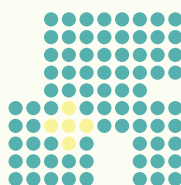


地域

志向学

研究

2026
VOL.10



地域連携推進本部
地域協学センター

国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学

Collaborative Study with Community

Table of Contents

| | |
|---|-----------------------|
| 1. Preface ----- | 2 |
| | <i>Nobuo MURAKAMI</i> |
| 2. Review Article ----- | 3 |
| 2-1. Weaving the threads of opportunities in Iceland: A hybrid educator’s ongoing path toward gender equality | <i>Megumi NISHIDA</i> |
| 3. Practical Reports ----- | 13 |
| 3-1. Outcomes and Prospects of Community Practices to Enhance Local Recognition and Appeal: The “Hirayama One-Day Café” Project in Mizunami City, Gifu <i>Momomi OTA, Minami TAMAKOSHI, Junko MAKINO, Hana FUKUI, Rei FUTAMURA</i> | |
| 3-2. “Kaseki Examination” (examination comprehension about fossil and paleontology) —A school-museum collaboration in Mizunami City, Gifu, Japan— <i>Yusuke ANDO, Yoshihito ITO</i> | |
| 3-3. Proposal for the Basic Concept of the Next Renewal of MASA 21: FY2025 Practice for Business Plan & Action Final Report Submitted to Kawabo Co., Ltd. <i>Wakana OKUYAMA, Miu FUJII, Yuto YAMASAKI, Kimio SHIBATA</i> | |
| 3-4. Draft Integrated Report for an SME Manufacturer from Student’s Perspective: FY2025 Business Plan & Action Final Report Submitted to Prosper Co., Ltd. <i>Asahi HINO, Misuzu OZAWA, Kimio SHIBATA</i> | |
| 3-5. Japanese cultural <i>fuudo</i> of Lake <i>Biwa</i> discovered from publications of English tourism magazine: Reflections on three perspectives <i>Masashi HARADA</i> | |
| 3-6. Local communities where diverse actors collaborate: Lessons learned from the case study in Oumi District of Tsushima, Nagasaki <i>Kenji KITAMURA</i> | |
| 3-7. Three-Dimensional Visualization of Internal Geometry of a Spouted Vessel Using a 3D Industrial Endoscope: Practice and Perspectives <i>Seicho Miyoshi, Riho Hotani, Shinnosuke Hashimoto, Hiroshi Maeshima, Ayumi Onozawa, Shogo Kawano</i> | |
| 3-8. Student Volunteer Participation in Foster Parent Association Activities: Insights and Learning as an Opportunity to Understand Foster Families <i>Rei FUTAMURA</i> | |
| 3-9. Student Volunteer Participation in Foster Parent Association Activities: Significance from the Foster Parents' Perspective <i>Rei FUTAMURA</i> | |
| 3-10. Summer School 2025 in Kaidu: Educational program of Area Branding for diverse students <i>Asuka TSUKAMOTO, Rei FUTAMURA, Minoru SASAKI</i> | |
| 4. Open Lecture Report on December 6th, 2025 ----- | 109 |
| Theme: Exploring the Potential of Community Development through University–Museum Collaboration | |
| 5. Submission Guide ----- | 147 |

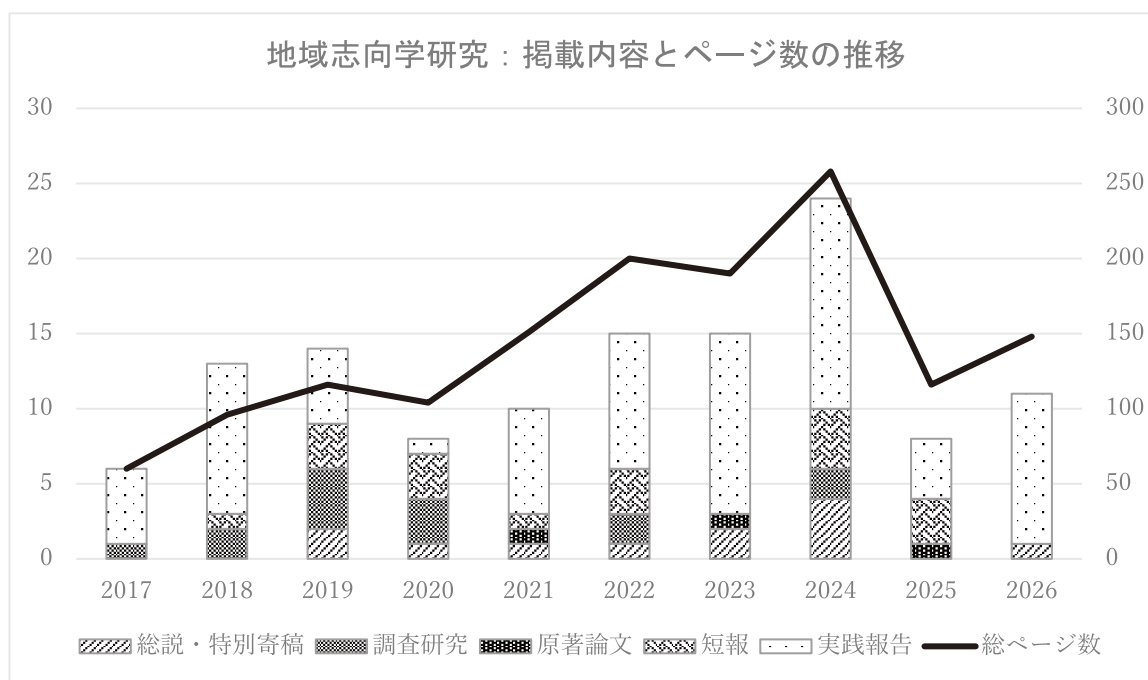
地域志向学研究 目次

| | |
|--|-----------|
| 1. 巻頭言 | 2 |
| | 村上啓雄 |
| 2. 総説 | 3 |
| 2-1. アイスランドで紡ぐ「機会」という名の糸 ：ハイブリッド教育者として歩み続けるジェンダー平等への道 | 西田めぐみ |
| 3. 実践報告 | 13 |
| 3-1. 地域の認知度を高め魅力を発信する実践の成果と可能性 —岐阜県瑞浪市釜戸町平山区と岐阜大学の協働による「平山一日限定カフェ」の試み— 太田百美・玉腰みなみ・牧野純子・福井花菜・二村玲衣 | |
| 3-2. 岐阜県瑞浪市における域学連携を活用した『化石検定』の実施 | 安藤佑介・伊藤允一 |
| 3-3. マーサ 21 次期リニューアル基本構想に向けた提案 —カワボウ(株)への 2025 年度ビジネスデザイン実習最終報告から— 奥山和奏・藤井美羽・山崎優翔・柴田仁夫 | |
| 3-4. 学生目線による中小製造業の統合報告書（案）の作成 —(株)プロスパーへの 2025 年度ビジネスデザイン実習最終報告から— 日野旭・大澤未涼・柴田仁夫 | |
| 3-5. 英文観光雑誌出版から発見した琵琶湖文化の風土—3つの視点についての考察 | 原田雅史 |
| 3-6. 多様な主体が協働する地域—長崎県対馬市青海地区における活動からの学び— | 北村健二 |
| 3-7. 3D 工業用内視鏡による注口土器内部形状の三次元可視化—実践と展望— 三好清超・保谷里歩・橋本真之介・前嶋宏志・小野澤歩美・河野省悟 | |
| 3-8. 里親会活動への学生ボランティア参画の試み—里親子を知る契機としての気づき・学び | 二村玲衣 |
| 3-9. 里親会活動への学生ボランティア参画の試み—里親からみた意義 | 二村玲衣 |
| 3-10. サマースクール 2025 in 海津 —多様な学生を対象としたエリアブランディング教育プログラム 塚本明日香・二村玲衣・佐々木実 | |
| 4. 2025 年 12 月 6 日公開講座 実施報告 | 109 |
| SDGs×地（知）の拠点 「大学と博物館の協働による地域づくりの可能性」 | |
| 5. 地域志向学研究 投稿募集 | 147 |

1. 巻頭言

現在の国立大学法人東海国立大学機構岐阜大学地域連携推進本部地域協学センターは、そのホームページに記載されている通り、開設された2013年12月以来、学際的に複数の学問の「協働」、分野・部局（学部・センター等）横断的な連携の強化、地域と「協学」しながらその課題解決に貢献する積極的な取り組み（課題解決に向けた実践的な方策等の研究及び地域志向教育活動）を「地域志向学」プロジェクトとして位置付け支援し、地×知の拠点形成に努めてこられました。これらの取り組みを2017年3月から論文、あるいは報告として記録してきたのが本誌「地域志向学研究」であり、複数の学問分野の学際的な協働や、横断的・融合的な連携、教育研究機関・自治体・NPO・地域団体・民間事業者等の協学を進めながら地域の課題解決に貢献する、統合的な基礎・応用研究、教育活動や実践的な取り組みの報告を掲載するものと位置づけられています。本号は記念すべき第10号となります。

下図は今までの投稿内容とページ数をまとめたものです。両者とも右肩上がりにボリュームアップし、2024年の第8号では過去最高の論文・ページ数となりました。ただし昨年度と今年度はそれに比べ論文数やボリュームも減少しており、原著論文の発表も期待しつつ関係者の積極的な投稿をお願いしたいところです。



本センターは、2025年度から地域連携推進本部の組織として改編され、それまでの活動を継承し「日本トップクラスの地域中核大学」として、超高齢社会において、子ども・若者（学生）から高齢者まで、全ての人びとが世代や立場を超えて生き生きと豊かに暮らすことのできる地域社会づくりに貢献することをミッションのひとつとして運営されています。大学の学生・職員のみならずすべての地域住民が多くの学びの機会を得るとともに、本センターが地域と強固に連携するためのリーダーシップをますます発揮してほしいものです。また、その推進を担ううえで本誌が重要な貢献をすることに大いに期待したいと思います。

2026年3月吉日
岐阜大学地域協学センター・アドバイザー
村上 啓雄

2. 総説

2-1. アイスランドで紡ぐ「機会」という名の糸

：ハイブリッド教育者として歩み続けるジェンダー平等への道

アイスランド大学教育学部 西田めぐみ

2. Review Article

2-1. Weaving the threads of opportunities in Iceland:

A hybrid educator's ongoing path toward gender equality

University of Iceland, School of Education

Megumi NISHIDA

Summary

Living in Iceland, a northern country often characterized as highly advanced in gender equality, I have engaged with the concepts of inclusion, empowerment, and hybridity through my everyday practices as a mother, educator, and researcher. Drawing on an autoethnographic approach, this paper interweaves these theoretical concepts with my lived experiences to offer a reflective examination of gender equality in the Icelandic context. In addition, the paper discusses the significance of recognizing diverse opportunities within contemporary society and highlights the importance of identifying and pursuing such opportunities.

Keywords

Gender equality, inclusion, empowerment, hybridity, autoethnography

アイスランドで紡ぐ「機会」という名の糸 ：ハイブリッド教育者として歩み続けるジェンダー平等への道

西田めぐみ¹⁾

¹⁾アイスランド大学 教育学部 (Hagatorg 1, 107 Reykjavík, Iceland)

要旨

世界一ジェンダー平等と言われる極北の国アイスランドで生きる私は、母親・教育者・研究者としての日々の実践の中で、インクルージョン、エンパワメント、ハイブリッドという概念を体感してきた。本稿では、オートバイオグラフィの手法を用い、これらの概念と私自身の経験を絡み合わせながら、アイスランドにおけるジェンダー平等を考察する。また現代社会に存在するさまざまな機会を認識し、それらを自ら掴むことの重要性について議論する。

キーワード

ジェンダー、インクルージョン、エンパワメント、ハイブリッド、オートエスノグラフィ

1. プロローグ「女性の休日」

私の手元にある「本当にやる！できる！必ずやる！」(Ég þori! Ég get! Ég vil!)というアイスランドの絵本¹⁾が、ふと私をある想いに誘った。その副題にある「女性の休日」とは一体どういう意味なのか。

それは今から50年前の1975年10月24日、約22万人だったアイスランド人口のうち、女性の約9割にあたる2万5千人以上が家事や仕事をする手を止め、首都レイキャヴィークの中心にある広場に集まったことに因むらしい。女性が家庭や社会に及ぼす影響力を当時は男性社会だったアイスランド国民に知らしめるための集会だったという。集会に参加するために女性が不在となった家庭では、男性が慣れない育児に追われたり、会社に子どもを連れていく羽目になったりしたようだ。普段暗黙の了解で女性が担っていた役割を男性が体感することで、今まで女性に課されていた家事や仕事を知覚し、その実態を身をもって知ること、その重みや尊さを理解することで、アイスランドにおけるジェンダー平等の意識が芽生えるきっかけになる画期的な出来事だった。

それから半世紀経った2025年10月24日に行われた集会では、女性が活躍する職場の多くが休業または午前中のみの勤務となった。私が教諭として働く幼稚園も基本休園となったが、医療従事者などどうしても子どもを幼稚園に預けざるを得ない場合にかぎって男性スタッフが対応した。一方で研究者として籍を置くアイスランド大学からは、13時に大学本館前に女性やノンバイナリー(男女いずれにも限定されない性自認をもつ人)の人は全員集合しようという呼びかけが届いた。私も当日は家事や仕事をせず、15歳になる子どもに誘われて共にこの「女性の休日」集会に参加した。この集会自体は毎年行われているわけで

はないが、在住17年の私にとって実は今回が初参加だった。日本ではもっぱら「女性の休日」と呼ばれるこの集会は、アイスランド語でKvennaverkfallと言い、直訳すると「女性のストライキ」となる。そのため日本人の私の中ではストライキという偏見に満ちたイメージで、周囲に迷惑をかけるような物々しい集会を想像し、参加には抵抗感があった。実際はさまざまな年齢の女性たちが明るい声で語り合い、満面の笑顔で仲間たちと楽しそうにプラカードを掲げていた。50年前もこんなに明るいものだったのかはわからない。1975年の初めての集会に参加したアイスランド人女性に話を聞くと、彼女は乳児を抱えて参加し、普段家事に追われた彼女の母親も、一張羅の上着を身に纏い、背筋を伸ばし、いきいきと街に出かけていったという。今日の様子を見ると、自分の着たい服を着て(ただ、当日は雨上がりのとても寒い日だったので、みんな防寒着を羽織っていたが)、長い時間をかけて築き上げてこられた女性の権利の確認のために集まる、という雰囲気だった。参加する女性たちにとっては意義深く尊い一日なのだろうと感じられた。

昨今のアイスランドはジェンダーギャップ指数世界一²⁾ということがよく知られている。しかし、数字がすべてを説明してくれるわけではない。実際アイスランドに住んでいると、確かに日本で働いていた頃よりも満たされた生活を送ることができていると実感することが多い。

日本で生まれ育った私は、30代半ばに差し掛かる2008年、当時の首相によってアイスランドが経済危機に陥ったと告げられてから1週間後に、アイスランド人との結婚を機に移住をした。日本ではアイスランドは経済が破綻してしまったというような誤解を生む報道がされており、大丈夫なのかと周りに心配されるなか、若さゆえに

怖いもの知らずだったこともあり、新しい人生の冒険を夢見て私はアイスランドにやってきた。でも自らの目で見ると肌で感じたこの地は、日本でのバブル崩壊時とは比べられないほど穏やかだった。2009年に失業率は10%を超えたものの³⁾、アイスランドに住む人たちはそれを「機会」として受け入れていたようだった。原則学費が無料の大学に通って学位を取ったり⁴⁾、豊かな福祉の恩恵を受けて子どもを作ったり⁵⁾と、2010年頃には我が家を含め、まるでアイスランド全体にベビーブームにとどまらない勢いのようなものが満ちていた。移住して間もない日本人女性である私でさえ、文化や言葉の壁にぶつかりながらも妊娠と出産を経験し、大学院にも進学した。不思議なことに、全く将来への不安は感じなかった。

アイスランドでは福祉国家として国に住む全ての人を守るべく、さまざまな機会が提供されている。しかしそれは一方で、能動的な行動の先にある。機会はただ与えられるものではない。自ら気づき、選択し、掴み取る行動力が必要になる。では、アイスランドでは女性がどのように声をあげ、ひとりの人間として得られるこれらの機会を掴むのか。そしてジェンダー平等とは何を意味するのか。

本稿では、筆者自身の経験を通して社会文化的文脈を照射するオートエスノグラフィ(autoethnography)⁶⁾の手法を用いることで、個人的な語りを手がかりに、アイスランド社会における機会とジェンダーの意味を考察することを目的とする。そこから筆者である私が日本とアイスランドの間(ハイブリッド)に生きる移民かつ女性だという二重のマイノリティ性を持つ中で、周りの支えを受けながらさまざまな機会を自らの力で掴み取っていく過程を振り返る。そして最後にハイブリッド教育者として理解するアイスランドにおけるジェンダーの本質について考察する。

2. アイスランドで得られる「機会」

アイスランドに生きる女性として目の前にある機会を掴むには、社会を支える根底にある価値観や、その上に成り立つ文化的実践を理解する必要がある。私が17年間アイスランドで生活し、教育現場と研究の双方に身を置くうち、機会の背景には三つの重要な概念が存在することが見えてきた。それは、インクルージョン、エンパワメント、そしてハイブリッドである。

これらは独立した概念ではあるが、相互に深く関わり合いながら、人々が機会に気づき、選択し、

掴み取っていくための基盤である。本章では、これら三つの概念を、私自身の経験を通して順に考察していく。

2-1. インクルージョン

日本でも、障がいのある児童や生徒が同じ環境で学ぶという文脈で「インクルーシブ教育」という言葉が使われるようになって久しい。しかし、アイスランドで語られるインクルージョンは、より広い社会的基盤に根ざした概念であり、社会に生きるすべての人の人権を尊重し、公正に機会を得て生きていくための社会規範として理解されている。その背景には、すべての人が生まれた瞬間から、ひとりの人間として尊重される存在であるという価値観がある。

インクルージョンには平等(equality)と公正(equity)という二つの内包要素がある。現状のインクルージョンがどういうものかと考える時に、日本人として理解に時間がかかるのがこの両者の違いではないだろうか。平等とは男女平等という言葉が表すように、性別関係なくすべての人に同じ機会が与えられることだとすると、公正は各人の違いを尊重しながら与えられた機会を全うするために互いに配慮することである。日本では平等と公正が混乱されやすいのか、例えばインクルーシブ教育という合理的配慮でも、周囲の適切な理解がなければ特別扱いや、逆に障がいのある学生にとっては彼らの尊厳を妨げる「差別」になるとして反感が生じるかもしれない⁷⁾。しかし、アイスランドの文脈で語られるインクルージョンはすべての人が「ありのままの自分で参加できること」を前提としていて、その実現のために社会が支援の形を柔軟に変えていく⁸⁾。個人を変えるのではなく、公正のために周囲や環境が変わる必要がある。教育の文脈で例えるならば、生徒を変えるのではなく、教師や学校が変わることだ。すべての人が社会生活に参加できるように社会全体が変化・対応すべきである、というのがインクルーシブな社会の考え方だ。

このようなインクルーシブな社会を築くのに不可欠なのが「機会」である。アイスランドでは、教育や福祉、職業訓練や言語支援など、学校や社会の多種多彩な場で、人々に多様な機会が用意されている。ただし、その機会を活かすかどうかは個人にゆだねられており、その差にこそジェンダーや育ってきた環境、文化などの文脈が反映される。私がアイスランドに移住し、家庭を築き、大学院で学ぶ機会を享受できたのは、日本人である私にも社会の中でチャンスをもものにできる可能

性があることを知ったからだ。そして、その新しい扉を開いて足を踏み入れる決断をしたのは、私自身だった。誰かに言われて、周りの雰囲気にならされて決めたのではない。移住という特殊なきっかけではあったものの、自分の身が置かれた状況は自らの意思で変えられるということ、変えてよいのだということアイスランドに来て知り、実行した。

では、アイスランド社会の中で移民女性としての居場所をどのように作っていくことができるのか。私自身の生い立ちを振り返りつつ、我が家を例に考えてみる。

経済安定期の日本で一般的なサラリーマン家庭に生まれ育った私は、時々近所にパートに行くことはあったものの専業主婦として生きる母の姿から、漠然と女性一般の生き方をそういうものだと思い込んでいた。それは母が自ら選んだものというより、社会の風潮に影響を受けた結果だったと思う。特に私が生まれ育った地域では、女性が家庭に入らず学位を取得してキャリアを築くというのは特殊なことのように思っていた。私の身内の女性や周りの女友達も高校や短大を卒業して就職した後、まもなく嫁いで主婦になった。当時は気づいていなかったが、そもそも女性のキャリアというものが概念としてすら存在しないかのような風潮だったのかもしれない。また、私自身学校での成績が振るわなかったということもあり、幼い頃から競争社会の文脈で自己肯定感を育むべきでないかのように刷りこまれていたようにも思う。

日本では中学の社会科教員を目指していたが、2000年前後の教員採用試験は今では想像できないような倍率で、理系科目が苦手な私には第一関門である一般教養のテストを突破することさえきわめて困難だった。同じ教育分野ということで塾に勤めるようになったものの、そこでの経験は当然のことながら私が就職前に描いていた牧歌的な教育現場とはほぼ真逆と言えるものだった。私は高校で初めて受験を経験したが、塾の世界では自らの子ども時代の経験からは考えられないような苛烈な競争が繰り返されていた。理想と現実のギャップに改めて打ちのめされたことは確かではあるが、塾で経験したことや抱いた思いは、アイスランドに移住してから思わぬ形で糧となり、私の大学院生活を豊かにしてくれた。

日本での常識はアイスランドの非常識だと移住後の早い段階で気がついた。ここでは家事は女性だけが担うことでも、誰かが手伝うことでもない。それは、ひとりの人間としての生活を自らの

力で支えるための自立的な行動として捉えられている。この地に移り住んでから、義母がバリバリと働くソーシャルワーカーだと知った。一方で、電気技師の義父が台所に立ち、週末に家中をモップがけするという事を聞いて衝撃を受けた。その話を私の大学院での女性指導教官に話すと、彼女の家では夫が家中の植物の世話をするという。そして彼女の海外出張には、夫が鞆持ちとして同行することも多い。それは誰かが我慢するのではなく、お互いを支え合っていくうちに出来あがった役割分担なのかもしれない。

もちろん、人に頼らず自分で身の回りの世話をするという意味で、すべてのアイスランド人が家事に積極的というわけではない。我が家の場合、幼稚園教諭と研究者という職業的ニ足の草鞋を履く事を選んだ私には家事にまで手が回らず、その皺寄せは夫と子どもにかかってくる。しかしながら、そのことに対して一度も苦言を受けたことはない。夫も子どもも私が教育者兼研究者として活動する機会を得た事を尊重してくれているからだろう。そのため私が1週間ほどの出張を終えて帰宅した際、台所がとんでもないことになってはいたとしても、すぐにはそれに目を向けないように努めている。これは仕事を選んだ私の責任でもあるのだから。声を荒げないよう一呼吸し、心を落ち着かせてから夫と子どもにも声をかけて一緒に片付けていく。以前アイスランド大学内で女性研究者が「うちの小学生の子は（自分で食事を用意するため）オープンと電子レンジを使いこなす」と言っていたが、我が家も私が不在にする機会が増えてくるにつれ、子どもは自分で食事の支度をするようになってきた。家族で食卓を囲まない可哀想、自分の夢を犠牲にしても家族を守る、というのは日本らしい発想で、個々の生活のリズムや価値観を尊重するのがアイスランドらしいのかもしれない。念のため言い添えると、我が家の家族関係が冷めているのではない。週末など、夫と休みが重なる時は、近所に住む義父母や義妹家族も含めて集まることも多々ある。本稿を書いている今夜も義父が料理を振る舞うそうで、私は早く仕事を終えて義両親宅に行かねばならない。でもそれは参加するように強制されたからではなく、純粋に私が行きたいからだ。私がフルタイムで幼稚園教諭をしながら大学院生をしていた頃は、土日といえば幼い子どもを夫や義父母に預けて集中して勉強ができる貴重な機会で、自分が義両親宅を訪問することはほとんどなかった。日本だと母親としての責任を真っ先に考えてしまうかもしれないが、自分の生き方を大切に

するこの国ではそうでない。義父母が夫に持たせてくれる夕食の残り物を詰めたタッパーは、目の前に広がる機会を掴み取ろうと必死にもがく私にとって大きな精神的支援だった。

平等とは、全員同じ行動をすることではない。そして公正とは、自分の生き方を選ぶ自由が保障され、その選択が尊重されることである。そうした平等と公正を手にすることができるのがインクルーシブな社会と呼べるのではないだろうか。社会活動に参加することは権利であり、義務ではない。選択は個々に委ねられる。しかし、だからこそ、私は能動的に動くための一歩を踏み出したかった。私にとってのその一歩は、アイスランドで大学院に通い始めることだったろう。

では、機会が平等に開かれているインクルーシブな社会において、どのようにしてその機会を掴む力を育ていけるのか。その鍵となるのが、次に述べるエンパワメントである。

2-2. エンパワメント

エンパワメント (empowerment) という英単語の核にあるのは「力(power)を、与える/つける(em)」という概念である。近年日本でも、動詞形のエンパワー (empower) と合わせて、ビジネスや教育、福祉など色々な文脈で使われるようになってきた。欧米では、女性や移民を含むマイノリティと呼ばれる人たちが、自分の置かれた立場を自覚し、困難に向かいあう力を育むことを指す場合が多い。

この概念の背景には、ブラジルの教育哲学者パウロ・フレイレの思想がある。彼は、スラムに生きる人々の識字教育を通して、人々が自らの置かれた状況を認識し、その構造を批判的に捉え、抑圧から解放されていく過程を示した⁹⁾。これは外国語学習に置き換えるとわかりやすい。例えば自らの力で英語が読めるようになることで海外の情報に触れ、新しい知識が増えて、視野が広がる。それにより人との対話が増え、自信が生まれ、世界の動きに主体的に関わる力が育まれる。その経験の積み重ねが、エンパワメントと呼ばれる状態につながるはずである。

私は学校教育や社会人生活を経て、2008年のアイスランド移住まで日本社会で生きてきた。当時は自分の生き方を深く考えることもなく、時代が流れるまま社会が求めるまま、その流れに抗うことなく生きてきたように思う。声を上げたり、疑問を抱いたりすることは推奨されず、生活していく中で漠然と抱えていた「何かがおかしい」という感覚さえ、いつの間にか心の奥に押し込めて

いたように思う。そもそも私には社会に抑圧されていたという自覚さえなかった。

移住の翌年、アイスランド大学教育学部で国際教育学のプログラムが開講された。移民のエンパワメントを目的とし、すべての授業を英語で行うカリキュラムだった。これを偶然見つけたことが私の人生を大きく変えることになった。日本のような過酷な大学入試もなく、高い学費や参加費用も必要ない。言語の壁は高かったが、それは一緒に学ぶ仲間たちとの支え合いや、自らの努力によって越えられるものだった。何より大学院での学びの機会の存在は、それまでの自分の想像を超えた異次元の可能性だった。導かれるようにその扉を開いたとき、私ははじめて、自分自身がエンパワーされるべき、エンパワーされてよい存在なのだと理解した。言ってしまうと、過去の私は自己肯定感が低く、自分が存在する意味さえ考える余裕もなかったのだ。新しい学びの機会を得ることで、自分の存在価値を自覚した。解放の感覚に近かった。またそこで出会った仲間たちの多くが世界中から集まった移民女性で、彼女たちとこの感情を共有できたことも、「女性だから何もできない」「移民だから何もできない」という卑屈な考え方から解放させてくれる大きな要因にもなった。

私が学びの機会を得た背景には、前章で述べたインクルージョンの思想がある。社会が必要な環境と機会をすべての人に開いていたからこそ、私はそこに手を伸ばすことができた。私はアイスランド大学で学びながら気づくことができた。エンパワーされた人は、他の誰かを支えたいと自然に思えるようになるのだということ。これは教育においては、競争ではなく共存を前提とする教育のあり方を指し、また、序列をつけることに重きを置かないアイスランドの教育文化と深く結びついている。自分の声の存在に気づき、研究活動を通じてその発信の手段を知った私は、移民としても教育者としても、前に進もうとしている人を支えたいと願うようになった。

では、人はどのようにして自らの「声」に耳を傾け、エンパワーされていくことが可能なのだろうか。次に述べるハイブリッドという概念が、その道筋を照らしてくれる。

2-3. ハイブリッド

日本語でハイブリッドというとガソリンと電気を動力とした自動車のイメージが最初に思い浮かぶかもしれない。英語では「異なる二つものを組み合わせる」という意味を持ち、文化を語る

文脈では異なる文化が出会い、そのあいだに生じる相互作用の中から、新しい価値が立ち現れてくる過程を示す。私が身を置く教育の分野では、インド人哲学者ホーミ・K・バーバの「Third space(第三のスペース)」と重ねられることが多い。それは、既存の文化に別の文化が融合し、単なる足し算ではない新しい文化が生まれる場所を指す¹⁰⁾。私の場合、日本とアイスランドの間が第三のスペースであり、そこでハイブリッドな教育者であることを自覚し、教育者として成長していく過程が博士論文の研究テーマとなった。

アイスランドに移住して間もない頃は、自分の中にある二つの文化の境界線について意識を向けることは、日本人という客観的事実を語る時以外ほとんどなかった。しかし、移民人口が現在17%を超えるこの国で¹¹⁾、私は次第に「日本人としての私」と「アイスランドに生きる私」の、どちらも否定せずに生きる場を求めるようになっていった。

アイスランド大学での学びは、その境界線を照らし出す大きなきっかけになった。国際教育学という学科の特質上、アイスランド人よりも自然と移民たちが身近な仲間になった。そこで過ごした時間は、年齢も国籍も違う同級生たちと共に学び、互いの背景の違いを尊重し、色んな角度から「自分は一体何者なのか」を問い続けるものであった。だが、たった数年間の修士課程での学びで答えが出るようなものではない。また、もっとできることがあるのでは、という向上心も芽生えてきて、国際教育学を修了後、続けて教員免許を取得するために義務教育教員養成課程に進むことに決めた。そこでは授業の全てがアイスランド語で行われ、とても苦勞した。数単位分の授業で学んだアイスランド語レベルでは太刀打ちができなかったものの、コンピューターの翻訳機能を駆使し、講義室で隣に座るアイスランド人に勇気を振り絞って「今のってどういう意味？」と声をかけながら乗り切った。多くの講義ではディスカッションが頻繁に行なわれたが、アイスランド語の乏しい私が参加できるように他の学生たちは英語で議論をしてくれた。担当教員の多くも英語でのレポートを受け取ってくれたり、筆記テストの代わりに口頭試問の機会を設定してくれた。ただ、移民の挑戦への理解が乏しい年配のアイスランド人教員から支援を受けられずに落第したことも一度あった。アイスランドに住むからといって誰もが支えてくれるわけではない。しかし、突破する方法は常にどこかにあることを経験から学んだ。そしてそれらの経験が、今までは自分の能力

の境界線を自ら設定していたことに気づかせてくれた。

また大学院で学ぶうちに、私はアイスランドの中での日本人女性としての自分を強く自覚するようになった。特にアイスランドを研究対象とする日本の研究者たちとの交流機会が増えていく中で、アイスランドは性別が個々の能力に影響を及ぼす環境ではないことを理解した。偶然にも、日本の研究者たちのほとんどが男性で、彼らが研究過程で出会ったアイスランド人研究者のほとんどが女性だった。両者のあいだでは、性別関係なく対等な議論が行われていた。日本では女性であることが壁になって意見も述べにくいと感じていたが、それは周囲の雰囲気によって自ら生み出していた偏見も影響していたのかもしれない。日本人の研究者たちとの交流から、自文化(日本)と異文化(アイスランド)のあいだで生まれる新しい価値観の存在に気づいた。それは「どちらでもない/どちらでもある」状態だった。まさに人々が機会に気づき、自ら選び、掴み取っていくための基盤となるハイブリッドの概念が生み出した第三のスペースであり、私が二つの文化のバランスをとりながらハイブリッドな教育者として生きていくために必要なものだった。

ここでハイブリッドな教育者への成長に欠かせないもう一つの私の経験を紹介したい。アイスランド大学で教員免許を取得した翌年の2014年、博士課程後期に進学し、同時にヒャトリモデル(Hjallastefnan)¹²⁾と呼ばれる教育方法を実践する幼稚園で働くことになった。そこではインクルージョンを目指すべく、逆説的に男女をあえて分けて保育することで、それぞれの特性を活かしながら子どもたちへ自由な探究を楽しむ機会が提供される。教諭と子どもの割合は年齢によるものの最大でも1対8人程度なので、子ども一人ひとりの声を丁寧に聞き取り、それぞれにあった学びのタイミングを尊重できる環境が整えられている。性別で分けることはあくまでも手段の一つで、個々の子どもの学びを尊重しやすい環境が作られるのだ。だからこそ、その教育文化を尊重するべきだったのだが、私は無意識に子どもを自分の管理下に置こうとしてしまっていたことがある。

今でも忘れられないが、幼稚園に勤め始めてちょうど3ヶ月が過ぎた大雪の朝のことだった。雪がほとんど積もることのない地域で生まれ育ち、雪遊びの経験がなかった私は、大雪にはしゃいで飛び出していく子どもたちをまとめられずにパニックを起こしてしまった。子どもの足がとられてしまうような量の雪は危険だと思っていた私

は、子どもの安全を自分が守りつつも、幼稚園の時間割どおりに外遊びもさせないといけな、とジレンマに陥った結果、それなら子どもたちに危険を言い聞かせてしっかり管理せねばならないと思ひ込んでしまった。後で聞いたところ、アイスランド人の同僚たちは、私が焦る理由がわからなかったらしい。日本では危険が予測されるような遊びはあえて避けることに驚きはないかもしれない。雪を知らない私にとって、私の膝丈に至るほどの積雪は脅威でしかなかった。しかし、アイスランドで生まれ育った子どもたちは雪遊びのプロで、私が管理しなくても大雪での遊び方を体で熟知していた。幼児教育での理論的知識と経験が乏しいこともあったが、問題の本質は、私が子どもたちを信頼していないことにあった。私が無理にまとめようとしなくとも、子どもたちは日々の幼稚園教育の中で培った認知力をもって安全に遊びを楽しむことができたのである。この大雪の日をきっかけに日本人としての教育観を根底から揺るがされた私は、自分の実践と向き合いながら、自らの教育者としてのアイデンティティの変化をつぶさに見つめるようになった。異なる文化の間に立つことは、どちらかを捨てることではない。両方の文化を受け入れながら、自分らしい第三のスペースを創り出すこと。そして私は、幼稚園で働く中で、そこに新しい教育の形を模索する自分を見つけられた。それが、私の研究で見出した「ハイブリッド教育者」¹³⁾という在り方である。

幼稚園での経験を通じて私は内に秘められた自分の意見や感情の存在を知り、大学院での研究活動を通じてそれらを自分の声として世界に届ける方法を知り、これらの経験から他者を支える力をつけることができた。つまりハイブリッドという概念は、私がエンパワーされた結果に生じたのであり、よりインクルーシブな教育現場や社会づくりに貢献する糧ともなるものだ気がついたのだ。

では、アイスランドの社会に根付くと私が信じるこれらの概念が、アイスランドでのジェンダー平等とどう結びつくのか。そして、私が「女性の休日」集会で得た気づきとはなんだったのか。

3. エピローグ「私たちが休日にする！」

凍てつく寒さが身にしみた「女性の休日」集会からの帰り道、我が子と一緒にレイキャヴィークのダウンタウンにある馴染みのカフェに寄って、温かいワッフルを食べるつもりだった。けれど、カフェに着くと、店は閉まっていた。働く女性た

ちは皆、集会に参加していたのだ。「じゃあ、家でワッフルを焼こうか」という話になったものの、その材料はない。「帰り道、店によって買い物していかなきゃね」と言った時、続いて私の口から「でも、それって家事をするってことになっちゃうんじゃない？」と思わずこぼれた。すると私の子どもは、迷いなくこう言った。「女性の休日というのはただ家事を放棄する日じゃないよ。自分がしたいことを自分で選ぶ日なんだよ。だから、もしお母さんがワッフルを焼いて食べたいなら、そうすればいいんだよ。」その言葉を聞いた瞬間、私は思わず立ち止まってしまった。

アイスランドで生まれ育った子どもにとっては何気ない一言だったのかもしれない。でもそれは私にとっては目から鱗がポロリと落ちるような一言だった。この「女性の休日」は、不平等な家事や労働をしないことが目的ではなく、自分の意思で自分のしたいことを選択する機会が私たち女性の手の中にもあることに気づかせるものだった。まさか15歳の子どもから教えられることになるとは。しかし、そう思う私の感覚こそが、もしかして古いのか、もしくは偏見に満ちているものなのかもしれない。偶然の一言であったとしても、アイスランドという社会で育まれてきた平等や人権への理解と感性を、自然に体現していたからこそその発想だったことに驚き、そして興奮を抑えられなかった。

この私にとって初めての「女性の休日」集会を経験し、改めて深く感じたことは、ジェンダーとは女性の問題ではなく、人権の問題だということだった。女性らしく、男性らしくと生物学的な性別で役割を分けることは容易いことかもしれない。しかし、人間というものはそんな単純な存在ではない。性別は単なる属性にすぎず、ひとりの人間の価値や可能性を決めるものではない。「女性だから教育を受ける必要がない」と他人が決めるのではなく、「私は教育を受けたい」と自らの意思で選び、機会を掴み取ることができるはずだ。もし他の誰かが同じように機会を掴もうとするなら、私は全力で支援したい。そう思えるのは、私自身が多くの機会や人々の支えによってエンパワーされた経験を持つからだ。

インクルージョンという考え方は、アイスランド社会の根底にある哲学であり、人々に機会を提供し、選択の自由を保証するための礎である。それは、「女性の休日」集会の歴史が示すように、長い時間をかけて作られてきた強固な礎だ。もし同じことを日本で行うとするなら、ただアイスランドの真似をするだけでは何も変わらないだろ

う。インクルーシブな社会を築くということは、一つの織物を社会全体で協力しながら織り上げていく営みに似ている。そこでは、ひとりひとりの学びの機会や就労の機会などの糸を誰もが自分の手に取り、自らの力で紡ぎ上げる必要がある。それら紡ぎ上げられた糸をそれぞれが持ち寄り、共に大きな織物を織り上げるということだ。織物は短期間で完成するものではなく、家庭、学校、社会の中にある多彩な色をした糸の数々を長い時間をかけて丁寧に織り上げていく議論であり、実践であり、過程である。そうして一緒にひとつの織物を協働で織り続ける営みこそがインクルーシブな社会構築の本質だと、私たちは改めて認識しなければならない。

ではどこから始めればよいのか。まずは性別や年齢、社会的地位などを問わず、すべての人が自分を大切にすることだ。日本の文化には「他人への思いやりの心」という尊い考えがある。それを自分自身へ向けてほしい。自分の心の声に耳を傾けられる人だけが、真に周囲の人の声にも耳を傾けることができる。日本にいた頃の私は、女性だからできないと社会や自分自身によって思い込まされていたことがたくさんあった。そして周囲にどう評価されるかということに気にしていた。根っこから日本人であることが染みついている自分には簡単には変えられないであろう部分でもあるが、アイスランドに来て、そして「女性の休日」集会に集まる人々の笑顔を見た時、女性が秘める力を知った気がした。女性にも強くなる力がある。強くなるとは、自分を大切にし、自らの力で選択する勇気を持つことだ。そのような社会をつくるのがジェンダー平等への道ではないだろうか。アイスランドの「女性の休日」集会は、ハイブリッドな教育者としてこの国で生きていく矜持と、日本におけるジェンダー平等実現を支援する覚悟を確認させてくれた機会だったように思う。

4. 引用文献・注

- 1) リンダ・オウラフスドットイル著、朱位昌併訳(2025). 本当にやる！できる！必ずやる！アイスランドの女性の休日. ゆぎ書房.
- 2) World Economic Forum(2025). Global gender gap report 2025.
https://reports.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2025.pdf (2025年11月取得)
- 3) Statistics Iceland. Labour force survey.
https://px.hagstofa.is/pxen/pxweb/en/Samfelag/Samfelag_vinnumarkadur_vinnumarkadsran

nsokn__1_manadartolur/ (2025年11月取得)

4) Heijstra, T. M., Steinhorsdóttir, F. S. & Thorgerdur Einarsdóttir (2016). Academic career making and the double-edged role of academic housework. *Gender and Education*, 29(6). 764-780.

<http://dx.doi.org/10.1080/09540253.2016.1171825>

5) Islands.is. Children's prosperity and welfare.

<https://island.is/en/childrens-prosperity-and-welfare> (2025年11月取得)

6) Ellis, C. (2004). *The ethnographic I: A methodological novel and autoethnography*. Altamira Press.

7) 松田康子 (2012). 高等教育における障害者支援と合理的配慮の検討; ひとりの障害学生への聴きとり調査を事例に 北海道大学大学院教育学研究院紀要、117、205-229.

8) Óskarsdóttir, E., Gísladóttir, K. R. & Guðjónsdóttir, H. (2019). Policies for inclusion in Iceland: possibilities and challenges. In: M. C. Beaton, D. B. Hirshberg, G. R. Maxwell & J. Spratt (eds.), *Including the north: A comparative study of the policies on inclusion and equity in the circumpolar north*. Rovaniemi: University of Lapland, pp. 57-50.

9) Freire, P. (1993). *Pedagogy of the Oppressed*. Continuum.

10) Bhabha, H. K. (1994). *The location of culture*. Routledge.

11) Statistics Iceland. The population grew by 550 in the first quarter.

<https://static.is/publications/news-archive/inhabitants/population-in-the-1st-quarter-2025/> (2025年11月取得)

12) The Hjalli model.

<https://www.hjallimodel.com/> (2025年11月取得)

13) Nishida, M. (2025). Expanding the spectrum of love through autoethnographic self-study. *Pedagogy, Culture & Society*, 33(5). 1-18.

<https://doi.org/10.1080/14681366.2025.2461158> (2025年11月取得)

3. 実践報告

3-1. 地域の認知度を高め魅力を発信する実践の成果と可能性

- 岐阜県瑞浪市釜戸町平山区と岐阜大学の協働による「平山一日限定カフェ」の試み—
- | | |
|-----------------------|-------|
| 岐阜大学 地域科学部 3年 | 太田百美 |
| 岐阜大学 地域科学部 3年 | 玉腰みなみ |
| 岐阜大学 地域科学部 4年 | 牧野純子 |
| 岐阜大学 医学部 3年 | 福井花菜 |
| 岐阜大学 地域連携推進本部地域協学センター | 二村玲衣 |

3-2. 岐阜県瑞浪市における域学連携を活用した『化石検定』の実施

- | | |
|----------|------|
| 瑞浪市化石博物館 | 安藤佑介 |
| 瑞浪市役所 | 伊藤允一 |

3-3. マーサ 21 次期リニューアル基本構想に向けた提案

- カワボウ(株)への 2025 年度ビジネスデザイン実習最終報告から—
- | | |
|--------------------|------|
| 岐阜大学 社会システム経営学環 3年 | 奥山和奏 |
| 岐阜大学 社会システム経営学環 3年 | 藤井美羽 |
| 岐阜大学 社会システム経営学環 3年 | 山崎優翔 |
| 岐阜大学 社会システム経営学環 | 柴田仁夫 |

3-4. 学生目線による中小製造業の統合報告書(案)の作成

- (株)プロスパーへの 2025 年度ビジネスデザイン実習最終報告から—
- | | |
|--------------------|------|
| 岐阜大学 社会システム経営学環 3年 | 日野旭 |
| 岐阜大学 社会システム経営学環 3年 | 大澤未涼 |
| 岐阜大学 社会システム経営学環 | 柴田仁夫 |

3-5. 英文観光雑誌出版から発見した琵琶湖文化の風土—3つの視点についての考察

- | | |
|--------------|------|
| インデペンデントスカラー | 原田雅史 |
|--------------|------|

3-6. 多様な主体が協働する地域—長崎県対馬市青海地区における活動からの学び—

- | | |
|--------------|------|
| 追手門学院大学 国際学部 | 北村健二 |
|--------------|------|

3-7. 3D 工業用内視鏡による注口土器内部形状の三次元可視化—実践と展望—

- | | |
|-----------|-------|
| 飛騨市教育委員会 | 三好清超 |
| 飛騨市教育委員会 | 保谷里歩 |
| 飛騨市教育委員会 | 橋本真之介 |
| ナルックス株式会社 | 前嶋宏志 |
| ナルックス株式会社 | 小野澤歩美 |
| ナルックス株式会社 | 河野省悟 |

3-8. 里親会活動への学生ボランティア参画の試み—里親子を知る契機としての気づき・学び

- | | |
|----------------------|------|
| 岐阜大学地域連携推進本部地域協学センター | 二村玲衣 |
|----------------------|------|

3-9. 里親会活動への学生ボランティア参画の試み—里親からみた意義

- | | |
|----------------------|------|
| 岐阜大学地域連携推進本部地域協学センター | 二村玲衣 |
|----------------------|------|

3-10. サマースクール 2025in 海津

- 多様な学生を対象としたエリアブランディング教育プログラム
- | | |
|----------------------|-------|
| 岐阜大学地域連携推進本部地域協学センター | 塚本明日香 |
| 岐阜大学地域連携推進本部地域協学センター | 二村玲衣 |
| 岐阜大学地域連携推進本部地域協学センター | 佐々木実 |

3. Practical Reports

3-1. Outcomes and Prospects of Community Practices to Enhance Local Recognition and Appeal:

The “Hirayama One-Day Café” Project in Mizunami City, Gifu

*Momomi OTA, Minami TAMAKOSHI, Junko MAKINO,
Hana FUKUI, Rei FUTAMURA*

3-2. “Kaseki Examination” (examination comprehension about fossil and paleontology)

—A school-museum collaboration in Mizunami City, Gifu, Japan—

Yusuke ANDO, Yoshihito ITO

3-3. Proposal for the Basic Concept of the Next Renewal of MASA 21:

FY2025 Practice for Business Plan & Action Final Report Submitted to Kawabo Co., Ltd.

*Wakana OKUYAMA, Miu FUJII,
Yuto YAMASAKI, Kimio SHIBATA*

3-4. Draft Integrated Report for an SME Manufacturer from Student’s Perspective:

FY2025 Business Plan & Action Final Report Submitted to Prosper Co., Ltd.

Asahi HINO, Misuzu OZAWA, Kimio SHIBATA

3-5. Japanese cultural fuudo of Lake Biwa discovered from publications of English tourism magazine:

Reflections on three perspectives

Masashi HARADA

3-6. Local communities where diverse actors collaborate:

Lessons learned from the case study in Oumi District of Tsushima, Nagasaki

Kenji KITAMURA

3-7. Three-Dimensional Visualization of Internal Geometry of a Spouted Vessel Using a 3D

Industrial Endoscope:

Practice and Perspectives

*Seicho Miyoshi, Riho Hotani, Shinnosuke Hashimoto,
Hiroshi Maeshima, Ayumi Onozawa, Shogo Kawano*

3-8. Student Volunteer Participation in Foster Parent Association Activities:

Insights and Learning as an Opportunity to Understand Foster Families

Rei FUTAMURA

3-9. Student Volunteer Participation in Foster Parent Association Activities:

Significance from the Foster Parents' Perspective

Rei FUTAMURA

3-10. Summer School 2025 in Kaizu:

Educational program of Area Branding for diverse students

Asuka TSUKAMOTO, Rei FUTAMURA, Minoru SASAKI

地域の認知度を高め魅力を発信する実践の成果と可能性 —岐阜県瑞浪市釜戸町平山区と岐阜大学の協働による「平山一日限定カフェ」の試み—

太田百美¹⁾・玉腰みなみ¹⁾・牧野純子²⁾・福井花菜³⁾・二村玲衣⁴⁾

¹⁾岐阜大学地域科学部 3 年生 (〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1)

²⁾ 岐阜大学地域科学部 4 年生 (〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1)

²⁾ 岐阜大学医学部 3 年生 (〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1)

²⁾岐阜大学地域連携推進本部助教 (〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1)

1. はじめに

岐阜県瑞浪市平山区は、世帯数 29、人口 100 人未満の、過疎化が進む中山間地域である。本稿では、平山区と岐阜大学が協働し実施した地域魅力発信の取り組みについて、企画の経過や当日の様子を報告するとともに、参加者を対象としたアンケート結果と住民の反応を分析し、本実践から導かれる成果と可能性について述べる。

岐阜大学では、令和 2 年に瑞浪市と包括連携協定を締結し、令和 5 年度から岐阜大学次世代地域リーダー育成プログラム上級段階科目「地域リーダー実践（上級）Ⅰ・Ⅱ」における連携を開始した。岐阜大学次世代地域リーダー育成プログラムは、地域を知り・地域の課題を見つけ・地域の課題解決に向け行動できる力を身につけた、次世代の地域を担っていく人材を育成するプログラムである。「地域リーダー実践（上級）Ⅰ・Ⅱ」は同プログラムの上級段階に位置づく科目であり、担当教員の指導のもと特定の自治体や企業と 1 年間ともに活動し、実際の地域課題を改善・解決へ導くことを通して、地域の中でリーダーシップを発揮できる人材、あるいはリーダーを支援する人材として必要な素養や能力を養うことをねらいとしている。本科目では令和 5 年度から平山区と連携して活動する学生で各年度ごとに「平山チーム」を結成し、地域を盛り上げるゆるやかな住民組織「ヤマカツ」をはじめとした平山区住民や、瑞浪市役所職員と継続的に協働し、地域の魅力を発見・発信する活動を行ってきた。

2. 「平山一日限定カフェ」の企画と実施

令和 6 年度平山チーム・チーム名「はじゅみもり」では、「地域リーダー実践（上級）Ⅰ・Ⅱ」における地域魅力発信の取り組みとして、平山区や瑞浪市と協働し「平山一日限定カフェ」を実施した。以下、企画の考案から当日の実施状況まで述べる。

2-1. 企画検討に至った視点

「はじゅみもり」では、令和 6 年度前学期において、「瑞浪市平山区の魅力を発見し、地域内外の人に発信する方策を考える」ことを活動テーマとし、現地見学や関係者とのオンラインミーティングから、学生目線での平山区の魅力と課題を発見した。平山区の魅力は、豊かな自然が広がっている点、住民同士のつながりが強い点、来訪者をあたたかく迎え入れる雰囲気がある点である。一方、平山区の課題は、平山区のホームページや SNS の運用がされていないため、平山区に関する情報が対外的に発信されていない点、そして平山区の知名度が高くない点である。

同年度後学期には、これらの魅力を活かしつつ、活動テーマに沿う形で課題の解決を図ろうと考え、いくつかの解決策を考案した。その中から、平山区の魅力を知ってもらい、平山区に興味を持つ関係人口を増加させるという目標のもと、「平山一日限定カフェ」という企画実施を提案し、その広報も兼ねて平山区の公式 Instagram を始動させていくこととした。

そして、この企画の実施において、主に下記の 2 つのねらいを設定した。来訪者に 2 つのねらいを達成してもらうことで、目標である関係人口増加のきっかけに寄与したいと考えたのである。

1. メニューを通して特産品であるマコモダケや、自然の豊かさについて知ってもらいたい
2. 実際に訪れてもらうことで、平山区でのあたたかな関わりを感じてもらいたい

上記の軸を具体的に企画に反映した。

この企画を立てていく上で、6W2Hのフレームワークを活用した。6W2H(表2-1-1左列)に沿って検討を進めることで、企画を立てるうえで重要な事項を、取り漏らすことなく明確にすることができた。

2-2. 検討結果としての企画概要

検討の結果、上記1・2のねらいから「平山らしいカフェ」というコンセプトを打ち出し、カフェのメニューとして平山区にあるものを取り入れ、平山区の魅力を五感で感じられるカフェを目指すこととした。また、地域外の学生から見た平山区の魅力をアピールするサブ企画も考案した。カフェとサブ企画を通じて来訪者に平山区の住民と交流してもらうことで、来訪者にとってはよく知らない/住民にとっては住み慣れた「平山」の魅力を、発見/再発見してもらうきっかけになると考えた。

具体的には、カフェは平山での活動の中心拠点である平山区公民館で実施し、公民館内の調理室で調理を行うこととした。カフェとして飲食を提供するのは和室とテラス席、サブ企画を楽しむための部屋として利用するのはフローリングの部屋に決定した。同時に利用できる最大来訪者数としては和室12人(3卓)、テラス12人(3卓)、フローリング10人を想定した。平山区の魅力を感ずるためゆっくり過ごしてほしいと考え、滞在時間は1時間程度と想定した。

カフェメニューとしてはご飯2種、デザート4種、ドリンク7種、ツアー1種を考案した。まず、ご飯は「生トマトとしらすのマコモッティパスタ」、「平山ゴルフ場カレー」。デザートは「まこも団子」、「平山シフォンケーキ」、「平山カップチョコ」、「まこもからすみ」。ドリンクは「まこもミルク」、まこも茶、クロモジ茶の他、コーヒー、緑茶、紅茶、りんごジュースを用意した。「まこもミルク」とコーヒーは注文に応じてカフェアートを施すことにした。さらに、カフェメニューとして「ガイド付きわくわく平山お散歩ツアー」を考案し、組み入れた。

カフェメニューの一部には平山の特産品であるマコモダケの葉の粉末を使用することとした(表2-2-2中で*付のメニュー)。「平山ゴルフ場カレー」は平山区にあるゴルフ場をモデルに作り、「平山シフォンケーキ」や「平山カップチョコ」は平山区の自然をイメージした。からすみは、平山を含む東濃地域の伝統的なお菓子であることから、マコモ粉末を練り込んで提供することとした。そして、「ガイド付きわくわく平山お散歩ツアー」では、八幡神社や五輪塔、阿弥陀堂など名所から平山区の歴史に触れて、高台での景色も見られるコースを選定し、平山区の魅力を五感で楽しんでもらえるように企画した。

また、平山区の人のあたたかさを知ってもらうため、サブ企画の実施を決定した。具体的には、平山そのものの魅力を知ってもらうための地域紹介リーフレット・動画の作成、平山の方との交流を促すためのボードゲームの設置・クロスワードの配布、お客さんのメッセージを残せるメッセージボードの設置を行うことにした。平山の紹介動画には平山住民の方に提供してもらった写真や動画、また私たちが現地見学の際に撮影した写真を使用し、平山の四季の美しさや平山での一年の生活を知ってもらうようにした。

その他、交通手段についても検討した。平山区は車でなければ来訪が難しい立地であることから、高齢者や学生にも気軽に訪れてほしいと考え、大学のバスを活用して釜戸駅～会場の平山区

表2-1-1. 6W2Hに沿って考案した本企画の要点

| | |
|--------------|--|
| Why(目的) | 平山の特産品や人の温かさを知ってもらう |
| What(テーマ) | ただいまと言える場所、まるで実家のようなカフェ |
| How(概要・内容) | 特産品であるマコモダケを使用したメニューの提供、お客さんや住民が交流できるサブ企画の実施 |
| Who(主催/協力) | 岐阜大学 学生チーム「はじゅみもり」 /釜戸町平山区、瑞浪市役所 |
| When(日時) | 2025年3月30日(日曜日) |
| Where(場所) | 平山区公民館 |
| Whom(ターゲット) | 移住に興味のある人・のどかな田舎に興味のある人・瑞浪市周辺の人 |
| How much(予算) | 瑞浪市「域学連携推進事業交付金」を活用し、食材費や消耗品費等をまかなうことで、利用客へメニューを無償提供する |

表2-2-2. カフェメニュー

| カテゴリー | メニュー名 |
|-------|--|
| ご飯 | 生トマトとしらすのマコモッティパスタ* 平山ゴルフ場カレー |
| デザート | まこも団子* 平山シフォンケーキ* 平山カップチョコ* まこもからすみ* |
| ドリンク | まこもミルク* まこも茶* クロモジ茶 コーヒー 緑茶 紅茶 りんごジュース |
| ツアー | ガイド付きわくわく平山お散歩ツアー |

*はマコモダケの葉の粉末を使用したメニュー

公民館間のシャトルバスの運行を決定した。

2-3. 実施に向けた準備

多くの人にカフェを訪れてもらい魅力を知ってもらうため、宣伝にも力を入れた。瑞浪市に協力いただき、瑞浪市広報誌への掲載、瑞浪市公式 Instagram への投稿、駅やカマドブリュワリーでのポスターの掲示を行ったほか、岐阜大学教職員の協力を得ての岐阜大学内でのチラシ配布など、様々な年代の人に情報を届けられるように工夫をした。2-1. で触れた平山区公式 Instagram も始動し、企画実施直前には 5 日間にわたりカウントダウン形式の投稿を行った。なお、当日、来訪者が平山での写真を Instagram 等に投稿してくれることも想定し、「#ヒラヤマイネ」という専用ハッシュタグも作成した。

具体的な企画準備として、まず企画書やスタッフ用の運営マニュアル、役割ごとの仕事マニュアル、タイムスケジュールなどを作成した。これらの作成を通じて企画イメージを膨らませていく中で、当日の人員として全体統括・調理（フード・デザート・ドリンク）・ホール・ツアー対応・バス対応の役割を担えるだけの人数が必要であるとわかり、学生スタッフ募集にも努めた。

続いて、当日のカフェ企画・サブ企画に必要な、来訪者に渡す印刷物 3 種（裏に平山についての情報が載っているリーフレットがある平山クロスワード、アンケート用紙、写真撮影協力をお願いといった印刷物とメッセージボードに貼るための付箋）、メニュー表（図 2-3-1）、クロスワードの景品となるしおり、スクリーンとプロジェクター、平山区の四季を紹介した動画、メッセージボードを作成した。その他、ボードゲームは学生や教職員間で持ち寄り、提供する飲食物の材料やカトラリー、テーブルクロス等は購入して準備した。なお、提供する飲食物のうち、事前に作り置きが可能なメニューについては、食品衛生責任者資格をもつ教員の指導のもと、厳重な衛生管理の上で前日に作り置きし、当日スムーズなカフェ運営ができるようにした。

なお、ここまでの企画と準備については、第 4 章に記すインタビューにもご協力いただいた平山区住民の足立氏・瑞浪市市民協働課の中箴氏を中心として、企画の構想段階から意見交換する機会を数多くいただき、協働して検討しながら進めてきた。意見交換のみならず、現地見学も快く受け入れてくださったほか、カフェ企画の広報にもご協力いただき、瑞浪市広報誌での宣伝掲載、市内各スポットでのチラシ掲示の交渉や、平山区内でのチラシ配布など、幅広くご尽力いただいた。なお、後述するが、本企画では準備だけでなく、当日の運営においても、平山区の住民の方々や瑞浪市役所職員の方々のご協力が大きな助けになった。

2-4. 企画実施当日の報告

2-4-1. 実施の概要

実際の実施概要は表 2-4-1-1 のとおりである。当日は少なくとも 191 名がカフェへ来訪し、アンケートも 88 名の方から回答を得られた。

当日は「はじゅみもり」メンバー 4 名の他に当日スタッフとして 7 名の学生が参画し、3 名の教員が同行した。「はじゅみもり」メンバーによる仕切りのもと、各々が割り振られた役割（全体統括・調理（フード・デザート・ドリンク）・ホール・ツアー対応・バス対応）のマニュアルに沿って準備を進め、開店を迎えた。

メイン企画であるカフェでは、予定通りご飯 2 種、デザート 4 種、ドリンク 7 種、ツアー 1 種のメニューを提供した。また、多くの来訪者が満足感を得られるように、ご飯とデザートで 2 品ま



図 2-3-1. 学生作成のメニュー表

で注文可能という方法でメニューを提供した。平山お散歩ツアーは平山区の住民の方によるガイド付きで4回行い（開始時刻は12:30、13:30、14:30、15:30）、計19名の方に参加してもらうことができた。

また、サブ企画として記念写真の撮影・平山ツアーの実施・メッセージボードの設置を行った。記念写真の撮影には来訪者の方々にも参加していただき、11:10と16:00の二回行った。特に開店後の11:10の撮影には多くの来訪者に参加してもらうことができた。メッセージボードはカフェの出入り口付近に設置し、来店時に手渡した桜の形の付箋にそれぞれメッセージを書き込んでもらい、退店時にメッセージボードに貼り付けてもらった。

表 2-4-1-1. 平山一日限定カフェ実施概要

| | |
|-----------|--|
| 実施日時 | 2025.03.30(日) 11:00~16:00 |
| 実施場所 | 平山区公民館 |
| スタッフ | 大学生 11 人、引率教員 3 名、「ヤマカツ」メンバーを含む平山区住民 4 名、瑞浪市役所職員 1 名 |
| タイムスケジュール | 11:00 開店 11:10 記念撮影 15:30 ラストオーダー 16:00 記念撮影、閉店 ツアーとバスの時間は別記 |
| 参加者 | カフェ利用者 少なくとも 191 名(注文数より逆算) ツアー参加者 19 名 シャトルバス利用者 34 名 |

また、予定通り JR 釜戸駅から公民館を行き来するシャトルバスを運行し、平山区の住民の方のご協力のもと、平山区内にカフェ会場への道案内の看板を設置し、駐車場の案内や来訪者の誘導をしていただいた。

2-4-2. カフェ内での来訪者の流れ

来訪者への対応は次のとおりである。来店した方へスタッフが印刷物 3 種（平山クロスワード、リーフレット、アンケート）を手渡す。スタッフの案内で和室で着席、注文し、注文の品を待つ間に配布した印刷物に目を通してもらうことで、待ち時間を楽しく過ごせるようにした。他にも待ち時間を楽しめる工夫として平山区について紹介する動画をプロジェクターで投影した。食事後、アンケートやメッセージボードの付箋へ感想等を書いてもらい、退店する。

表 2-4-1-2. シャトルバス時刻表

| 行きのシャトルバスの時間 | JR 釜戸駅 | カマドブリュワリー | 平山区公民館 |
|--------------|--------|-----------|--------|
| 10:50 | | 10:55 | 11:10 |
| 11:50 | | 11:55 | 12:10 |
| 12:50 | | 12:55 | 13:10 |
| 13:50 | | 13:55 | 14:10 |
| 14:50 | | 14:55 | 15:10 |
| 帰りのシャトルバスの時間 | 平山区公民館 | カマドブリュワリー | JR 釜戸駅 |
| 12:15 | 12:15 | 12:30 | 12:35 |
| 13:15 | 13:15 | 13:30 | 13:35 |
| 14:15 | 14:15 | 14:30 | 14:35 |
| 15:15 | 15:15 | 15:30 | 15:35 |
| 16:15 | 16:15 | 16:30 | 16:35 |

当初は和室・テラス席のみの食事提供を想定していたが、開店前から想定より多くの方が来店し満席になったため、レイアウトを急遽変更し、フローリングの部屋でもカフェメニューを提供することに決定した。この変更により、ボードゲームを利用したサブ企画はできなかった。開店直後に多くの来訪者が殺到したため、メニューの準備数が不足に提供が滞るタイミングもあったが、午後には客足が落ち着いた。中にはスタッフにご意見やお礼の言葉を届けてくれる来訪者の方もいた。また、来訪者の数が落ち着いた夕方には来訪者同士・来訪者とスタッフが気軽にゆっくりと交流することができた。

2-4-3. 平山区住民・瑞浪市役所職員の方々のご協力

カフェ当日は、当初住民等から 4 名のスタッフを予定していたが、当日の慌ただしさの中で、急遽、接客対応等をしてくださった住民の方もいた。上述した看板の設置や駐車場の案内・誘導のほか、サブ企画として行ったツアーのガイドを務めていただいたり、公民館のガス釜の使い方を教えていただいたりした。また、瑞浪市役所の中箆氏には、ご考案いただいた「マコモッティパスタ」を終日調理していただいた。

以上のように全体を通して、合計で 8 名の方にご協力いただいた。また、平山区にゆかりある作家の木工、陶芸作品をフローリングの部屋に設置した。

2-5. 実施の振り返り

カフェ開催の後日、「はじゅみもり」メンバーで振り返りを行った。KJ 法で当日の感想や良かった点・悪かった点を整理していく中で、カフェ企画の目的である「平山らしいカフェ」を開催し、「平山を知ってもらい」「魅力を感じてもらい」を達成できたことを確認した。また、量的な視点

での振り返りも行い、来訪者は少なくとも 191 名おり、ガイドの参加者人数は 19 名、シャトルバス乗車人数は 34 名であったことを確認した。そして、アンケート結果の「自然の豊かさを感じられた」の 85.4%、「あたたかい雰囲気を感知られた」の 66.3%から、最初に設定した 1・2 のねらいを達成できたこと、「平山にまた来たいと思う」が 53.9%であったことから、リピートへのきっかけを作ることにはできたと思われることを確認した。また、カフェ企画のターゲットである「移住に興味がある人」、「のどかな田舎に興味ある人」、「平山区の住民」、「近隣地域の住民」のいずれのターゲットにも参加いただくことができたことが明らかになった。



補足写真 実施の様子

3. アンケート結果からみる来訪者の反応

3-1. アンケートの概要

来訪者の特性と照らしながら、イベントを通して「平山を知ってもらい魅力を感じてもらおう」という目的がどの程度達成できたかを調べるため、アンケート調査を実施した。実施日時はイベント開催日の2025年3月30日（日）11:00～16:00であり、来訪者のうち88名にご協力いただいた。来訪者は少なくとも191名いたため、回収率は46.6%以下である。

アンケートの質問項目は全9問で、回答しやすいようできるだけ簡潔な質問を心がけて作成した。調査した内容は、回答者の年齢、居住地、来訪手段、イベントを知ったきっかけ、平山についての認知度、平山の魅力を感じたか、平山を再訪したいかについてであり、アンケートの最後には感想等を自由記述できる設問を加えた。

「平山の魅力」としては、私たちが平山の魅力だと考える①自然の豊かさと②人のあたたかみの2つを挙げ、それぞれについて「十分に感じた」「少し感じた」「あまり感じなかった」「全く感じなかった」から選んでもらい、そう感じた理由を自由記述してもらった。また平山を訪問したいかについては、「また来たい」「イベントがあれば来たい」「そう思わない」から選んでもらい、どのようなイベントがあれば来たいかを、今までに平山でしたことのあるイベントや、イベントの企画案として出たものを候補に挙げ、選択してもらった。

3-2. 単純集計の結果

回答の各設問を集計すると、以下の結果となった。グラフは図3-2-1に示したとおりである。

まず、回答者（n=88）の年齢構成は、10代が1名（1.1%）、20代が4名（4.6%）、30代が10名（11.4%）、40代が11名（12.5%）、50代が18名（20.5%）、60代が20名（22.7%）、70代以上が24名（27.3%）であった。最も多かったのは70代以上で、全体の約3割を占めた。ただし、年齢が低い子どもはアンケートに回答していない場合がある。

居住地は、瑞浪市が43名（48.9%）で最多であった。隣接市町村である恵那市在住者は15名（17.1%）、土岐市在住者は10名（11.4%）で、岐阜県内他市町村の在住者は13名（14.8%）、さらに愛知県在住者が7名（8.0%）いた。

会場までの主な交通手段は、自家用車が70名（79.6%）と大半を占め、次いでシャトルバス15名（17.1%）、自転車2名（2.3%）、未回答1名（1.1%）であった。公共交通利用（シャトルバス）は全体の約2割程度にとどまった。

本カフェ企画を知ったきっかけとしては、「知人紹介」が39名（44.3%）と最も多く、次いで「瑞浪市広報誌」15名（17.1%）、「平山公式Instagram」10名（11.4%）、「チラシ」9名（10.2%）、「掲示ポスター」5名（5.7%）、「回覧板」1名（1.1%）の順であった。また、「その他」と回答した者が5名（5.7%）、未回答者が2名（2.3%）いた。

平山を「初めて知った」と回答したのは41名（46.6%）で最多であった。続いて「来たことがある」37名（42.1%）、「名前は知っていた」5名（5.7%）、「住んでいる」3名（3.4%）、未回答2名（2.3%）であり、半数近くが今回の企画を機に平山を初めて認知したようである。

平山の自然の豊かさについては、「十分に感じた」が62名（70.5%）と最多であった。「少し感じた」が17名（19.3%）、「あまり感じなかった」が4名（4.6%）、未回答が5名（5.7%）であり、約9割が何らかの形で自然の豊かさを実感していた。

また、平山の人々のあたたかな雰囲気については、「十分に感じた」が59名（67.1%）で最も多く、「少し感じた」17名（19.3%）、「あまり感じなかった」1名（1.1%）という結果であり、全体の9割近くが好意的に雰囲気を評価している。また、未回答は11名（12.5%）おり、回答し難い、もしくは設問の意味が分かりづらかった可能性がある。

今後、平山へ再来訪したいかという設問に対しては、「イベントがあれば来たい」が64名（72.7%）、「そう思う」が22名（25.0%）、未回答2名（2.3%）であった。具体的に希望するイベント内容としては、「カフェ」31名、「夏祭り」13名、「田植え」9名、「叫ぶイベント」¹⁾6名で、その他にも「花火」や「天体観測」など自由記述による回答がいくつか見られた。

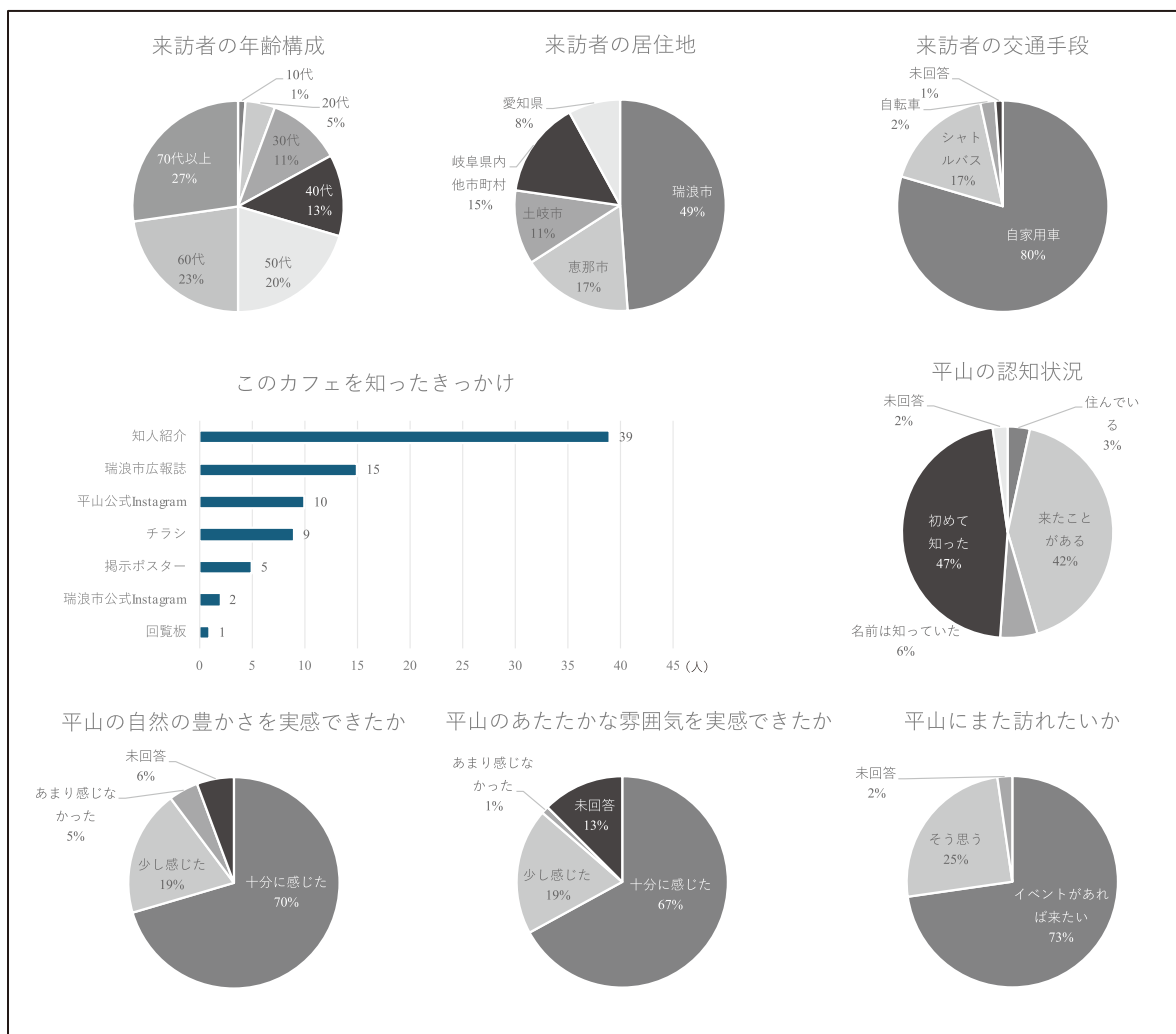


図 3-2-1. 来訪者アンケート単純集計結果

3-3. クロス集計の結果

本アンケートで得た回答を今後の平山でのイベント企画に生かしていくため、クロス集計を行った。結果を順に示していく。

3-3-1. ターゲット層と企画のありよう

今後イベントを行う際のターゲット層の参考にするために、①回答者の年齢と住所、②年齢と平山区への再来訪意向でクロス集計を行った。①の分析結果として、岐阜県内に居住している客層の年齢が比較的高く、愛知県内に居住している客層の年齢が比較的低いことが明らかとなった。このことから、年齢が高くなるほど、居住地域から距離が遠い場所でのイベントへの参加が難しくなると考えられる。さらに、岐阜県内に居住している来訪者に関しては年齢が高くなるほど客数も多くなっている。当日、高年齢層の来訪者に、多人数のグループでの来店が多かった。年齢の高まりに伴い多くの人が余暇や地域の人とつながりをもてる時間が増え、単に喫茶店で集まる感覚で今回のカフェイベントに参加した人も少なからずいるように思われる。

②の結果では、いずれの年代においても、「イベントがあれば来たい」が「そう思う」を上回っている。10～20代のうち「イベントがなくても平山区に訪れたい」と思う人は1人もいなかったが、その要因の一つとして、10～20代には愛知県出身の人が多く、平山区から地理的に離れているため、移動にかかる時間と経費の負担が大きいことが考えられる。さらに、全体を見ると「イベントがなくても訪れたい」人よりも、「イベントがあれば訪れたい」人の方が多いという結果に関しては、平山区の魅力を感じするには時間が足りなかったという理由や、平山区

の魅力は感じているが平山区でしか感じるこのできない魅力を見出すには至らなかったという理由が考えられる。

3-3-2. 情報発信の現状

今後イベントを行う際の情報発信の参考にするために、回答者の年齢とイベントを知ったきっかけでクロス集計を行ったところ、表 3-3-2-1 に示す結果となった。10～20 代の来訪者の中に平山区公式 Instagram をきっかけとして訪れた人がいなかったことから、平山区公式 Instagram による広報は若い層に届いていないことが分かるとともに、平山区公式 Instagram をフォローしている人は年齢層の高い人が多いと予想される。

表 3-3-2-1. 年齢×イベントを知ったきっかけのクロス集計結果

| 年齢 | 知人紹介 | 瑞浪市広報誌 | 平山インスタ | チラシ | 掲示ポスター | 回覧板 | 瑞浪市インスタ | その他 | 未回答 | 総計 |
|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|
| 10代 | | | | 1 | | | | | | 1 |
| 20代 | 2 | 1 | | 1 | | | | | | 4 |
| 30代 | 8 | 2 | | | | | | | | 10 |
| 40代 | 2 | 2 | 1 | 2 | 1 | | 1 | 1 | 1 | 11 |
| 50代 | 11 | 1 | 2 | 2 | 1 | | | 1 | | 18 |
| 60代 | 11 | 3 | 2 | 2 | 1 | | | 1 | | 20 |
| 70代以上 | 5 | 6 | 5 | 1 | 2 | 1 | 1 | 2 | 1 | 24 |
| 総計 | 39 | 15 | 10 | 9 | 5 | 1 | 2 | 5 | 2 | 88 |

また、平山区の認知状況と情報入手経路の関係を調べるために、認知状況とイベントを知ったきっかけでクロス集計を行った。「平山区を初めて知った」人の中で、最も多かった情報入手経路は瑞浪市広報誌（11 人）であり、属性に関係なく多くの人の目に情報が留まりやすい広報誌の強みが発揮されていた。一方、「平山区を訪れたことがある」人の中で最も多かったきっかけが平山区公式 Instagram であり、知人紹介と並んで 10 人だった。このことから、平山区を訪れたことがある人に情報発信する際には平山区公式 Instagram が最も適しているといえ、平山区を訪れたことがない人にとっては平山区公式 Instagram を認知するきっかけやフォローする動機は、ほとんど存在しないと考えられる。そして、平山区の認知状況の結果だけで見ると、平山区を初めて知った人は来訪者 88 人中 41 人と半数近くいたため、イベントの目的の一つである「平山区を知ってもらう」ことは達成できたと言えるのではないかと。

3-3-3. 平山の魅力はどこに住む人に響くか

居住地域によって平山区に対する印象がどのように変わるかを調べるために、①回答者の住所と自然の豊かさを感じた程度、②回答者の住所と平山の人々のあたたかさを感じた程度でクロス集計を行った。①では、瑞浪市に居住する人の中で、自然の豊かさを「十分に感じた」人の割合が約 85% と高かったことから、同市内でも場所によって自然の豊かさの程度は様々であり、各地域の魅力や活かし方も多様に存在すると言える。一方、恵那市に居住する人の中で、自然の豊かさを「十分に感じた」人の割合は約 57% と少なかった。この結果に関しては、恵那市は平山区に隣接しており、平山区と同様の景色が広がる地域も多いため、平山区を特別自然豊かだとは思わなかった人が多いのではないかとと思われる。全体的な結果をみると、どの地域に住んでいる人も平山区の自然の豊かさを感じたと言える。

②では、愛知県に居住する人の中で、平山の人々のあたたかさを「十分に感じた」人の割合が約 83% と特に高かったことから、平山区を訪れた愛知県居住者にとって今回のカフェイベントは、普段の生活と比べてより一層、地域住民と活発に交流し、住民や地域全体のあたたかさを感じることができた機会になったと言える。全体的な結果をみると、どの地域に住んでいる人も平山区の人々のあたたかさを感じたと言える。

3-3-4. 駐車場やシャトルバスへのニーズ

今後イベントを開催する際に、駐車場やシャトルバスを用意すべきか検討するために、①居住地と利用した交通手段、②交通手段と再来訪意向でクロス集計を行った。まず、①では、居住地を問わず駐車場とシャトルバスの確保は不可欠であることが分かった。特に愛知県からの来訪者については、自家用車とシャトルバスの来訪者がほぼ同数であり、これは電車などの公共交通機関を利用して平山を訪れる層も一定数存在することを示唆している。このことから、今後も幅広い地域からの来訪者を誘うためには、駅と会場を結ぶシャトルバスの運行が非常に重要であるといえる。

②の分析結果からは、まず、自家用車で来訪する人向けの駐車場の用意について、「イベントがなくても平山区に訪れたい」と考えている人のうち今回自家用車を利用した人は約67%、「イベントがあれば訪れたい」人のうち自家用車を利用した人は83%と、平山区への再来訪意向が高い人のうち、自家用車を利用する人が非常に多かったため、次回以降も駐車場を用意する必要性は極めて高いと言える。加えて、イベントがないときでも自家用車で訪れたいと思っている人がいるため、普段から利用可能な駐車場があると、より平山区に立ち寄りやすくなると思われる。次にシャトルバスの運行について、「イベントがなくても平山区に訪れたい」人のうち今回シャトルバスを利用した人は約24%、「イベントがあれば訪れたい」人のうちシャトルバスを利用した人は約15%と、割合としてはあまり高くない。しかし、シャトルバスを利用した人には岐阜県外在住者が多く含まれていることを考慮すると、多様な地域からの集客を目指すのであればシャトルバスの必要性は高いと言える。

3-3-5. 「また来たい」と思わせるためにどうすべきか

平山区の認知状況と再来訪意向に合わせて来訪者へのアプローチ方法を検討するために、認知状況と再来訪意向でクロス集計を行った。イベントがなくても平山区に訪れたい人のうち、最も割合が高いのが「平山区に訪れたことがある」人で約48%、次に割合が高いのが「平山区を初めて知った」人で約33%だった。この結果から、平山区に初めて訪れた人よりも平山区を訪れたことがある人の方が、平山区にまた来たいと感じやすい傾向にあり、それは回数を重ねたほうがより平山区の魅力に触れる機会が多くなるからだと考えられる。そして、「初めて平山区に来た」人の内訳を見ると、「イベントがなくても平山区に訪れたい」人が17.1%だったのに対し、「イベントがあれば訪れたい」人が82.9%と多かった。この結果をもとに考えると、今回初めて平山区に訪れた人に対する今後の働きかけ方としては、まず2回目の来訪を確実なものとするために次回も平山の魅力が伝わるイベントを開催し、魅力を十分に感じてもらうことで、継続的な来訪を目指していきたいと考える。

また、居住地と再来訪意向のクロス集計をしたところ、居住地からの距離と再来訪意向に連関が見られた。愛知県からの来訪者は「イベントがあれば来たい」という回答が多く、特別なイベントがない限り再来訪への意欲が低い傾向が見られた。これは、地理的な距離が遠いほど、平山への訪問には明確な目的や動機が必要となるためと考えられる。一方で、平山に地理的に最も近い恵那市からの来訪者では、「イベントがあれば」／「なくても再訪したい」と回答した人の数が同程度であった。この結果は、距離が近いほど日常的な利用や、特定のイベントに依存しない再来訪の可能性が高まることを示唆している。したがって、リピーターの獲得には、地理的近接性に応じたアプローチの検討が有効であると考えられる。

さらに、平山の魅力が再来訪意向に与える影響を検討するため、自然の豊かさを感じたか・人のあたたかみを感じたか・再来訪意向の3軸でのクロス集計を行った。その結果、自然とあたたかみのどちらか一方でも魅力を「十分に感じた」と答えた来訪者は、イベントの有無にかかわらず再来訪したいと考える可能性が高いことが示された。これは、平山の本質的な魅力を感じ取った来訪者が、高いリピーターになる可能性を秘めていることを意味する。一方で、これら2つの魅力を十分に感じていない来訪者は、イベントがない限り再来訪したいと考えない傾向が見られた。このことから、リピーターを増やし、平山への継続的な来訪を促すためには、より多くの来訪者に「自然の豊かさ」または「人のあたたかみ」、あるいはその両方を深く感じてもらえるような取り組みを強化していく必要があると言える。特に、「自然の豊かさをあまり感じなかった

が、雰囲気を感じた」人や「自然の豊かさを少ししか感じなかったが、雰囲気を感じた」人がイベントがなくても再訪したいと考えていることから、平山の「雰囲気」が再来訪意向に与える影響は「自然の豊かさ」よりも強い可能性があると言える。今後は、平山ならではの魅力的な「雰囲気」を創出し、それを来訪者に効果的に体験してもらうことに注力することで、さらなる再来訪促進が期待できるだろう。

3-3-6. だれにどのようなイベントが求められているか

平山で実施するイベントへのニーズと回答者の属性の関連を検討するため、①居住地と希望するイベント、②年齢と希望するイベントでクロス集計を行った。①の分析では、居住地によって希望するイベントの傾向が異なることが判明した。愛知県からの来訪者は、田植え体験や夏祭りといった非日常的な体験型イベントへの希望が多く見られた。これは、都市部では体験しにくい活動を求めて平山を訪れているためと考えられる。また、今回のイベントで提供されたカフェが好評だったことから、カフェへの希望も多く見られた。しかし、愛知県からの来訪者でカフェを希望する人が比較的少なかったのは、地元で多くのカフェがあるため、平山で特にカフェを求める必要性を感じていないためと推察される。対照的に、瑞浪市からの来訪者でカフェを希望する人が多かったのは、地元でそうした「憩いの場」が少なく、それを求めている可能性が高いと考えられる。このことは、地域ごとのニーズを詳細に把握し、それに合わせたイベントや施設の提供が重要であることを示している。

②の結果、イベントへのニーズは年齢層によっても違いが見られた。夏祭りは全体的に高い人気があり、幅広い年代に需要があることが明らかになった。特に若年層に夏祭りへの希望が多かったのは、彼らがよりアクティブな体験を求めているためと推察される。一方で、年齢層が高い方々からはカフェへの希望が多く、これは落ち着いた「憩いの場」を求めていると考えられる。興味深いのは、「叫ぶイベント」への参加を希望する70代の回答者が複数いたことである。

4. 聞き取り調査による住民等の反応

ここからは、企画の準備から実施まで学生と協働いただいた瑞浪市平山区の足立氏、瑞浪市役所市民協働課の中箴氏へのインタビュー結果を通して、来訪者アンケートではわからなかった平山区住民の反応や、瑞浪市職員の方からの反応について述べ、実践を多角的に振り返っていく。

インタビューは、Zoom ミーティングを活用したオンラインにて、足立氏と中箴氏の両名に参加いただき、2025年7月7日（月）16:30から18:07までの1時間37分間実施した。事前に学生4名で考えたインタビューシートをもとに、半構造化インタビューの形で行った。岐大側はインタビュアーとして太田・玉腰が、進行役として二村が出席した。下記では、インタビューで得られた情報を4つの節に分け、インタビューの言葉を引用しながら整理する。

4-1. 実施に対する地域住民の反応

まず、本実践の実施に対して、平山区の住民や「ヤマカツ」メンバーからは、「本当に皆さん驚いてまして、本当に感謝というかね。皆さんよくやっていただいたということはありません。区会、春祭りなどでも、そのことは、話題にはなりました」（足立氏）という。一部の住民にとって、大学と連携することや、地域を元気にしていくという「ヤマカツ」の取り組みは「どういったものかというのわからなかったものが、実際ああいう形になったので。そこは住民の皆さん関心が高まったというふうに思います」（同）として、「ヤマカツ」をはじめとする地域おこしの活動への理解を具体化させ、関心を高められたのではないかとしている。なお、本実践当日の写真や、当日取材を受けた新聞記事等は現在も平山区公民館内に掲示いただいております。カフェの成果は区会等の公民館での集まりを通じて、住民へ周知され続けている。

こうした企画の実施について、足立氏は「平山にいる人だけではなかなか。そこまでできませんので、まあ、そういった意味では、学生さんの力が大きかったかなというところは、本当に実感しました」と大学との連携がもたらす力を言及され、特に「いろんな準備の書類とか、オペレーションの書類とか、しっかり作っていただいた」として、大学で企画の立て方や地域その

ものについて学びながら取り組み、企画書や当日運営マニュアル等を作り込んだうえで実施に臨んだ学生の積み上げを評価いただいた。

具体的な企画の中で、住民の視点から良かったこととして、「ツアーをやってもらったのが、あれ意外と良かったなと思ってます。思ったより、参加者もいましたし」と挙げられ、来訪者から好評だっただけでなく、自身にとっても、地元の歴史について学ぶ機会がない中で、改めて関心をもつ契機になったという。

また、本実践の目標の一つとして、来訪者に平山区でのあたたかな関わりを感じてもらいたい、というものがあつた。要するに、住民と来訪者での交流の機会としたいということであるが、これに関する住民からの反応は特にないという。学生と来訪者、学生と住民との間で話している光景は見られたものの、「住民と来訪者」のコミュニケーションを図れていたか、図るための機会を創出できていたかということからは、達成できていないように思われる。

4-2. 周辺地域からの声

足立氏・中箴氏兩名から語られたのは、周辺地域のまちづくり関係者の反応であつた。足立氏は、「〇〇のまちづくりの組織の方が何人かいらっしゃいまして。実際にこのヤマカツの活動を見られたのは、多分初めてだと思います」、「しっかりやっているなど、話をいただいて」感銘を受けたような反応を得られたという。また、中箴氏は、カフェに来訪した他地域のまちづくり関係者から「小規模な自治会で、こんなに人が来れるのはすごいいいねって。何かすごく参考になったみたいな感じの反応だった」という。このように、周辺地域のまちづくり関係者が来訪し、本活動の様子から、平山区ならびに「ヤマカツ」の活動を高く評価してくれたという。

実際に足立氏は、「そういう方に実際見ていただいたというのは、しっかりやっているということでは、わかっていただいたかな」と感じ、この来訪をひとつのきっかけとして、周辺地域でNPO法人化されたまちづくり団体の連携団体に「ヤマカツ」が組み入れられたという。足立氏は「まちづくりの中の、一員というか。そういったものに認識されたのかなということだと思います」と述べ、本実践の実績により、周辺地区組織に対して平山区を印象付けられたことを示唆している。中箴氏も、この実践から「結構、『平山』っていう言葉がちゃんと歩くようになった、釜戸で」と、釜戸町の中で特段知られていたわけではない「平山」の認知度が上がった可能性に言及した。

また、中箴氏によれば、瑞浪市役所内では、「市役所の職員はすごい良かったねっていう人が多いですね、やっぱり。人いっぱい来てたねとか」と評判が良く、「特定の職員からは、次に何かイベントがあつたら、(中略)一緒にやりたい」という声もあがっているという。

4-3. 実施前の広報について

実施前の広報については、市の広報誌、ポスター掲示、市ならびに平山区のInstagram、平山区内の回覧板等で周知を行った。広報誌や掲示ポスター、市のInstagramでは問い合わせ先を瑞浪市市民協働課とし、対応をお願いしていた。中箴氏は、通常の市広報について「悲しいことに、広報についてのお問い合わせってほぼないんです」という。しかし、「平山カフェだけは、広報について『このカフェってバスってどういう風なの?』とか、『何時から何時までやってるの?』みたいな問い合わせが3件程度ありました」、「それで、『あ、人がいっぱい来るだろうな』って予想をしたんです」と、当日盛況となることを予感していたという。

また、足立氏と平山チーム学生で運用していた平山区公式Instagramについては、特に動画による宣伝の閲覧数が多く、効果的だったのではないかと。「カフェの時は、道案内とか動画出してもらって。あれもいきなり300、400いったと思うんですけど。で、自分もこの前のマコモの田植えの早送りの動画出したら、あれ結構見ていただいたので、そういう意味では動画がいいかなと思ってます」(足立氏)。

4-4. 平山チームが考案した見せ方からの気づき

今回、想定以上の集客ができたことについて、中箴氏は広報の際の「地域の見せ方」に良さがあつたのではないかと指摘する。「やっぱり見方を変えるだけで、やっぱり全然違うんだと思うんですよ」、「普段日常生活にあるものをどうやってPRしていくかっていう視点の変換ができれば、

すごく興味を持ってもらえる」、「『実家みたいなの』とか、ちょっと行ってみたいねとか確かめてみたいねっていう動きにつながったことで、人がすごく来てくれたと思っているので」（中箴氏）。平山に当たり前にある日常を学生目線で捉え直し、コンセプトとして前面に打ち出したことが、人々の来てみたいという気持ちにつながったのではという。

この経験をもとに中箴氏は「平山でやったことをきっかけに、やっぱり売り出し方と情報発信の仕方だっているのは思ったので」、自身が担当する他地区の事業において、地域の当たり前を組み合わせたり、いくつかの共通項ある企画をドッキングさせることで、こちらも想定以上の集客を得ることができたという。「普通にあるものをどうやって PR して興味を沸かせるかっていう手法として、もう一回やってみたら、やっぱり当たった」。PR 手法については、特段のフレームワークや手法を用いたわけではないが、学生目線での発想が功を奏したといえる。

4-5. 今後の展開について

足立氏によると、平山区住民を中心に「次はいつやるんですか？という問い合わせは非常に多い」という。実際、次回を要望する声は実施当日にも多くの来訪者からいただいた。こうした状況から、足立氏をはじめとした「ヤマカツ」メンバーや中箴氏、また平山チーム学生としても、協働して定期的にカフェ企画を開催していきたいと考えている。ただ、今回の形での実施は、メニューの多さやサブ企画等の多さから準備の負担が大きかったため、「継続的にするためにも、やっぱりその日ぐらいでできるようなものに」（中箴氏）再検討していく。また、企画検討の当初、平山の情報発信の手段としてホームページの開設も検討していたが、今回、Instagram とその他アナログな手段での広報でこれだけの来訪者を得られたこと・これ以上の来訪者は受け入れられないことから、情報発信ツールは当面 Instagram の運用に限る方向とする予定である。

カフェ第二弾は、2025 年 11 月に規模を縮小して実施することとした。足立氏・中箴氏は、「平山でこういうことをやってますというのが定着すれば、これは、1 つ、大きなことになるかなと思っています」（足立氏）、「平山のカフェ、できればやっぱりずっと続けていくと、『あ、平山って 1 日カフェのところでしょ』ってっていう認識が出てくるので、できれば続けたいですね。岐大のカフェのところでしょっていう」（中箴氏）と、定例化され印象付けられることに期待を寄せており、「はじゅみもり」メンバーもまた、カフェを通じて平山を発信し続けることに意欲的である。

5. 本実践が地域にもたらす可能性

本実践では、岐阜県瑞浪市平山区と岐阜大学が連携し、「平山一日限定カフェ」を通じて地域の認知度向上と魅力発信を図った。学生と住民が共に企画・運営を行い、191 名以上が来訪、アンケート回答 88 名中 89.3%が「自然の豊かさを感じた」、86.4%が「あたたかな雰囲気を感じた」と回答し、97.7%が「平山にまた来たい」と回答するなど、高い満足度と再来訪意向が得られた。クロス集計から、地域外からの来訪者には「非日常体験型イベント」が、近隣地域在住の高齢者層には「憩いの場」としてのカフェがそれぞれ有効であることが確認され、今後のターゲット別企画立案に活用できる知見が得られたといえる。

住民と市職員へのインタビューでは、大学と協働することで規模の大きい本実践を実現できたことや、地域・企画の見せ方が高く評価された。また、周辺地域のまちづくり関係者から平山が一目置かれるきっかけとして、本実践が寄与していたことも明らかになった。

本稿では多岐にわたるデータを扱ったため、すべてを十分にまとめきれない部分もあり、考察がしきれていない点も残るが、得られた成果と知見は地域と大学の連携による学びと実践の有用性を示すものである。

今後は、準備負担を軽減した上で令和 7 年度内に規模を縮小したカフェ第 2 弾を実施し、「平山といえばカフェ」となるよう定例化することを目指す。さらに、得られた知見をもとに「自然の豊かさ」や「人のあたたかみ」を深く体験できるプログラムを強化し、平山来訪のリピーター創出と持続的な関係人口の拡大を図っていく。

注

1) 平山を一望できる丘から参加者が思い思いに叫ぶイベント。2024 年 7 月に初めて実施された。

岐阜県瑞浪市における域学連携を活用した『化石検定』の実施

安藤 佑介¹⁾・伊藤 允一²⁾

¹⁾瑞浪市化石博物館（〒509-6132 岐阜県瑞浪市明世町山野内 1-47）

²⁾瑞浪市役所（〒509-6195 岐阜県瑞浪市上平町 1-1）

1. はじめに

瑞浪市は、岐阜県の南東部（東濃地域）に位置する人口約 35,000 人の市である。瑞浪市では、「瑞浪市まちづくり基本条例（2015 年 7 月 1 日施行）」に基づいて、市民と行政の協働による市民主体のまちづくりを推進している。この中で、特に若年層のまちづくりへの参加機会確保のため、2013 年に中京学院大学、2016 年に瑞浪高校、中京高校および麗澤瑞浪高校、2019 年に中部大学、2020 年に岐阜大学と域学連携協定を締結し、産業・文化・福祉・教育などの分野で瑞浪市と高等教育機関が相互に協力し、「若者や研究者の参加による地域の活性化」や「社会貢献を通じた優れた人材の育成」を図っている。また、学生が地域の課題解決や活性化に取り組む域学連携活動に「域学連携推進交付金（調査研究活動: 5 万円; 実践活動: 20 万円）」を交付し、若者による協働のまちづくりを推進して、まちづくりに関与する「関係人口」の増加を目論んでいる。

しかしながら、2021 年の市民を対象としたアンケートでは、20 代～30 代の世代の中で「瑞浪市に住み続けたい」と思う割合は 75%と全年齢層の平均値 80.2%と比較すると低い値を示した。したがって、将来的には人口流出を抑制するためにも、瑞浪市に関係する（在住または市内の学校に通う）生徒（中学校～高校）・学生（専門学校や大学）の瑞浪市へのシビックプライド（郷土への愛着や誇り）の醸成を図る施策が必要であった。若者のシビックプライド醸成と域学連携の取り組みをさらに実効性のあるものとするため、2022 年に瑞浪市と域学連携協定を締結している高校生・大学生を対象に、学校の枠を超えたまちづくりチーム瑞浪市役所「ミライ創ろまい課（以下ミライ創ろまい課と記述する）」が結成された。

本論の主体となる「化石」について、瑞浪市は昔から市内各地から保存良好な化石が容易に見つかることから「化石の街」と呼ばれており、その中心的な役割を担う瑞浪市化石博物館は、1974 年に開館した化石専門の博物館である。博物館設立にあたって、下記の理念が立てられた（瑞浪市化石博物館, 2003）¹⁾。

- ・化石専門の博物館
- ・地域の博物館
- ・みんなの博物館

このうち、本稿の鍵となる「みんなの博物館」については、誰もが利用できるような開かれた博物館であることが設立からの理念であり、開館当初から講座の開催などの活動はもちろんのこと、近年では出前講座など公民館や学校をはじめとする教育機関と様々な連携を通じた活動を展開している。小中学校との連携については、安藤ほか（2024）のように地域の化石資料を使った「化石の街」ならではの出前講座を継続的に実施している²⁾。その中で、前述のミライ創ろまい課との連携事業として「化石検定」の開催とそれに係る活動を高校生と行うこととなった。本報告では、化石検定開催に至る経緯をミライ創ろまい課の活動とともに時系列に報告し、本事業が運営側と受検者側にもたらした効果を紹介し、筆者が事業を通して感じた域学連携に対する提言も行う。なお、一般的に域学連携は大学（生）と地域の連携に焦点が当てられた政策用語（例えば田原, 2019）であるが³⁾、瑞浪市の場合は高等学校を含む高等教育機関全般を対象としているため（瑞浪市, 2025）⁴⁾、本報告で扱う域学連携とは大学だけでなく高校との連携も示す。

2. ミライ創ろまい課について

ミライ創ろまい課は、条例等で規定されている正式な瑞浪市の部署ではなく、仮想的に行政組織の課名を模した学生によるまちづくりグループである。活動の目的は、「学生が主体となり自らが企画した地域活動に大人を巻き込みながら実践する」ことを通じ、若者が進んでまちづくりに参画し、まちに『にぎわい』を創出することである。またターゲットを生徒・学生に定め、市内に高校 3 校と大

| アンケート項目 | |
|---------|--|
| 地域推奨量 | ①瑞浪市を知人・友人に推奨する気持ちはどの程度ですか |
| 地域参加量 | ②瑞浪市をより良くするために参加や行動しようとする気持ちはどの程度ですか |
| 地域感謝量 | ③瑞浪市をより良くしようと活動している人の感謝の気持ちを表すとどの程度ですか |

| 評価 (0~10の11段階) | | | | | | | | | | |
|----------------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|
| 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 |

| | |
|-----------|----------|
| マイナスとして計算 | プラスとして計算 |
|-----------|----------|

【算出方法】 (8~10の評価の割合) - (0~5の評価の割合) ×人口 (万人)

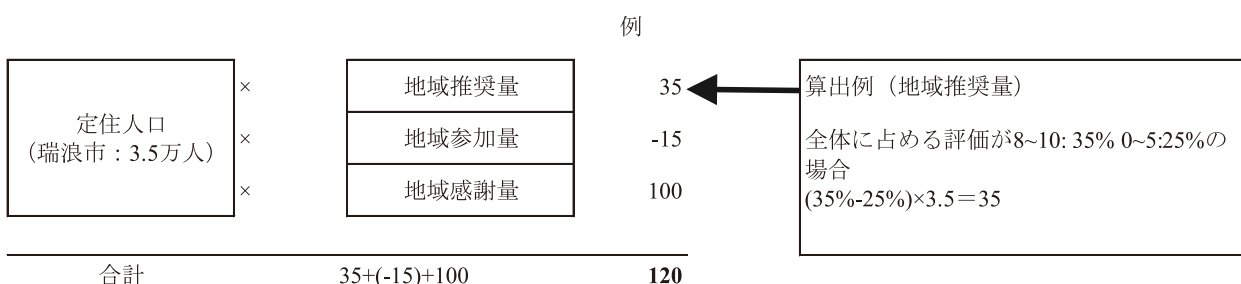


図 1. 修正地域参加総量指標を用いたミズナミライ値の算出方法と算出例、太字が本算出例で算出されたミズナミライ値となる。

学1校が立地している利点を活かし、高校や大学との連携を強化して若者の定住意欲に繋がるような施策を展開することにより、若い世代の転出超過に対応することも目的の一つである。

その主な活動は月に2回程度、市内事業者や市役所職員、キャリア教育のアドバイザーを交えて行うワークショップである。この中で、生徒・学生が主体的に企画を検討・実施し、瑞浪市の魅力向上や課題解決に向けた提言を行っている。活動時期は原則として2年間(ただし3年間活動を行うメンバーもいる)であり、1回あたり90分を目途に活動する。2025年度時点で、瑞浪高校13名、中京高校54名、麗澤瑞浪高校16名の計83名が活動に参加している。また活動の効果を測る目的で修正地域参加総量指標(mGAP: modified Gross Area Participation)を採用して2024年12月にアンケートを実施し、活動前と活動後の気持ちを測定し(ただし活動前の気持ちは記憶を2022年5月にさかのぼって回答してもらった)算出した指数に現在瑞浪市の人口概算値(3.5とした)を掛け合わせたものを「ミズナミライ値」として独自に算出した(図1)。これは、若者のシビックプライド醸成の成果を毎年実施する市民アンケートの「瑞浪市に住み続けたいと思う割合」にしていたが、若者のアンケート回答数が極端に少なく(500人の回答者の中毎回1~3人)、効果の測定が困難であったためこのような指標を設定した。mGAPは、は東海大学の河井孝仁教授が提唱したシティプロモーションの効果を図るための評価指標であり、「地域の推奨意欲」「地域活動への参加意欲」「地域活動への感謝意欲」

表 1. アンケートから算出したミズナミライ値。アンケート項目の①~③は図1の①~③に該当する。算出の際、図1に示すように黒色枠はマイナスとして、灰色枠はプラスとして扱う。

| 気持ちを測った時期 | アンケート項目 | 回答 | 回答数 | 割合 | 各指標産出結果 | ミズナミライ値 |
|-----------|---------|------|-----|-----|---------|---------------|
| 活動前 | ① | 0~5 | 55 | 68% | -203 | -430.5 |
| | | 6~7 | 18 | 22% | | |
| | | 8~10 | 8 | 10% | | |
| | ② | 1~5 | 45 | 55% | -140 | |
| | | 6~7 | 24 | 30% | | |
| | | 8~10 | 12 | 15% | | |
| | ③ | 1~5 | 37 | 46% | -87.5 | |
| | | 6~7 | 27 | 33% | | |
| | | 8~10 | 17 | 21% | | |
| 活動後 | ① | 1~5 | 15 | 18% | 42 | 374.5 |
| | | 6~7 | 42 | 52% | | |
| | | 8~10 | 24 | 30% | | |
| | ② | 1~5 | 9 | 11% | 122.5 | |
| | | 6~7 | 35 | 43% | | |
| | | 8~10 | 37 | 46% | | |
| | ③ | 1~5 | 4 | 5% | 210 | |
| | | 6~7 | 24 | 30% | | |
| | | 8~10 | 53 | 65% | | |

の3要素を数値化し、地域への人・モノ・カネの流れを増やすことを目的とした地域活性化のための定量的な手法であり、これが関係人口の増加や潜在的関係人口の顕在化に寄与するものと考えられている(河井, 2016, 2023)^{5), 6)}。活動開始前と活動開始後のアンケートを基に算出した結果(回答者は81名)、参加前は-430.5だった意欲が活動後は+374.5と値が805と大きく上昇しただけでなく、マイナスからプラスになったことが明らかになり(表1)、ミライ創ろまい課の活動は瑞浪市の関係人口の顕在化に寄与している可能性が高いと考えられる。

3. 化石検定の構想と方針

ミライ創ろまい課発足時に、どのようなプロジェクトを行うのか高校生にアンケートをとったところ、(1)高校生が発案したイベントの開催、(2)高校生による特産品の開発、(3)高校生が関わる化石に関する事業の展開の3つが選定された。そして、(3)の中でさらにいくつかの事業が提案され、その中で実現可能な事業を検討した結果「化石検定」事業を実施することとなり、ミライ創ろまい課内に「化石検定チーム」が結成された(2022年結成時は11名)。

化石検定の目標・年次計画・実施方法・活動内容を策定する中で、最初にスケジュールを検討した結果、表2に示すように2024年10月の「化石の日」(毎年10月15日:日本古生物学会選定)前後に本試験を開催することを最終目標とした。これを達成するために、2022年を準備期間、2023年をプレテスト開催とその反省点などを本試験に向けた改善、2024年に本試験の開催をそれぞれの年次目標とした。なおこれらの構想は高校生ではなく、あらかじめ市役所の職員とキャリア教育のアドバイザー(清水徹也:生涯教育支援「たら×れば」)との協議で考案された事項である。

活動内容については、高校生が主体となって問題作りから運営を行うご当地検定を前面に出してプロモーション活動を行うこととした。検定の対象としては、化石好き・古生物学好きな層を主なターゲットとして呼び込み、あわせて検定好きな層も参加できるような難易度や内容にして瑞浪市や化石に対する新たなファン層の獲得を目指した。また、2023年のプレテスト開催により化石検定の存在を浸透すること、2024年の本試験開催時には市内外から化石ファン・古生物ファン・検定ファン層が受検すること、さらには「化石の街みずなみ」の認知度向上と関係人口の獲得も目標に入れた。これについては、浅野(2011)が提唱した「趣味縁」⁷⁾によるファン層の増加とそれによる情報発信や化石・古生物学の普及に期待できるためである。

検定の問題については、活動初期の時点で高校生から様々な意見や提案が出された。例えば、「化石採集の実技を入れる」「化石の鑑定を入れる」「選択制にするかどうか」「時代ごとに設問を分けて作るか」「化石の種類で設問を分けて作るか」などである。これらのうち化石採集や鑑定といった実技については、実施が現実的ではないことが明らかになったため比較的早い構想段階で行わないこととなった。2022年時点での試験問題の方針は下記の通りである。

- ・解答を選択制にする(基本を5択とする)。
- ・試験時間は60分とする。
- ・問題1問につき解答に費やす時間は1~2分を想定する。
- ・上記を達成するため、問題は40~60問を用意する。
- ・化石のでき方や地層に関する問題15~20問を前半に出す。
- ・古生代~新生代の古生物に関する問題15~20問を中盤に出す。
- ・瑞浪の化石に関する問題15~20問を最後に後半に出す。

上記の方針に沿ってプレテスト及び本試験を開催することとしたが、化石の鑑定についてはプレテストの振り返りを経て導入の再検討がなされ、2024年の本試験では採用することとし、実際に受検者分の化石を用意した。また、当初は全ての問題の解答を選択制にすることと決めていたが、この点についてもプレテストの振り返りの際の相談により一部記述式の問題も含めることとなった。

4. 化石検定の活動と2023年のプレテスト開催までの経緯

前述のようにミライ創ろまい課の活動は、その日設定した課題を高校生と相談しながら取り組むという内容である。化石検定については高校生が主体であるが、著者の安藤が取りまとめを行い、キャリア教育を専門とするアドバイザーの助言を組み入れながら課題等を作成し、高校生と共に取り組んだ。内容としては、検定の方向性や問題作りの方向性などの漠然としたものや、検定をPRする

表 2. 化石検定の計画と実際の活動状況.

| 年 | 月 | 化石検定チームの活動(計画) | 化石検定チームの活動(実際) | 古生物学者、市役所の活動(計画) | 古生物学者、市役所の活動(実際) | |
|------|------|-------------------------------|----------------------------------|-------------------------------|------------------------------|-------|
| 2022 | 4 | ○チーム結成 | ○チーム結成 | ○活動準備 | ○活動準備 | |
| | 5 | ○事前学習 | ○事前学習 | ○事前学習支援(講義等) ○スケジュール等検討 | ○事前学習支援(講義等) ○スケジュール等検討 | |
| | 6 | | | | | |
| | 7 | | | | | |
| | 8 | | | | | |
| | 9 | ○インタビュー・博物館等見学 ○問題作成のための学習 | ○インタビュー・博物館等見学 ○問題作成のための学習 | ○インタビュー・博物館等見学 ○問題作成支援 | ○インタビュー・博物館等見学 ○問題作成支援 | |
| | 10 | | | | | |
| | 11 | | | | | |
| | 12 | | | | | |
| | 2023 | 1 | ○問題作成 | ○インタビュー・博物館等見学 ○問題作成のための学習 | ○問題作成支援(レイアウト等) | ○問題作成 |
| | | 2 | | | | |
| | | 3 | | | | |
| 4 | | | | | | |
| 5 | | ○問題作成 ○チラシ作成 ○広報活動 | ○チラシ作成 ○イラストレーターと打合せ ○広報活動 | ○チラシ作成 ○広報活動 | ○問題作成 ○チラシ作成 ○広報活動 | |
| 6 | | | | | | |
| 7 | | | | | | |
| 8 | | ●プレテスト開催 | | | | |
| 9 | | ○採点 | ○振り返り | ○振り返り | ○採点 | |
| 10 | | ○振り返り | | ○結果発送 | ○結果発送 | |
| 2024 | 1 | ○振り返り | ○振り返り | ○振り返り | ○振り返り | |
| | 2 | ○広報活動 | ○チーム再編 ○活動再開 | ○チーム再編 ○活動再開 ○問題検討 | ○チーム再編 ○活動再開 ○問題検討 ○チラシ配布 | |
| | 3 | | ○活動方針等検討 | ○活動方針等検討 | ○活動方針等検討 | |
| | 4 | | ○新チラシ作成 ○問題検討 | ○新チラシ作成 ○問題検討 | ○新チラシ作成 ○問題検討 | |
| | 5 | ○広報活動 ○会場レイアウト等検討 | ○広報活動 ○問題校正 ○会場レイアウト等検討・打合せ | ○問題作成・校正 ○本試験準備 | ○問題作成・校正 ○本試験準備 | |
| | 6 | | ○試験準備 | ○試験準備 | ○試験準備 | |
| | 7 | ●本試験開催 | | | | |
| | 8 | ○採点 | ○振り返り | ○採点 | ○採点 | |
| | 9 | ○振り返り | ○活動終了 | ○結果発送 | ○結果発送 | |

方法やチラシのデザインなど具体的なものの打ち合わせなど多岐に渡った。また、博物館訪問やインタビューの準備や予備知識の習得も行った。このように、2022年の時点では化石検定は高校生が問題作りを行う予定であったため、各種文献調査や瑞浪市化石博物館をはじめとする博物館を見学するとともに古生物学を専門とする研究者(=古生物学者、以下古生物学者と記述する)に取材を行い(図2A)、問題作りの知識を得ることを2022年の活動方針として9月より活動を本格化した(表2)。

2022年11月より福井県立恐竜博物館などで取材を行ったが、この活動の中で高校生は古生物学や地質学の知識が不十分な中、わずか1年という短期間で問題を作るといふことの難しさを実感することとなった。取材結果を踏まえて方針を再度検討した結果、問題作りは当初監修を行う予定だった古生物学者(相場大佑: 深田地質研究所; 安藤佑介: 瑞浪市化石博物館; 大路樹生: 名古屋大学博物館; 大橋智之: 北九州市立自然史・歴史博物館; 木村由莉: 国立科学博物館; 服部創紀: 福井県立大学恐竜学研究所。所属は2024年当時のもの)に主導を依頼し、高校生はその完成度を高めるための活動を行うという形に方針を変更した。ただし、博物館見学や取材を通して、化石検定のヒントとなる知識(例: 展示されている化石やどんな種類の古生物や話題が問題作りに適しているか)やコメント(例: 検定であるためクイズではなく、暗記でできるような内容ばかりでは検定の質が下がる。観察したり考えたりする問題が良い)が得られ以降の活動の参考になった。特に、「観察する、考える問題」については、高校生だけでなく問題作成者側にとっても問題作りを行う上での良い助言となった。前述のとおり高校生は問題作成ではなく、主にいかに検定を盛り上げるかに注力することとなった。当初は全員で問題作成をはじめとする活動を行う予定であったが、作業を分担制にして、安藤や問題の監修を行う古生物学者は問題作成、高校生は得意分野を話し合い、チラシや問題のレイアウト、ス

トリー企画のようにそれぞれが得意とするものを見つけて活動することとした。中でも、活動中に高校生から出された「私たちの世代は漫画が好きなので、イラストを多用して問題冊子やチラシを華やかにしたい」という意見を採用し、安藤の知り合いである関東在住のサイエンスコミックライターの Ayane 氏にイラスト制作を発注するとともに、協働で作業に当たる機会を設け、結果的に高校生にキャリア教育の場を提供することとなった(図 2B)。普段接点がないイラスト制作を専門とする漫画家と仕事ができることとあって高校生のモチベーションは向上し、イラスト制作の打ち合わせは高校生にとって大変貴重な経験となった。Ayane 氏への発注は翌年にも行われ、結果としてこの発注は後述する広報の一翼を担うこととなった。

2022 年～2023 年に表 2 に示すような活動を行った結果、プレテストは当初の予定通り 2023 年 10 月に開催することができた(図 3)。プレテストについては、開催することが目標であったため、受検者数などの数値目標は立てていなかったが、実際の受検者は 20 名と想定(50 名程度)よりも少なかった。これは、表 2 に見られるように当初の計画よりも実際のスケジュールや活動内容が大きく異なるものとなってしまったこと(内容の大幅な変化や遅れ)、特に広報についてはチラシが 8 月下旬に完成し、配布する期間が 1 か月程度と短かったため情報が全く伝播しなかったことが要因であると考えられる。したがって本件は、化石検定の知名度が低いという現状を知るきっかけとなった。また、問題も精査する時間が少なく、記憶力に頼るクイズ的な問題が多くなり、問題を作成した古生物学者らにとっても満足いく内容ではなかった。あわせて、当日の司会進行を不慣れな高校生に任せため、学校の「文化祭」のような雰囲気になってしまったという感覚があった。このように反省点は多く見られたが、プレテストを開催することによって活動の進め方を把握することができた。また、



図 2. ミライ創ろまい課の活動の様子。A, 福井県立恐竜博物館でのインタビューの様子(2022 年 11 月)。B, サイエンスコミックライター Ayane 氏とのイラストの打ち合わせ(2023 年 6 月)。C, 高校生によるイラスト(案)の検証作業(2024 年 5 月)。D, 高校生と司会者、監修者・古生物学者の木村由莉氏(国立科学博物館)との打ち合わせ(2024 年 8 月)。

プレテスト後に問題をウェブ上で公開するなど広報活動を継続した結果、化石検定の知名度が徐々に向上していくこととなった。

5. 2024 年の本試験開催までの経緯

第2章で述べたように、ミライ創ろまい課の活動は原則として2年である。そのため、2023年のプレテスト終了後、主に関わった多くのメンバーが引退し、構成人数も減ることとなった(2024年1月時点では3名)。2024年2月の活動時点で、メンバーのモチベーションや知識が低いことを把握した安藤が伊藤と相談した結果、別のプロジェクトに関わっていた高校3年生2名をメンバーに加え、活動を行うこととなった。これは、2年間活動したことによるミライ創ろまい課での活動経験が豊富なメンバーの加入による活動のモチベーションや知識・企画力・発言力の底上げを狙ったものであったが、結果としてこの行動は目論見通りとなった。

2024年の活動は、プレテストを上回る受検者数で10月の本試験を開催することを目標として、主に広報活動、問題をプレテストよりも質・難易度の高いものにする、イラストを活用して問題冊子やチラシのレイアウトを華やかにすることに重点をおくこととなった。会場となる瑞浪市総合文化センター講堂の規模を踏まえて募集人数を100名に設定し、これに近づけるための工夫を行った。例えば、チラシについてはプレテストのものを流用することで、開催の7か月前にあたる3月には印刷し、中部地方だけでなく関東圏など各地の自然史系博物館や日本古生物学会友の会など興味を持つ人が多く見込まれる場に配布した。SNSも活用し、X(旧Twitter)では早くから化石検定開催の告知を行うとともに、ミライ創ろまい課の活動も頻繁に報告することとした。また2023年に引き続き、イラストをAyane氏に発注した結果、Ayane氏のグループによるYouTube動画での宣伝やネットワークによるサイエンスパフォーマンスフェス2024(埼玉県)での「恐竜&化石クイズバトル」の問題企画(図4A)と会場での化石検定の宣伝の機会にも恵まれた。この時企画した問題は、そのストーリー考案からラフ画作成まで前述の高校3年生2名が意欲をもって行い、その完成度の高さから高校生の提案通りに採用された。その後、この問題は化石検定用に改良されて実際に本試験に組み込まれることとなった(図4B)。

イラストについては、2023年時はチラシや問題冊子を飾る程度にとどまったが、上記のイラスト活用に発想を得た高校生から次の提案があった。それは、「化石検定の主役はやはり化石の専門家である



図3. 化石検定プレテストの様子。

この足跡をたどっていくと恐竜に会えます。どちらが安全な恐竜かな？

① ②

動物の体の化石を体化石というんだ。でも化石は体化石だけでなく足跡のような生痕化石もあるんだ。生痕化石からも昔の生き物の色々なことがわかるんだよ。

では、この恐竜の足跡からどんなことがわかりますか？すべてえらんでください。

①この恐竜は4本足で歩いていた。 ②この恐竜はアンキロサウルスだ。
③この場所は昔はさばくだった。 ④この恐竜は子どもの恐竜だ。
⑤この恐竜はイラストの右下から左上に向かって歩いた。

21 ポクも先生が持っている恐竜の化石を発掘してみたいです！

これはジュラ紀の有名な肉食恐竜だよ。発掘したいのなら、この化石が見つまっている地層についてみようか。

この恐竜の化石を見つけることができる地層はどれですか？1つえらんでください。

①ネグト層 ②ランス層 ③モリソン層 ④ヘルクリク層 ⑤ダイナソーパーク層

22 この恐竜の名前がわかる手がかりが頭の骨のどこにあります。一番大切な字がかり「1か所」を解答用紙に○で囲んでください。

●注意：解答用紙にある○の大きさを2か所以上や全体を○で囲まないでね。

図4. A, サイエンスパフォーマンスフェス内「恐竜&化石クイズバトル」用に作った問題。レイアウトは本稿用に改編を行った。B, 図4Aのクイズを化石検定用に検討し、「イラストを見て考える」内容に改良した問題。C, 化石検定本試験用の「研究者や高校生が登場し、イラストを使って解答する問題」の一例。



図 5. 化石検定チラシ. A, 2023 年に作成したチラシ. B, 2024 年に作成したチラシ.

監修を行った古生物学者，そのため高校生は古生物学者に華を持たせる（検定を魅せる）工夫をしたほうがよい，「イラストは脇役ではなく主役にもなれるため，イラストを見て考える問題やイラストを使って考える問題をもっと用意したほうが良い」といったものであった．これらは提案時に即採用され，チラシは 2023 年のもの（図 5A）とは異なり，問題を作成した古生物学者とともに高校生がモチーフになったイラストが主体となり（図 5B），問題にも古生物学者や高校生のイラストが使用された（図 4C）．このイラストの原案や校正については高校生が行い（図 2C），高校生の助言を基にした「イラストを見て考えたりイラストを使って考える問題（図 4B, 4C）」も増加した．本試験開催時の運営についても，高校生からプレテストの結果を踏まえ「可能であれば司会進行は慣れた大人（できればプロ）が主となって行う方が良い」との提案を受け，検討した結果，岐阜県在住の化石好きかつ瑞浪市で定期的に化石を採集するタレントのまゆみん氏に依頼することが提案され，連絡をとったところ当日の司会は同氏に一任された．高校生は，古生物学者や司会者との打ち合わせ（図 2D）や，当日の進行方法，衣装等の提案を行うこととなり，その活動を通じて様々なキャリア教育を受ける機会を得た．

化石検定の問題冊子については前述のとおり，イラスト化された古生物学者に加えて高校生も登場するユニークかつストーリー性のあるものに仕上がりに，単なるクイズとは一線を画す「試験問題」となった．また，冊子完成から開催までに時間的余裕があったため，会場の飾りつけなどイベントを盛り上げる工夫を行うこともできた．あわせて，当日の運営の準備も十分に時間をかけて行うことができ，プロの司会者を採用したことで相まってクオリティの高い「イベント」として完結することができたのである．

6. 化石検定実施の効果と域学連携の活動に関する提言

本試験は，プレテストでの反省を踏まえた早めの広報活動が功を奏し，受検者数はプレテストの 3 倍にあたる 60 名にのぼり，中でも若年齢層の受検者が半数以上を占めた（図 6，表 3）．居住地別にみると，岐阜県と愛知県で全体の約 60%を占めるが，遠方である関東圏からも 10%以上を占めており（表 4），この点についても早くから継続して行った広報活動の効果であると考えられる．また，問題についても時間的余裕をもって作成し，検証や校正に十分な時間を割くことができたことで，完成度の高いものに仕上がった．あわせて司会をプロが務め，高校生がサポートに回ったが，化石の被

表 3. 化石検定本試験受検者の年齢.

| | | | | | | | | | |
|----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|
| 年齢 (歳) | 1~5 | 6~10 | 11~15 | 16~20 | 21~25 | 26~30 | 31~35 | 36~40 | 合計 |
| 受検者数 (人) | 0 | 11 | 12 | 3 | 4 | 1 | 0 | 5 | |
| 割合 | 0% | 18% | 21% | 5% | 7% | 2% | 0% | 8% | |
| 年齢 (歳) | 41~45 | 46~50 | 51~55 | 56~60 | 61~65 | 66~70 | 71~75 | 76以上 | 60 |
| 受検者数 (人) | 5 | 2 | 2 | 8 | 2 | 1 | 4 | 0 | |
| 割合 | 8% | 3% | 3% | 13% | 3% | 2% | 7% | 0% | |
| | | | | | | | | | 100% |

表 4. 化石検定本試験受検者の居住地.

| 地域 | 東海 | | | | 北陸 | | | 甲信越 | |
|----------|-----|-----|------|-----|-----|-----|------|-----|-----|
| 県 | 岐阜県 | 愛知県 | 三重県 | 静岡県 | 石川県 | 富山県 | 福井県 | 長野県 | 山梨県 |
| 受検者数 (人) | 12 | 24 | 3 | 1 | 1 | 2 | 1 | 3 | 1 |
| 割合 | 21% | 40% | 5% | 2% | 2% | 3% | 2% | 5% | 2% |
| 地域 | 関東 | | | | 近畿 | | | | |
| 県 | 東京都 | 千葉県 | 神奈川県 | 群馬県 | 京都府 | 大阪府 | 合計 | | |
| 受検者数 (人) | 7 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 60 | | |
| 割合 | 12% | 2% | 2% | 2% | 2% | 2% | 100% | | |



図 6. 化石検定本試験の様子.

り物をかぶって賑やかしを行うなど (図 6) それぞれが役割を分担して行うことにより試験当日は皆が満足して帰路についた。なお、試験後の受検者の評価も「難しかったが挑戦し甲斐があった」などの好意的なものがウェブ上で見られ、中でも司会を務めたまゆみん氏は自身の YouTube チャンネルでも取り上げた (まゆみんラボ, 2025) ⁸⁾。あわせて、検定終了後から約 1 年間に約半数の受検者が家族単位で瑞浪市化石博物館を訪れ、一部の受検者とは著者と化石検定について意見交換を行う機会を設けることができた。その多くの方が古生物学について「より深く学ぶきっかけとなった」「2 回目開催の場合は参加したい」と発言し、本域学連携は当初の目論見であったリピーターの獲得や古生物学の普及に一役買ったものと思われる。受検者の中には、検定をきっかけとして親交を深めた方々もあり、浅野 (2011) の「趣味縁」⁷⁾の拡大にもつながったことも事実である。したがって、化石検定本試験開催と受検者やリピーターの確保に加え、高校生だけでなく行政や博物館とは異業種の Ayane 氏やまゆみん氏が本事業に関わった結果、瑞浪市の「関係人口の増加」という本域学連携の目標は当初の予定以上に達成でき、本事業は成功したものと評価することができる。

第 4 章および第 5 章で述べたように、化石検定における高校生との活動では分担制をとり、それぞれが興味を持つ分野、得意とする分野での活動を推奨した。高校生は、チラシ等のレイアウトやイラストの設計を行い、タブレットパソコンを活用してラフ画を描く光景が活動中見られた (図 2C)。授業や部活などの学校活動の延長となるような活動の場合、グループ活動や集団行動になる場合がほとんどであり、個性が埋没する、活動しない生徒・学生が出てきてしまう場合が多い。本事業が成功

した一因は分担制をとり、メンバー毎の個性を伸ばすような活動ができたことが挙げられるが、その要因には毎回の活動時に雑談を入れるなど安藤がメンバーとの積極的な交流を行った点がある。すなわち、域学連携活動の重要な点の一つに運営側が高校生と綿密なコミュニケーションをとり、その能力や興味を把握することが挙げられる。

本事例の場合、参加した高校生の古生物学に関する知識は少ないが、検定を華やかにする企画力や発想力は優れたものがあつた。このように、域学連携を行うには連携をする生徒・学生個々の興味や能力を見極めてその力をいかに発揮できるような場を提供するかを誘導する能力を運営側（大人）が身につける必要があると筆者は考える。あわせて、メンバーと十分な時間を使ったコミュニケーションをとることも必要であるが、この時に大切なのは域学連携を「利用」と考えないこと、博物館や行政機関の求める「学び」と学校の求める「学び」をすり合わせることで、そして大人が本気で事業を実施する心構えや用意があることを生徒・学生に伝える工夫が必要である。最後に、域学連携は化石検定のように発信・交流人口獲得への一手段となりえるが、本事例のようにイラストレーターやタレントとの協働をはじめとする生徒・学生への社会教育やキャリア教育の機会を提供する場であることも忘れてはならない。特に、後者については学校生活では経験できないような体験であるため生徒・学生のモチベーション向上につながり、企画や構想を現実的な事業に昇華するために大切なことと思われるが、これを実現するためには運営者側が事業実施の前にあらかじめ事業に関する人的関係のネットワークを構築できるかどうかは鍵となると考えられる。

7. 謝辞

本報告執筆に関して、サイエンスコミックライターの Ayane 氏とサイエンスコミュニケーターの佐伯恵太氏にはイラストやサイエンスパフォーマンスフェスのクイズ問題画像の使用について快諾いただいた。タレントのまゆみん氏には打ち合わせ時の写真の使用や本文への名前の使用について快諾いただいた。福井県立大学恐竜学部の服部創紀博士には、原稿に目を通していただくとともに、改善に向けた助言をいただいた。以上の方々に厚くお礼申し上げます。

8. 引用文献

- 1) 瑞浪市化石博物館 (2005). 30年の歩み. 瑞浪市化石博物館. 58 p.
- 2) 安藤佑介・楓 達也・合田隆久・水野利之 (2024). パレオパラドキシア瑞浪釜戸標本の発見・発掘・剖出の記録. 瑞浪市化石博物館研究報告, 50(3), 1-12.
- 3) 田原洋樹 (2019). 域学連携型授業を通して観られる学習効果の検証について. 明星大学経営学研究紀要, 14, 1-18.
- 4) 瑞浪市 (2025). 大学・高等学校との域学連携. <https://www.city.mizunami.lg.jp/kurashi/machizukuri/1001312/1002718.html> (2025年12月25日閲覧).
- 5) 河井孝仁 (2016). シティプロモーションでまちを変える. 彩流社. 207 p.
- 6) 河井孝仁 (2023). 関係人口創出に係る地域広報の可能性. 広報研究, 27, 126-135.
- 7) 浅野智彦 (2011). 若者の気分 趣味縁からはじまる社会参加. 岩波書店. 148 p.
- 8) まゆみんラボ (2025). 第一回 化石検定の結果報告！瑞浪市から結果が送られてきました. <https://www.youtube.com/watch?v=dH-DkKCgzWM> (2025年12月25日閲覧).

マーサ 21 次期リニューアル基本構想に向けた提案 —カワボウ(株)への 2025 年度ビジネスデザイン実習最終報告から—

奥山和奏¹⁾・藤井美羽¹⁾・山崎優翔¹⁾・柴田仁夫²⁾

¹⁾ 岐阜大学社会システム経営学環 (〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1)

²⁾ 岐阜大学社会システム経営学環准教授 (〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1)

0. 実践報告の概要

0-1. 提案の概要

本稿は、岐阜大学社会システム経営学環のビジネスデザイン実習において、地域密着型ショッピングセンター(以下、SC という)「マーサ 21」(岐阜市)を運営するカワボウ株式会社と連携し、次期リニューアルに向けた基本構想・計画を学生が検討した実践の過程と成果を報告する。実習の目標は、マーサ 21 を「持続的な地域密着型 SC」とするために、商圈内に位置し若年層が継続的に集まる岐阜大学との接点を強化し、「マーサ 21 と岐阜大生の持続的関係性」を形成することである。具体的には、①予備調査とアンケート調査に基づく岐阜大生の利用実態・ニーズの把握、②優良店視察による示唆の整理、③調査結果に基づく交通手段、空床対策、新施設、テナント配置の提案を行った。

0-2. 本稿の目的

2025 年度のビジネスデザイン実習の 3 年次担当教員 3 名のうち、柴田准教授が担当したカワボウ株式会社(以下、カワボウ。本社：岐阜県岐阜市)と株式会社プロスパー(本社：岐阜県羽島市)の 2 社のうち、カワボウを担当した学生の最終報告を実践報告としてまとめ、報告スライドの一部とともに開示することを目的とする(スライド 1、スライド 2、スライド 3)。

1. はじめに

1-1. 地域商業の環境変化と若年層の取込み

マーサ 21 はカワボウが 1988 年に正木工場跡地に開業し、複数回のリニューアルを経て約 40 年にわたり地域住民に親しまれてきた地域密着型 SC である(スライド 4、スライド 5)。岐阜市は近隣都市と比較して生産年齢人口比率が相対的に低い傾向が示されており、今後の人口動態を踏まえると、既存顧客の維持に加えて若年層との関係の強化・深化が中長期的な課題となる。また、若者の SC 離れや岐阜市の中心市街地の商業構造の変化など、購買行動も変容している。

こうした状況のもと、岐阜大学には市外・県外から多様な学生が通学しており、生活行動や余暇行動の「日常圏」を形成している点に着目した。大学周辺の消費環境は限定的であり、授業終わりの時間帯

スライド 1

2025年度 ビジネスデザイン実習

カワボウ株式会社様 最終報告会

マーサ21 Gr.
岐阜大学社会システム経営学環 3年
奥山(L)、藤井、山崎
2025年12月15日(月) 13:05~13:35

スライド 2

本日の内容

| | |
|--------------|-----------|
| 1. 実習概要 | 6. 優良店の視察 |
| 2. 企業概要 | - 実施概要 |
| 3. ご提案内容 | - 得られた気づき |
| 4. ご提案に至る流れ | 7. ご提案 |
| - 現状分析 | ①交通手段の見直し |
| - プレインタビュー調査 | ②空床対策 |
| 5. アンケート調査 | ③新施設の増設 |
| - 実施概要 | ④テナント配置 |
| - 質問項目 | 8. 今後の見通し |
| - 結果と分析 | |

スライド 3

実習概要

【実習テーマ】
マーサ21 次期リニューアルの基本構想・計画の作成

【実習内容】

| | | | |
|----------|----------------------------|-----------|--------------|
| 第1回 4/21 | 企業紹介 | 第5回 10/27 | 質疑応答 |
| 第2回 5/12 | 基本構想・計画、営業活動、 管理部業務について | 第6回 11/17 | アンケートの結果について |
| 第3回 6/9 | マーサの施設運営、 マーサボウルについて | 第7回 12/15 | 最終報告 |
| 第4回 7/7 | 中間報告 | | |

【訪問者】
社会システム経営学環 ビジネスデザインコース 柴田Gr.

企業概要 - マーサ21 スライド 4



【概要】
カワボウ株式会社が正木工場跡地に開業した地域密着型ショッピングセンター
1988年から約40年にわたり地域住民に親しまれている商業施設

【リニューアルの歴史】
1995年：北館（第2期増床）
2008年：東館（第3期）リニューアルオープン
2015年：大幅改装（環境・店舗配置改善）
2022年：第5期リニューアル（外観・設備刷新）

ご提案内容 スライド 7

私たちが掲げるコンセプト

ともに、こころ動く、出会いを

大学生の
アクセス向上
→交通手段改善

大学生の
ニーズ反映
→新施設増設

学生向け
新サービス
→空床の活用


企業概要 - カワボウ株式会社 スライド 5

| | |
|---------|---|
| 設立 | 昭和18年6月18日 |
| 資本金 | 100百万円 |
| 代表取締役社長 | 川島 政樹 |
| 本社所在地 | 〒502-8501 岐阜県岐阜市正木中1丁目1番1号 |
| 業種 | 不動産賃貸業・ボウリング場運営 |
| 事業内容 | <ul style="list-style-type: none"> ・複合型SC「マーサ21」の企画運営を行う営業管理部門 ・「マーサ21」およびカワボウビルの設備管理を行う設備管理部門 ・「マーサポウル」の企画運営を行うマーサポウル部門 |


ご提案に至る流れ - 現状分析 スライド 8

| | |
|--|--|
| <p style="text-align: center;">Strength</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子供用エリアの充実 ・食に強い ・イベントの充実 ・マーサアプリ ・地域密着型 | <p style="text-align: center;">Weakness</p> <ul style="list-style-type: none"> ・立体駐車場が入り組んでいる ・目新しさの不足 ・学生向けのお店がマーサ外にある ・アパレルが弱い ・施設の老朽化 |
| <p style="text-align: center;">Opportunity</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交通網の発達 ・肥沃な商圏 ・子育て支援との連携 (ex.ぎふっ子カード) ・防災拠点としての役割 ・体験型消費へのニーズの高まり ・デジタル技術の革新 | <p style="text-align: center;">Threat</p> <ul style="list-style-type: none"> ・競合SCの存在 ・物価上昇 ・ECサイトの代用 ・人口減少・少子高齢化 ・周囲の道路が渋滞に巻き込まれやすい |

ご提案内容 スライド 6



私たち学生
岐阜大生だからこそできる
ご提案・情報提供をしたい



カワボウ株式会社様
持続的な地域密着型の
SCを目指す

マーサ21と岐阜大生の
持続的関係性の形成

ご提案に至る流れ - 現状分析(クロスSWOT) スライド 9

| | | |
|-----------------|---|--|
| | Opportunity | Threat |
| Strength | <p>強み×機会</p> <p>地域密着型 × 肥沃な商圏</p> <p>地域の高校・大学の文化祭や部活動と コラボレーションしたイベントを開催 するなど、学校生活の延長線上にある サードプレイスとしての方向性</p> | <p>強み×脅威</p> <p>イベントの充実 ×ECサイトの代用</p> <p>コト消費を充実させ、ECでは得られない リアルな楽しみを提供する方向性</p> |
| Weakness | <p>弱み×機会</p> <p>目新しさの不足 ×体験型消費へのニーズ</p> <p>期間限定ショップやフリーマーケットな どを開催し、常に新鮮な発見がある場所 に変えていく方向性</p> | <p>弱み×脅威</p> <p>目新しさの不足 ×競合SCの存在</p> <p>特定のジャンルに特化して「ニッチな 楽しさ」を追求する方向性。</p> |

に「立ち寄り先」となり得る SC の価値は相対的に高いと考えられる。そこで本実習では、マーサ 21 の次期リニューアルのコンセプトを「ともに、こころ動く、出会いを」と設定し、岐阜大生にとってのサードプレイス化を通じた新たな関係性の構築を検討した（スライド 6、スライド 7）。

1-2. 現状分析

前学期は、提案の前提を共有するために PEST 分析、SWOT 分析、クロス SWOT 分析を実施した。PEST 分析では、①人口動態の変化（高齢化の進行と若年層の縮小）、②モビリティの変化（自動車依存と公共交通の課題）、③消費行動の変化（EC 利用拡大、若者の「買い物」から「体験」への志向）、④地域商業の再編（中心市街地の空洞化や大型店の撤退）を重点的に整理した。とくに岐阜県では LRT 構想が検討されており、岐阜駅—マーサ 21—岐阜大学を結ぶ人流の可能性が示される一方、運行開始時期は本報告時点では未定のため、短期施策として既存交通資源を活用した代替策が必要である。

SWOT 分析では、マーサ 21 の強みとして「食」領域の集客力と長年にわたり培われた地域におけ

る認知度の高さを挙げた。弱みとしては、若年層が日常的に利用するアパレル・娯楽の選択肢が限定的である点、授業終わりに立ち寄る導線が弱い点、空床の存在が館内体験の「もったいなさ」を生む点を整理した。機会として、岐阜大学・岐阜大生という若年層の集積、学習・交流ニーズの高まりを位置付け、脅威として人口減少・競合 SC との比較、若年層の可処分所得の制約を位置付けた（スライド 8）。クロス SWOT 分析では「強み（食・地域認知）×機会（若年層の集積）」として授業終わりの“食+滞在”を中心軸に据え、「弱み（導線・空床）×機会（学習・交流）」として空床の学習・交流利用を優先施策とした（スライド 9）。

1-3. 実習の進行

本実習は全 7 回の活動で構成され、前学期は現状分析とプレインタビュー調査を中心に実施し、後学期はアンケート調査、優良店視察、提案作成を経て最終報告に至った。企業への訪問調査から、現場で観察される現在の顧客層（50 歳以上の女性を中心に）と、将来の顧客基盤を担う若年層の取り込みという課題認識を共有した。そのうえで「いきなり大規模投資に踏み切らず、試行と検証で実装可能性を高める」方針を採用し、①小さく始められる交通・滞在施策、②空床の暫定活用、③需要が確認できた場合の大規模投資（映画館）という段階設計を提案の前提とした。

2. 調査設計と方法

2-1. 予備調査（プレインタビュー調査）

現状の岐大生との関わりを把握するため、2025 年 6 月 25 日～27 日にかけてマーサ 21 の利用経験のある岐大生 11 名に半構造化インタビュー調査を実施した（学部 2 年 3 名、3 年 8 名；下宿 5 名、岐阜市内実家 3 名、その他実家 3 名）（スライド 10）。予備調査から、(1)利用頻度が高いのはマーサ 21 でアルバイトを行う下宿生、(2)自宅生の利用は週 1 回から月 1 回程度にとどまる、(3)利用は居住形態に関わらず授業終わりの夕方が多い、(4)下宿生は衣類購入、自宅生は飲食・書籍が多い、という 4 つの仮説を構築した（スライド 11）。

2-2. 本調査（オンラインアンケート調査）

前述の仮説の検証と実際の岐大生のニーズを把握するため、岐阜大学の学部生・大学院生を対象に Google フォームによるアンケート調査を実施した。調査期間は後学期の 2025 年 10 月 1 日から 11 月 7 日（38 日間）で、427 名の回答を得た（スライド 12）。対象母集団は 2025 年 5 月 1 日時点の学生 7,340 名である。設問は、属性（居住形態・居住地など）、利用頻度、利用目的、利用しない理由、

ご提案に至る流れ - プレインタビュー スライド 10

マーサ21を利用している学生を対象に実施 (n=11)

- 実施日：2025年6月25日～27日（3日間）
- 学部2年生 3名、学部3年生 8名
- 下宿生 5名、岐阜市内実家暮らし 3名、その他実家暮らし 3名

利用頻度

利用目的

12

ご提案に至る流れ - プレインタビュー スライド 11

【プレインタビューからの仮説】

- ① 利用の頻度が高いのは、マーサ21でアルバイトをしている下宿生
- ② 自宅生の利用は、週1回～月1回の頻度にとどまっている
- ③ 利用のタイミングは、居住形態に関係なく「授業終わりの夕方」が多い
- ④ 主な利用目的は、
下宿生：衣類の購入 自宅生：飲食・書籍が多い

⇒これらの仮説検証および岐阜大生のニーズ調査のため、後学期にアンケート調査を実施

13

アンケート調査 - 実施概要 スライド 12

調査対象：岐阜大学の学部生・大学院生

調査の目的：岐阜大生のマーサ21の利用実態および岐大生のニーズ把握のため

調査方法：Googleフォームを利用したオンラインアンケート（学内ネットワーク、SNSなどを通じて依頼）

回答者数：427名

調査期間：10/1～11/7（38日間）

14

アンケート調査 - 実施概要 スライド 13

回答者の属性

回答者の学部・大学院構成

| | |
|------|------|
| 工学部 | 130名 |
| 経済学部 | 97名 |
| 文学部 | 64名 |
| 法学部 | 33名 |
| 理学部 | 33名 |
| 農学部 | 22名 |
| 医学部 | 22名 |

岐阜大学の学部・大学院構成

| | |
|------|--------|
| 工学部 | 880名 |
| 経済学部 | 2,248名 |
| 文学部 | 1,222名 |
| 法学部 | 956名 |
| 理学部 | 975名 |
| 農学部 | 448名 |
| 医学部 | 1,711名 |

15

放課後の過ごし方、導入してほしい施設・サービス等で構成した。

なお、回答者属性は学部生を中心とし、居住形態は下宿生と自宅生が混在していた。学年・居住地の分布は大学全体の構成と必ずしも一致しないため、結果の一般化には留意が必要である(スライド13)。しかし、授業終わりの利用需要(約63%)や、自宅生の利用頻度の低さといった傾向は、複数の設問で総合的に現れており、施策検討の基礎データとして一定の妥当性を有すると判断した。

2-3. 分析方法

分析は単純集計に加え、居住形態と利用目的等のクロス集計、カイ二乗検定による有意差検定、自由記述のテキスト分析(共起ネットワーク)を行った。利用頻度はカテゴリを点数化し、属性別平均値の比較で傾向を把握した(スライド14)。

3. 結果

3-1. 利用頻度の特徴

利用頻度の点数化による平均値は、①アルバイトをしている下宿生5.6、②アルバイトをしていない下宿生4.132、③自宅生2.981であり、①が最も高かった。①は週1~3回程度、②は月1~3回程度、③は2か月に1回程度の利用と推察され、仮説(1)は支持された。一方、仮説(2)は棄却され、自宅生の利用が想定以上に低いことが明らかになった(スライド15)。

3-2. 利用タイミング

全回答者のうち、平日15時以降の授業終わりに利用すると回答した者は269名で、約63%に達した。この比率は居住形態・居住地の構成比と大きな差がなく、授業終わりの立ち寄り需要が広く存在することが示されたことから、仮説(3)は概ね支持されたと考えられる(スライド16、スライド17)。

3-3. 利用目的と居住形態

居住形態と利用目的の関係について、下宿生は自宅生よりショッピング目的利用の割合が高く、統計的に有意であった($p=0.00075$)。一方、飲食(食事・カフェ)目的の割合は居住形態との有意な関係が確認されなかった($p=0.72$)。加えて、自宅生では「娯楽」($p=0.0012$)および「友人・恋人との交流」($p=0.02$)の利用割合が下宿生より高い傾向が示され、自宅生はレジャー・交流の場として、下宿生は生活必需品の購買の場として利用している構図が浮かび上がった(スライド18、スライド19)。

3-4. 課題の整理

マーサ21を利用しない理由では「交通の便が悪

アンケート調査 - 結果と分析 **スライド14**

仮説①: 利用の頻度が高いのは、マーサ21でアルバイトをしている下宿生
 仮説②: 自宅生の利用は、週1回~月1回の頻度にとどまっている

<分析方法>

| 1. 「居住形態」、「利用頻度」、「利用目的」の3項目を使用 下記の3パターンで頻度を点数化したものの平均を比較 | 頻度 | 数字 |
|---|-----------|----|
| A: アルバイトをしている下宿生の利用頻度 | 利用したことがない | 1 |
| B: アルバイトをしていない下宿生の利用頻度 | あまり利用しない | 2 |
| C: 自宅生の利用頻度 | 2ヶ月に1回 | 3 |
| | 月に1~3回 | 4 |
| | 週に1~2回 | 5 |
| | 週に3回以上 | 6 |
| | ほぼ毎日 | 7 |

2. 「居住形態」、「利用頻度」の2項目を使用
1のC(自宅生の利用頻度)の結果から検討

15

アンケート調査 - 結果と分析 **スライド15**

仮説①: 利用の頻度が高いのは、マーサ21でアルバイトをしている下宿生
 仮説②: 自宅生の利用は、週1回~月1回の頻度にとどまっている

<分析結果>

仮説①は、平均利用頻度が「下宿生(非アルバイト)」・「自宅生」<「下宿生(アルバイト)」であるため、仮説は採択。
 ⇒現状、岐阜大生にとって「娯楽よりも生活」の場所

仮説②は、自宅生の平均利用頻度が「2ヶ月に1回程度の利用」であるため、仮説は棄却。
 ⇒岐阜大生の4割が利用する「バス・電車」などの公共交通機関に課題

17

アンケート調査 - 結果と分析 **スライド16**

仮説③: 利用のタイミングは、居住形態に関係なく「授業終わりの夕方」が多い

全回答者のうち、「授業終わり」かつ「平日15:00以降に利用している」と回答した人は約63%
 このうち、下宿生と自宅生の構成比は、全回答者の構成比と大きな差は見られない。

居住形態 (全回答者)

49% 51%

・下宿生(一人暮らし) ・自宅生(家族から通学)

居住形態 (仮説該当者)

45% 55%

・下宿生(一人暮らし) ・自宅生(家族から通学)

18

アンケート調査 - 結果と分析 **スライド17**

仮説③: 利用のタイミングは、居住形態に関係なく「授業終わりの夕方」が多い

岐阜市在住の割合

居住地の内訳 (全回答)

約61%

・その他() ・岐阜市() ・岐阜市以外()

居住地の内訳 (仮説該当者)

約66%

・その他() ・岐阜市() ・岐阜市以外()

⇒この仮説において、居住形態・居住地は結果に大きな影響を与えていない。したがって、仮説は概ね正しい。

19

い」が一定割合で挙がり、とくにバス利用者で不満が強い傾向がみられた。岐阜大学『令和6年度学生生活実態調査』によれば、通学で電車・バスを利用する学生は38.0%であり、岐阜大生のバス利用者は約2,800名と推定される。このうち本調査で「交通の便が悪い」と感じる割合は22.9%で約640名、さらにその約71%がマーサ21を「あまり利用しない」と回答しており、潜在需要の取り込みの重要性が明らかとなった。

また、放課後の時間を課題・自主学習に充てる学生が多い一方、大学内施設の利用制約や立地の問題から、集中できる学習場所が不足していることが示唆された。さらに、マーサ21の利用頻度が高い学生ほど「アルバイト目的」が強く、日常の買い物は大学近辺にある徒歩圏の別店舗で済ませる傾向も確認され、滞り・消費につながる新たな利用目的の創出が課題として浮かび上がった。

3-5. 自由記述からみる潜在ニーズ

自由記述のテキスト分析では、「勉強」「カフェ」「映画」「友だち」「居場所」「夜」「遅くまで」といった語が共起し、授業終わりに“滞在できる居場所”を求める声が目立った。とくに「大学は混んでいる」「学内は閉まるのが早い」といった制約認識が見られ、学内外を横断した学習・交流の受け皿が不足している可能性が示唆された。また、「(欲しいものを売る)店がない」「行く理由がない」といった表現は、単なる品揃えの問題にとどまらず、来館動機(目的)の弱さを示すものであり、提案では“目的来店を生む仕掛け”を重視する必要性が高まった(スライド20)。

4. 優良店視察から得られた示唆

2025年9月18日、玉川高島屋SC(東京都世田谷区)を視察し、ディベロッパー主体のまちづくりと顧客層拡大の工夫を学んだ(スライド21)。第1に、地域の不要品「も」受け入れるリサイクルステーションの設置など、「地域との関わり」を施設運営に組み込む発想が確認された。第2に、近隣大型施設(例:二子玉川ライズ)との棲み分けにより、商圈全体の価値を高める戦略が実装されていた。第3に、POPUPを「挑戦の場」として位置付け、成功した店舗を常設化するなど、新規性・流行を取り込む仕組みが用意されていた。これらは、マーサ21における若年層向け施策を「試験的導入から始め、成功により拡張する」方針の妥当性を補強する示唆となった。

スライド 18

アンケート調査 - 結果と分析

仮説④: 主な利用目的は、下宿生は衣類の購入、自宅生は飲食や書籍が多い

①下宿生は、自宅生よりもマーサ21をショッピング目的で利用する割合が高い

| | 下宿生 | 自宅生 |
|--------------|-----|-----|
| ショッピング | 159 | 116 |
| ショッピングを利用しない | 56 | 83 |

p値: $p=0.00075$
 有意水準 $\alpha=0.05$ よりの遥かに低いため、仮説は統計的に採択される
⇒下宿生は自宅生と比較して、ショッピングを利用する割合が統計的に有意と証明

22

スライド 19

アンケート調査 - 結果と分析

仮説④: 主な利用目的は、下宿生は衣類の購入、自宅生は飲食や書籍が多い

②自宅生は、下宿生よりもマーサ21を飲食目的で利用する割合が高い

| | 下宿生 | 自宅生 |
|--------------|-----|-----|
| 食事・カフェ | 127 | 121 |
| 食事・カフェを利用しない | 88 | 78 |

p値: $p=0.72$
 有意水準 $\alpha=0.05$ よりの遥かに高いため、仮説は棄却される
⇒食事・カフェの利用割合については、居住形態との間に統計的に有意な関係はない

23

スライド 20

アンケート調査 - 結果と分析

分析環境: [MacBookAir10,1 Apple M1 8コア, 16GBメモリ]
 [macOS Sequoia Ver.15.7.2]
 [KH Corder Ver.3.03a macOS]

利用頻度
月に1~3回、2ヶ月に1回

利用目的
ショッピング、食事、カフェ

利用頻度
週に1~2回、週に3回以上

利用目的
アルバイト
(買い物は別の場所で行っている)
⇒ 70%以上の学生が普段他店で買い物

25

スライド 21

優良店の視察 - 実施概要

玉川高島屋SC視察 2025年9月18日(木) 13:00-15:50
@東神開発株式会社 本社 (東京都世田谷区玉川3-17-1)

【SCの歴史・概要に関するご説明】: 廣瀬様 (東神開発株式会社)

【現地視察】

東館5F ▶ マロニエ ▶ Ivies Place ▶ 西館B2 リサイクルステーション ▶
 西館P ▶ 本館1F グランパティオ ▶ 本館1F AIアナウンス ▶
 南館1F リモートインフォメーション ▶ 南館3F ▶ 南館5F 「紀伊国屋」 ▶
 南館7F ▶ 本館屋上 ▶ 本館6F 催事場 ▶ 本館3F 免税カウンター ▶
 西館3F デパートデループポート ▶ 西館B1 食堂モンポ ▶ 東館5F

【質疑応答】

26

ご提案 ①交通手段の見直し **スライド 22**

岐阜市シェアサイクル Gifu-ride 新規サイクルポート設置



Gifu-rideとは？

どのサイクルポートでも貸出・返却可能なシェアサイクル

スマホに専用アプリをインストールし、会員登録後、自転車のQRコードを読み取ることによって簡単に利用開始可能

31

ご提案 ②空床対策 **スライド 26**

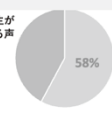
〈アンケート分析を通して見えた現状〉

1.岐阜大生の放課後の過ごし方
多くの岐阜大生がバイト以外の過ごし方として、何らかの勉強を行なっている。
⇒勉強を遅くまでするスペースがない…

2.欲しいテナントがないため利用しない岐阜大生の利用頻度
欲しいテナントがないため利用しないと回答した学生は、岐阜大生の平均利用頻度よりも高い頻度でマーサを利用している岐阜大生である。
新しいテナントを求める岐阜大生の半数以上が何かしらのスペースとして新しい機能を求めている。

3.利用者の頻度別利用目的
高頻度利用者の新たな利用目的の創造が、課題として位置付けられる。

テナント不満学生がスペースを求める声




37

ご提案 ①交通手段の見直し **スライド 23**

【サイクルポート設置場所】

①マーサ21 北側駐輪場 ②岐阜大学 正門前



【利用料金】

クレジットカード・キャッシュ決済
VISA, Mastercard, JCB, American Express, Diners Club, Discover, UnionPay

現金・交通系ICカード決済
nanaco, TOICA, Kitaca, PASMO, Suica, ICORCA, ぎふICORCA, nimoca, TOUGOU

| 種別 | 料金 | 設定の頻度 |
|----------------|--------|----------------------|
| 1日定額プラン (24時間) | 1,000円 | 電動アシスト付自転車 (24時間利用可) |
| 1日定額プラン (24時間) | 600円 | 普通自転車 |
| 1日定額プラン (24時間) | 900円 | 電動アシスト付自転車 (24時間利用可) |
| 1日定額プラン (24時間) | 1,000円 | 普通自転車 |
| 1日定額プラン (24時間) | 600円 | 普通自転車 |

岐阜大学⇄マーサ21のバス運賃は260円

出典: ecobike 13

5. 提案

今回実施したアンケート調査や優良店調査を分析した結果、次の4つの施策の提案を行うこととした。

5-1. 交通手段の見直し: Gifu-ride サイクルポート設置

まず、短期的に実現可能な交通不便の解消策として、岐阜市シェアサイクル Gifu-ride のサイクルポート新設を提案する(スライド22)。設置候補は①マーサ21 北側駐輪場、②岐阜大学正門前である。バス運賃(片道260円)に比べ低コストで移動でき、忠節橋方面の未整備エリアに拠点が生まれることで、市内回遊性の向上も期待できる(スライド23)。

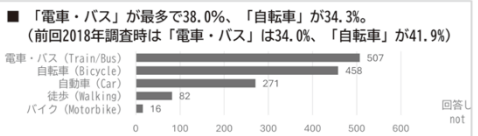
効果推計では、前述の潜在層454名のうち30%が「2か月に1回」、10%が「月1~3回」にマーサ21の利用頻度が増加すると仮定すると、年間来店数は約726回増加する。バス利用学生の平均精算額1,500円を用いると、年間約109万円の売上増加が見込まれると考えられる(設備費は岐阜市主体で整備されることを前提に、マーサ側支出は計上していない)(スライド24、スライド25)。

ご提案 ①交通手段の見直し **スライド 24**

【費用対効果】

- *岐阜大学の学生数: 7,340名
- *岐阜大学『令和6年度学生生活実態調査』より、通学で電車・バスを利用する学生の割合は38.0%
⇒岐阜大学のバス利用者数は約2,800名と推定
⇒うち、「交通の便が悪い」と感じている学生は約640名

■「電車・バス」が最多で38.0%、「自転車」が34.3%。
(前回2018年調査時は「電車・バス」は34.0%、「自転車」が41.9%)



出典: 岐阜大学 (2024) 34

5-2. 空床対策: 学習・滞在ニーズの受け皿づくり

5-2-1. コワーキングスペースの設置

次に空床対策の1つ目として、既存テナント(丸善)と連携したコワーキングスペース「マーサの自習室(仮)」を提案する。参考事例として、丸善丸の内本店の「丸善の三階」HPを参照した。座席は学習用10席・読書用5席の計15席を想定し、利用料はマーサ館内で飲料を購入したレシート提示により「最初の1時間無料」とすることで、運営費と利用者負担を抑えつつテナント売上にも波及させる(スライド26、スライド27)。

ご提案 ①交通手段の見直し **スライド 25**

約71%がマーサ21を「あまり利用しない」と回答
⇒該当学生数は岐阜大学全体で約454名と推定

このうち、30%が2か月に1回に、10%が月1~3回にステップアップすると仮定すると、全体で年間約726回の上店増加に

| 利用頻度 | 年間来店数の目安 |
|-----------|----------|
| ほぼ毎日 | 160回 |
| 週1~2回 | 45回 |
| 月1~3回 | 12回 |
| 2か月に1回 | 4回 |
| あまり利用しない | 2回 |
| 利用したことがない | 0回 |


アンケートより、バス利用学生の1回の来店当たりの平均利用金額は1,500円

年間約109万円の売上増加効果が得られる見込み

35

ご提案 ②空床対策 スライド 27

〈施策概要〉



〈参考事例〉
丸の内本店：
「Personal Lounge 丸善の三階」
多摩センター店：
「本屋の自習室」

〈施策趣旨〉
地域課題である勉強スペース確保のために、既存テナントである丸善にご協力いただき、コワーキングスペースを提供

〈施策内容〉

1
できること
ふっと一息
自由に学習
本も自由

2
使えるひと
どなたでも
自由に利用可

3
営業時間
10:00~21:00
(丸善営業時間)


4
席数
勉強用：10席
読書用：5席

5
その他
飲料持ち込み可
(マーサで購入のみ)

ご提案 ②空床対策 スライド 28

〈施策概要〉 - イベント -

現役岐阜大生による学習会



企画概要：岐阜大生が中高生の勉強の悩みを解決！
企画内容：学習会(質問会)などを実施
開催頻度：月に1~2回程度
参加費：500円
ポイント：塾よりもお得に、誰でも利用できる！

他団体による行事(一例)

企画概要：出張版学研マーサほほえみ教室
企画内容：教室生を招き、マーサの中で体験
できる企画を展開
開催頻度：3ヶ月に1回程度
ポイント：より実践的な学びを得られる！

読む力 考える力 伸びる学力

学研教室

幼児/小学生/中学生/高校生/英語

ご提案 ②空床対策 スライド 29

〈カラオケ〉

【場所】
ミーティングルームB

【設置効果】
岐阜大生：大学近くに遊べる場所が増える
マーサ21：デッドスペースの活用



【料金表】

| 1人当たり | 一般料金(平) | 学生料金(平) | 一般料金(休) | 学生料金(休) |
|----------------------|---------|---------|---------|---------|
| 昼料金 (9:00~15:00) | 200円/時間 | 100円/時間 | 300円/時間 | 200円/時間 |
| 夜料金 (15:00~21:00) | 300円/時間 | 200円/時間 | 400円/時間 | 300円/時間 |

利益 = 売り上げ - 費用 = 76,800円 - 50,000円 = 26,800円/月

ご提案 ③新施設の増設 (映画) スライド 30

提案概要

課題1：映画館を増設するためのスペース不足
解決策：3スクリーン(計180席)のミニシアター

イオンシネマ

2スクリーン(60席・90席)の運営
・人気作の上映

マーサ21

1スクリーン(30席)の運営委託
・版權切れ映画の上映
・プライベート貸切上映

映画館談話室(カフェ)
・丸善/駿河屋に運営委託

ご提案 ③新施設の増設 (映画) スライド 31

課題2：ピーク時の駐車場の混雑
解決策：イオンシネマシステムの活用

| | |
|------------------|--------------------------|
| ハッピーモーニング | 1,400円 (プラス会員 1,300円) |
| 平日10時台までに上映される作品 | |
| ハッピーナイト | 1,400円 (プラス会員 1,300円) |
| 毎日20時以降に上映される作品 | |

画像・料金・割引情報、イオンモール各様案 (2025.12.03) https://www.aioncinema.com/theater/access/01560_movie.html

情報発信の強化

- ・映画館内での目立つポスター
- ・岐阜大学内(生協、学食)でのチラシ・ポスター
- ・マーサ21公式WEBページでのプロモーション

→オフピーク時間への誘導

2つ目の対策は、地域との交流機会を増やすため、このスペースを使って現役岐大生による学習会を月1~2回程度実施し、中高生の学習相談の場を提供する(スライド28)。加えて、既存の学習サービスを館内で体験できるイベント(例：出張版教室)を組み合わせ、学びの拠点化を図る。これにより、①岐大生の学習環境の確保、②滞在時間の延長による販売機会増、③若年層のインキュベーション機能の強化、④地域人材育成への貢献という「四方よし」を目指す。

更に3つ目の対策として、娯楽需要への対応としてカラオケ導入案を検討した。ボーリング場に隣接するミーティングルームBへの設置を想定し、機器レンタル費月5万円で計算すると、月間利益2万6,800円の試算となった(スライド29)。利益規模は大きくないが、遊び場不足の解消とデッドスペース活用の観点から、段階的導入の選択肢の1つとなると考えられる。

5-2-2. 運用設計の要点

自習室の運用においては、①混雑・騒音管理、②飲食ルール、③安全管理(夜間の見守り)、④テナント売上への波及、の4点が論点となる。混雑管理については座席数を限定し、混雑時は館内掲示で利用を他スペースに誘導する。飲食は「マーサ館内購入の飲料のみ可」とし、レシート提示をルールに組み込むことで売上波及と衛生管理を両立する。安全管理は丸善スタッフと館内警備の巡回を前提に、学習会などイベント開催時のみ学生スタッフを補助として配置する。これらの運用条件を明確化することで、コワーキング機能を“常設の公益的機能”として位置付け、空床対策の一環としての正当性を高める。

5-3. 新施設の増設

5-3-1. 映画館(ミニシアター)と文化的滞在の創出

導入希望施設で最多となった映画館に対し、イ

オンシネマとマーサ 21 の協業による 3 スクリーン (90 席・60 席・30 席、計 180 席) のミニシアターを提案する。人気作上映はイオンシネマが担い、30 席スクリーンは著作権切れ映画の上映やプライベート貸切上映など、地域コミュニティ用途も含む多目的活用を想定する (スライド 30)。

駐車スペース不足にはオフピーク時間帯への誘導 (モーニング・ナイトの価格施策等) を組み合わせる (スライド 31)。収益の不安定性には「映画館談話室 (カフェ)」を併設し、映画関連書籍の展示や、表紙を隠した本との偶然の出会い (Blind Date with a book) など体験価値を付加する (スライド 32)。

収支面では、年間来客数約 12 万人、チケット単価 1,400 円、売店 350 円を前提に、工事費は概算 1 億 9,600 万円と見積もった。イオンシネマ側は年間収入 1 億 8,450 万円、年間コスト 1 億 6,704 万円、純利益は 1,746 万円となる。カフェは年間純利益 254 万円、マーサ 21 は家賃収入 4,134 万円、借入金の返済は 10 年で、1,776 万円として純利益 2,358 万円を見込む。投資回収や需要変動は今後の検討課題であるが、ミニシアターは若年層の来館動機を「目的来店」として創出し、館内回遊と滞在を促進する中核施策となり得る (スライド 33、スライド 34、スライド 35)。

5-3-2. 映画館提案における差別化ポイント

本提案における映画館の差別化ポイントは、近隣シネコンと同質化しない体験設計にある。30 席スクリーンの多目的活用は、地域映画・学生制作の上映、学校行事の上映会、卒業制作発表など、地域コミュニティの“発表の場”として機能し得る。談話室は、映画の感想共有や本との偶然の出会いを促す場として、上映前後の滞在時間を延ばし、館内に回遊を生む。さらに、丸善・駿河屋等との連携により映画関連書籍や関連グッズの展示・販売を組み合わせ、映画館単体の興行収入への依存を下げる構造を目指す。これらは、地域密着型 SC が提供し得る“文化的滞在”として位置付けられる。

5-4 テナント配置：ファッション導線の再設計


追加調査では、岐大生が求めるアパレルブランドの傾向が把握され、現状のアパレルに物足りなさを感じる声も確認された。そこで、2 階をファッション・暮らし、3 階をアミューズメント・食事といったカテゴリ別のゾーニングを基本方針とし、サービス系テナントの階層移動等によりファッションエリアの回遊性を高める配置を提案した。具体的には、主要集客の核となる低価格アパレル (例：GU) と、学生の関心が高いブランド (例：ZARA) をフロ

ご提案 ③新施設の増設 (映画)
スライド 32

課題 3：興行収入への依存度が高く、収益が不安定
解決策①：映画館談話室の併設

丸善・駿河屋と協力し、映画関連の本を飾るカフェ
 コンセプト：映画×本×カフェの複合文化空間
 ・「アカデミアセット」の販売
 ・コーヒー+ランダムで古本のセット
 ・本との新しい出会いを楽しむ「談話」
 ・映画館の感想を共有する「談話」

→映画前後の滞在時間の延長
 →プロモーション効果



画像：Google Geminiにより生成

ご提案 ③新施設の増設 (映画)
スライド 33

収支計算

| | |
|---|--|
| <p>【面積内訳】 1,232㎡</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スクリーン：274.5㎡ ・カフェ：180㎡ ・ロビー：777.5㎡ <p>【年間来客数の想定】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・90席：6万人/年(166人/日) ・60席：4万人/年(111人/日) ・30席：2万人/年(55人/日) 合計 約12万人/年 <p>【チケット単価】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1,400円 <p>【シネマ売店売上】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・350円 | <p>【工事費用】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シネマ①：5,500万円 ・シネマ②：3,800万円 ・シネマ③：3,000万円 ・トイレ・カフェ：600万円 ・パブリックスペース：4,700万円 ・給排水工事：2,000万円 <p style="text-align: right;">合計：1億9,600万円</p> |
|---|--|

ご提案 ③新施設の増設 (映画)
スライド 34

| | |
|--|--|
| <p>収支計算 (イオンシネマ)</p> <p>〈年間収入〉</p> <p>○チケット売上 100,000人 × 1,400円 = 1億4,000万円</p> <p>○売店売上 120,000人 × 350円 = 4,200万円</p> <p>○30席スクリーン 貸切収益 25,000円/回 × 100回/年 = 250万円</p> <p>合計：1億8,450万円</p> | <p>〈年間コスト〉</p> <p>○人件費 3,000万円</p> <p>○配給料 チケット売上の45~55% = 約7,000万円</p> <p>○光熱費 2,500万円</p> <p>○諸経費 (修繕・広告等) 400万円</p> <p>○家賃 1坪あたり10,000円 × 317坪 × 12か月 = 3,804万円</p> <p>合計：1億6,704万円</p> |
|--|--|

ご提案 ③新施設の増設 (映画)
スライド 35

| | |
|---|---|
| <p>収支計算 (カフェ)</p> <p>〈年間収入〉</p> <p>○売上 1,800万円 (1日50人 × 客単価1,000円)</p> <p>〈年間支出〉</p> <p>○人件費 640万円</p> <p>○原価 360万円 (20%)</p> <p>○賃料 330万円 (1坪5,000円)</p> <p>○光熱費 216万円</p> <p>純利益 1,800万円 - 1,546万円 = 254万円</p> | <p>収支計算 (マーサ21)</p> <p>〈年間収入〉</p> <p>○家賃 4,134万円</p> <p>〈年間支出〉</p> <p>○借入返済 (10年) 1,776万円</p> <p>純利益 4,134万円 - 1,776万円 = 2,358万円</p> |
|---|---|

(参考文献)

カワボウ HP『会社概要・事業内容・アクセス』、<http://www.kawabo.co.jp/company/outline/>、2025年12月30日最終確認。

(独)統計センター「2020年国勢調査」『政府統計の総合窓口 e-Stat』、<https://www.e-stat.go.jp/>、2025年12月30日最終確認。

岐阜県都市政策課 (2025)「新たな交通システム整備の考え【資料4】」『まちづくりの推進』、<https://www.pref.gifu.lg.jp/uploaded/attachment/464997.pdf>、2025年12月30日最終確認。

ecobike (株)『岐阜市シェアサイクル Gifu-ride』、<https://interstreet.jp/gifushi/>、2025年12月30日最終確認。

岐阜大学教育推進・学生支援機構 (2024)『令和6年度学生生活実態調査 結果報告』、https://www.gifu-u.ac.jp/upload/2024_survey_on_student_life_2.pdf、2025年12月30日最終確認。

Personal Lounge (2025)『丸善の三階』、<https://personal-lounge.jp/>、2025年12月30日最終確認。

イオンシネマ『各務原 料金・割引』、https://www.aeoncinema.com/theater/access/81060_price.html、2025年12月30日最終確認。

Rootus (2025)「“出会い系本屋”って知ってる？ 豊かな時間が流れる『snow shoveling』が本好きの中で話題に」、<https://rootus.net/article/5911>、2025年12月30日最終確認。

日経 BOOKPLUS (2024)「砂川市・いわた書店 申し込み殺到『一万円選書』が映す世情」、<https://bookplus.nikkei.com/atcl/column/033000012/121200037/>、2025年12月30日最終確認。

学生目線による中小製造業の統合報告書(案)の作成 —(株)プロスパーへの2025年度ビジネスデザイン実習最終報告から—

日野旭¹⁾・大澤未涼¹⁾・柴田仁夫²⁾

¹⁾岐阜大学 社会システム経営学環 (〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1)

²⁾岐阜大学 社会システム経営学環准教授 (〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1)

0. 実践報告の概要

0-1. 提案の概要

近年、企業に対しては財務情報だけでなく、環境・社会・ガバナンス(ESG)や人材・知的資本等を含む非財務情報の開示が強く求められている。とりわけ統合報告書は、企業が「どのように短・中・長期の価値を創造するか」を、戦略・ガバナンス・実績・見通しとあわせて簡潔に伝えるコミュニケーション手段として位置付けられる。株主・投資家だけでなく、金融機関、取引先、従業員、地域社会などの多様なステークホルダーが企業の持続性を評価する局面が増えたことで、情報公開の「透明性」自体が企業評価の要素となりつつある。

一方で、中小企業、とくにBtoB製造業では、優れたものづくりの技術を有していても、情報発信の機会や手段が限定され、採用・取引・金融機関との対話において自社の強みが十分に伝わりにくい課題がある。Webサイトに掲載される情報は会社概要や製品情報に偏りやすく、「どんな人が、どのような価値観で、何を目指している企業なのか」といった働く場としての魅力(人的資本、組織文化、挑戦の姿勢など)は可視化されにくい。結果として、地域の若者にとって「比較検討できる材料が少ない企業」として認識され、応募の母集団形成に不利になる可能性がある。

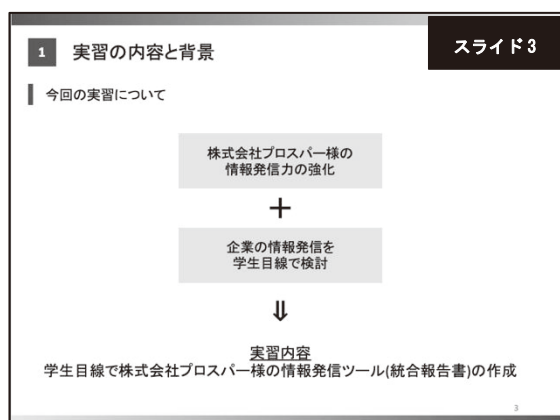
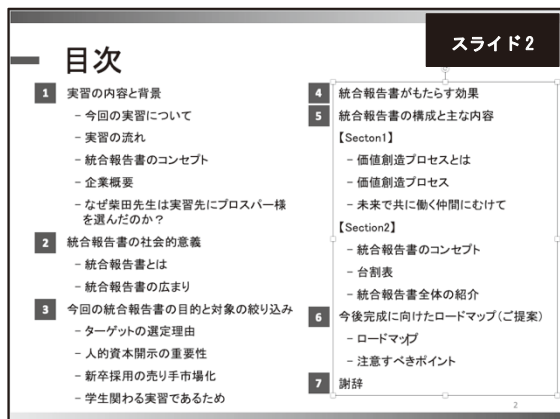
0-2. 本稿の目的

本報告は、岐阜大学「ビジネスデザイン実習」(2025年度)において、株式会社プロスパー(以下、プロスパー)の情報発信力強化を目的に、学生目線で統合報告書(案)を作成した実践内容と得られた知見を整理するものである。実務上のアウトプット(統合報告書案)を軸にしつつ、作成過程での意思決定、データ収集の方法、編集上の工夫、今後の実装に向けた課題を、実践報告としてまとめる(スライド1、スライド2)。

1. はじめに

1-1. 実習の目的

本実習の目的は、①社内の情報をステークホルダーにとって理解しやすい形で可視化し、②採用を中心とした対外的な信頼形成に資する情報発信ツールとして、統合報告書(案)を構想・試作することである。統合報告書の一般的な主対象



は投資家であるが、未上場企業であるプロスパーにおいては、投資家以外の利害関係者との対話基盤を整えることに実務的意義があると考えた。

また、実習の設計上、学生が作成主体となるため、「若者が知りたい情報」を起点に編集方針を立てることができる。この点を強みに、ステークホルダー全般を視野に入れつつ、とくに「地域の若者（高卒・大卒の就職希望者）」に焦点を当てた。狙いは、就職検討段階での企業理解を深め、応募・見学・説明会等の次の行動につながる「入口の情報」を厚くすることである（スライド3）。

1-2. 実習先選定の背景

実習では、なぜプロスパーが実習先として選定されたのかについても、学生側で議論・整理を行った。その結果、主に2つの観点があると考えた（スライド4）。第1に、名古屋中小企業投資育成株式会社から支援を受けている点である。同社は国の法律に基づく制度として、成長志向で将来性が見込める企業に長期安定資金を供給し、企業の成長を支援する。こうした支援を受けていること自体が、一定の評価基準を満たす企業である可能性を示唆するため、学生の学習素材としても有用であると整理した。

第2に、BtoB企業ゆえに情報発信が相対的に弱く、強みが広く知られにくい点である。とくに人口減少局面では採用難が構造化しており、「良い企業」であっても認知されなければ人材確保が難しい。そこで、学生の視点から、企業の情報発信のあり方を考える実習として、プロスパーは適格的な対象であると考えた。

1-3. 対象企業の概要

プロスパーは創業昭和37年、昭和57年9月に設立され、従業員数116名のアクリル店舗装備品および産業用機械向け樹脂部品の製造業である。事業所は本社を含め5拠点を有し、現在事業拡大局面にある。BtoB企業であることから、社内の取り組みや魅力が外部に伝わりにくく、採用環境の変化に対応した情報発信の強化が課題として想定された（スライド5）。

2. 実習の進め方

2-1. 全体プロセス

実習は約9か月間実施した。4～7月にかけて社長・部門責任者から講話を伺い、複数回のインタビューを行うことで、企業の現状・課題・将来像を把握した。次に、収集した情報をオンラインホワイトボードツールMiro等を使用し、重要要素を抽出したうえで、統合報告書の全体構成（台割）とコンセプトを検討した。全体の台割を確定したのち、内容を補強するため、社員アンケートおよび社員インタビューを実施し、得られた定量・定性情報を再度吟味して統合報告書（案）に落とし込んだ（スライド6）。

本実習でのアウトプットは時間の関係で「完成版」ではなく、(1) 価値創造プロセス図の作成、

1 実習の内容と背景
スライド4

なぜ柴田先生は実習先にプロスパー様を選んだのか？

名古屋中小企業投資育成株式会社から支援を受けている

投資育成とは、国の法律に基づき設立された株式会社であり、成長志向で業績に将来性が見込める企業に長期安定資金を提供し、自己資本の充実に企業の成長を支援している。

BtoBのため情報発信力が弱い

BtoBの企業は、社内の情報や特徴を発信するツールがほとんどなく、会社を認知してもらいにくい現状にある。

出典: 名古屋中小企業投資育成株式会社(2020) 7

1 実習の内容と背景
スライド5

企業概要

| | |
|------|---|
| 会社名 | 株式会社プロスパー |
| 設立 | 昭和57年9月(創業昭和37年) |
| 資本金 | 2,800万円 |
| 代表 | 代表取締役 武山誠 |
| 社員数 | 116名(男性47名 女性69名 内パート38名)(2025年12月3日現在) |
| 事業内容 | アクリル店舗装備品(陳列什器、サイン看板) 産業用機械用樹脂部品製造 |
| 事業所 | 本社: 岐阜県羽島市 関東支社: 埼玉県さいたま市 日光支社: 栃木県日光市 大阪支社: 大阪府豊中市 京都支社: 京都府木津川市 |

出典: 株式会社プロスパー 6

1 実習の内容と背景
スライド6

実習の流れ

「ワクワク」の深掘り
いただいた情報等から重要な要素を抽出し、「ワクワク」を深掘り
未来志向が重要であると考え、コンセプトを決定

内容を具体的に
社員の方のリアルな声を集め、統合報告書に反映
幅広い役職や年代の方々にご協力いただき、様々な意見を収集

情報整理

コンセプト決め

レイアウト決め

アンケート・インタビューの実施

内容吟味

報告資料作成

Miroを活用
4月～7月の社長からのご講演、インタビューの内容を参考に、情報を整理・要素分け

見開きで台割を作成
ページ数を決定し、目次を参考にレイアウトを検討
読者に伝いたい情報は特目につくように配置
台割もステークホルダーと学生を協議

情報を見極める
いただいた情報やインタビュー等の結果から、必要な情報を抽出し、内容を吟味

出典: 株式会社プロスパー 8

2 統合報告書の社会的意義 **スライド7**

統合報告書とは？

定義 統合報告書は、組織の外部環境を背景として、組織の戦略、ガバナンス、実績、及び見通しが、どのように短、中、長期の価値創造を導くかについての簡潔なコミュニケーションである。

目的 財務資本の提供者に対し、組織がどのように長期にわたり価値を創造するかを説明することである。

「統合報告書とは、財務情報(売り上げや利益、資産など)および非財務情報(企業理念、ビジョン、ビジネスモデル、技術、ブランド、人材、ガバナンス、CSR、SDGsなどの取り組み)を取りまとめた報告書のことである

出典: 国際統合報告協議会(IIRC)(2014) 朝日新聞SDGs ACTION(2022)

3 今回の統合報告書の目的と対象の絞り込み **スライド11**

学生がかかわる実習であるため
統合報告書は、一般的に投資家に向けて発行されるケースが多く、そのため上場企業では積極的に統合報告書を採用している背景がある。

御社は未上場であるため、今回統合報告書をつくる理由は投資家以外の別のステークホルダーに対して透明性を高くするところにあるのではないかと。

学生がかかわる実習ならではの統合報告書が作成できると良いのではないかと。

>>> 地域の若者 をターゲットにする

(2) 若者向けページの試作、(3) ステークホルダー別ページの骨子化、(4) 完成に向けたロードマップ提案、の4点を中核に据えた。

2 統合報告書の社会的意義 **スライド8**

統合報告書の広まり

2023年時点で世界**70**か国以上**2,500**社を超える企業が統合報告書を採用している。

日本国内で統合報告に取り組んでいる企業は約**1,200**社にのぼる。

東証プライム上場企業

| | | | |
|-------|-------|-------|--------|
| 2010年 | 2015年 | 2020年 | 2024年 |
| 22社 | 206社 | 609社 | 1,177社 |

983社

出典: JPRS(2023) 田中弘隆(2025)

2-2. 調査・情報収集

情報収集は、①経営層へのインタビュー、②各部署・総務部等へのヒアリング、③社員アンケート調査、④若手社員への個別インタビュー、の組合せで実施した。アンケート調査は、職場環境・教育研修・福利厚生・働きがい等の項目を中心に実施し、満足度の平均値等を「数字でわかる会社」誌面に反映する方針とした。個別インタビューでは、入社後の成長プロセス(入社1年目の業務の変化)や、日々のスケジュール、会社イベントの意味づけなど、若者が知りたいと考える具体情報を収集した。

2 統合報告書の社会的意義 **スライド9**

統合報告書=透明性確保のツール

透明性の高さは企業の評価軸の一つであり、情報公開が進んでいる企業の**社会的信頼**は向上していると考えられる。

中小企業で統合報告書の導入はほとんどされていないが、先じて実施することで、**企業価値向上**につながる。

3. 統合報告書の位置付けと本実習でのねらい

3-1. 統合報告書の定義と普及

統合報告書は、国際統合報告協議会(IIRC: International Integrated Reporting Council)が提示する枠組みに基づき、外部環境を背景として、組織の戦略、ガバナンス、実績、見通しがどのように企業の価値創造につながるかを簡潔に示す報告書である(スライド7)。統合報告書の普及は、企業価値の構成要素が無形資産・無形要素へと拡大していることとも関係する。実際、世界70か国以上で2,500社を超える企業が統合報告書を採用しているとされ、日本でも取り組み企業は増加し、上場企業を中心にスタンダードな情報公開手法となっている(スライド8)。

3 今回の統合報告書の目的と対象の絞り込み **スライド10**

目的 企業内部の情報が誰も分かる形で公開する

ターゲット 地域の若者、ステークホルダー全般

今回意識するターゲットは若者であるため、学生視点で読みたい、興味を持てる統合報告書になるようアレンジを加え作成。

ターゲットの選定理由

新卒採用の売り手市場化 → 人的資本開示の重要性 ← 学生がかかわる実習である

中小企業では、作成コストやデータ整備の負担、社内の担当体制不足等により導入が未だ限定的であるが、先行的に実施することで「透明性の高い企業」としての評価形成につながる可能性がある(スライド9)。本実習では、統合報告書を「透明性確保のツール」と捉え、未上場企業でも採用・

取引・金融機関対応に資する情報発信手段として応用できるかを検討した。

3-2. 地域の若者を読者ターゲットにする意義

地域の若者をターゲットに据えた背景には、人的資本情報の重要性の高まりがある（スライド 10、スライド 11）。2023 年 3 月期決算以降、上場企業等では人的資本に関する情報開示が求められ、7 分野・19 項目にわたる具体的情報の開示枠組みが提示されている（スライド 12）。また、新卒採用市場の売り手化が進み、工業高校卒の求人倍率が急上昇するなど、製造業の採用環境は厳しさを増している（スライド 13）。大卒においても中小企業の求人倍率上昇が報告されている（スライド 14）。

こうした状況下では、企業の仕事内容や育成方針、職場環境、福利厚生、キャリア形成の見通し等を、比較可能な形で提示することが、応募者意思決定の前提条件になる。そこで本実習では、従来の統合報告書で相対的に薄くなりがちな「働く場のリアリティ」を、若者向け誌面として厚く編集する方針を採った。

4. 統合報告書（案）の設計

4-1. コンセプトと編集方針

本統合報告書（案）のコンセプトは、やってみたい・見てみたいという未来志向の「ワクワク」を表現する「みたい」である（スライド 15）。読み手がプロスパーの活動や社風を多面的にイメージし、「一緒に〇〇してみたい」と思える状態を目標に設定した。編集上は、(1) 会社の理念と挑戦の姿勢を短い言葉で伝える、(2) 図解・写真・具体事例で理解負荷を下げる、(3) 社員の声を多く入れて「人」を中心に構成する、の 3 点を重視した。

とくに BtoB 企業では、最終消費者に向けたブランド露出が少ないため、「誰と働くのか」「どんな文化か」が企業選択において重要になる。そこで、会社の将来像や価値観を“読み手の感情”に接続するための言語化・可視化を試みた。

4-2. 統合報告書（案）がもたらす想定効果

統合報告書（案）がプロスパーにもたらす効果として、実習では 4 点を整理した（スライド 16）。第 1 に採用活動の強化である。持続可能性や企業の社会的責任への関心が高い人材に対して、企業の姿勢や人材育成方針を示すことは応募促進につながる。第 2 に金融機関との信頼形成である。財務・非財務情報を統合し、将来の価値創造の見通しを示すことで、対話の質を高め、信頼関係を強化できる。第 3 に社員の貢献意欲の向上である。将来像

3 今回の統合報告書の目的と対象の絞り込み **スライド 12**

人的資本開示の重要性

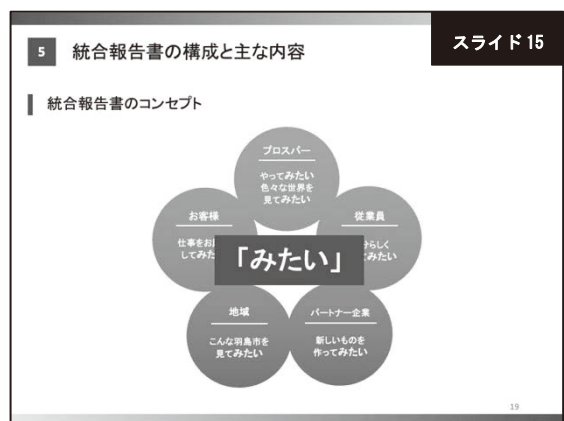
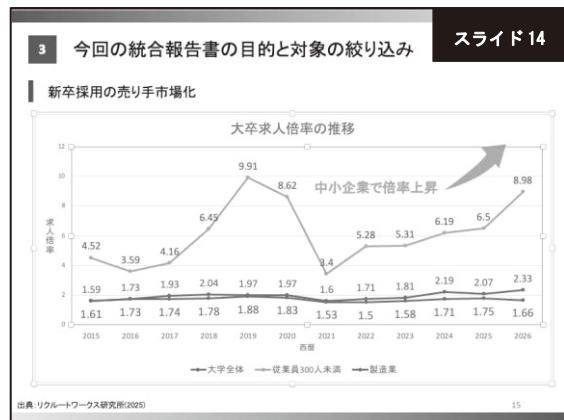
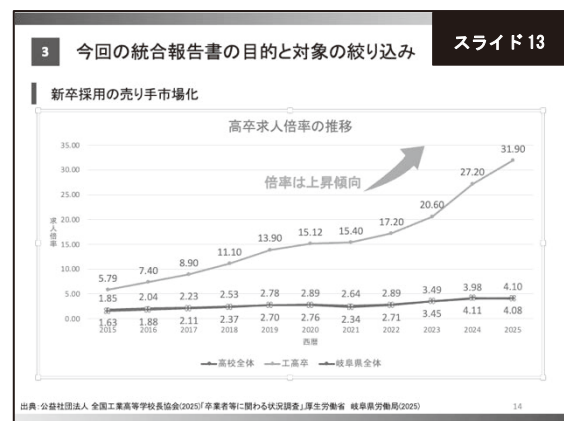
「グローバル企業では、企業価値の約80%以上が無形資産や無形要素で構成されているといった報告」もある。

何らかの価値を生み出せる人材が企業にとって重要であるとの認識が社会的に強まっている

2023年3月期決算以降、有価証券報告書を発行する上場企業などに対して人的資本に関する情報開示が義務化
→7分野・19項目にわたる具体的な情報を公開する必要がある

| | | | |
|------------|-----------|------------|--------|
| 1.人材育成 | 2.ダイバーシティ | 3.健康・安全 | 4.労働慣行 |
| 5.エンゲージメント | 6.流動性 | 7.コンプライアンス | |

出典: マネーフォワード クラウド給与(2025) 12



4 統合報告書がもたらす効果 スライド 16

採用活動に有利になる

持続可能性や企業の社会的責任への関心が強い優秀な人材の獲得につながる。

金融機関への信頼獲得

将来的な展望や価値創造のプロセスについて、建設的なコミュニケーションの材料になる。

社員の貢献意欲向上

将来の見通しや経営方針が統合的に示されることで、会社への理解が深まり所属感・貢献意欲の向上につながる。

企業価値の向上
良好な取引の実現

社会的信頼が向上し、優良企業との関わりが増加する可能性が高い。
企業価値向上につながる。

18

5 統合報告書の構成と主な内容 スライド 20

価値創造プロセスとは

「価値を創造するプロセスモデル」

目的・特徴

- 企業が価値を生み出す過程を示す
- 自社の活動を流れて表現する
- プラス面、マイナス面どちらも記載する
- 直感的に理解できるように図でまとめる

→統合報告書の中核をなす概念図

》》 企業活動の可視化

出典: 日本取引所グループ(2023).ncdesign, inc.(2024).宝印刷(2025).株式会社リンクシユール

24

5 統合報告書の構成と主な内容 スライド 17

台割表

| 通し番号 | ノンブル | 項目 | タイトル | 内容 |
|------|------|----------|------------|----------------|
| 1 | | 表1 | 表紙 | |
| 2 | 1 | 目次 | 目次 | |
| 3 | 2 | トップメッセージ | 代表挨拶 | 武山社長からのご挨拶 |
| 4 | 3 | 会社情報 | 事業内容 | 事業内容の具体的な紹介 |
| 5 | 4 | 会社情報 | 企業理念他 | 企業理念・社是・行動指針 |
| 6 | 5 | 会社情報 | プロスパー流マインド | プロスパー流マインドの説明 |
| 7 | 6 | 会社情報 | プロスパー流マインド | 新たな挑戦の紹介 |
| 8 | 7 | ガバナンス | ステークホルダー経営 | ステークホルダーとの関係図 |
| 9 | 8 | ガバナンス | ステークホルダー経営 | ステークホルダーとの関係図 |
| 10 | 9 | ガバナンス | 働く仲間 | 社員の実態 |
| 11 | 10 | ガバナンス | 働く仲間 | 社員の声・新商品開発について |

出典: 株式会社税関(2017).編集業務支援サービス[Edit Partners](2025).株式会社インダ印刷 book-hon事業部2020

20

5 統合報告書の構成と主な内容 スライド 18

台割表

| 通し番号 | ノンブル | 項目 | タイトル | 内容 |
|------|------|----------|----------|------------------|
| 12 | 11 | ガバナンス | 働く仲間 | 福利厚生・社員との関係性 |
| 13 | 12 | ガバナンス | 働く仲間 | 社員教育・社員研修 |
| 14 | 13 | ガバナンス | お客様 | お客様との関係性 |
| 15 | 14 | ガバナンス | お客様 | 取り扱い依頼・取引の流れ |
| 16 | 15 | ガバナンス | お客様 | 事例紹介・売上高 |
| 17 | 16 | ガバナンス | 協力企業 | 協力企業との関係性 |
| 18 | 17 | ガバナンス | 協力企業 | 協力企業の紹介 |
| 19 | 18 | ガバナンス | 協力企業 | 関わり方についての考え方・例 |
| 20 | 19 | ガバナンス | 地域 | 地域との理想の関係性・SDGs |
| 21 | 20 | ガバナンス | 地域 | インターンシップ・ワークショップ |
| 22 | 21 | 価値創造プロセス | 価値創造プロセス | |
| 23 | 22 | 価値創造プロセス | 価値創造プロセス | |

出典: 株式会社税関(2017).編集業務支援サービス[Edit Partners](2025).株式会社インダ印刷 book-hon事業部2020

21

5 統合報告書の構成と主な内容 スライド 19

台割表

| 通し番号 | ノンブル | 項目 | タイトル | 内容 |
|------|------|-------|----------------------------------|--|
| 24 | 23 | 新卒採用 | 未来の仲間に向けて | 新卒採用について・求める学生像 |
| 25 | 24 | 新卒採用 | 未来の仲間に向けて | 仕事紹介・新入社員の待遇 |
| 26 | 25 | 新卒採用 | 未来の仲間に向けて | 入社後1年間の流れ |
| 27 | 26 | 新卒採用 | 未来の仲間に向けて | 社員の1日のスケジュール |
| 28 | 27 | 会社情報 | 会社概要・沿革 | |
| 29 | 28 | 会社情報 | 組織体制 | 組織図 |
| 30 | 29 | 会社情報 | 財務諸表 | 貸借対照表 |
| 31 | 30 | 会社情報他 | 表彰/認証/認定 リスクマネジメント 第三者コメント | これまで獲得したもの 様々なリスクへの考え・対策 柴田先生からのコメント |
| 32 | | 表4 | 裏表紙 | |

出典: 株式会社税関(2017).編集業務支援サービス[Edit Partners](2025).株式会社インダ印刷 book-hon事業部2020

22

や経営方針が共有されることで、会社の共通目的への理解が深まり、働く意味づけが促進される。第4に企業価値向上による良好な取引の実現である。透明性の高まりは社会的信頼の基盤となり、優良な取引先との関係構築にもつながり得る。

なお、組織が成立・維持されるための要件として、C.バーナードは共通目的・貢献意欲・コミュニケーションの3要素を指摘している。統合報告書を通じた情報共有は、とくに共通目的とコミュニケーションの質を高める手段として位置付けられよう。

4-3. 構成（台割）と主要コンテンツ

本統合報告書（案）は表紙・裏表紙を含め全32ページで構成し、2部構成とした（スライド17、スライド18、スライド19）。第1部は「価値創造プロセス」と若者向け誌面を中心に、価値創造の考え方と働くイメージを可視化する。第2部は会社情報を多面的に整理し、ステークホルダー別の関わりや情報公開項目（財務・非財務）を配置する。

若者向けの誌面「未来で共に働く仲間に向けて」では、①新卒採用に対する考え方、②求める学生像、③部署別仕事内容、④数字でわかる会社（採用実績、従業員構成、満足度等）、⑤入社後1年間の流れ（年次イベントを含む）、⑥若手社員の1日のスケジュール、⑦社員プロフィールと学生へのメッセージ、を掲載した。求める学生像は、社長・各部署の部長・総務部へのヒアリングから要素を抽出し、抽象語ではなく行動・姿勢のレベルまで具体化することで、学生が自己照合しやすいように配慮した。

また、部署別の仕事内容は、職種名だけでなく、扱う製品・工程・社内外の関係者・必要なスキル等を列挙し、「入社後に何をするのか」を具体的に想像できるようにした。数字でわかる会社は、定量情報が比較材料となることを踏まえ、既存の公開情報に加え、社内アンケートで得た数値を活

スクと戦略、事業活動、アウトプット、アウトカム（内部・外部）を整理した(スライド 22、スライド 23、スライド 24)。

リスクと戦略は、SWOT 分析で整理した外部環境の脅威・機会を踏まえつつ、今回は「脅威をリスクとして整理し、リスクと機会は紙一重である」という考えに基づき、見出しをリスクに統一した。戦略は、社長へのインタビュー内容と学生側の考察を接続し、①情報発信の強化、②人材育成を通じた技術継承、③挑戦を支える組織文化の醸成、などを配置した(スライド 25)。

アウトカムについては、内部（従業員モラル、組織評判、収益・キャッシュフロー等）と外部（顧客満足、ブランドロイヤリティ、社会・環境影響等）を区別し、ステークホルダー別に具体化した。最終的な到達イメージとして、社長インタビューで得た「日本中がワクワクする未来」をゴールに置き、顧客・社員・協力企業・地域社会・地球環境の5者にとっての成果を言語化した(スライド 26、27)。

4-5. デザイン上の工夫

今回の提案では紙媒体での閲覧も想定し、文章量を抑えつつ、要点を図解・箇条書きで示す編集を基本とした。例えば、会社の全体像は「会社を数字で示す」誌面で視覚的に把握できるようにし、詳細説明は見開きの導入文で補足する構成とした。また、若者向け誌面では、仕事内容の説明を抽象的な職種紹介に留めず、実際の工程や関係部署、使用する設備・製品群と結び付けることで、学習内容（製造業の業務理解）にも接続した。

さらに、価値創造プロセスの図では、「資本→活動→成果」の流れを1枚で理解できるように、項目数と階層を調整した。統合報告書は情報量が多くなりがちであるため、企業規模に応じて「何を、どこまで開示するか」を選択する必要がある。本案では、採用目的に関わる人的資本・組織文化・地域との関わりを厚くし、数値が未整備の領域は、今後のデータ整備を前提に“記載枠”として残す形を取った。

5. 実習で得られた成果

5-1. 情報の体系化と可視化

第1に、経営層・社員から得た情報を統合報告書の枠組みに沿って整理したことで、暗黙知化していた企業の強み、組織文化、将来像を「読み手の理解単位」に再構成できた。とくに、価値創造プロセスの作成を通じて、経営資源（資本）と成果の関係を俯瞰し、どの資本を強化すべきか、どの外部環境

事業で共に働く仲間に向けて

スライド 28

学びも、楽しいも、自分らしさも、全部ここから始めてみたい。

仕事内容

| 製造部 | 生産管理部 | 営業部 |
|-----------------|----------------------------|--------------|
| ・プロダクト開発(設計/生産) | ・Production/Quality管理/品質保証 | ・営業活動/顧客サポート |
| ・設備管理 | ・設備管理/設備保守 | ・設備管理/設備保守 |
| ・品質管理 | ・品質管理/品質改善 | ・品質管理/品質改善 |

数字でわかる「新入社員」

| | | | |
|-------------|--------------|----------|----------------|
| 月額平均 | 218,000円 | 年休日(実働) | 120日 |
| 就業時間 | 8:30 - 17:45 | 残業時間(平均) | 35時間(週) |
| 一人前になる期間 | 1-2年 | 昇給回数(年) | 1回 |
| 満足度(5点満点平均) | 3.4点 3.6点 | 満足度 | 3.2点 3.2点 3.8点 |

新卒採用数 5人(2024年) 新卒採用割合 66%(2025年現在)

求める学生像

- 「企業に学ぶ、現場で学ぶ」経験者(1人)
- 「人と人とのつながり」を大切にできる人
- 「チームワーク」を大切にできる人
- 「責任感」を持って取り組める人
- 「好奇心」を持って取り組める人
- 「成長意欲」を持って取り組める人

学生写真

事業で共に働く仲間に向けて

スライド 29

入社後1年間の流れ

- 4月 入社式
- 5月 新人社員研修開始
- 6月 新人社員歓迎会
- 7月 配属が決まる
- 8月 カルパ看板製作
- 9月 忘年会
- 10月 発表会
- 11月 制作の幅が広がる
- 12月 2年へ

社員 1日のスケジュール

S2人 (営業部)

K2人 (製造部)

社員写真

事業で共に働く仲間に向けて

スライド 30

暮らしの背景を作る会社

企業理念(目的)

BELTRE

～人の心を豊かにする空間と体験を創造するモノづくり企業～

社名(目標)

行動指針(動き方)

社員の成長

社員の成長(新人入社後)

社員の成長(社員の成長)

社員の成長(社員の成長)

事業で共に働く仲間に向けて

スライド 31

プロスパーマインド「やってみよう」が走り出す

一人ひとりが「やってみよう」が走り出す

「わくわく」を高める取り組み

人を豊かにする流れ

新たな挑戦 利益一億円

「日本一ワクワクする企業」に向けて、

まずは自分がやってみよう

社員写真

社員写真

企業価値M&F (Material Learning Farm)

企業価値M&F (Material Learning Farm)

企業価値M&F (Material Learning Farm)

要因に備えるべきか、といった議論のたたき台を提示できた（スライド28）。

第2に、若者向け誌面を中心に、インタビューに基づく具体的な業務像や社内イベントを時系列に整理したことで、企業理解を促す「疑似体験」を設計できた。単なる制度紹介ではなく、社員の声、1日のスケジュール、入社後1年の成長ステップを提示することで、採用のミスマッチ抑制にも寄与し得る設計となった（スライド29、スライド30、スライド31、スライド32）。

5-2. ステークホルダー別ページの骨子化

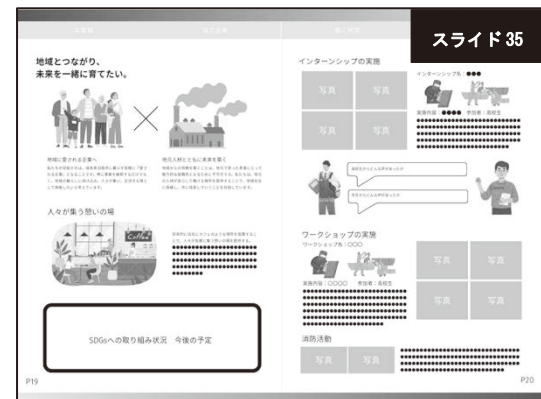
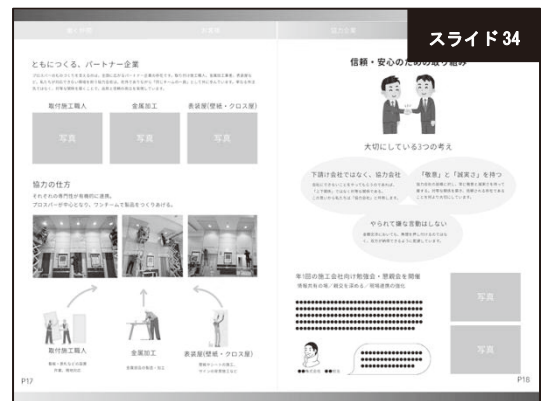
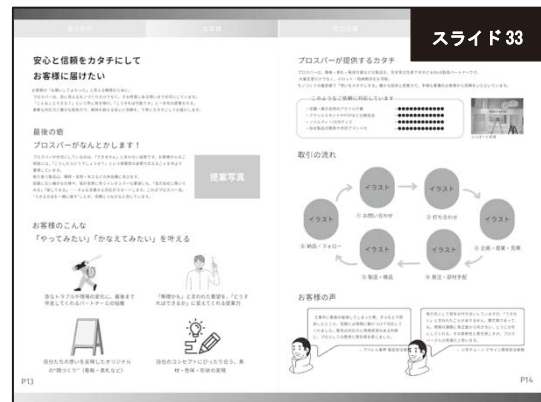
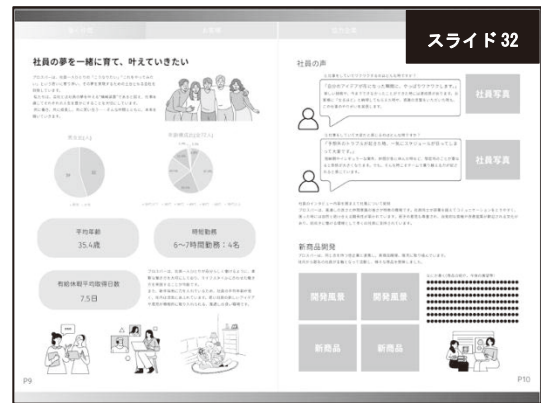
第2部では、社員、顧客、協力企業、地域など、ステークホルダーごとに「関わりのプロセス」と「提供価値」を示す構成を提案した。顧客向け誌面では、接点から取引に至る流れを図解し、顧客の声の掲載により透明性向上を狙う（スライド33）。協力企業向け誌面では、関係性を図示して可視化することにより、サプライチェーン上の信頼を伝える構想を置いた（スライド34）。地域向け誌面では、イベント参加者の声や写真を多用し、地域との関係性を情緒的にも理解できる設計とした（スライド35）。さらに、財務諸表、表彰・認証、リスクマネジメントの取り組み、第三者コメント等の配置案を示し、今後の情報拡充の方向性を明確にした。

5-3. 社内外の対話を促すデザイン

学生側の学びとして実習を通して、経営全体を俯瞰して捉える視点と、現場の声や社員の思いに丁寧に耳を傾ける姿勢の両方を学んだ。とくに、インタビューでは「言葉になりにくい良さ」が多く存在し、それをどのように構造化し、読み手に伝わる文章・図に変換するかが核心的課題であった。統合報告書の作成は単なる編集作業ではなく、企業の価値創造の論理を再解釈し、社内外の対話を促すデザイン行為であることを体感した。

5-4. 限界と改善の方向性

本報告は実習期間内に得られた情報に基づくため、①財務指標の詳細分析、②サプライチェーン全体に関する網羅的記述、③外部評価（第三者保証等）の導入、については十分に扱えていない。また、社員の声や写真を多用する編集は、採用広報ツールとして有効である一方、統合報告書としての一般的な比較可能性、すなわち他社との同質性を下げる可能性がある。したがって、最終的な完成版では、用途（採用・金融機関対応・取引先向け等）ごとに、紙媒体・Web・説明会資料の役割分担を明確にし、必要に応じて「統合報告書版」と「採用広報版」を並行して整備することが望ましいと考える。



6. 今後の課題とロードマップ提案

6-1. 課題の整理

統合報告書(案)は、概念設計と主要ページの試作段階にあり、完成に向けては追加の情報収集と検証が必要である。具体的には、①各ページに掲載する定量指標の定義と継続的な収集体制(人材育成、採用、離職、研修、エンゲージメント等)、②顧客事例・協力企業情報の公開可否に関する調整、③写真素材・図版の権利処理と品質担保、④ガバナンス、コンプライアンス、リスクマネジメント情報の補強、⑤IIRC 枠組みに照らした過不足の点検、が挙げられる。

6-2. 完成に向けたロードマップ

そこで本実習では完成に向けたロードマップとして、①社内プロジェクト立ち上げ(担当者決定、制作スケジュール、予算、発行部数の確定)、②本案の構成確認と修正、③詳細情報収集(地域/SDGsの取り組みの洗い出し、各ステークホルダー認識の整理、社員・関連会社への追加調査、写真素材準備、使用事例の各社調整)、④原稿作成と経営者フィードバック(意図のずれ、表現の妥当性、数値の整合性の確認)、⑤デザイン・校正、⑥発行、の6段階を提案した(スライド36、スライド37)。

なお、本案は若者向けに社員の声を多く盛り込む編集方針を採っているため、より一般的な統合報告書の形式に近づける場合は、現状の聞き取りに基づく内容に加えて、データの裏付けや開示項目の追加を段階的に実施する必要がある。逆に、採用目的を強く押し出す場合は、統合報告書を“採用の入口の冊子”として位置付け、Webサイトや採用ページ、説明会資料等との役割分担を明確にすることが有効であると思われる(スライド38)。

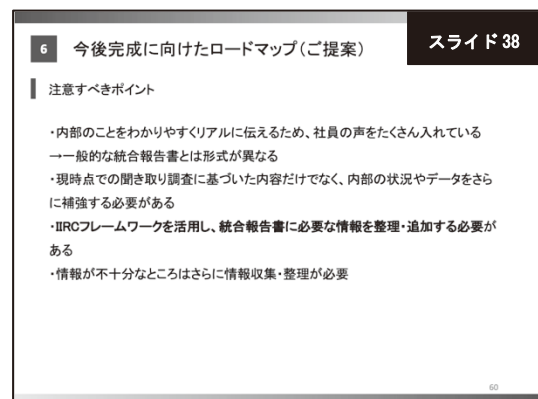
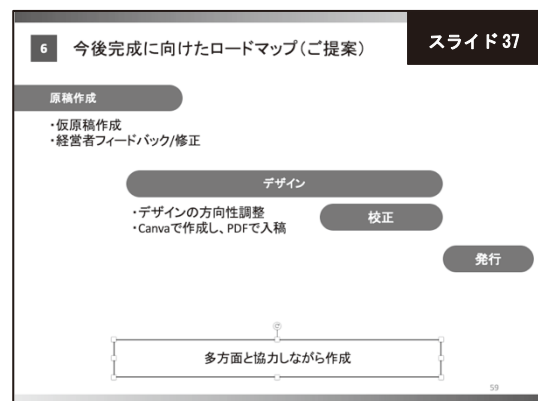
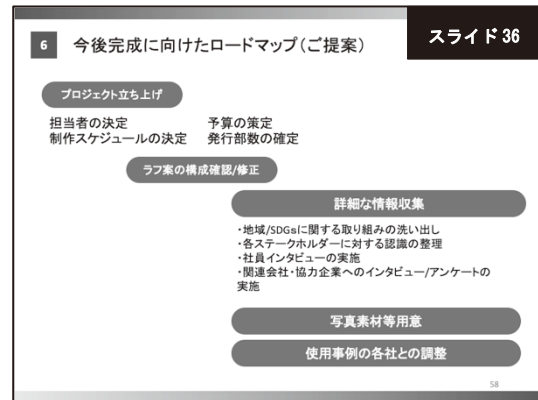
6-3. 実装に向けた運用設計

統合報告書の継続発行では、制作そのもの以上に、年次で更新できるデータ基盤と社内巻き込みの設計が鍵になる。例えば、人的資本の指標(採用、教育、資格、研修、離職等)を総務部が年次で更新し、各部署は「今年の改善」「来期の挑戦」を短文で提出する、といった最小運用から開始することが現実的である。さらに、協力企業・地域との活動は、行事ごとに写真と短い記録を残す運用に変えることで、翌年の編集コストを下げられる。完成版の発行後は、採用説明会での配布、金融機関との面談資料としての活用、Webサイトでの公開など、利用場面を設定し、利用者からの質問・反応を次年度の改善項目として回収する循環をつくることが望ましい。

7. おわりに

本実習は、学生が企業への理解を深めながら、情報公開の枠組みを用いて企業活動を整理し、採用・信頼形成に資する統合報告書(案)を試作した点に特徴がある。中小製造業においても、経営資源や価値創造のストーリーを可視化し、働く人の実像を伝えることは、採用力強化、金融機関との対話、社員の貢献意欲向上、ひいては企業価値向上に寄与し得る。

あわせて、学生が作成した草案を起点に、経営層と現場・部署間の対話を促進し、報告書制作



を年次の経営コミュニケーションとして定着させることを提案する。

今後、社内体制の整備と継続的な情報収集を通じて、本案を実装可能な報告書へ発展させることが期待される。また、学生が関与した成果物を社内外の対話に活用することで、企業の魅力を言語化する活動が組織文化として定着する可能性もある（スライド 39）。

謝辞

本実習にあたり、株式会社プロスパーの皆様にはヒアリングや施設見学等で多大なるご協力を賜った。ここに記して感謝申し上げます。

(参考文献)

IFRS 財団 (2022) 「国際統合報告フレームワーク (日本語訳)」『Integrated Reporting』、<https://www.ifrs.org/issued-standards/integrated-reporting/>、2025年12月30日最終確認。

IFRS 財団 (2023) “Integrated Thinking & Reporting Conference—Five key takeaways”、<https://www.ifrs.org/news-and-events/news/2023/08/integrated-thinking-and-reporting-conference-five-key-takeaways/>、2025年12月30日最終確認。

マネーフォワード クラウド給与 (2025) 「人的資本とは？定義や具体例、注目されている背景、高める方法を解説」、<https://biz.moneyforward.com/payroll/basic/89268/>、2025年12月30日最終確認。

(公社) 全国工業高等学校長協会 (2025) 「進路対策委員会報告 卒業者等に関わる状況調査」、https://zenkoukyo.or.jp/web/content/uploads/R07sotsugyo_kekka.pdf、2025年12月30日最終確認。

厚生労働省 岐阜県労働局 (2025) 「令和7年3月『高等学校卒業者』の就職内定状況等 (3月末現在)」、https://jsite.mhlw.go.jp/gifu-roudoukyoku/newpage_00737.html、2025年12月30日最終確認。

リクルートワークス研究所 (2025) 「第42回ワークス大卒求人倍率調査 (2026年卒)」https://www.works-i.com/surveys/item/250424_recruitment_saiyo_ratio.pdf、2025年12月30日最終確認。

Schoo 編集部 (2023) 「バーナードの組織の三要素とは？組織に必要な3つ要素を理解し導入するためのポイントを解説」、<https://school.jp/biz/column/1271>、2025年12月30日最終確認。

7 謝辞 スライド 39

感謝の言葉

実習で学んだこと・感じたこと

- ・会社全体を俯瞰して見る視点と、現場の声に耳を傾ける姿勢の両方を学んだ。
- ・社員の方や経営層の方へのインタビューを通して、一人ひとりの想いが会社の未来をつくっていると感じた。

63

参考文献 スライド 40

- IFRS (2023) 『Integrated Thinking & Reporting Conference—Five key takeaways』、2023年8月16日、<https://www.ifrs.org/news-and-events/news/2023/08/integrated-thinking-and-reporting-conference-five-key-takeaways/>、2025年12月30日最終確認。
- 朝日新聞SDGs ACTION(2022)『統合報告書とは？作成目的や主な記載項目、注意点を事例とともに解説』、2022年5月8日、<https://www.asahi.com/edg/article/14615458?msockid=3d5ea614d2356b41ea7b36843be4191>、2025年12月30日最終確認。
- Incdesien inc (2024) 『[2024年版] 参考にした！ 価値創造プロセス固まると』、2024年7月12日、<https://x.gd/hvn5r>、2025年12月30日最終確認。
- ウルマル編集部 (2019) 『統合報告書』組織の戦略、ガバナンスを伝える最適な方法』『ウルマル』(2019年12月6日)、<https://www.maru.defacto.com/net/integrated-report/>、2025年6月30日最終確認。
- 大橋信太郎 (2022) 『統合報告書とは？作成目的や主な記載項目、注意点を事例とともに解説』『The Asahi Shimbun SDGs ACTION』(2022年5月8日)、<https://www.asahi.com/edg/article/14615458?msockid=086a05c022a288c9286d1708247069c8>、2025年6月30日最終確認。
- 共同印刷株式会社プロモーションメディア事業部HintCip編集部 (2021) 『統合報告書のトレンドと進化の方向』～持続的な価値創造サイクルのドライバーとなるレポート～』『Hint Cip』(2021年8月27日)、<https://www.hintcip.com/articles/009/>、2025年4月30日最終確認。
- 国際統合報告協議会(IIRC) (2014) 『国際統合報告フレームワーク日本語訳』(FRS) (2014年3月)、https://integratedreporting.ifrs.org/wp-content/uploads/2015/03/International_IR_Framework_JP.pdf、2025年6月30日最終確認。

65

参考文献 スライド 41

- コロナキャリア20代×高卒女子のための、「しぶみ再発見」サイト(2025)『高校生の就職市場が激変！今知っておくべき最新動向』、2025年8月10日、<https://coro-career.com/un categorized/191/>、2025年12月30日最終確認。
- 公益社団法人 全国工業高等学校長協会 (2025) 『卒業者等に関する状況調査』、2025年10月、[R07sotsugyo_kekka.pdf](https://sotsugyo.kekka.pdf)、2025年12月30日最終確認。
- 株式会社インダ印刷 book-hon事業部 (2020) 『ページ数の数え方とノンブル、通し番号の違い(印刷注文の前に知っておきたい基礎知識)』『ブックホン』(2020年9月20日)、<https://www.book-hon.com/column/3739/>、2025年12月10日最終確認。
- 株式会社スリーハイ (2024) 『THREE HIGH ANNUAL REPORT OMOU 2024』、2024年4月、https://www.threehigh.co.jp/annual-report/pdf/report_2024_snhw.pdf、2025年12月30日最終確認。
- 株式会社プロスパー「会社案内-会社概要」、<https://www.prospers.co.jp/company.html>、2025年12月30日最終確認。
- 株式会社帆風 (2017) 『台割の意味と作り方(無料テンプレートあり)』『i-pan-オンラインショップ』(2017年11月16日)、<https://www.vanfu.co.jp/column/booklet-print/daiwari.html>、2025年12月9日最終確認。
- 株式会社リンクシナール『価値創造プロセスガイド-企業成長への実践的アプローチ-』、<https://www.links.co.jp/column/topics/article11.html>、2025年12月30日最終確認。
- Schoo編集部 (2023) 『統合報告書とは？求められる背景や作成のポイントを企業事例とともに解説』『Schoo for Business』(2023年9月25日)、<https://school.jp/biz/column/1271>、2025年6月30日最終確認。
- Schoo編集部 (2023) 『バーナードの組織の三要素とは？組織に必要な3つ要素を理解し導入するためのポイント』『Schoo for Business』(2023年7月26日)、<https://school.jp/biz/column/1271>、2025年12月10日最終確認。
- J-LLC 上場企業リサーチ (2025) 『東証プライム市場の上場企業一覧』、2025年12月1日、<https://j-llc.com/markets/prime>、2025年12月30日最終確認。

66

参考文献 スライド 42

- 田中弘隆 (2025) 『日本の企業報告に関する調査2024』『KPMG』(2025年4月)、<https://assets.kpmg.com/content/dam/kpmg/jp/pdf/2025/jp-sustainable-value-corporate-reporting.pdf>、2025年12月30日最終確認。
- 宝印刷 (2025) 『統合報告書の“価値創造プロセス”とは？含めるべき要素やポイントを解説』、2025年6月12日、https://www.takara-print.co.jp/media/integratedreport_008/#toc_01、2025年12月30日最終確認。
- 人的資本経営コンソーシアム (2024) 『人的資本経営の現状-課題とトップランナーたちの取組』、2024年12月 <https://www.meti.go.jp/policy/economy/intelki/shihon/pdf/toprunners.pdf>、2025年12月30日最終確認。
- 編集支援サービス Edit Partners (2025) 『編集に関するお役立ちコラム』『編集支援サービス Edit Partners』(2025年)、<https://www.edit-partners.jp/column/flaplan>、2025年12月9日最終確認。
- マネーフォワードクラウド給与 (2025) 『人的資本とは？定義や具体例、注目されている背景、高める方法を解説』(2025年4月17日)、<https://biz.moneyforward.com/payroll/basic/89268?msockid=257df0cc210388302d01a6a20d169746-2>、2025年11月19日最終確認。
- 名古屋中小企業投資育成株式会社 (2020) 『制度の活用をお考えの方へ-投資育成とは』、2020年、<https://www.shio-qi.co.jp/system/what/>、2025年12月30日最終確認。
- 日本生命保険協会 (2020) 『企業価値向上に向けた取り組みに関するアンケート (2020年度版)』 https://www.seiho.co.jp/ir/ir/news/2021/pdf/20210416_4-5.pdf、2025年12月30日最終確認。
- 日本取引所グループ (2023) 『国際統合報告フレームワーク-ESG情報開示枠組みの紹介』(2023年10月10日更新)、<https://www.jpx.co.jp/corporate/sustainability/esgknowledgehub/disclosure-framework/04.html>、2025年12月30日最終確認。
- 山内由紀夫 (2019) 『統合報告書 何のために読む？』『CCL』(2019年12月26日)、https://console.nikkeibp.co.jp/ccl/atcl/20191226_2/、2025年6月30日最終確認。

67

英文観光雑誌出版から発見した琵琶湖文化の風土： 3つの視点についての考察

原田雅史¹⁾

¹⁾インデペンデントスカラー 修士（教育学）（〒440-0084 豊橋市下地町字神田 131 番地 2）

1 はじめに

本報告は、琵琶湖の英文観光雑誌本（雑誌と本両形態の出版物）の出版経験を振り返り、琵琶湖周辺地域の風土の特徴について、近現代の公文書関連資料も用いて論じることが目的である。そのきっかけは次に述べる。著者は英文観光雑誌本 *Journey Around Lake Biwa* の発行・運営に携わってきた。著者自身、インタビューや写真撮影で滋賀県内や滋賀県の文化圏とつながる福井県と京都府を訪問し、資料を多角的に収集し、それを実際の観光地の責任者やインタビューを受けていただいた人に和文で、人によっては英語のネイティブスピーカーによる校正が済んだ英文の校正と共に和文校正をお願いした。最終的に全体の確認を英文で行い、8号まで発行してきた。その内容は琵琶湖の風土、つまり観光で琵琶湖周辺地域を訪れる人に対してどのようにその魅力を伝えたいかという点を主眼に出版した。

その琵琶湖の風土を、地域社会の実践的な体験からイメージすると、次のようなものとなる。琵琶湖周辺地域は近江商人に代表する職業倫理や職業アイデンティティが伝承されてきた。森林や水の文化の中で暮らす琵琶湖地域の人々は、日本的な儀礼や習慣が持つ美意識や人同士の絆を大切にしてきたともいえる。本論では、琵琶湖の風土を特徴づけると考えられる①職業観、②伝統的な信仰と美意識、③人間関係の絆について、近現代の公文書関連資料や滋賀県民ともゆかりのある随筆家・白洲正子氏の思想や滋賀県が近年行っている観光イベント等を用いて考察し、琵琶湖の豊かな環境がもつ風土とは何かを整理する。

1-1 風土とは何か

『大辞泉』によると、「風土」とは2つの意味がある。¹「1. その土地の気候・地味・地勢などのありさま。」「2. 人間の文化の形成などに影響を及ぼす精神的な環境。「政治的風土」「宗教的風土」」。本論文では二番目の意味で精神的な環境として「風土」という言葉を用いる。この精神的な環境と関連する琵琶湖の風土の要因を本実践報告で論ずる。倫理学者の熊野純彦は和辻哲郎が論ずる「人倫的な組織」とは、「家族」「親族」「地縁共同体」「経済的組織」「文化共同体」「国家」からなるものと定義している。²「家」は和辻の引用通り、「人々に安らかな休息の可能性を与える」。「家」は「同じ部屋の下で眠り、同じかまの飯を食う」という精神的な環境といえる。

また、地理学者・安田喜憲（2011）の『日本文化の風土』における日本文化と風土との関係を参考にした。安田は「自然と文化の研究」という節において、「日本文化を考えると、この多様性に富んだ日本列島の自然環境の特性をみのがすことはできない」と論じ、また「文化と自然は一体のもの」と位置づけている。

本稿においても、この視点で日本語圏の琵琶湖の自然と文化を英語圏の英文観光雑誌本という視点から観察した取材の実践面を近現代史の資料が描いてきた歴史面と繋げて報告する。自然、文化、観光、歴史の次元から琵琶湖文化の風土に関連する精神的な環境を表現する。

1-2 観光英文雑誌本 *Journey Around Lake Biwa* から見た琵琶湖文化の風土

著者は2017年10月以降、訪日外国人観光客を想定した英文観光雑誌本 *Journey Around Lake Biwa* の出版に携わってきた。一般に日本のシンボルとして一番標高の高い富士山があげられる。そこに行く観光ルートや観光圏は有名で内外ともに知られている。琵琶湖は日本一の面積を持つ湖として知られているが、富士山と琵琶湖の創世に関する神話がある一方で、³ 琵琶湖の観光資源の価値の整備が十分ではなく、地域貢献として出版する意義があると当時考えた。琵琶湖周辺は近江と旧名を呼ばれ、隣県の京都府や福井県とも、鯖街道をはじめ、様々な文化交流史を持つ地域であるといえる。それぞれの地域研究も近年盛んに行われている。日本文化の源流としての琵琶湖周辺地域を論じてきた随筆家の白洲正子の『近江山河抄』⁴、牧直視・白洲正子共著の『近

江: 木と石と水の国』⁵、成安造形大学附属近江学研究所の『近江学: 文化誌近江学』⁶を参考に、日本文化を雑誌本の写真と記述を通して描こうと考えた。Magzter や Amazon など雑誌本として配信できるデジタルプラットフォームを活用し、配信を行ってきた。

琵琶湖周辺地域社会へ貢献する写真雑誌として観光情報と共に日本文化の解説を提供してきた。自然と共に生きる伝統的なライフスタイルを持つ水文化や歴史遺産を紹介してきた。

内容を振り返って分類したところ、①神社仏閣、②商人、③伝統工芸および産業、④民間信仰、⑤歴史的文化財、⑥コミュニティデザイン、⑦食文化、⑧森林や水関連職業、⑨街道という琵琶湖文化の風土を描出したと考える(表1)。この内容から琵琶湖文化の風土の特徴として、上述の3点(職業観・信仰と美意識・絆)を見出すことになった。②・③・⑧は職業観、①・④・⑤・⑥は信仰と美意識、⑦・⑨は人間関係の絆の側面を持つと考える。

2 3つの視点に関する検証

これらの英文観光雑誌本に反映された精神的な環境を示す職業観、信仰と美意識、人間関係の絆の3つのキーワードについて、インタビュー内容を踏まえ、関係する近現代史に関する資料も用いて、琵琶湖文化の風土の特徴を捉えているかを検証したい。

2-1 職業観

インタビューを行うたびに学んだことは、滋賀県の日本文化に携わる専門家は、京都と比較しながら自分のビジネスを説明する程、京都と近江との位置づけがアイデンティティになっていることであった。つまり、琵琶湖周辺地域の人々の文化の風土は京都と密接に繋がっていることであった。例えば下記のような発言がある。「It is said that a group of painters of Kyoto began to create their work to make money during the Edo period. (京都の画家の集団が江戸時代に生活費を稼ぐために作品を作ったのが始まりと言われている。)」⁷「My family has been engaged in making rice for over 400 years in this place. I am the 16th generation of my family. In the past, it was a wholesale rice shop, and delivered rice to the old capital of Kyoto. (この地で400年以上コメ作りに従事している。16代目である。過去に米屋に卸していて、古都京都にも配達に行っていた)」⁸「We worked on a sculpture for the Gion Festival in Kyoto. I think that it was rewarding job, as we won a gold medal for our woodcarving. (私たち京都の祇園祭用の彫刻に取り組んだ。木彫に関しては金賞を受けた際に、やりがいがある仕事だと思った。)」⁹

京都と言えば日本文化を代表する地域である。そこにつながる豊かな文化と、それを支える生産物に対する誇りをうかがわせるインタビューも多くあった。例えば次のようなものがある。

「Japan has a rich wooden cultural heritage and if you are Japanese, it is natural to be proud of it. Some young people would like to learn such architectural methods and techniques. During the period of high economic growth (1955-1973), there was an idea that making a house was like making a box. However, I think that making a home is important to become a living industry. (日本には豊かな文化的な遺産があり、誇りを感じる。そうした建築技法や技術に関心を持って学ぶ若者もいる。高度経済成長期は(1955-1973)には家づくりは箱を作ることに例えられていた。しかし、家を作ることは生活産業として重要になるだろうと思っていた。)」¹⁰「The folding fan is indispensable for various events in Japan. In shrines and temples, folding fans are needed for events. Japanese cultural events such as festivals and comic storytellers (rakugo) always require a fan. Japanese culture was always a culture that used folding fans. (扇子は日本では様々な行事で必要不可欠なものになっている。神社仏閣では扇子は行事で必要となっている。祭りや落語のような日本文化の行事では扇子は常に用いられる。日本文化とは扇子を用いる文化とも言っていた。)」¹¹「We use the water that comes out here. It the underflow water of Mt. Ibuki. Water and water quality are important in sake brewing. It is said that taste of the sake is determined by the water. Minerals and other things present in the water will affect the taste of the sake. (私たちはここで流れている水を使う。伊吹山の伏流水である。酒造りには水や水質が決めてとなる。酒の旨さは水で決まる。水の中のミネラルやその他の成分が酒の旨さに影響する。)」¹²

また、滋賀県立公文書館の Website にはデジタル展示のコンテンツがあり、「【展示】滋賀の商業と近江商人」(展示期間 平成27年10月13日～平成27年11月26日)を資料として滋賀の商業

表 1: 観光英文雑誌本 Journey Around Lake Biwa の号数ごとの琵琶湖文化の風土面 (1/4)

| 各号の目次のスクリーンショット | 号数と琵琶湖文化の風土面 (要約) と分類 (目次に基づく) |
|---|--|
|  | <p>ISSUE 1</p> <p>坂本の神社や寺院を紹介しながら、門前町としての聖なるコミュニティを紹介した。近江八幡という商人の町を紹介し、和舟の観光、寺院や観光地の山について記述した。近江商人の町の持つ自然や建造物を写真と共に描いた。</p> <p>①神社仏閣、②商人、④民間信仰、⑤歴史的文化財、⑥コミュニティデザイン、⑧森林や水関連職業</p> |
|  | <p>ISSUE 2</p> <p>水と文化に関する視点でまとめた。琵琶湖の水で作られた豆腐、歴史的偉人の資料館、水の聖地や近江富士の伝説などを取り上げた。大津の寺院や祭りを論じた。</p> <p>①神社仏閣、②商人、④民間信仰、⑤歴史的文化財、⑥コミュニティデザイン、⑦食文化</p> |










表 1: 観光英文雑誌本 Journey Around Lake Biwa の号数ごとの琵琶湖文化の風土面 (2/4)

| | |
|--|---|
| <p style="text-align: center;">CONTENT Issue 3 [May 2018]</p> <p style="text-align: center;">Interviews with Traditional Craftsmen</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>6 Otsu-e Painter, Mr. Shozan Takahashi</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>24 Master Craftsman of Brush, Mr. Junichi Fujino</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="text-align: center;">  <p>40 Mr. Masao Suita (President of Suita Fan)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>54 Obata Doll, 9th head of a family, Mr. Gengo Hosoi</p> </div> </div> <p style="text-align: center; margin-top: 10px;">Tennenzuga-tei (Isome-shi Garden)</p> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;">  <p>70 Principal, Mr. Torao Isome</p> </div> | <p style="text-align: center;">ISSUE 3</p> <p>4人の伝統工芸に携わってきた専門家に、人材不足や継承問題を踏まえ、伝統工芸とは何かを自身の考え方についてインタビュー記事を掲載した。また、歴史的文化財の施設を訪れ、インタビューを行い、関連文化について説明をいただいた。</p> <p>③伝統工芸および産業、⑤歴史的文化財、⑥コミュニティデザイン</p> |
| <p style="text-align: center;">CONTENT Issue 4 [August 2018]</p> <p style="text-align: center;">Interviews with people working to preserve traditional culture</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="text-align: center;">  <p>6 Mr. Atsushi Oda of Nagahama Hachimangu Shrine</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>30 Mr. Shigehito Yoshii of Nagahama City Project Co., Ltd.</p> </div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 10px;">  <p>56 Ms. Yuuko Yamaji, Proprietress, Yamaji Brewery Inc.</p> </div> <p style="text-align: center; margin-top: 10px;">Culture & History of Nagahama City</p> <p style="text-align: center;">77 Kinomoto Jizoin Temple</p> <p style="text-align: center;">78 Lakeshore settlement of Sugaura</p> <p style="text-align: center;">80 Zelkova in Yogo Town</p> <p style="text-align: center;">81 Nagahama Bonsai Exhibition of Japanese Plum Trees</p> <p style="text-align: center;">82 Yokarou</p> | <p style="text-align: center;">ISSUE 4</p> <p>滋賀県の中でも長浜という地理的にも文化的にも特徴のある都市において、街づくりの専門家、醸造業の専門家にインタビューを実施。長浜市内の文化や歴史に関連する場所やイベントを紹介した。</p> <p>①神社仏閣、②商人、③伝統工芸および産業、④民間信仰、⑤歴史的文化財、⑥コミュニティデザイン、⑦食文化、⑧森林や水関連職業</p> |

表 1: 観光英文雑誌本 Journey Around Lake Biwa の号数ごとの琵琶湖文化の風土面 (3/4)

| | |
|---|---|
| <p style="text-align: center;">CONTENT Issue 5 [November 2018]</p> <p style="text-align: center;">Food Culture of Shiga Prefecture</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>4 Challenge for the future of Tsukudani freshwater fishmonger Okumura Tsukudani Co., Ltd.</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>20 A traditional Omi beef specialty store Marutake Omi Nishikawa</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="text-align: center;">  <p>32 Center base of Lake Biwa fishery, Okishima Island Okishima Fisheries Cooperative Association</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>48 Rice farming in Shiga: a tradition of more than 400 years Wakai Farm</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="text-align: center;">  <p>60 A 400-year-old funazushi maker Kitashina Shop (Sohonke, Kitashina Shinise)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>76 Historic pickle store with old-fashioned recipe Yaoyo</p> </div> </div> | <p>ISSUE 5</p> <p>滋賀の食文化について特集した。佃煮、近江牛、沖島漁業協同組合、米農家、鮎寿司、漬物の専門家にそれぞれの歴史や文化を説明いただきながら、職業倫理ともいえる彼らの独自の考え方をまとめた。</p> <p>②商人、③伝統工芸および産業、⑥コミュニティデザイン、⑦食文化、⑧森林や水関連職業</p> |
| <p style="text-align: center;">CONTENT Issue 6 [February 2019]</p> <p style="text-align: center;">Castle Town, Hikone</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="text-align: center;">  <p>6 A Japanese confectionery store with a history of 210 years Confectioner-Itoju</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>18 Reconstructing Koto Ware and Hikone's tradition Ichishirogama</p> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="text-align: center;">  <p>32 A 350-year Inheritance of Household Medicine Arikawa Pharmaceutical Co., Ltd.</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>46 Pursuing the Creation of a Buddhist Altar Heartfully Eirakuya Co., LTD.</p> </div> </div> | <p>ISSUE 6</p> <p>城下町彦根は和菓子、湖東焼、製薬会社、仏壇会社を訪れ、商品開発とそれらの歴史や文化を専門家に語ってもらった。</p> <p>②商人、③伝統工芸および産業、④民間信仰、⑤歴史的文化財、⑦食文化</p> |

表 1: 観光英文雑誌本 Journey Around Lake Biwa の号数ごとの琵琶湖文化の風土面 (4/4)

| | |
|---|--|
| <p style="text-align: center;">CONTENT Issue 7 [May 2019]</p> <p style="text-align: center;">The Living Wooden Culture of Lake Biwa</p> <div style="display: flex; flex-wrap: wrap;"> <div style="width: 50%;">  <p>6 The family woodcarving tradition in the artisan community Mori Sculpture House</p> </div> <div style="width: 50%;">  <p>22 The birthplace of <i>kijishi</i> (woodturner) Woodturning Craft Museum</p> </div> <div style="width: 50%;">  <p>40 Inheriting the tradition of 1200 years in the sacred place of the woodturners. Tsutsui Rokuro</p> </div> <div style="width: 50%;">  <p>58 Protecting the climate of thatched-house life Shiratanisō Museum of History and Folklore / Kayabuki-no-sato (thatched-house village), Shiratanisō</p> </div> <div style="width: 50%;">  <p>74 A long-established gardening business making use of local trees and the environment Omi Hanakatsu Zoen, Inc.</p> </div> <div style="width: 50%;">  <p>86 Processing trees grown in local area with carpenters knowing the local climate Sakata Building Contractor, Inc.</p> </div> </div> | <p>ISSUE 7</p> <p>生活の木の文化と琵琶湖に関する特集。木彫家、木地師の資料館、木地師、古民家施設、園芸家、大工業の特集で、それぞれの歴史と伝統的な仕事の位置づけや課題について語ってもらった。それぞれの木の文化の歴史や琵琶湖材をはじめ地産地消の風土を持つ人たちの考え方や仕事への誇りといった倫理的な面についても論じている。</p> <p>②商人、③伝統工芸および産業、⑤歴史的文化財、⑥コミュニティデザイン、⑧森林や水関連職業</p> |
| <p style="text-align: center;">CONTENT <i>Journey Around Lake Biwa, 8</i></p> <p style="text-align: center;">Saba Kaido Road, Obama, & Kyoto</p> <div style="display: flex; flex-wrap: wrap;"> <div style="width: 50%;">  <p>Scenery of Saba Kaido Road</p> </div> <div style="width: 50%;">  <p>Mackerels Specialty Store with the history of Saba Kaido Road: Kutsukiya</p> </div> <div style="width: 50%;">  <p>A traditional craftsman who has inherited the 400-year-old history of <i>Wakasa-nuri</i> lacquerware: Furui Hashi Kobo (Furui Chopsticks Studio)</p> </div> <div style="width: 50%;">  <p>Passing the <i>Wakasa washi</i> (Japanese paper) tradition that has lasted for 1,000 years on to the next generation: <i>Wakasa Washi-no Ie</i> (House of <i>Wakasa Washi</i>)</p> </div> <div style="width: 50%;">  <p>Gallery remodeling 150-year-old merchant house: Seisukan</p> </div> <div style="width: 50%;">  <p>Column article: Legend of Yao-bikuni</p> </div> <div style="width: 50%;">  <p>Handmade <i>shibazuke</i> handed down to the village of Ohara since ancient times: Shibakyu</p> </div> </div> | <p>ISSUE 8</p> <p>魚屋、若狭塗や若狭和紙の伝統工芸士、町屋ギャラリー、小浜の伝説、京都の老舗漬物店といった鯖街道に位置する職人や伝統産業に携わる人々の仕事への思いを語ってもらった。</p> <p>②商人、③伝統工芸および産業、④民間信仰、⑤歴史的文化財、⑥コミュニティデザイン、⑦食文化、⑧森林や水関連職業、⑨街道</p> |

あるいは近江商人を琵琶湖文化の風土の視点で分析する。¹³ 明治 5 (1872) 年。明治初期の滋賀県当局者は、「三方よし」の倫理観を持つ「富豪」で、「各自の事業に務め、規模も小さく」東京や函館等「県外」で活躍していた近江商人に批判的であった。¹⁴ ビジネス融資の仕組みも存在していたことが分かっている。¹⁵ 「近江商人の由来」(大正元年(1912))の資料によると、近江商人は「単独経営」で「得意先に商品の卸売り」を行うものが多く、東京、大阪、京都でも個人営業者としてトップであった。¹⁶ 東京、大阪に次ぐ全国で第3番目の商法会議所があり、琵琶湖の水運を活かし、物資流通の集散地で商業者の都市が天津であった。伝統的な近江商人はのれんわけの設立を前提とし、丁稚奉公人を育成していた。こうした背景のもと、全国初の商業高校を設立したのは滋賀であった。このように丁稚奉公や教育に基づく人間関係の絆による経済活動が発展していったことがわかる。さらに、昭和5年に出版された近代資料といえる大阪毎日新聞経済部編『経済風土記』を紹介する。¹⁷ この「序」を書いた下田将美は、和歌山、三重、岐阜同様に「風光に於いて勝れ、一面に於ては驚くばかり史實に豊富」である滋賀を「経済」と「自然の美」を特徴として描いている。つまり、滋賀経済と自然の美は、琵琶湖文化の風土における精神的な環境の要因と関係しているとも理解できる。また、滋賀を次のように表現している。米、小鮎、牛肉、信楽焼の産地として活躍し、独自のビジネスマナーを持つ近江商人の財力は日本で占める割合が高い。天津市は遊覧都市であり、湖上汽船があり、北陸と近畿地方を結ぶ琵琶湖は敦賀から商業都市である大阪へのルートをはじめ、水路として役割を果たしてきた。長浜と天津間は鉄道があった。琵琶湖は電力を生む。伊藤忠兵衛は丸紅という商社や近江銀行を作った近江商人として知られている。このように、この資料は、近江商人の具体像を描いたものといえる。

地理的特徴として、近畿圏という滋賀、京都、兵庫、大阪、奈良、三重の2府4県の「約1400万」人の水として琵琶湖は利用されてきた。¹⁸ 公益財団法人琵琶湖・淀川水質保全機構は、この点に関して「美しい自然と豊かな水に恵まれた琵琶湖・淀川流域は、古より私たちに癒しと潤いをもたらし、また、近畿圏の経済の発展や文化の醸成はこうした水の恵みに支えられてきました」と記述している。¹⁹ これらは自然と水環境が経済と文化を作る絆を示唆し、精神的な環境の要因としての日本文化の風土の記述ともいえるだろう。

2-2 信仰と美意識

長浜市曳山博物館は展示「歌舞伎からみるお江の時代」で、曳山子ども歌舞伎の背景にある源流を探求した。以下、展示録『歌舞伎からみるお江の時代』に沿って、記述内容を括弧で引用しながら分析する。²⁰ 男装の麗人や扇で顔を隠し女装した男が描かれた「茶屋遊び」という草紙がある。このように性別を自在に往還するような独自の美意識を持つものが歌舞伎の一つの特徴でもある。男装する遊女が主人公の「四条河原遊学図屏風」で描かれている通り、日常の中で芸能に携わる人々が尊重されてきた芸能史の一部を示しているともいえるだろう。また野郎歌舞伎と呼ばれる男性がそれぞれの楽器やファッションによってアイデンティティを表現している「野郎歌舞伎図屏風」もある。

これに関連して、英文観光雑誌本の第4号で「長浜」を特集した。その中でのインタビュー記事で次のような発言を引用したい。「The area where Nagahama city and Hikone city is located is also a production area of Buddhist altars. There are many painters and sculptors in this area. These craftsmen competed to create better festival floats year after year. For example, when one festival float in one area became luxurious, others did their best to match it in quality and luxury. (長浜市や彦根市が位置する地域は仏壇の生産地である。この地域には画家や彫刻家が多く住んでいる。年々、こうした職人はよりよい曳山を作ろうとして競争的であった。例えば、ある地域のある曳山が豪華絢爛になると、他も曳山の質の面や豪華さにおいてそうしたものに対抗しようとして奮闘してきた。)」²¹

このように、工芸に携わる職人は琵琶湖周辺地域の祭りを通じて、美術的価値を含む美意識を高め、伝統的な日本文化の技術を発展させてきたことがわかる。こうした地域の職業人の努力の結晶が反映された美を楽しむ機会こそが、祭りといえるかもしれない。日本の芸能や文学史につながる琵琶湖周辺地域の祭りは、上述の歌舞伎史におけるジェンダー的な美だけでなく、工芸的な美を含む多面的な美が特徴的であると思われる。

そうして培われた美意識は、日常空間である庭園にも影響を及ぼしており、次のような発言がある。「One of the main characteristics of this garden is are huge stones. In addition, the pine tree called akamatsu (Japanese red pine tree) planted here are often used in our local gardens. In this area, many rich houses have big stones in the garden as well as akamatsu. The same is true for rural areas. The garden is particularly cherished among local people. To create the unique form of the branches takes time to prune and grow. The gardener for the Ando family is always same person, because the shape of trees will be changed if the gardener changes. (この庭の主な特徴の一つは巨石である。それと共にここに植えられた赤松(日本の赤い松)は私たちの地域の庭ではよく見かける。この地域では、お金持ちの多くは赤松とともに庭に大きな石を置く。田舎の地域でも同じである。特に地方の人にそうした庭は愛好されてきた。枝を独特な形にするために刈り込み育てることに時間がかかる。安藤家の庭師は常に同じ人になっているのは、庭師が変わると木の形が変わってしまうからである。)」²²

また大津には比叡山坂本という宗教エリアがあり、比叡山宗教サミットは世界の宗教者による平和的な集いとして歴史を持つ。²³ そして私の英文観光雑誌本の取材において、貴船神社と滋賀とのつながりを知った。その部分を紹介したい。「People around Lake Biwa depend on water to live. Therefore, Kifune shrine in Kyoto which is the deities of water are enshrined. In the past, fishermen had often come to visit here. There are old documents, but here they seem to have been crowded because of many prayers. (琵琶湖周辺の人々は水の暮らしをしているといえる。それに関連して、京都の貴船神社は水の神様として祀られている。過去に漁師たちがここ(滋賀県大津市内の石塔)にお参りによく来ていた。古い記録によると、多くの参拝者が来て混雑していた様子であった。)」²⁴ 「貴船神社は万物の命の源である水の神を祀る、全国2千社を子添える水神の総本宮」として知られている。²⁵ 滋賀県神社庁のWebsite内のデータベースを使って「貴船」で神社検索をすると、滋賀県内に17社存在する。この水の神は漁業だけでなく、様々な水に関連する職業の人々が信仰しているものである。

江戸時代以降の北海道では近江商人が漁業分野で活躍したといわれている。以下、中西聡は「松前藩城下や箱館湊・江差湊の商人」は漁業を行い、「請け負った場所へ本州など(本州・四国・九州)の産物」を運び、「アイヌと交易し、漁獲物は前藩城下や箱館湊・江差湊へ運んで、北前船などに販売した」と述べる。²⁶ ここでは漁業に基づく商業の職業観があることが理解される。このように漁業や水についての神道への信仰を大切にす美意識を持ち、日常の精神的な環境としての神社という場や空間が伝統的に受け継がれてきた面がある。一方で漁業が他の産業とリンクし発展してきたのが近江商人の商業の一面であると思われる。

ただしこうした一面は、一方で衰退の危機にあることもインタビューからはうかがわれた。「In most houses in current Japan, the genkan (vestibule) is too small to get big Buddhist altar through it. Owning a Buddhist altar is like bringing a part of the temple to our homes. And it is also a symbol of the family. These days, however, fewer people are buying Buddhist altars. In that sense, now is a time when Japanese tradition is being lost. (現在の日本のたいていの家屋では、玄関は大きな仏壇を置けないくらい狭い。仏壇を置くことは自宅にお寺の一部の機能を持っていくようなものである。家族のシンボルともいえる。最近ではしかし、仏壇を買う人がめっきり少なくなった。この意味において、日本の伝統が失われつつある時代が現在であろう。)」²⁷ 「Thinking about chopstick design is difficult because it is must fit in a small space. It is also a difficult task to balance consumer needs with their design ideas. Many chopsticks today are made according to orders from wholesalers. This is because you cannot sell chopsticks under your own name unless you use a distribution channel. Even people who are regarded as artists find it difficult to sell. (箸のデザインを考えることは難しい。狭いスペースにデザインを入れ込むからである。デザイナーの考えをお客さんの求めるものと一致させることは難しい。今日の箸の多くは卸からの注文に沿って作られている。これは販路を用いない限り自分の名前で箸を売ることにはできない程だからである。芸術家と知られている人でさえ販売は困難を伴うものである。)」²⁸ 「I think that we must convey the tradition of washi to our future. Using opportunities to make an experience to make washi for children, I would like to pass on the tradition. When I came in contact with today's children, I found that they did not know about paper. Although there are time constraints in the experience-based class, what I want to convey to the children is that Japanese paper is made from the bark of wood. (次世代に和

紙の伝統を伝えていくべきだと思う。私は伝統をそのように受け継いできた。子どもに和紙作りの体験をさせる機会を得た際に、子どもたちは紙のことを知らないことに気づいた。体験授業では時間的制約があるけれど、子どもたちに日本の和紙は木の樹皮から出来ていることを伝えていきたい。)」²⁹

次世代への継承の重視は、全国初の商業高校を設立した話にも通じる一面であろう。

2-3 人との絆

「三方よし」に代表される人間関係の絆の側面について、琵琶湖周辺地域の専門家たちが次のように語っている。「I try to be polite to everyone. We strive to make our customers happy. If you do a shoddy work, a customer will immediately know. For example, we study how to bake mackerel very closely. I am very happy when a customer tells me that their meal was delicious. (みんなに礼儀正しく接している。お客さんが幸せになるように努力している。雑な仕事をすればお客さんは直ちにわかるはず。例えば、鯖を上手く焼く方法を研究している。この前食べた商品は美味しかったとおっしゃってくださいると大変幸せである。)」³⁰また、歴史的な文脈として、「667年に天智天皇により近江大津宮へ遷都」があり、飛鳥と連携して中央政府機能があった。³¹ 遣隋使や遣唐使として外交や文化に関連する仕事をした小野妹子や犬上御田鍬ら近江の氏族は琵琶湖周辺の開発にも関わった人たちである。³² 有力者も一般庶民も、人との絆を重視して琵琶湖の風土を支えてきたと言える。

ここでは全国滋賀県人会連合会の Website の内容分析を行う。³³ 滋賀県人会は全国 42 都道府県内 50 か所、海外には 15 存在する。1964年に発足したこの組織は近江商人の思想を組織の「趣旨」「目的」「沿革」にも反映している。これは滋賀経済の人材の持つ琵琶湖文化の風土を全国、世界に活かして貢献していこうとしていると見ることができよう。全国滋賀県人会連合会の Website を見ると、アジアには 4 つ、北米に 5 つ、中南米に 4 つ、欧州に 2 つ組織があることが示されている。³⁴ 全国滋賀県人会連合会が「沿革」で述べている近江商人は「地縁」「血縁」を活用し、「滋賀県人の輪」を形成してきたが、グローバルな課題に琵琶湖という地勢を活かした視点で取り組んでいることを示している。この琵琶湖文化の風土は、近江商人の職業倫理であり、滋賀県人の絆であり、水の信仰を持つ美を大事にする知恵のようなものが関係していると考えられる。

下記、上記の関連事項を考察する。宗教社会学者 R. N. ベラーは経済倫理と近江商人との関係について論じた。³⁵ 「すぐれた近江商人は、多くの場合、住居を大都市の一つに移さず、近江の国の商業町に本店をおいて、そこから全国的な商いを指揮した。彼らは、その職業をきびしく追求し、あるいは仏教に献身し年をおくった」。浄土真宗がその一つである。「すべての家訓や店則は、信仰についても」記載され、法律を守り、服従してきた。彼らは「禁欲的な日常生活」で「早寝早起き」で身体や家や店を「清潔に保つ」ことも守ってきた。これは人と人がある目的に向かって絆を形成していくために必須の信仰に基づく倫理であり、日本社会の経済組織において、こうした前近代からの精神的な環境が継承されてきたともいえる。

これに関連して、ある城下町では祭りの費用において、自律的な町を支える精神が受け継がれてきたことが、私が刊行した英文観光雑誌本の中でも表現されている。「Townsppeople have traditionally paid these costs. Although we are receiving some support from the government thanks to the Cultural Property designation, Nagahama is a typical town based on autonomy by the townspeople. From the era of Hideyoshi, townspeople known as juninshu (ten people) had operated the town. (町の人たちはこれらの費用(祭りの費用)) 伝統的に支払ってきた。文化財指定のおかげで政府の支援を一部受けたが、長浜は町の人々によって自律に基づき作られてきた。秀吉の時代から町の人たちは十人衆として知られ、町を運営してきた。」³⁶ こうした自律的で歴史のある美意識に基づく規範が町の人々の精神的な環境の中で伝承され、仕事を通じた親密な人間関係に基づく職業観が発達していった面がわかるだろう。ここでは、独自の日本文化の風土が見られる。

2-4 近年の滋賀県の取り組み

最近の滋賀県の仏像や水文化を紹介した観光イベントや文化遺産に関する行政関連の取り組みにおいて、随筆家・白洲正子氏の近江文化の考え方や概念が近年評価され、取り上げられている。ここでは、倫理や道徳につながる信仰や、³⁷ 絆ともいえる人間関係を反映した生活の庶民の水文

化、³⁸ 民間信仰を反映した伝統産業や信仰を含む文化事業、³⁹ 滋賀県の近江商人を含む庶民の信仰が反映した美意識、琵琶湖の経済につながる個人の職業アイデンティティ、⁴⁰ 観光開発、⁴¹ 山観光、⁴² 職業関連資料館や飲食施設、⁴³ 文化遺産のPRやその学習機会⁴⁴、博物館経営、⁴⁵ 地域文化学習⁴⁶が行われている。これらの白洲氏関連は、上述の3点から分析すると、次のように言えるだろう。独自の職業観を持つ近江商人が発展させた財力ともいえる経済や産業を、そしてその人たちの美意識や絆といった教えを含む自然との生活に根ざす信仰を基底とした道徳倫理を、白洲氏の思想を通して学び体験する旅イベントや取り組みを行ってきたとも考えられる。

また、林野庁によると OECD 加盟国の森林率で日本は上位から3番目である。⁴⁷ 地理学・環境考古学の安田喜憲は『日本文化の風土』において、日本の文化風土の特徴はエジプトと類似点があり、「アニミズムの神々が長らく健在で」「自然と人間のかかわりのベーシックなあり方」に関係している。⁴⁸ これは、自然・信仰と絆の関係を示していると解釈できる。これに関連して、琵琶湖は「440 万年の歴史を持つ」古代湖で、「60 以上の固有種」が存在し、「水産業の場としての価値、観光資源としての価値、学術研究の場としての価値」があると滋賀県は発表している。⁴⁹ 日本の自然崇拜について、宗教学者の姉崎正治は、「日本の宗教の起源は神や霊魂つまり、その背後の自然崇拜である」と言う。⁵⁰ 「木と石と水—それは生活に必要なものを生み出す「山」のシンボル」であると白洲氏は説く。⁵¹例えば滋賀県の三上山は「男山・女山の二つの峰からなっており、頂上には、奥宮・巨石の磐座・東の祠（八大龍王社）が祀られている御上神社のご神域」である。そこは伝説が残る自然崇拜の空間といえよう。

3 おわりに

以上、私が体験的に出版や取材を通して学んだ日本文化の風土の特徴を論じてきた。琵琶湖の観光資源の価値の整備が十分ではないと考えて英文観光雑誌本を出版してきたが、その活動を通じて琵琶湖文化の風土を特徴づける3つの視点①職業観、②信仰と美意識、③人との絆を整理し、これらの視点が的を射たものであることを、本稿の考察を通じて確認した。『経済風土記』に書かれた水系と財力が、外交や文化に関する職業観、神道や仏教という信仰と美意識、及びそれらに付随する人間関係の絆が土台となっているといえる。

琵琶湖周辺地域の風土の特徴として、琵琶湖水系に支えられた近江商人の職業観、豊かな自然環境にもとづく自然崇拜の美意識、そして今や世界中に拠点を持つ滋賀県人会ネットワークに代表される人の絆の3点を描くことができたといえる。

ここでは自然、文化、観光、歴史の次元から精神的な環境を持つ風土が琵琶湖周辺地域の日本文化に存在することを示唆しているといえる。自然の中で石の技術などを持つ職業観が発展し、近江の漁業や林業を含む暮らしを発達させてきた琵琶湖周辺地域について、本実践報告では、自然崇拜の美意識や経済倫理と絆を描く試みを行った。

¹ 小学館「ことばのまど」大辞泉 (<https://kotobanomado.jp/>、2025年8月26日最終閲覧)

² 熊野純彦『和辻哲郎』（岩波書店、2009年）26～27頁。

³ 吉田信「富士山と琵琶湖についての言い伝えをめぐって」（『東北学院大学教養学部論集』第169号、2014年、13～27頁）(https://www.tohoku-gakuin.ac.jp/research/journal/bk2014/pdf/no09_02.pdf、2026年1月5日最終閲覧)。

⁴ 白洲正子『近江山河抄』（講談社、2025）。

⁵ 牧直視・白洲正子『近江：木と石と水の国』（駸々堂出版、1973）。

⁶ 『近江学：文化誌近江学』1-7号（成安造形大学附属近江学研究所、2009）。

⁷ Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “Special Issue, Interview 1. Otsu-e painting for the common people continued from the Edo period,” *Journey Around Lake Biwa*, Issue 3, 2018, pp.6-22.

⁸ Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “Rice farming in Shiga: a tradition of more than 400 years,” *Journey Around Lake Biwa*, Issue 5, 2018, pp.48-59.

⁹ Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “The family woodcarving tradition in the artisan community,” *Journey Around Lake Biwa*, Issue 7, 2019, pp.6-21.

-
- ¹⁰ Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “Processing trees grown in local area with carpenters knowing the local climate ,” Journey Around Lake Biwa, Issue 7, 2019, pp.86-103.
- ¹¹ Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “Special Issue, Interview 3. A craftsman who inherits the technology of the fan of 300 years ,” Journey Around Lake Biwa, Issue 3, 2018, pp.40-53.
- ¹² Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “The oldest brewery in Shiga prefecture, continuously operated for 486 years ,” Journey Around Lake Biwa, Issue 4, 2018, pp.56-75.
- ¹³ 「【展示】滋賀の商業と近江商人」滋賀県立公文書館デジタル展示 Website
(<https://www.pref.shiga.lg.jp/kenseishiryo/kakonotenjishiryo/10800.html>、2025年8月27日最終閲覧)。
- ¹⁴ 「【展示】滋賀の商業と近江商人「勸業の儀に付伺書」」滋賀県立公文書館デジタル展示 Website
(<https://www.pref.shiga.lg.jp/kenseishiryo/kakonotenjishiryo/10800.html>、2025年8月27日最終閲覧)。
- ¹⁵ 「【展示】滋賀の商業と近江商人「勸業社規則」」滋賀県立公文書館デジタル展示 Website
(<https://www.pref.shiga.lg.jp/kenseishiryo/kakonotenjishiryo/10800.html>、2025年8月27日最終閲覧)。
- ¹⁶ 「【展示】滋賀の商業と近江商人「近江商人の由来」」滋賀県立公文書館デジタル展示 Website
(<https://www.pref.shiga.lg.jp/kenseishiryo/kakonotenjishiryo/10800.html>、2025年8月27日最終閲覧)。
- ¹⁷ 大阪毎日新聞経済部編『経済風土記』近畿外篇、刀江書院、昭和5年（国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1223873>、2025年8月7日最終閲覧）。
- ¹⁸ 「琵琶湖の概要」水資源機構琵琶湖総合管理所 Website
(https://www.water.go.jp/kansai/biwako/html/about_biwa/ab_biwa_02.html、2025年8月7日最終閲覧)。
- ¹⁹ 「はじめに 令和7年3月」公益財団法人琵琶湖・淀川水質保全機構 Website
(<http://www.byq.or.jp/kankyo/r05/byq-main.html>、2025年8月7日最終閲覧)。
- ²⁰ 財団法人長浜曳山文化協会『歌舞伎からみるお江の時代』（2011年）。
- ²¹ Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “The sacred shrine forest and the Nagahama Hikiyama Festival ,” Journey Around Lake Biwa, Issue 4, pp.6-29.
- ²² Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “Beautiful architectural treasure remaining in Nagahama,” Journey Around Lake Biwa, Issue 4, 2018, pp.30-55.
- ²³ 「比叡山宗教サミット」天台宗国際平和宗教協力協会 Website
(<https://www.tendai.or.jp/summit/index.html>、2025年8月28日最終閲覧)。
- ²⁴ Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “Tennenzuga-tei (Isome-shi Garden) ,” Journey Around Lake Biwa, Issue 3, pp.70-78.
- ²⁵ 「貴船神社について」貴布禰総本宮 貴船神社 Website (<https://kifunejinja.jp/>、2025年8月27日最終閲覧)。
- ²⁶ 中西聡『北前船の近代史：海の豪商たちが遺したもの』（交通研究協会、2023年）。
- ²⁷ Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “The family woodcarving tradition in the artisan community,” Journey Around Lake Biwa, Issue 7, 2019, pp.6-21.
- ²⁸ Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “A traditional craftsman who has inherited the 400-year-old history of Wakasa-nuri lacquerware,” Journey Around Lake Biwa, Issue 8, 2019, pp.24-37.
- ²⁹ Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “Passing the Wakasa washi (Japanese paper) tradition that has lasted for 1,000 years on to the next generation,” Journey Around Lake Biwa, Issue 8, 2019, pp.38-51.
- ³⁰ Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “Mackerels Specialty Store with the history of Saba Kaido Road,” Journey Around Lake Biwa, Issue 8, 2019, pp.14-23.
- ³¹ 「社会資本整備審議会都市計画・歴史的風土分科会第4回歴史的風土部会議事要旨 平成15年

6月30日」国土交通省 Website

(https://www.mlit.go.jp/singikai/infra/city_history/historic_climate/4/historic_climate_.html、2025年8月7日最終閲覧)。

³² 「湖国が産んだ英雄 ―その1―」立命館大学父母教育後援会 Website (<https://www.ritsumeifubo.com/fudoki/02/>、2025年8月7日最終閲覧)。

³³ 「全国滋賀県人会とは」全国滋賀県人会連合会 Website (<https://zenjiren.com/about>、2025年8月27日最終閲覧)。

³⁴ 「全国の滋賀県人会リスト&滋賀県市町へのリンク」全国滋賀県人会連合会 Website (https://zenjiren.com/kenjinkai_list、2026年1月2日最終閲覧)。

³⁵ R.N.ベラー(池田昭 訳)『徳川時代の宗教』(岩波書店、1996年)。

³⁶ Zipangu Bridge (Pen Name of Masashi Harada) “Beautiful architectural treasure remaining in Nagahama,” Journey Around Lake Biwa, Issue 4, pp.30-55.

³⁷ 「近江ヒストリア講座「白洲信哉の近江山河抄」其の三「百済寺・石塔寺編」」彦根商工会議所 Website (<https://www.hikone-cci.or.jp/seminars/1224/>、2026年1月2日最終閲覧)。

³⁸ 「琵琶湖とその水辺景観-祈りと暮らしの水遺産-」文化庁 Website (<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story008/>、2026年1月2日最終閲覧)。

³⁹ 「生誕100年特別展 白洲正子 神と仏、自然への祈り 会期 2010年10月19日～2010年11月21日」滋賀県立近代美術館 Website (<https://www.shigamuseum.jp/exhibitions/2457/>、2026年1月2日最終閲覧)。

⁴⁰ 「「アートマネジメント人材養成講座」開催内容の変更について | 滋賀県立文化産業交流会館」滋賀県立文化産業交流会館 Website (<https://www.s-bunsan.jp/topics/23153.html>、2026年1月2日最終閲覧)。

⁴¹ 「講演会「白洲次郎・正子と暮らした日々」参加者募集(受付終了)」長浜観光協会・一般社団法人びわ湖の素 DMO Website (https://kitabiwako.jp/post_62141、2026年1月2日最終閲覧)。

⁴² 「竜王山」滋賀県商工観光労働部観光振興局観光企画室 Website (<https://www.pref.shiga.lg.jp/file/attachment/1000125.pdf>、2026年1月2日最終閲覧)。

⁴³ 「新近江名所圖會 第267回 木地師の聖地―東近江市蛭谷・君ヶ畑」公益財団法人滋賀県文化財保護協会 Website (<https://www.shiga-bunkazai.jp/shigabun-shinbun/category/best-place-in-shiga/>、2026年1月2日最終閲覧)。

⁴⁴ 「白洲正子の作品を手引きに“近江の水文化”を探访するツアー『「白洲正子の目線」で日本遺産を巡る』開催」株式会社共同通信ピー・アール・ワイヤー (Kyodo News PR Wire) Website (<https://kyodonewsprwire.jp/release/201602047636>、2026年1月2日最終閲覧)。

⁴⁵ 「滋賀県博物館協議会35周年記念：旅と博物館」栗東歴史民俗博物館 Website (<https://www.city.ritto.lg.jp/hakubutsukan/kenpakukyoku35.pdf>、2026年1月2日最終閲覧)。

⁴⁶ 「【参加者募集】9月12日(土)白洲正子が愛した雪野寺跡童子像を訪ねて～苗村神社(国宝)と龍王寺の史跡と伝承探訪～」竜王町観光協会 Website (<https://ryuoh.org/event/20200912/>、2026年1月2日最終閲覧)。

⁴⁷ 「我が国の森林の現況」林野庁 Website (https://www.rinya.maff.go.jp/j/sin_riyou/tayousei/top.html、2025年8月27日最終閲覧)。

⁴⁸ 安田喜憲『日本文化の風土』(朝倉書店、2011年)、8頁。

⁴⁹ 「滋賀の環境2022(令和4年版環境白書)本編」滋賀県 Website (<https://www.pref.shiga.lg.jp/ippan/kankyoshizen/kankyoku/329202.html>、2025年8月27日最終閲覧)。

⁵⁰ Anesaki, Masaharu, History of Japanese Religion, London: K. Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd., 1923, p.11.

⁵¹ 牧直視・白洲正子『近江: 木と石と水の国』(駸々堂出版、1973)。

多様な主体が協働する地域 —長崎県対馬市青海地区における活動からの学び—

北村 健二¹⁾

¹⁾追手門学院大学国際学部（〒567-8620 大阪府茨木市太田東芝町1番1号）

1. はじめに

協働は、複数の主体間の対等な関係と相互支援によって成り立つ¹⁾。エドガー・シャインによると、支援が有効に機能するためにはいくつかの原則がある²⁾。そのなかで、地域づくりにおける協働の文脈に特に当てはまると筆者が考えるのは、支援を与える側と受ける側の両方が用意できていること（原則1）と、支援関係が公平とみなされる状態であること（原則2）である。ただし、シャインが主に想定するのは、支援を与える側と受ける側という二者間の固定的かつ一方向の場合の関係性である。具体的には、専門家による情報・サービスの提供や、医師による診断・処方などが含まれる。一方、地域づくりには多くの主体が関わり、支援を与える側と受ける側の区別は必ずしも単純でない。時と場合によって立場が入れ替わるなど、流動的かつ多方向の関係性にもとづく協働であることが珍しくない。

このように複雑な協働においては、シャインが「プロセス・コンサルテーション」と表現する支援が重要であると考えられる。専門家や医師とは異なり、主体間の公平な関係性を築いたうえで、必要な支援を特定する役割のことである²⁾。しかし、このような側面支援に関する知見が十分に蓄積されているとは言えない。地域づくりの協働において、十分に準備され、公平な関係性にもとづく相互支援はどのように成立するのだろうか。そして、相互支援の成立を側面支援するプロセス・コンサルテーションはどのようなものか。以上の問いを念頭に置き、本稿では、地域づくり協働における相互支援の考えかたを示し、現場実践の例として長崎県対馬市におけるツシマヤマメコ生息地保全の取り組みを検討する。

2. 地域づくりの協働における相互支援

支援に関するシャインの論をここでも参照してみたい。人は誰でも場面に応じた役割を演じており、その役割のなかで様々なモノ/コトを他者に提供している。提供するモノ/コトは、金銭や知見などに限らず、敬意、賛辞、注目など様々な種類を含む。そして、提供したモノ/コトへの見返りを求めるのも人の習性である。見返りも同様に多様で、お礼の言葉なども含まれる。シャインは、こうして相互に提供（pay）されるモノ/コトを社会的通貨と表現する²⁾。この論から私が想起するのは、足を運んで訪問すること（paying a visit）もその一例になりうるということである。「はるばる来てくれてありがとう」という謝辞が、特に地方における地域づくりの協働の場面でよく聞かれるのは、提供とその見返りの交換が発生していることと表れと解釈できる。

協働が相互支援であるならば、give & takeの視点が欠かせない。関わる主体それぞれにとって、提供するモノ/コト（give）と、その見返りとして得られるモノ/コト（take）との間で一定の均衡が保たれることが、中長期的な協働につながると考えられる。提供ばかり多く便益が不釣り合いに少なければ、その主体が協働に参加し続けることは難しい。逆に、何も提供しない主体が便益だけを多く得れば、それは「ただ乗り」であり、協働の公平性を損なうことになる。

ここで問題なのは、各主体にとってのgive & takeが暗黙の感覚に留まることが多いことである。営利事業の場合には費用と利益が計算され、その差が収益または損益として数値化される。しかし、地域づくりでは数値化できない感覚の要素が多く含まれることから、give & takeの可視化が難しい。協働に関わる主体それぞれのgive & takeが、完全な形でなくても可視化されることで、協働の構造についての理解が進み、中長期的な協働を設計する際に役立つと筆者は考えている³⁾。

もう一つ考えておくべきことに協働の多層性がある。地域づくりの協働では、多様な主体がそれぞれ異なる持ち場で参加する。多くの場合、地域内のリーダー役の人や組織が中核的な主体となり、その主体と密接に連携するいくつかの主体が存在する。さらに、地域外の関係人口など、外側から緩やかに連携する主体も加わることで、多層的な協働構造が築かれる（図1）⁴⁾。

特に地方では人員や予算などのリソースに制約があり、単一の主体が実施できる活動の規模にも限りがある。多様な主体が寄り集まって協働する構造が重要となるのはそのためである。各主体が提供するリソース（give）と得る便益（take）の分析や、多層性を持つ協働構造の可視化をおこなうことで、中長期的に機能し続ける地域づくりの協働のありかたについて一定の示唆を得ることが本研究の目的である。次節以降で、具体的な現場実践の事例を紹介する。

3. ツシマヤマネコを守る会の活動

本研究が対象とする事例は、NPO 法人ツシマヤマネコを守る会（以下「守る会」）が長崎県対馬市において実施するツシマヤマネコの生息地保全の活動である。離島である対馬には固有の生態系があり、それを象徴するツシマヤマネコは絶滅の危機にある。守る会は 1993 年に対馬市民が中心となって設立され、2007 年に NPO 法人となった。ツシマヤマネコの生息数維持のための保護を主たる活動としている。具体的には、耕作されなくなった民有地を借りるか、あるいは買い取り、ヤマネコの生息環境の再生を図っている。それらの土地を農地として再生し、ソバやサツマイモなど対馬の伝統的な作物を栽培し、それらを餌とするネズミなどの小動物が増え、それらの小動物を捕食することでツシマヤマネコが生息可能になる、という構図である。

守る会は、対馬市内の三か所を活動現場としており、その最新の場所が峰町の青海（おうみ）地区である。海岸の斜面に段々畑があり、その固有の里山景観は長崎県の「だんだん畑 10 選」の一つに認定されている。しかし、高齢化などにより耕作放棄地が近年増加している。守る会は、段々畑の再生によりツシマヤマネコが生息できる環境の復元の可能性があると考え、青海地区住民とともに活動をおこなうこととなった⁵⁾。

住民のなかには、青海地区出身で、Uターン後に就農した農業者（D氏）も含まれている。D氏が他の住民から借りた区画が農地としてすぐに再び使えるように、守る会の予算および差配により 2025 年に整備をおこなった。この土地に多い岩石の除去と、シカやイノシシの侵入を防ぐ柵の設置が整備作業に含まれる。D氏は 2026 年からここでサツマイモ栽培を計画しているが、2025 年は利用せず、守る会が利用することとなった。具体的にはソバの栽培をおこない、収穫せず小動物の餌場となるようにした。それらの小動物をツシマヤマネコが捕食できる環境を作ることが目的である。サツマイモやソバは従来から対馬市内で流通する作物であるが、今後は付加価値を高めたうえで島外など新たな販路も開拓していくことも活動目的に含まれる。さらに、青海地区住民との信頼関係を前提に、新たな移住者による空き家活用の促進も守る会の活動の視野に入っている。このように、地域経済・社会の面での側面支援も守る会の青海地区での活動に含まれている。

4. 事例調査の背景と方法

本研究は、2025 年度の対馬グローバル大学において実施されることとなった。対馬グローバル大学とは、行政（対馬市）が提供する一般向け講座である。「環境」、「しまづくり」、「ビジネス」の三つのオンラインゼミがあり、筆者は 2024 年度からしまづくりゼミを受講している。年度初めの受講生募集期間中に三つのゼミをすべて体験受講する機会が提供されており、2025 年 5 月の環境ゼミにおいて受講生 C 氏による前年度修了研究の発表があった。その内容が、本稿で紹介する青海地区での取り組みであった。その後、筆者が C 氏に本研究の構想を伝え、協力への快諾を得て実施することとなった。C氏は環境ゼミを、筆者はしまづくりゼミをそれぞれ 2 年連続で受講しつつ、メールでのやり取りなどを通じて本事例調査を進めることとなった。C氏は青海地区で

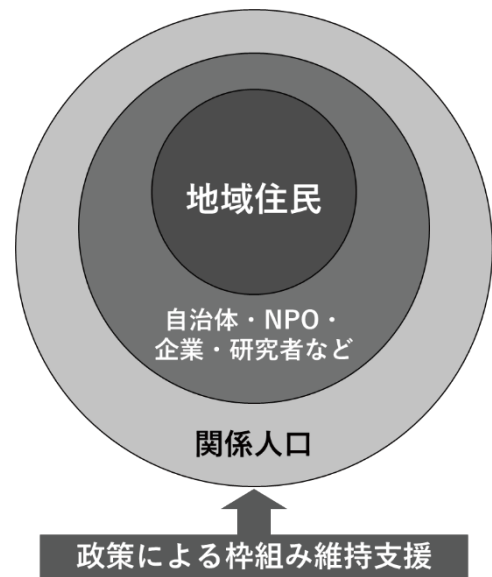


図1 地域協働への関わりの階層
（出所: Kitamura & Clapp (2013) を改変）

の活動の進展を当事者としてまとめ、筆者は外部者としてその活動における協働の構造を分析する、という関係性である。

2025年9月に筆者が対馬を訪問した際には、C氏の事前調整により、対馬在住の守る会役員B氏から現地視察案内と活動全般の説明を受けることができた。翌10月には、2回にわたりC氏と筆者の間でオンライン対話を実施した。青海地区における協働の構造を整理する手段として、関係主体分析のマトリクスを活用した。これは、協働に関わる各主体の「役割」、「提供するリソース」、「得られる便益」という三つの項目について記述する様式である³⁾。オンラインの画面でマトリクスの様式を画面共有しながら対話し、C氏の語りを筆者がマトリクスに順次記入した。そして、関係主体分析の完了後に、その結果をもとに協働構造の図示を試みた。

5. 関係主体分析

C氏と筆者の対話をもとに整理された関係主体分析の要約を表1に示す。守る会という組織と、その組織のなかの個人との間には重複があるが、重要な主体に関してはあえて組織と個人それぞれを分析するようにしている。例えばA、B、Cの三氏はいずれも守る会の役員であり、組織としての守る会に含まれるが、それぞれの持ち場があるので、組織と個人の両方で示されている。

表1 青海地区での協働の関係主体分析(要約)

| 関係主体 | 役割（関わりかた） | 提供するリソース | 得られる便益 |
|-------------|---|---|--|
| ツシマヤマネコを守る会 | <ul style="list-style-type: none"> ・実施主体 ・広報（青海の魅力発信により、商品開発・販路開拓につなげることを企図） | <ul style="list-style-type: none"> ・市内他地区の林業者集団への整備作業委託資金（地域内経済循環の仕組み） ・情報・ノウハウの提供（新たな協働パートナーと青海地区の仲介を含む） | <ul style="list-style-type: none"> ・ツシマヤマネコ生息地の確保 ・（単独では限界があるなかで）協働パートナーとなる事業者の資金による活動拡大 |
| A氏（故人） | <ul style="list-style-type: none"> ・守る会の創始者、初代会長、（逝去後は）名誉会長 ・A氏の名前や思いのおかげで会の活動が可能になっている（逝去後も名前が必ず出る） | <ul style="list-style-type: none"> ・多大な時間、労力、熱意 ・クラウドファンディング返礼品などに活用可能な多数の資産（写真、データなど） ・他者（研究者含む）への影響 | <ul style="list-style-type: none"> ・深い信念にもとづく生きざまの体現 ・後の世代への継承 ・（守る会の活動を通じて）友人・幼馴染み、現在の守る会役員など協力者の広がり |
| B氏 | <ul style="list-style-type: none"> ・守る会の役員（副会長兼事務局長） ・唯一の対馬在住役員 ・資金調達および活動実施における中心的な役割 | <ul style="list-style-type: none"> ・多大な時間、労力、熱意 ・社会的経験、知見 ・円滑な人間関係構築のための知恵 | <ul style="list-style-type: none"> ・ツシマヤマネコの生息環境改善 |
| C氏 | <ul style="list-style-type: none"> ・守る会の役員（島外在住） ・交渉のつなぎ役（行政、民間、個人） ・六次産業化などビジネス視点を含む事業計画の発案 | <ul style="list-style-type: none"> ・時間（現地訪問1回あたり4泊5日程度） ・旅費（現地訪問1回あたり約20万円、2025年は年に8回程度訪問）および現地滞在費 ・労力 ・他地域の野生生物保護・調査から得られた知見 | <ul style="list-style-type: none"> ・ヤマネコを含めた対馬の持続可能な自然環境保全 ・野生生物調査という本職の知見を活用した貢献の実現 |
| 青海地区住民 | <ul style="list-style-type: none"> ・農地所有者（複数が貸主となっている） ・守る会との協議と相互支援 ・青海地区への思い ・信頼関係ができたうえで外部者の受け入れ | <ul style="list-style-type: none"> ・農地（D氏が借用） ・地区全般や農業に関する知恵・助言 | <ul style="list-style-type: none"> ・青海地区の景観の復活 ・人が来ることによるにぎわいの復活 |

| | | | |
|------------------------------|---|--|---|
| D氏 | <ul style="list-style-type: none"> ・青海地区出身者 ・夫妻でUターンして就農 ・農地の借り主 | <ul style="list-style-type: none"> ・青海地区出身であることによる信頼関係 ・自身が借りた農地を2025年に守る会が利用することの許可 | <ul style="list-style-type: none"> ・2026年以降に即耕作可能な状態に整備された農地（獣害対策として設置された柵を含む） ・青海の段々畑再生の実現 |
| 対馬市内他地区の農林業者集団 | <ul style="list-style-type: none"> ・経験豊富な林業者（兼農業者）たち ・対馬での現場作業全般（日程など計画段階から）を請け負うことが可能 ・A氏との信頼関係により守る会の委託先となった経緯あり | <ul style="list-style-type: none"> ・重機による作業などの技術 ・マンパワー ・農業のノウハウ | <ul style="list-style-type: none"> ・一つの収入源（年間通じて一定の作業あり） ・地元内でのお金の循環 |
| クラウドファンディング支援者 | <ul style="list-style-type: none"> ・金銭面での支援 ・ヤマネコを守りたい気持ちを持つ人が多数 ・対馬/青海への想いを持つ人もいる ・SNSでのシェア（協力の拡大） | <ul style="list-style-type: none"> ・寄付金 ・支援の気持ち ・宣伝活動 | <ul style="list-style-type: none"> ・返礼品 ・ヤマネコ生息地の整備 ・対馬の景観の復活 |
| 守る会会員（クラウドファンディング支援者と一部重複あり） | <ul style="list-style-type: none"> ・金銭面での支援 ・ヤマネコを守りたい気持ちを持つ人が多数 ・生息地への想いを持つ人がいる ・SNSでのシェア（協力の拡大） | <ul style="list-style-type: none"> ・会費 ・支援の気持ち ・（一部の会員）イベントのボランティアスタッフとして従事する時間・労力 ・宣伝活動 | <ul style="list-style-type: none"> ・ヤマネコ生息地の整備（いつか野生のヤマネコに会いに行ける場所となる） |

本事例において中核的な推進役を担うのは守る会である。ツシマヤマネコの保護という会の基本的な目的を、青海地区の持続可能性の文脈と合うように結び付けている。ツシマヤマネコがここでは「環境アイコン」⁶⁾となり、ヤマネコが生息できる地域の環境・社会・経済の状態を目指して多様な主体の協働が可能となっている。地域内外の主体同士をつなぐ役割を守る会が果たし、耕作放棄地の再生と、そこでのソバやサツマイモなどの生産、商品化、販路開拓など事業化のノウハウ蓄積により、地域内外の担い手が新たに参入する際の支援も目指している。また、守る会が青海地区の住民たちと信頼関係を構築することによって、守る会を介して地域外から新たな主体が青海地区に入りやすくなる、という目利きの役割は非常に重要である。守る会の仲介があることで、青海地区住民も外からの参入者も比較的短期間に準備が整い、協働への参加に着手することができる。これは、プロセス・コンサルテーションに相当する側面支援を守る会が担っていると解釈することができる。そして、多様な主体の協働が稼働することにより、ツシマヤマネコ生息地の保全という、守る会の当初の目的の達成にもつながるといふ循環が成立する。

守る会という組織内に属する個人もそれぞれの持ち場で役割を果たしている。本研究ではその代表として三名に注目した。会を創設したA氏（故人）の信念にもとづくツシマヤマネコ保護が、守る会のすべての活動の軸にあることは疑う余地がない。逝去後も、A氏のもとに集まっていた同志たちにより守る会は存続し、活動が継承されているという事実が、A氏の存在の大きさを示している。

B氏は2017年に対馬に移住し、現在では唯一の対馬在住役員として守る会の黒柱となっている。守る会にクラウドファンディングという新たな手段を導入したり、島内他地区の協働パートナーたちとの信頼関係を維持・強化することもB氏の貢献の例である。特にA氏逝去後に守る会の活動が続いているのは、B氏の存在なしに語れない。

C氏は島外在住の役員として、特に青海地区での活動における推進役となっている。段々畑での小規模農業の六次産業化構想や空き家活用によるにぎわい復活など、地域の社会・経済面の

持続可能性に守る会の活動の射程が広がったことや、野生生物保護に関する国内他地域からの知見が活用されていることなどにC氏の貢献がある。A氏、B氏、C氏とも、多大なる時間や労力を提供し、ツシマヤマネコ生息地保全という成果が精神的な便益となっている。

守る会にとって、この事例において最も重要な協働パートナーは、場の主である青海地区の住民たちである。過疎高齢化により、住民たち自身の活動には限界があり、信頼関係にもとづく地域外の主体との協働が地域の持続可能性にとって欠かせない。耕作されなくなった農地を新規就農者に貸したり、地域固有の知識を提供することなどによって、景観再生や空き家活用、そして最終的には地域のにぎわい復活への進展という便益が期待されている。

新たに青海地区で農業に従事する生産者は、ソバやサツマイモなどこの地域の伝統的作物を栽培・販売するとともに、付加価値を高めて六次産業化を図る。それにより、収益性のある生業を確立するとともに、地域全体への貢献が可能となる。このような事業化のノウハウを守る会が蓄積し、別の新たな就農者に提供できれば、点と点を線につなぎ、将来的に面として展開する可能性も生まれる。

なお、耕作放棄地を農地に戻すには、前述のとおり岩石の除去や柵の設置などの現場作業が必要である。守る会の以前からの協働パートナーである対馬市内他地区の農林業者たちが、守る会の委託を受けて青海地区での農地再整備にも従事していることも特筆に値する。対馬という島のなかで相互支援にもとづく経済が循環することの意義は、C氏との対話のなかで強調されたことの一つである。

守る会には現在約400名の会員がおり、その過半数は対馬市外に住んでいる。クラウドファンディングを通じた支援者も250名以上おり（会員と一部重複あり）、これらの人たちが全国各地から会費や寄付を通じて支援している。一部の会員や支援者は、守る会が開催するイベントの運営にボランティアで参加する。また、ソーシャルメディアでの発信などを通じて協働の輪の拡大に貢献している。こうした支援者は、例えばクラウドファンディングの返礼品のような直接的な見返りのみならず、ツシマヤマネコ保護の拡充（に貢献している）という精神的な満足便益として得ることでgive & takeの均衡を保っていると考えられる。

ここで、筆者自身の関わりかたについて補足しておきたい。本研究を実施することが筆者の主たる関わりであり、そのために時間や労力などを費やす代わりに、自らの知識と経験が増え、本稿を含む研究成果となり、対馬グローバル大学の修了にもつながるという便益を得ている。また、本研究の過程で、前述のクラウドファンディングの寄付もおこなった。それにより、協働の全体像のなかの（かなり外側ではあるが）一員という立場での参与観察による自己分析も可能となった。寄付金や、手続きに要した時間などを提供することにより、返礼品（筆者の場合はフォトブック）、クラウドファンディング関連の配信を通じた活動の最新情報入手という便益を得ている。本研究を実施できたことについての守る会への謝意のささやかな表現という自己満足に近い感覚もある。以上のように、自分という主体にとってgive & takeの均衡が満足できる形で成立していることを自ら体験的に理解することができた。

6. 多層的な協働

青海地区における協働には多様な主体が参加し、それぞれが異なる層を形成している。関係主体分析をもとに協働構造の要点を示したのが図2である。協働の推進とプロセス・コンサルテーションを担う守る会と、活動現場のある青海地区の住民たちが二つの大きな核となり、そのなかの個人がそれぞれの役割を果たしている。耕作放棄された農地の再整備などを請け負う農林業者集団や、青海地区で新たにソバやサツマイモを栽培する農業者が密接に関わる。守る会の会員やクラウドファンディング支援者は、現場での活動には必ずしも深く関与しないが、資金提供や広報などを通じて持ち場で役割を果たしている。

このように多様な主体が相互支援する形の協働は、どの主体にとっても単独では築けない規模のものとなる。点と点がつながり線となり、線が結びついて面として広がる。移動範囲の広い種の生息域確保を含む生態系保全には面的な展開は欠かせず、それは地域の社会・経済の持続可能性にも当てはまる。地理的な広がり、主体の多様性の広がりが、ここでは比例していると解釈できる。

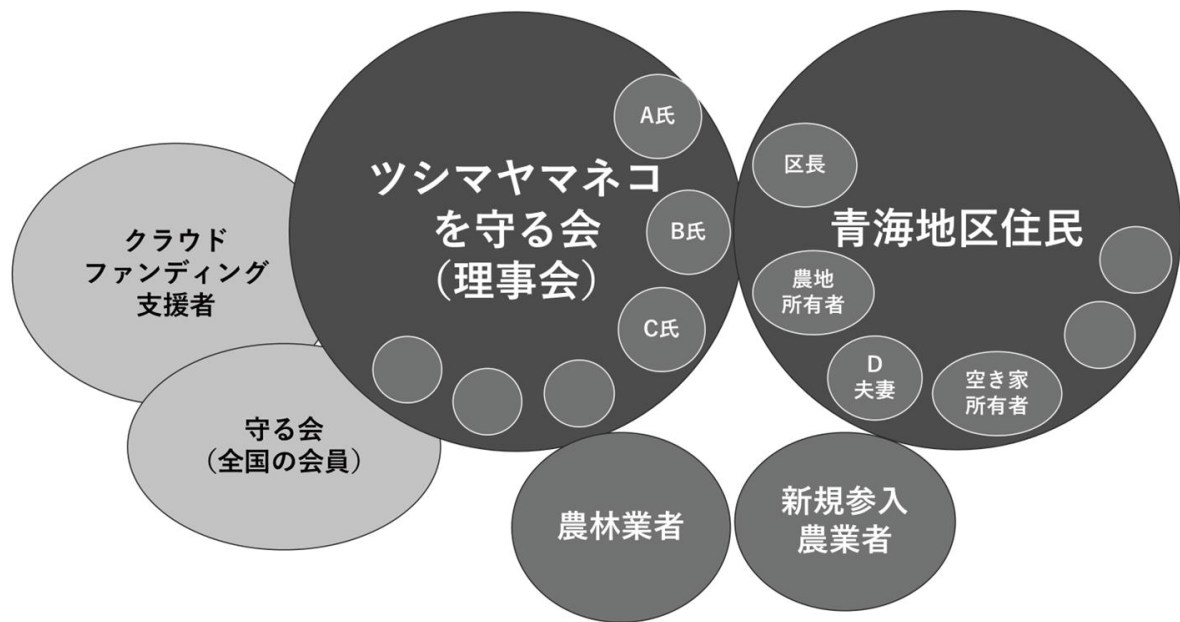


図2 青海地区における協働構造の模式図
(出所:筆者作成)

なお、図2の描写は、守る会と青海地区住民を中核的な主体と捉え、そこからの広がりを出すもので、位置関係などは筆者の解釈である。B氏およびC氏に確認を依頼したものの、もし認識の誤りや漏れがあるとすれば、それはすべて筆者の責任である。また、分析結果とその解釈について、研究の各段階で対馬グローバル大学しまづくりゼミで筆者が発表するとともに、対馬未来フォーラムという対馬市主催の集会において中間報告としてのポスター展示をおこなった⁷⁾。ゼミでは指導教員はじめ関係者から示唆に富むコメントが各段階で提供され、それらを踏まえて結果の解釈や表現の改善が重ねられたことを申し添えたい。

7. まとめ

本研究では、多様な主体間の相互支援としての地域づくりの協働構造を検討した。対象事例である青海地区での協働には、多くの主体がそれぞれ異なる持ち場で参加しており、各主体にとっての give & take の均衡が一定程度成り立っていると解釈できることが分かった。協働の面的拡大のためのプロセス・コンサルテーションの役割を守る会が担っていることも確認された。地域内外の多様な主体がそれぞれの持ち場で参加できるために、多層的な協働構造を設計し、主体間をつなぐ役割が重要であることが、青海地区の実践例から示された。

謝辞

ツシマヤマネコを守る会および対馬グローバル大学の支援により本研究の実施が可能となりました。特に、森田悦朗氏および羽根佳雄氏から多大なる知見と協力をいただきました。また、出水薫氏、佐藤雄二氏、崔春海氏およびしまづくりゼミ関係者から示唆に富む多くの助言をいただきました。なお、本研究の実施にあたり JSPS 科研費 (JP21K12348) の支援を受けました。皆様のご支援・ご協力に感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 豊田光世 (2017) . 地域協働による保全活動の推進に向けた合意形成. 日本生態学会誌, 67(2), 247-255.
- 2) Schein, E. H. (2009). *Helping: How to offer, give, and receive help*. Berret-Koehler. エドガー・H・シャイン (著), 金井真弓 (訳), 金井壽宏 (監訳) (2011). 人を助けるとはどのようなことか—本当の「協力関係」をつくる7つの原則. 第2版. 英治出版.
- 3) 北村健二 (2025a). 協働に関わる各主体は何のために参加し、何を通じて貢献するのか?—対馬もりびと協同組合をめぐる関係者分析と対話の実践—. 地域志向学研究, 9, 37-44.
- 4) Kitamura, K. & Clapp, R. A. (2013). Common property protected areas: Community control in forest conservation. *Land Use Policy*, 34, 204-212.
- 5) 森田悦朗 (2025). ツシマヤマネコと暮らせる里山に～青海のだんだん畑再生作戦!～. 対馬未来フォーラム 2025 ポスター発表, 対馬, 2025年12月21日.
- 6) 佐藤哲 (2008). 環境アイコンとしての野生生物と地域社会—アイコン化のプロセスと生態系サービスに関する科学の役割. *環境社会学研究*, 14, 70-85.
- 7) 北村健二 (2025b). 多様な主体が協働する地域—青海地区におけるツシマヤマネコを守る会の活動からの学び—. 対馬未来フォーラム 2025 ポスター発表, 対馬, 2025年12月21日.

3D 工業用内視鏡による注口土器内部形状の三次元可視化—実践と展望—

三好清超¹⁾・保谷里歩²⁾・橋本真之介³⁾・前嶋宏志⁴⁾・小野澤歩美⁵⁾・河野省悟⁶⁾

^{1~3)}飛騨市教育委員会（岐阜県飛騨市古川町本町 2-22）

^{4~6)}ナルックス株式会社（大阪府三島郡島本町山崎 2-1-7）

1. はじめに

岐阜県飛騨市の飛騨みやがわ考古民俗館では、館のファンで構成される石棒クラブが収蔵展示資料の三次元データをオープンデータとして公開している¹⁾。その多くは、2021 年度から始まった一般参加型の「3D データ化合宿」で、1 点当たり 100 枚程度の画像を撮影し、メタシェイプというソフトで合成して三次元データに仕上げるフォトグラメトリ手法によって作成されたものである。誰もが資料のデータ取得と活用に関わることができる体制で行い続け、2025 年 12 月末時点で公開されたモデル数は 202 点に達した。その結果、高田祐一による「全国の博物館文化財関係機関、歴史系博物館、それに準ずる事業の Sketchfab アカウント一覧」において、公開数は全国 1 位、閲覧数は全国 2 位を記録している²⁾。

こうした蓄積の過程で、口縁部が狭い土器については、形状によって内部情報を取得できない場合があるという問題意識を持っていた。これは、三次元データによる記録取得が始まる以前から存在する。従来の方眼紙と鉛筆等を用いた実測手法においても、実測器具が届かない部分の記録が困難なのである。そのため、飛騨市教育委員会では、土器の内面形状や器壁の厚み等の内部構造を客観的に把握できる新たな方法を模索してきた。（三好）

続いて、産業側の問題意識について述べる。ナルックス株式会社（以下、ナルックスとする）は大阪府に本社を置く光学部品製造を主業務とする企業であり、新たな取り組みとして、狭所・閉所を三次元的に可視化できる 3D 工業用内視鏡の開発を進めてきた。これまでの検証により、限られた空間においてフルカラーの立体形状を取得できるという技術的可能性については一定の確認がなされている。

一方で、これらの検証は主として日用品や自然物、工業製品であり、実際の文化財、特に土器の内部構造を対象とした可用性検証は十分に行われていなかった。土器は形状や表面状態、保存状況が多様であり、工業製品とは異なる取り扱い上の制約や評価観点が存在する。そのため、取得すべき情報の内容や、三次元データが研究・保存・展示の現場でどのように活用され得るのかについては、企業単独では把握しきれないという課題があった。

このような背景から、文化財の三次元データ化に注力している飛騨市教育委員会と連携し、実際の土器を対象とした技術検証を依頼した。技術の有効性を確認するだけでなく、文化財分野における活用可能性や今後の改良点を明らかにすることが、本取り組みにおけるナルックス側の問題意識であった。（前嶋・小野澤・河野）

以上のような両者の問題意識を踏まえて、縄文土器のなかでも口縁部が狭く、薬缶や急須を連想させる袋状の胴部に、上方に向く注ぎ口を持つ注口土器の三次元データ取得を行うこととした。また、成果と課題を広く発信・共有するために誰でも参加可能なイベントとした。（三好）

2. 注口土器の記録について

2-1. 三次元データを取得する注口土器

今回、三次元データを取得する注口土器は、『塩屋金清神社遺跡 A 地点発掘調査報告書』第 23 図No.12 として掲載されているものである³⁾。口径は 5.5 cm、器高 18.1 cm、底径 7.1 cm、最大幅 21.5 cmを測る。突起・口縁部・胴部から底部の一部および注口部が欠損しており、底部はわずかに高台状となる個体である。胴部が膨らみ、頸部がわずかにくびれ、口縁部が直立する器形である。口唇部には 1 条の沈線が巡り、渦巻文を施す 2 単位の円形突起（うち 1 つ残存）から続く橋状把手が胴部にかけて貼付される。口縁部から胴上部にかけては、沈線・半隆起線により弧線文・渦巻文・円文・楕円文・三角文が施される。胴下半部は無文、底面は網代圧痕である。後期前葉の堀之内 2 式期のものと考えられる。多数の破片を接合し、全体を復元している。2025 年 11 月現在、飛騨みやがわ考古民俗館で展示公開している。

2-2. 記録の現況

現状の記録は、方眼紙と鉛筆など実測道具を用いて作成され、発掘調査報告書に掲載している二次元情報を持つ記録と、石棒クラブの Sketchfab アカウントで公開されているフォトグラメトリ手法により記録された三次元データ記録の2種類である。

報告書に掲載されている二次元の図は、一側面のみ情報が公開されている(図1)。右側面の渦巻文を基調とした文様構成や残存範囲の把握などが可能である。それに対し、背面の文様構成、左側面の文様構成、凸線か沈線かという文様表現の手法、内面の形状、器壁の厚みなどは認識することができない。また、白黒二階調の報告書であるため、色情報は無い。

次に、Sketchfab で公開されている三次元データを見ると、全周囲から底面にかけて残存するのが分かる⁴⁾。また、残存範囲全ての文様構成とその表現手法、口縁部においては内面の情報を認識することができる。さらに、テクスチャを貼っているため、色情報を認識することができる。ただし、内面の形状、器壁の厚みは認識することができない。

この2種類の記録を比較すると、報告書掲載の二次元記録より三次元データの方が、残存範囲・その文様・口縁部の情報など、圧倒的に情報量が多いことが分かる(表1)。

2-3. 既存の記録手法での課題

上記の比較で三次元データの方が多くの情報を提示することができると明らかになったものの、これまでのフォトグラメトリによる三次元データの取得手法においては、使用しているデジタルカメラで内部の撮影が困難であり、データ取得ができないという課題があった。また、内部情報を得るためにX線CTスキャンも検討したが、色情報が取得できないという制約があった。

以上より、口縁部が狭小な土器において、内部の三次元データと色情報を同時に取得することが課題として残っていた。そのような時に、3D工業用内視鏡を用いた文化財三次元可視化システムを開発中のナルックスより、意見交換が可能かという打診があり、課題解決につながる可能性が期待された。(三好)

3. 3D工業用内視鏡について

3-1. 3D工業用内視鏡とは

本実践で用いた、ナルックスの開発する3D工業用内視鏡について説明する(図2)。3D工業用内視鏡は図2に示したように先端部に二つの小型カメラを配置した二眼構成を採用しており、各カメラの解像度は16万画素である。工業用途では、配管内部や機械部品内部など、狭所・閉所の状態確認を目的として設計されてきた。特に、暗い環境でも撮影ができるようにLEDによる照明とゲイン調整機能を持つ。

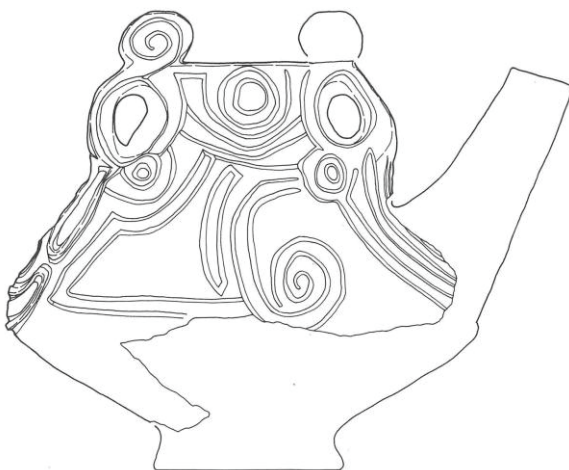


図1 塩屋金清神社遺跡の注口土器

『塩屋金清神社遺跡 A 地点発掘調査報告書』を転載。NTS。



図2 3D工業用内視鏡

先端は16mmと小さく、土器内部に挿入可能。先端にはLEDを搭載し、暗い部分でも撮影可能。

本装置には二つの三次元化機能が備わっている。一つは、ステレオ法を用いたリアルタイム三次元表示機能である。2つのカメラの視差を利用して観察中の視野に対して即時に奥行き情報を付与できる点が特徴であり、従来の二次元の内視鏡ではわかりづらい、今どこを見ているかを立体的にわかりやすくする機能がある。ただし、この方式は観察中の視野に限定されるため、対象物全体の形状を網羅的に取得することはできない。

もう一つは、複数の画像データから三次元点群を再構築するフォトグラメトリ機能である。フォトグラメトリ⁵⁾は計算処理を要するものの、対象物全体をフルカラーの三次元データとして記録できる点に利点がある。今回はこのフォトグラメトリ機能を用いて文化財内部の三次元点群データ取得を試みる。

3-2. 文化財のデータを取得する上での課題

文化財、特に土器調査においては、従来の三次元スキャナや一般のカメラによる外形記録は行われてきたが、従来装置が狭所に入り込めないために内部構造の観察や記録は困難であった。本内視鏡は小型構成により土器内部への挿入が可能であり、内部形状を非破壊で観察・記録できる点に特徴がある。一方で、文化財特有の条件、すなわち非接触性や安全性への配慮、運用方法については、これまで十分に検討されてこなかった。(前嶋・小野澤・河野)

4. 注口土器の記録を 3D 工業用内視鏡で取得

4-1. イベントとして実践の様子を公開

飛騨市教育委員会側とナルックス側の両者の課題をオンラインミーティングで共有した後、飛騨みやがわ考古民俗館の注口土器にて三次元データの取得作業を実践する運びとなり、2025年11月19日に行った。

飛騨みやがわ考古民俗館では、石棒クラブと共に、石棒を数字の「1」と見立てて石棒が4本並ぶ11月11日を「石棒の日」と称している。また、11月は「石棒強化月間」として同館の認知度向上や多くの方との関わりを増やすため様々な企画を毎年実施している。

本実践は、当初は関係者だけで行う予定であったが、飛騨みやがわ考古民俗館のファンを増やそうと、この石棒強化月間での一般参加型の企画とした(図3)。平日昼間の開催であったが1名の参加と1社の新聞取材、市広報の取材があった⁶⁾。公開イベントとしては午前中のみを予定していたが、試行錯誤を重ねる記録作業に一般参加者と



図3 イベントの開催
一般参加者もあり、新聞報道もなされた。

表1 報告書と Sketchfab での土器情報の比較

| | 公開範囲 | 文様表現 | 口縁部 | 色情報 | 内部形状 | 器壁厚み |
|-----------|------|---------|--------|-----|------|------|
| 報告書 | 一側面 | × | × | × | × | × |
| Sketchfab | 全周囲 | 半隆起線と沈線 | 構造の認識可 | 認識可 | × | × |

表2 3D 工業用内視鏡と X線 CT スキャンとのデータ比較

| 取得情報 | 断面情報 | 内部構造 | 内面情報 | 色情報 | 公開・活用 |
|------------|------|------|------|-----|-------|
| 利用技術 | | | | | |
| 3D 工業用内視鏡 | ○ | × | ○ | ○ | ○ |
| X線 CT スキャン | ○ | ○ | × | × | △ |

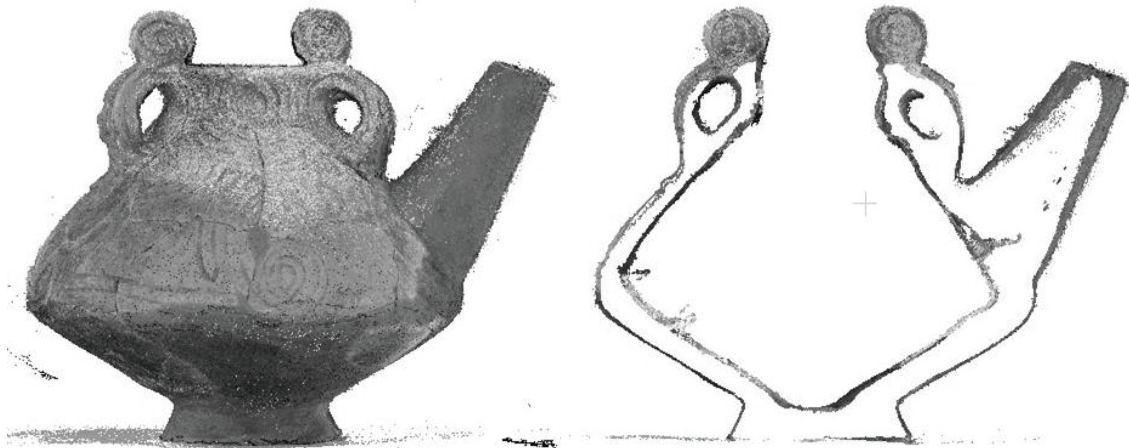


図4 教育委員会による外形記録とナルックスによる内形記録の点群データを結合 (左)外面・(右)断面。

一体感が生まれ、最後まで見届けたいと結果的に作業終わりの16時まで参加いただいた。(橋本)

4-2. 教育委員会側の成果と課題

実践による最大の成果は、一般的なデジタルカメラ撮影では認識できなかった土器の内面形状や壁面の厚みなど、色情報を備える内部の三次元点群を取得できたことである。既往の技術では不可能であった内面形状の可視化に成功した(図4)。なお、撮影が困難な箇所を可視化する手法として、これまでは土器を対象としたレントゲンやX線CT技術を用いた技術利用があった⁷⁾。これらの技術は断面情報の取得や内部構造の研究に



図5 明瞭に観察できる口縁部内面の注記

有効であるものの、内壁のテクスチャ情報は付与されないため、三次元データの作成を目的とした手段には適していない。一方で、今回ステレオ内視鏡により作成したデータは、内面のテクスチャ情報を保持したまま土器内面が立体化されている。また、土器内面に記された数mmの注記まで明瞭に読み取ることができる。一定の精度を保持したデータであると評価でき、CT技術で表現し得なかった内面情報や色情報を表現する画期的な手法である(図5、表2)。

今後の課題は、点群データからメッシュデータへの変換である。メッシュデータは各点を結んだ面で構成されるため、形状が視覚的に捉えやすく、点群データと比較して文化財の公開や活用に適している。近年、有形文化財の三次元計測点群の活用事例が示されている⁸⁾。多くの人の目に触れることが調査・研究の進展に繋がるため、三次元データの公開の容易さは重要な観点であり、現時点で普及している公開・活用のための技術へ対応させるためには、点群データのメッシュ化が不可欠である。(保谷)

4-3. ナルックス側の成果と課題

本実践の成果として、3D工業用内視鏡を用い、これまで可視化が困難であった土器内部の形状を三次元点群データとして記録できた点が挙げられる。従来手法では外形情報の取得が中心であり、内部構造については断片的な観察にとどまっていたが、本実践により、非破壊で内部形状を三次元的に把握できる可能性が示された。

一方で、実践を通じて複数の課題も明らかとなった。第一に、土器の内部構造が複雑であるため、直線的な挿入構造では視野や撮影範囲が限定される場面が多かった。このことから、先端部の向きを調整可能な機構の必要性が認識された。

第二に、取得した内部の三次元データと、既存の外形三次元データを統合する仕組みの重要性が明らかとなった。内部と外部を一体化した三次元モデルが構築できれば、製作技法の推定や保存状態の把握など、文化財研究への応用範囲が広がると考えられる。

本実践を通じ、工業用途として開発された技術を文化財調査へ適用する際には、技術性能だけでなく、現場特有の要件を踏まえた運用設計が重要であることが確認された。(前嶋・小野澤・河野)

5. おわりに

今回まず注目すべきは、連携による技術的検証を可能にした背景である。飛騨市教育委員会は、一般参加型の「3D データ化合宿」を通じて三次元データの取得と公開を継続し、オープンデータとして蓄積してきた。この公開性と継続性が、内部構造の未提示という従来手法の限界を可視化し、新たな記録技術を導入・検証する土壌となっていた。その段階にあつてナルックスによる産業側の課題とマッチングしたのは、両者が互いの専門分野で取り組み得ることを高めていたからこそであろう。異分野連携による技術交流は、前提条件が存在することを示す事例と言える。そのうえで、本実践は、工業用途として開発されてきた 3D 工業用内視鏡技術を文化財調査へ応用する試みであり、飛騨市教育委員会とナルックスの連携のもと、実際の土器を対象とした三次元データ化の技術検証を行った点に意義がある。

本実践の成果として、これまで土器内部の三次元構造を非破壊で詳細に記録することが困難であったものに対し、三次元点群として可視化できる可能性を示したことが挙げられる。非破壊かつフルカラーで土器内部の点群データを示したことで、従来観察に留まっていた製作技法などに直結する情報を可視化することができるため、今後は土器研究の進展や展示・教育等への活用に寄与する可能性が高まった。一方、取得データは点群にとどまっており、メッシュ化・テクスチャ構築まで至っていない。客観的データの提示にはさらに改良の余地が残る。

また、本取り組みは技術的可能性を確認する段階にとどまったことで、文化財調査の現場で継続的に活用するためには、装置構成や運用方法にも改善の余地があると明らかになった。内部での視野確保や操作性、安全性への配慮、取得データの活用方法などは、今後、現場との継続的な対話を通じて可用性を検討していく必要がある。

さらに、本実践を通して特に重要であると認識されたのは、技術の完成度そのものではなく、「誰が」「どのような目的で」「どのように使うのか」という視点である。文化財調査においては、対象資料の価値を損なわないことが大前提であり、技術開発と同時に運用ルールや調査フローを含めた総合的な設計が求められる。今後は、本実践で得られた知見をもとに、装置改良と運用方法の検討を進め、文化財調査に資する実践的技術として発展させていくことが求められる。(三好・前嶋・小野澤・河野)

引用文献・注

- 1) 石棒クラブの Sketchfab アカウント
<https://sketchfab.com/sekibo.club> (2026 年 1 月取得)
- 2) 高田祐一「文化財関係機関、歴史系博物館、それに準ずる事業の Sketchfab アカウント一覧」
<https://researchmap.jp/ytakata/%E8%B3%87%E6%96%99%E5%85%AC%E9%96%8B> (2026 年 1 月取得)
- 3) 宮川村教育委員会 2000『塩屋金清神社遺跡 A 地点発掘調査報告書』
- 4) <https://sketchfab.com/3d-models/2000a2312-3aa7e17d81034b918c7a6aea8a8528c1> (2026 年 1 月取得)
- 5) Marín-Buzón C, Pérez-Romero A, López-Castro JL, Ben Jerbania I, Manzano-Agugliaro F. Photogrammetry as a New Scientific Tool in Archaeology: Worldwide Research Trends. Sustainability. 2021; 13(9):5319. <https://doi.org/10.3390/su13095319>
- 6) 中日新聞記事 <https://www.chunichi.co.jp/article/1171873> (2026 年 1 月取得)、飛騨市ホームページ <https://www.city.hida.gifu.jp/site/koho/2025-11-19.html> (2026 年 1 月取得)
- 7) 阿部千春 2010「著保内野遺跡出土の土偶とその周辺」『考古学ジャーナル』608 東京・ニューサイエンス社 ほか
- 8) 長谷川恭子 2023「3 次元計測ビッグデータを活用した有形文化財の可視化 ——高精細可視化・半透明可視化・VR」ART RESEARCH 23-3 立命館大学

里親会活動への学生ボランティア参画の試み —里親子を知る契機としての気づき・学び

二村玲衣¹⁾

¹⁾岐阜大学地域連携推進本部（岐阜市柳戸 1-1）

1. 本稿における視座

里親子の実情やその制度について、日本では社会的な認知度が低いとされ、里親子の暮らしづらさや委託できる里親の少なさにつながる課題のひとつであると考えられている。具体的に、2017年に日本財団が実施した全国調査では、里親について「名前を聞いたことがある程度」と回答した人が41.2%、「全く知らない」と回答した人が20.6%で、合わせると61.8%の回答者が里親について名前以上のことを知らないという結果であった¹⁾。また、2018年に東京都民を対象として実施された調査においても、里親制度について「言葉は聞いたことがあったが、制度の内容は詳しく知らなかった」68.0%、「知らなかった」8.2%と、具体的な制度までは知られていないことが明らかになった²⁾。いずれも調査時点から年月が経っていることから、今日までに認知度が向上している可能性はあるものの、例えば令和7年3月に公表されたこども家庭庁支援局家庭福祉課「社会的養育の推進に向けて」でも「里親制度の社会的認知度が低く、新規委託可能な登録里親が少ない」と書かれており³⁾、認知度が低いという課題意識は変わっていない。

こうした状況に対して、行政と民間双方による普及啓発活動が進められてきており、日本福祉大学が2023年に実施した調査からは、全国の自治体で活動が進められていることを確認できる⁴⁾。ただ、こうした普及啓発は、里親リクルートや里親支援に関わる者⁵⁾の育成・研修といった文脈で進められることも多く、即時的にその対象とはならない子ども、学生をターゲットとした活動はほぼ見られない。筆者がこれまで調査等で関与したいくつかの地域でも、小中高校生に向けてこうした活動をしている例はなく、大学教育においても里親子の実態や制度に触れる機会は非常に限られている。また、瀬川・上田による報告では、鹿児島県内で高校生や大学生をターゲットとした普及啓発は行われておらず、教育との連携を啓発活動の課題のひとつとしている⁶⁾。

東海・北陸地域の里親が集った2025年度東海・北陸ブロック里親研究大会（以下、2025年度大会とする）では、託児・子ども企画において大学生がボランティアとして参画した。この参画の本旨は、大会における託児・子ども企画の安全な遂行と、参加した子どもに楽しんでもらうことにある。しかし、参画の成果には、学生が子どもたちとの関わりから得た、里親子の実態や制度に関わる気づき・学びが含まれるものと考えられる。このように考えるとき、学生による里親会活動へのボランティア参画は、学生に対する普及啓発活動の要素ももつといえる。本稿は、2025年度大会への参画を事例として、こうした参画の意義を、学生が得た気づき・学びという視点から検討するものである。

2 ボランティア参画の概要と調査・分析の方法

東海・北陸ブロック里親研究大会は、東海・北陸ブロックに含まれる6県1市里親会の持ち回りで毎年開催されている、東海・北陸地域の里親とその関係者等を対象とした学習と交流の場である。2025年度大会はNPO法人名古屋市里親会こどもピース（現在は認定NPO法人。以下、名古屋市里親会とする）が実施主体となり、2025年6月22日（日）に愛知県名古屋市港区にあるポートメッセなごやコンベンションセンターにて開催された。

（1）学生ボランティア参画の経緯

名古屋市里親会では、常態的な学生ボランティアの活用は行われていないものの、近隣の大学等関係者のつながりから、学生がボランティアとして不定期に参画している。その際の学生ボランティアの役割は、里親制度説明会に学習を兼ねて参加してもらい受付等簡単な業務を行う、里親子の交流イベントで子どもの遊び相手をする、といったものであった。里親会の日常的な学習会、イベント等で託児を設ける場合には、特定の任意団体に依頼している。

ブロック里親研究大会には子どもを養育している里親が多く参加することから、託児を設けることが通例である。その上、大会の参加対象はブロック内（東海・北陸地域）全域の里親等であ

るため、普段の里親会活動に比して多くの託児希望が見込まれる。加えて、2025 年度大会では、小学生以上の子どもを対象とした「子ども企画」として、会場に隣接するリニア・鉄道館への外出を計画したことから、なおさら多くの人員が必要と判断され、学生ボランティアの起用が担当内で提案された。筆者は名古屋市里親会に関わりがあったことから、所属大学での学生ボランティア募集と当日の引率を引き受け、本ボランティア活動に関与することとなった。

(2) ボランティア活動の概要

2025 年度大会では、未就学の子どもを対象とした「託児企画」ならびに小学生以上の子どもを対象とした「子ども企画」において、学生ボランティアが起用された。本稿では、筆者の所属する岐阜大学生が参画した子ども企画のみを調査対象とする。

託児・子ども企画は、担当者である里親 A 氏（託児企画主担当）・B 氏（子ども企画主担当）を中心に考案され、名古屋市里親会内の里親から構成される大会実行委員会での検討を経て企画された。

子ども企画の内容は表 2-1 のとおりである。日常的な里親会活動での託児は室内遊びに終始するが、今回は多くの子どもが集まると予想されたこと、また終日のイベントであったことから、室内遊びや室内で楽しめるショー、リニア・鉄道館見学が組み込まれた。上述した通りこうした内容は担当の里親を中心に起案されており、子どもにも楽しく過ごしてもらいたいという里親の思いのもと組み立てられている。子ども企画は同表のとおりに進められ、学生ボランティアは当日、9 時から 16 時半まで活動を行った。

当日は、小学生以上の子どもが 30 名参加した。それに対して子ども企画のスタッフは、企画担当の里親 B 氏 1 名、里親支援センター「ほだかの里」職員 6 名、里親支援専門相談員 4 名、里親会関係者（非里親）1 名、学生 21 名（岐阜大生 11 名、名古屋市立大生 10 名）の合計 33 名であった。なお、里親支援センター職員ならびに里親専門相談員はそれぞれの機関との協議の上、業務の一環として協力している。

スタッフの体制は図 2-2 のように階段状に設計された。担当里親 B 氏と「ほだかの里」C 氏が全体統括を行い、他のスタッフは子どもたちとともに 8 グループに分けられた。さらに、グループ内では里親支援センター職員ならびに里親支援専門相談員がリーダー役を担い、学生ボランティアは各リーダーの指示のもと動く形をとった。グループは子ども 3～4 名、リーダー 1 名、ボランティア 3～4 名で構成された。各学生ボランティアは基本的に子ども 1～2 名を担当し、一緒に遊んだり、話したりしながら安全を見守る役割を担い、特にリニア・鉄道館見学では常に離れず

表 2-1 子ども企画のタイムスケジュール

| 時間 | 活動内容 |
|-------------|--------------|
| 9:00～9:15 | ボランティア集合・説明 |
| 9:15 | 託児受付開始 |
| 9:15～10:30 | 室内遊び |
| 10:30～11:30 | サイエンスマジックショー |
| 11:30～12:40 | 室内遊び |
| 12:40～13:20 | 昼食休憩 |
| 13:30～15:00 | リニア・鉄道館見学 |
| 15:00～15:30 | 室内遊び |
| 15:30 | 保護者お迎え |
| 16:30頃 | ボランティア解散 |

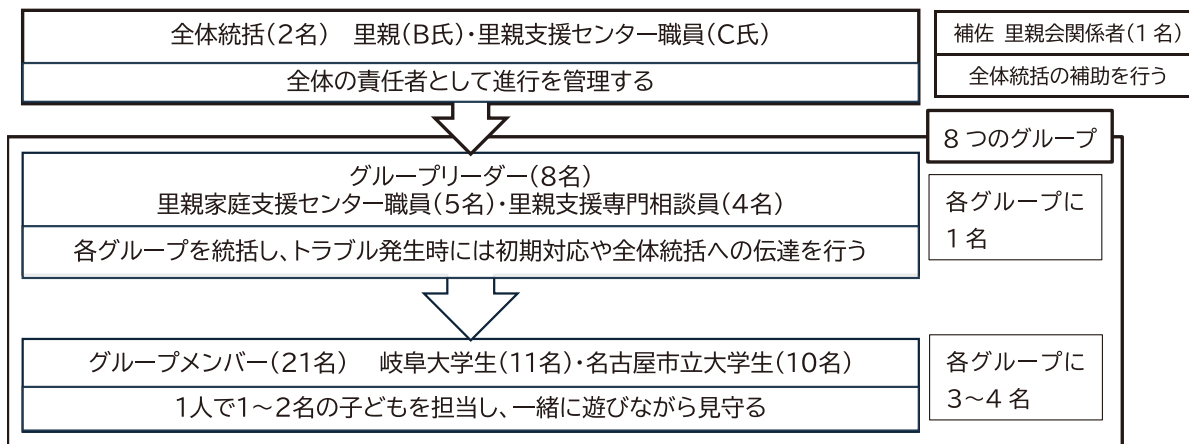


図 2-2 子ども企画の体制

行動することとした。

なお、今回の学生ボランティアに対する報酬は、往復の交通費相当分として一律 2000 円と、昼食としてお弁当が支給された。参加した岐阜大学生の多くは岐阜大学周辺に居住していたため、交通費を一部自己負担して参加したこととなる⁷⁾。

(3) 調査方法

本ボランティア活動に参画した岐阜大学生 11 名のうち、了承を得られた 8 名に対して半構造化インタビューを実施した。インタビューでは、事実確認として参加動機や当日の活動内容について尋ねたのち、本稿の問に関わる内容として主に①担当した子どもとのコミュニケーションの様子、②当日困ったことの有無とその具体的なエピソード、③活動を通して気づいたことや学んだこと、④今後も里親会のボランティアに参加してみたいか、という 4 項目を軸に質問した。

各調査協力者の属性、インタビューの日時と所要時間は表 2-3 の通りである。なお、学生はいずれも社会的養護や里親養育、あるいは児童福祉や保育を専門的に学んでいる者ではなく、

里親制度への理解は個人差のある状態で参画している。参加動機についても一様ではなく、子どもに関わりたい、里親制度に興味がある、ボランティアというものに参加してみたい、大学発行の称号につながる活動だから⁸⁾等、学生により異なっている。

表 2-3 調査協力者の属性とインタビュー日時・所要時間

| 調査協力者 | 属性 | インタビュー日時 | 所要時間 |
|-------|----------------|--------------------------------|-----------|
| 学生 a | 地域科学部 3 年 | 2025 年 6 月 24 日 9:07-10:19 | 1 時間 12 分 |
| 学生 b | 地域科学部 3 年 | 2025 年 7 月 10 日 10:36-11:43 | 1 時間 7 分 |
| 学生 c | 教育学部 4 年 | 2025 年 6 月 24 日 11:34-12:22 | 48 分 |
| 学生 d | 教育学部 4 年 | 2025 年 6 月 24 日 16:45-18:07 | 1 時間 21 分 |
| 学生 e | 工学部 3 年 | 2025 年 7 月 1 日 16:44-17:45 | 1 時間 1 分 |
| 学生 f | 工学部 3 年 | 2025 年 6 月 25 日 9:08-9:55 | 47 分 |
| 学生 g | 社会システム経営学環 4 年 | 2025 年 6 月 25 日 10:50-12:00 | 1 時間 10 分 |
| 学生 h | 応用生物科学部 3 年 | 2025 年 7 月 1 日 15:06-16:26 | 1 時間 20 分 |

(4) 倫理的配慮

本調査は、次に示す倫理的配慮のもと実施した。まず、事前に調査協力候補者に対し、①調査への協力は任意であること、②協力しないことによる不利益は生じないこと、③調査の目的と内容、④公表の方法、⑤個人情報取り扱い・匿名化について書面を用いて口頭での説明を行った。そして、これらを了承した調査協力者からのみ、協力同意書による承諾を得た。これらの説明および同意の内容は、紙媒体にて厳重に保管している。

(5) 分析方法

分析は、佐藤の質的データ分析法を参考とした⁹⁾。調査協力者の語りの内容が多岐にわたっていたことから、本稿で着目している「学生が得た気づき・学び」に焦点化した整理を試みるため、下記の手順で実施した。

まず、インタビューを録音したデータの全てについて逐語録を作成し、発言番号を付した。その後、逐語録を読み込み、活動を通して得た気づき・学びについて語っている発言のみを抽出した。具体的には、2(2)で述べたインタビュー内容の③に対する応答のほか、これらの語りに関わる①、②の応答も抽出した。抽出された 82 の発言についてコードを生成し、それぞれの意味を解釈しながらカテゴリー化を行った。なお、コードとカテゴリーの生成ならびに検討・解釈を行うにあたっては、逐語録と照らし合わせ、語りの文脈を確認しながら進めた。

2(2)中の④に対する応答等、分析手順において用いなかった発言は、気づき・学びについて直接的に語っている発言ではないものの、気づき・学びを経ての展開に関わる発言が含まれるため、考察に活用することとした。

3 分析の結果

上述の通り分析した結果、82の発言から14のコードと3つのカテゴリーが生成され、ボランティアを通じて得られた気づき・学びを整理することができた(表3-1)。以下、カテゴリーごとに詳述する。なお、文中ではカテゴリーを【】、コードを<>で示し、考察において発言の原文を引用する際は「」で示す。発言を引用する際は、発言の文脈を歪曲しない範囲で、同一発言番号内の一部の語りを抜粋することがある。

表 3-1 学生が里親会活動のボランティア参画を通じて得た気づき・学び

| カテゴリー | コード | 発言者 |
|--------------|------------------------------|-------------|
| 子どもとの接し方 | 子どもそのものへの理解 | b |
| | 子どもを注意することの難しさ | b,d,f,h |
| | 反応の少ない子どもと接することの難しさ | b,d,e,g,h |
| | 子どもの気持ちを汲んで対応することの必要性 | b,g |
| | 子どもの年齢に合わせた対応することの必要性 | b,h |
| | 接し続けることで心が開かれていくこと | a,d,e,f,g |
| | 周囲の子どもへの接し方が参考になった | a,b,g,h |
| ボランティアとしての責任 | 子どもの安全を守る立場という自覚 | a,h |
| | 知識をもって接することの必要性 | c,d |
| 里親子の生きている世界 | 子どもたちは「家族になる」経験をしていること | c,h |
| | 子どもにとっての「お父さん」「お母さん」が一人でないこと | e,f |
| | 「当たり前」は人によって異なること | e,g |
| | 〇〇だったのは、事情があつてのことではないか | a,c,d,e,g,h |
| | 里親子の実際の姿 | c,e,f,g |

(1) 子どもとの接し方

学生が得た気づき・学びとして、該当する発言数が40と最も多かったのは、7つのコードから構成された【子どもとの接し方】に類する気づき・学びである。

まず、計5名から語られたのは、子どもへ対応することの難しさであり、<子どもを注意することの難しさ>、<反応の少ない子どもと接することの難しさ>が該当する。具体的には、子ども同士が「喧嘩して、どうしようってなった」(b117)ときに「(筆者注：注意の言葉を)言っていたんですけど、あの、止まらなくて」(b123)という場面や、「激しめの遊びというか、室内だけど、風船を投げて、バレーみたいにして、(中略)初対面のお兄さんが『ダメだよ』っていうのは、ちょっと言えなかった」(f40)という場面、「弟くんが結構無口で、呼びかけに対して、あんまり反応しなかったりとか。(中略)その関係構築のところは戸惑ったし、難しかったです」(d36)といった場面を経験するなかで、難しさを覚えて立ち止まり、子どもへの接し方を考えていた。

次に、3名の学生の語りに<子どもの気持ちを汲んで対応することの必要性>や<子どもの年齢に合わせた対応することの必要性>に気づいた旨の発言があった。学生gが担当した子どもは当初反応が少なかったため、「良い反応が、最初返ってこなかったんで。なんかあんまり喋りかけるのも。知らない大学生に、そんなに色々聞かれても、『知らんわ』って思うよなって思って。自分自身、小さい時、結構人見知りで。(中略)距離の詰め方っていうのをちょっと意識して、途中は、もう何も喋らずにただ一緒に動くって感じで」(g102)と自分の経験をもとに子どもの気持ちを推しはかり対応している。また、学生bは上述の子どもへ注意する場面を経験しつつ、「子ども扱いしすぎるのもどうなんだろうなと思って。昔の自分だったら嫌だろうなと思って。どのくらいのバランスが大事なんだろう。っていう風に思いました」(b155)と子どもの心情への気づきを得ていた。

また、他のボランティアや里親・施設職員等のスタッフといった<周囲の子どもへの接し方が参考になった>という語りも複数見られ、その中には上述の難しさや必要性への気づきを語った学生による発言も含まれた。学生bは、一連の流れの後、「私たち、すごい子どもに気を遣ってオ

ブラートに何十にも巻くみたいなき感じになってたんですけど。スタッフさん結構ズバリなんですよ。そんなスッパリ言っているんだ」(b159)と気づいたことを語っている。

こうして子どもたちと接する中で、学生は思い悩みながらも、＜接し続けることで心が開かれていくこと＞を経験的に学んだ。具体例として、学生gのエピソードを下記に引用する。

『何して遊ぶ？』って聞いても『いい』って感じ。(中略)なので、最初は『何して遊ぶ？』とか、後は、他の子たちが遊んでるおもちゃがあったので、『一緒にやらない？』って言って『いい』って言われたんですけど、『見るだけ一緒に見よ』って言って、一緒に見てもらったっていう感じでした。最初の遊ぶ時間はそんな感じでした」(g48)

「マジックショーがあったんですけど、(中略)途中なんか印象的だったのは、その子がすごい笑ってる時があって。ショーのちょっと面白いギャグっぽいところでウケて。やっぱ小学生らしい面もあるんだなっていうのを感じて。で、マジックショー終わった後に声を掛けて、『結構面白かったねー』って言って。で、その後は、任意で別の部屋でマジック見られるよっていう時間で。(中略)『マジック見に行く？』って聞いたら『行く』って言ったんで。一緒に2人で見に行きました」(g50)

「そのあとリニア鉄道館に行ったんですけど、その子は別のグループだったんで、どうい感じだったか分からないんですけど。一番印象的だったのが、見学から戻ってきて、またその女の子と同じ場所において、自分も合流して。初めてその子から喋りかけてきてくれて。ちょっと何か明るい感じの顔をしながら、ひとこと言われたんですけど、『つまらなかった』って。めっちゃそれが嬉しくて。喋ってくれたと思って」(g88)

ほかに、学生bは普段、平常的に子どもと関わる機会がなく、「子どもってというのが、自分の記憶の中でしかない」(b151)ことから、「子どもってこんなめっちゃくちゃ悪口言うんだって」(b133)、「子どもの実態がわかった」(b169)といい、一般的な＜子どもそのものへの理解＞を深められたとしている。

(2) ボランティアとしての責任

次に、一部の学生は【ボランティアとしての責任】についても活動中に気づきを得ていた。ただし、本カテゴリーに該当する発言数は7、発言した学生数は4と、語りの量は多くない。

＜子どもの安全を守る立場という自覚＞は、「リニアの時に少しだけグループとはぐれてしまった時は、『あ、大丈夫かな？』と思って」(h60)という場面や、「トイレについていけないといけないうのが」(a37)、「個室に入って。目が届かない時が、少しでもあるっていう」(a41)といった一定の場面において生じた、「よそ様のお子さんを預かってみたい責任感をすごく感じました」(a41)という気づきである。

＜知識をもって接することの必要性＞は、本ボランティアへの参加を希望してから当日までに生じた気づきである。「こうした子ども達のことをそんなに学んでないし、自分含めて学びもすごく浅い大学生が関わることによって、さらに何か彼らを傷つけてしまったりだとか、そういうことはないのかなって」(d28)という発言が含意するように、里子という立場にある子どもだからこそ傷つけるのではないかという懸念であった。学生cも同様の思いがあり、「自分で言葉も知らないまま参加することに、ちょっと怖いなと思ったし、何も分かんなくてやるのは申し訳ないなと思った」ために、事前に里親子について調べた上で当日に臨んだという。

(3) 里親子の生きている世界

【里親子の生きている世界】について気づきや学びを得たという語りは、5つのコードに類された37の発言が該当した。

まずは、里子である子どもとの交流を通じ、＜「当たり前」は人によって異なること＞を知ったことである。「一番思ったことが、その自分の当たり前が、他の人の当たり前じゃないんだなってことを実感したので」(e104)、「里子の子たちと触れ合うから、なんか気づくことっていうのがたくさんあって、今回参加しただけでもなんか、自分の考えで、足りない部分とか知らなかった

なっているところがたくさん見つけられた」(g112)という、広範な視野での語りがあった。

より具体的な気づきとして、<子どもたちは「家族になる」経験をしていること>、<子どもにとっての「お父さん」「お母さん」が一人でないこと>を子どもとの対話の中で気づかされたと言語する学生もいた。前者については、「子どもに『ここにいる子達みんな里子だから』って何かのタイミングで言われたんですけど、『あ、そうか!』って。そこで何か気づかされたというか」(h108)、『小3の時に家族になったんだよ』みたいなことを、ある男の子が言ってくれて。あ、そっか、そうなんだよとか思って。(中略) 本当に普通にしゃべってて、ころっと出てきた一言だったので、そういう話をしてたわけでもなくて」(c40)という、子どもから発された言葉による気づきであった。後者については、「今日誕生日っていう子がいたから、『お父さんお母さんになんか買ってもらうの?』とか聞いたら、『好きな時に買ってもらえる』って普通に言ってたから。『あ、そうなんや』って、そんなに引かからなかったんですけど。後になって、あ、これ里親の、家のそういうこともあるんやって思ったら、そんな質問してよかったかなとかは思いました」(f54)、「最後お迎えを待ってた時に、『まだかな』みたいな風に子どもから言われた時に。その、お母さんとか、お父さんっていうワードをどう使っているのかなっていう風に。保護者の方って言うべきか。その辺はなんかどうすればいいかなって」(e74)というように、子どもに話しかけようとする中で戸惑い、反省を含む気づきであった。

また、<〇〇だったのは、事情があつてのことではないか>という気づきを含む語りは、これに該当する発言をした学生数が最も多かった。各学生の発言において、この“事情”が指していた事柄は、主に、里子になるに至った生育歴や環境を指していた。例えば、学生 a は、里子が育つ中で多くの「初めての大人」と触れ合っているからこそ大人に慣れていると感じ、「本当に気を遣える子だった」(a79)と語っている。

「初めての人でも結構喋り慣れてて。何だろ、正直に言うと、普段からそんなに初めての大人といっぱい接してるからこそ、何か慣れてるのかなと思って」(a65)

「何か『特定のボランティアにしか喋りかけない』とか、そういうのもなくて。本当に。その抱っこを要求する子も全員にみんなに行ってて。めっちゃ嬉しいですね。何か偉いなって思いました」(a79)

先入観を自覚しつつ、里子とそうでない子どもの違いに言及した学生もいた。

「里子の子たちっていう先入観が自分にあつて、そう感ただけかもしれないんですけど。うーん、なんか背負ってるような、なんかあるような」(g56)

「何ですかね?私、今まで小学校の学童のアルバイトとか、不登校になった子たちの適応教室ボランティアとかも、ちょっと行ったことがあつて。なんかその子たちとも、また違うような雰囲気だった気がします。(中略) なんか、それよりもちょっと重いような感じがしたような」(g58)

他に、「自分の里親、里子に関する知識も浅かったのかな。特性のある子が結構多くいらっしやるんだなってのが、当日行って、見てわかる方もいらっしやったので」(e34)、「私は、世間一般の割合がわからないので、あれなんですけど、なんか。そこまで、なんか周りに多かったことはなかったなっていうのだけ。それで何を思ったとかじゃないけど」(h80)と、里子には特性をもつ子どもが多いのではないかという発言もみられた。これらの語りは、学生が子どもの言動の理由を子どもの生育歴や特性に結びつけて考えた結果惹起された認識・解釈であり、必ずしも事実に沿うものではなく、“事情”と結びつけたことによって偏った見方が強化された可能性があることに留意する必要がある。

なお、学生 d は、「里子と聞くと、身構えてしまうというか、そのどうしても発達特性とか、あるいは理由によっては、その心についてしまった傷ついているものもあることが想定されるので」(d12)という準備状況で参加し、「やっぱり何かしらの特性あるのかなっていうふうに、失礼ですけど、ちょっと思ってしまうような。お子さんは、やっぱりいた」(d30)、けれども、「『こういう

子いるよね』ではあるんですけど」(d60)と“事情”と“〇〇だった”ことを結びつけることにゆらいでいた。

また、＜里親子の実際の姿＞を学ぶことができたという発言としては、里親子の実際の姿を見て接することによって得られた気づきや学びの語りがあった。「普通の子なんだけど、なんかそういう立場にある子もいるんだなっていうのは、感じましたね」(f50)、「一番思ったこととして、里親や里子って制度のことだけは本当に軽く知ってるだけで、実情とかは、何も知らないんだなってことは、実感しました」(e92)、「授業とかで聞いてはいたけど、(中略)実際に私が知りたかった、どういう子たちなんだらうっていうところも、なんとなく、そういう背景をいろいろ持つてるんだらうっていうことを感じたので、気づきかもしれない」(c52)、「やっぱりその里子の子たちと関わるのが初めてだったので。(中略)どんな感じの子なのかっていうのが、実際に、遊んだり、関わったりする中で、わかった部分があるなと思って」(g72)といった語りからは、単に里親制度に関する机上の学びにはない情報や実感を得られたことが読み取れる。

より具体的に、学生 e は企画終了後に迎えにきた里親と里子の姿を見た経験から、「愛情を持って育てていらっしやる。楽しそうにしてるっていうのが、すごい印象的で。なんか、視野が広がったというか」(g72)と語っており、里親制度運営要綱でも掲げられている「温かい愛情」をもった里親家庭の姿を知るきっかけにもなったと考えられる。

4 考察とまとめ

(1) 学生が得た気づき・学びの概観

分析の結果、学生たちは今回のボランティア活動を通して、【子どもとの接し方】、【ボランティアとしての責任】、【里親子の生きている世界】、という3つのカテゴリーに分類される事柄を気づき・学んでいたことがわかった。【子どもとの接し方】と【ボランティアとしての責任】中の＜子どもの安全を守る立場＞で言及されたような他のボランティア活動等でもみられる気づき・学びがある一方、【ボランティアとしての責任】中の＜知識をもって接することの必要性＞と【里親子の生きている世界】で言及された気づき・学びは、里親子に関わる本活動だからこそ得られたものである。

ただし、これら3つのことを全ての学生が気づき・学んだわけではないことには留意したい。具体的には、【子どもとの接し方】について、実習やアルバイト等で子どもと接する経験を積んでいる学生 c は特段の気づきを得ておらず、【ボランティアとしての責任】については学生の半数 (b, e, f, g) から発言がなく、【里親子の生きている世界】について、特段里親子という意識を持たずに本活動へ参加した学生 b は言及しなかった。

(2) 里親子を知る機会としての有用性

今回学生が得た気づき・学びの中でも、【里親子の生きている世界】の＜〇〇だったのは、事情があつてのことではないか＞については、全コード中最も多くの学生 (8名中6名) から言及されている。これらの気づきは、実際に接している子どものことを考えるなかで生じたものであり、学生が子どもを理解しようとした思考の表れであるといえる。こうした経験を通じた学習は、単に里親子の説明や実態について聞いて学ぶこととは異なり、子どもとの対話、その意味に対する思考という、より深い情報処理が発生している。Lockhart & Craik の処理水準モデルによれば、より深い情報処理は記憶を増強するものであるから、こうした活動を学生が経験することは、里親子という存在や制度を印象づけることに有効であろうと考えられる¹⁰⁾。ただし、3(3)で述べた通り、これに該当する発言から読み取れる学生の気づきや学びは必ずしも事実に沿うものではなく、里子という属性から意味づけた憶測も多分に含むものであった。活動に参加することにより、里親子に対してスティグマを生むことのないよう、活動前後でフォローを行うなど対処する必要がある。

また、里親子に対する理解に関連して、＜子どもたちは「家族になる」経験をしていること＞、＜子どもにとっての「お父さん」「お母さん」が一人でないこと＞、＜「当たり前」は人によって異なること＞という気づき・学びは、各学生の中に形成されていた家庭や親子のイメージを再構成するものであり、ただ里親子という存在や制度を認知することに留まらない気づき・学びをも

たらしめていたといえる。

さらに、今回実際に里親子と接したことをきっかけに、里親子や里親制度についてより深く知っていきたくて語った学生もいた。「里親とか里子とかっていうことは知りたいなと思いました。実際家帰ってからすごく調べて、その日に。知らないなあとと思って」(e98)、「率直に、参加して良かったなって思ってます。貴重な機会だなどは、参加する前からずっと思ってたので。実際行って、結構、自分が知らなかったことに、カルチャーショックみたいなのを受けたんですけど、逆に参加しなかったら絶対知らなかった世界だなって思ったので」(e108)。

本稿では、里親子に関する実情や制度について知る機会の少なさを課題意識として掲げた。ここまでの整理から、学生が里親会のボランティア活動に参画することは、里親子の存在や制度を学生に周知し、印象づける上で有用であり、また里親子に対する理解に欠かせない家族・親子へのイメージの変容ももたらし得るといえる。なお、気づきや学びの性質を踏まえると、学生以外が参画したとしても同様に、里親子を知る機会となったものと思われる。

(3) 子どもと関わることで、関わってみて良かったと思える

最後に、分析に用いなかったインタビューデータを参照しながら、子どもと関わる形で里親会活動に参画する意義を提起して本稿を終える。

インタビューで各学生に、今度も里親会活動のボランティアに参加したいかを尋ねたところ、全員が参加したいと答えた。その理由として各学生からあげられたのは、子どもとの関わりが楽しかった、子どもと仲良くなれたことが嬉しかったという声であった。

「一緒にいるうちに、慣れてきたらすごく喋ってくれるようになって。素を見せてくれるようになった感じが、ほんとに頑張ってた良かったなって」(学生 a)

「子どもたち、最後の方すごい楽しそうに帰ってたんで、それが良かったなあっていう。あと、この子たち(筆者注：けんかしていた子どもたち)、最終的に仲良しになってたので」(学生 b)

「最後、担当してた子が(中略)『また絶対遊びたい』みたいな感じで、『こういう企画もってしてくれたら、もうお父さんとお母さん早く講演会行かせて、自分遊びたいから』みたいに言っていたりして」(学生 c)

「最初のうちは、口があんまり開かず、緊張してるかなっていう子もいたんですけど。終わりの方になってくると、自分はこれが好きでとか。こういうことに興味があってとか、こんなことして叱られたとか、いろんなことを話してくれるようになった時は、あ、良かったな——というか、なんか、少し打ち解けてくれたのかなとか」(学生 d)

「単純に楽しかったなっていうのは思いましたね。普段やっぱり工学部なので、そんな子どもと遊ぶっていうのもない。ちょっと無縁な領域なんで、(中略)いろんな子のお世話をさせていただいたってのは、すごいやりがいがあった」(学生 f)

学生の声そのままに捉えるならば、それぞれが担当する子どもたちと関係性を構築し、楽しさや嬉しさ、やりがいといったポジティブ感情をもって活動を終えられたことが、今後の里親会活動への参画意欲につながっているといえる。

里親制度の啓発という観点で考えると、里親を増やすことや里親子が暮らしやすい社会の醸成につながる周知が求められることから、単に里親子を知るだけではなく、今度も何らかの形で関わりたい・関わっても良いと感じてもらえる形での周知が有効であろう。今回学生が参画した里親会活動は、子どもと楽しく安全に過ごすことを主旨とした、ふれあい中心のものであったために、ポジティブ感情が喚起されやすかったものと考えられる。

(4) 本稿で述べたことと今後の課題

里親子に関する実情や制度については、対面での制度説明や体験発表、あるいは SNS 等での情報発信という形で行われることが多くある。里親のリクルートや支援者養成の観点からは、多くの情報を正確に伝えられるこうした形式での普及啓発活動も欠かせない。他方で、本稿で扱った

ような形式での活動への参画は、制度そのものの直接的な理解にはつながりづらいものの、里親子のリアルな姿を伝え、その実情を考えさせ、里親子という家庭のありようを印象づけるうえで有用であったといえる。また、参画の中で見聞きしたことが、一部学生の家庭や親子そのもののイメージを変容させていた。こうした変容は、家庭という概念のときほぐしであり、里親子のみならず多様な家庭のありようを理解していくことにつながりうる。

本稿では実践報告として、インタビュー調査による質的データから、学生による里親会活動へのボランティア参画の意義を、特に里親子の実情と制度に関する気づき・学びという視点から整理してきた。ただ、この整理は、ブロック大会の子ども企画という、平常的ではないイベントにおいて単発で行った活動を事例としたものであり、幅広い里親会活動におけるひとつのボランティア形態でしかない。里親子に関する広報活動や里親制度の普及啓発活動は、各児童相談所や里親会をはじめとして全国各地で行われており、その内容や方法は多岐にわたることから、今後さまざまな事例における広報・啓発活動の意義の追究がなされていくことを望む。

謝辞

本稿で分析した調査は、科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 課題番号 24K05658 の助成を受けて実施したものである。

注

- 1) 日本財団『「里親」に関する意識・実態調査報告書』2019年3月、https://www.nippon-foundation.or.jp/wp-content/uploads/2020/08/new_inf_20180130_04.pdf (最終閲覧日: 2026年1月6日)。
- 2) 東京都福祉保健局「令和元年度東京都里親制度に関する都民の意識調査」2018年8月、https://www.fukushi.metro.tokyo.lg.jp/documents/d/fukushi/tomin_tyousa (最終閲覧日: 2026年1月6日)。
- 3) こども家庭庁支援局家庭福祉課「社会的養育の推進に向けて」2025年3月、p.55。
- 4) 日本福祉大学「里親支援業務に関する普及啓発から効果的な人材育成に関する調査研究報告書(令和5年度こども家庭庁こども・子育て支援推進調査研究事業)」2024年3月。
- 5) 児童相談所や施設職員等の職員のみならず、「フォスタリング機関(里親養育包括支援機関)及びその業務に関するガイドライン」に示された「応援チーム」に位置づく人々も含む。
- 6) 瀬川朗・上田瑞紀「里親広報啓発活動における一般市民を対象とした工夫—鹿児島県における事例—」『鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編』第73巻、2022年、pp.45-73。
- 7) 2025年6月時点で、岐阜大学から会場のポートメッセなごやまでの交通費は往復で2720円である。
- 8) 岐阜大学で発行している「次世代地域リーダー」という称号の取得につながる活動のひとつに位置づけた。なお、同称号の取得につながる活動の選択肢は多くあり、本活動への参加は取得に必須でない。
- 9) 佐藤郁哉『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社、2008年。
- 10) Lockhart, R. S. & Craik, F. I. M. (1990) Levels of processing. *Canadian Journal of Psychology*, 44(1), 87-112.

里親会活動への学生ボランティア参画の試み—里親からみた意義

二村玲衣¹⁾

¹⁾岐阜大学地域連携推進本部（岐阜市柳戸 1-1）

1 本稿における視座

里親という言葉は、何らかの事情で生みの親のもとを離れて育つ子どもを、自宅に預かり養育する人々を指す。里親会は里親が居住する地域ごとに組織している、いわゆる里親養育の当事者組織である。里親会では、サロン等による互助活動、養育や子どもの心身に関わる学習活動、社会一般に向けた里親制度の普及啓発活動などを実施し、里親子の生活環境の向上に資する役割を果たしてきている。

里親会の活動は、基本的に里親自身が行うボランティアなものである。任意で取り組む活動であるがゆえに、その担い手の不足に悩まされる里親会は少なくない。実際に、2018年に石井・富田・浪川が実施した2018年の調査では「会員数が増えないことや活動メンバーの不足、固定化」が¹⁾、2022年に全国里親会の会報誌「里親だより」に掲載されたアンケート調査においては「役員のなり手がいない」ことが、里親会の抱える課題のひとつであると明らかにされている²⁾。

近年の政策では、里親委託推進に合わせ、里親制度に密接に関わる機関間での協働により里親養育の包括的な支援体制を構築すること、さらには里親子の生活に関わるさまざまな機関を巻き込み、里親養育を理解し支援する地域ネットワークを構築していくこと求められている³⁾。政策上では里親会も里親を支援する機関としてあげられているが、一方、里親会は里親の手で里親子に必要な活動を行っている組織であるから、里親会そのものを支援することも、里親支援につながるものと考えられる。

東海・北陸地域の里親が集った2025年度東海・北陸ブロック里親研究大会（以下、2025年度大会とする）では、託児・子ども企画において大学生がボランティアとして参画した。本稿では、里親へのインタビュー調査をもとに、この参画において学生という外部者が参画する意義を、里親会支援という観点から検討する。

2 ボランティア参画の概要と調査・分析の方法

東海・北陸ブロック里親研究大会は、東海・北陸ブロックに含まれる6県1市里親会の持ち回りで毎年開催されている、東海・北陸地域の里親とその関係者等を対象とした学習と交流の場である。2025年度大会はNPO法人名古屋市里親会こどもピース（現在は認定NPO法人。以下、名古屋市里親会とする）が実施主体となり、2025年6月22日（日）に愛知県名古屋市港区にあるポートメッセなごやコンベンションセンターにて開催された。

（1）ボランティア活動の概要⁴⁾

2025年度大会では、未就学の子どもを対象とした「託児企画」ならびに小学生以上の子どもを対象とした「子ども企画」において学生ボランティアが起用された。

名古屋市里親会では常態的な学生ボランティアの活用は行われていないが、ブロック里親研究大会では養育中の里親が多く参加するため託児設置が通例であること、また2025年度大会では子ども企画において外出を計画したことから、多くの人員が必要と判断され、学生ボランティアを起用する運びとなった。筆者は名古屋市里親会に関わりがあり、里親会でのボランティア経験は学生の学びにつながるものと考えたことから、所属大学での学生ボランティア募集と引率を引き受け、本ボランティア活動に関与することとなった⁵⁾。

当日、託児・子ども企画は、託児・子ども企画担当の里親による統括のもと、里親支援センター「ほだかの里」職員、里親支援専門相談員、普段から里親会活動の託児をお願いしている地域のボランティアと、学生ボランティアの協働によって運営された。学生ボランティアは岐阜大生11名、名古屋市立大生10名の計21名が参画した。各学生ボランティアは基本的に子ども1～2名を担当し、一緒に遊んだり、話したりしながら安全を見守る役割を担い、特に子ども企画のリニア・鉄道館見学では常に離れず行動することとした。

託児・子ども企画の内容は、表 2-1 のとおりである。日常的な里親会活動での託児は室内遊びに終始するが、今回は多くの子どもが集まると予想されたこと、また終日のイベントであったことから、室内遊びや室内で楽しめるショー、リニア・鉄道館見学が組み込まれた。こうした内容は担当の里親を中心に起案されており、子どもにも楽しく過ごしてもらいたいという里親の思いのもと組み立てられている。子ども企画は同表のとおりに進められ、学生ボランティアは 9 時から 16 時半まで活動を行った。

表 2-1 託児・子ども企画のタイムスケジュール

| 時間 | 活動内容 | |
|-------------|--------------|-----------|
| | 託児企画 | 子ども企画 |
| 9:00~9:15 | ボランティア集合・説明 | |
| 9:15 | 託児受付開始 | |
| 9:15~10:30 | 室内遊び | |
| 10:30~11:30 | サイエンスマジックショー | |
| 11:30~12:40 | 室内遊び | |
| 12:40~13:20 | 昼食休憩 | |
| 13:30~15:00 | 室内遊び | リニア・鉄道館見学 |
| 15:00~15:30 | | |
| 15:30 | 保護者お迎え | |
| 16:30頃 | ボランティア解散 | |

なお、今回の学生ボランティアに対する報酬は、往復の交通費相当分として一律 2000 円と、昼食としてお弁当が支給された。

(2) 調査方法

本ボランティア活動で託児・子ども企画を担当した里親 2 名に対して半構造化インタビューを実施した。インタビューでは、事実確認として当日までの準備の流れや当日の活動

表 2-2 調査協力者のインタビュー日時・所要時間と担当

| 調査協力者 | インタビュー日時 | 所要時間 | 当日の担当 |
|-------|---------------------------|--------|----------|
| 里親A | 2025年7月1日 9:32-11:02 | 1時間30分 | 託児企画の統括 |
| 里親B | 2025年7月12日 10:01-12:36 | 2時間35分 | 子ども企画の統括 |

状況について尋ねたのち、里親会活動に学生という外部のボランティアが関わる意義を問うため、主に①学生ボランティアを参画させることで生じた不安や負担、②当日の学生参画の様子をみて感じたこと、③学生ボランティアが参画したことで良かった点・悪かった点、④今後の里親会活動における学生ボランティア活用をどう考えるか、という 4 項目を軸に質問した。調査協力者のインタビューの日時と所要時間、当日の担当は表 2-2 の通りである。なお、企画段階においては、里親 A・B 両氏が託児・子ども企画へ相互に関わり合い、準備を進めてきている。

(3) 倫理的配慮

本調査は、次に示す倫理的配慮のもと実施した。まず、事前に調査協力候補者に対し、①調査への協力は任意であること、②協力しないことによる不利益は生じないこと、③調査の目的と内容、④公表の方法、⑤個人情報の取り扱い・匿名化について書面を用いて口頭での説明を行った。そして、これらを了承した調査協力者からのみ、協力同意書による承諾を得た。これらの説明および同意の内容は、紙媒体にて厳重に保管している。

(4) 分析方法

分析は、佐藤の質的データ分析法を参考とした⁶⁾。調査協力者の数は 2 名と多くないが、語りの内容が多岐にわたっていたことから、下記の手順で整理を試みた。

まず、インタビューを録音したデータの全てについて逐語録を作成し、発言内容のまとめごとに発言番号を付した。その後、逐語録を読み込み、準備の流れや当日の活動状況といった事実に関わる発言、本研究と関わりのない発言などを除き、本ボランティアへ学生が関わったことに対して調査協力者がもつ思いや考えに関する発言を残した。残された 65 の発言についてコードを生成し、それぞれの意味を解釈しながらカテゴリー化を行った。なお、コードとカテゴリーの生成ならびに検討・解釈を行うにあたっては、逐語録と照らし合わせ、語りの文脈を確認しながら進めた。

3 分析の結果

上述の通り分析した結果、65の発言から14のコードと4つのカテゴリーが生成された(表3-1)。以下、カテゴリーごとに詳述する。なお、文中ではカテゴリーを【】、コードを<>で示し、考察において発言の原文を引用する際は「」で示す。発言を引用する際は、発言の文脈を歪曲しない範囲で、同一発言番号内の一部の語りを抜粋することがある。

表 3-1 里親会活動に学生ボランティアが参画することの意義

| カテゴリー | コード |
|--------------------|-----------------------|
| 学生が参画する意義 | 子どもにとって関わりやすい |
| | よく知らないからこそフラットに関われる |
| | 大人とはできない遊び方ができる |
| | 若い人々に里親子を知ってもらえる |
| | 力を尽くして取り組んでくれる |
| ボランティアを組み入れる運営上の利点 | 少ない費用で大きな力を得られる |
| | 多く的人数で子どもの安全を守る |
| 外部に依頼することの難しさ | 依頼するために発生する作業負担 |
| | 役割がなければ依頼できない |
| | ボランティアがどの程度対応できるか読めない |
| | ボランティアにどこまでの負担をかけてよいか |
| 学生参画に対する期待 | 繰り返し参画で得られるもの |
| | さまざまな学生に関わってほしい |
| | 中高生の里子を楽しませる役回り |

(1) 学生が参画する意義

里親会活動に【学生が参画する意義】として、5つのコードに分類された26の発言があった。このカテゴリーに分類した発言は、単に里親会に外部のボランティアが参画する意義について語ったものではなく、学生という存在が関与することの意義について語ったものである。

まず、今回のボランティア活動は子どもと関わる内容であったため、両氏からは子どもとの関係性に着目した意義が多く語られた。具体的には、<子どもにとって関わりやすい>、<よく知らないからこそフラットに関われる>、<大人とはできない遊び方ができる>というものである。

<子どもにとって関わりやすい>要素として、「子どもから見たら大人って、なんか怖いっていうイメージがあるじゃないですか。先生とかね。注意されるとか、大人ってやっぱりそういう風に見えるけど、お姉さんお兄さんはそういうの多分ない」(B20)というように子どもが関わっていく上での心理的なハードルが低く、「大学生のお姉ちゃんっていうふうにならわかってるから。女子はやっぱり憧れますよね」(A169)、「若いエネルギーっていうのが、やっぱり普通にちっちゃい子たちに人気ある」(B18)と学生は子どもから人気があり、学生が参加することそのものに子どもが喜んでいたという発言があった。

また、今回参画した学生はいずれも社会的養護や里親養育、あるいは児童福祉や保育を専門的に学んでいる者ではなく、里親制度や里親子を取り巻く状況への理解は個人差のある状態で参画している。加えて、参加した子どもの中には障がいをもつ子どももいたが、障がいについてもまた同様の理解度合いで参画している。そうした中で「わからないものに対する偏見はあると思うんですけど。(中略)みんな、全力っていうか。その子その子を發揮してるなって思った」(B22)、「知らないからこそ、純粋に関われるっていうのもありますし」(B246)と<よく知らないからこそフラットに関われる>こともあげられた。

さらに、<大人とはできない遊び方ができる>良さについても語られた。普段里親会の託児を担当する壮年・高年層のボランティアとはなかなかできない、かけっこ等の身体を使う遊び方ができ、「子どもの発散に付き合ってもらえる」(A20)。「いつものスタッフだと、『走らんでね』みたいな、『歩いていこうね』みたいなやり取りになるところを、仮に学生さんだったら、良い悪いは場所にもよりますが、『走るのもあり』みたいな」(A18)と、遊びの幅が広がることへの期待も含む発言もあった。

次に、特に里親B氏から強調された意義として、<若い人々に里親子を知ってもらえる>こと

があった。これに該当する語りはインタビュー中に複数回出てきているが、「若い年齢層の方が里親というものをまず知ってもらい、里親というものがあるっていうことを、まず知ってもらい。で、なおかつその里親のもとに暮らしている里子っていう子どもたちがいるっていう、社会にこういう人たちが存在しているんだよっていうところを、知ってもらいっていうところが、まず大きなことで、意義があることだと思って」(B2) という発言にその意図が集約されている。

そのほか、実際には必ずしも若さで左右される事項ではないと思われるが、「一般で募ったら、こういう感じにはならないと思うので。学生だからこそ、なんか、体当たりしたっていう感じ」(B206) と、<力を尽くして取り組んでくれる>ことへの言及もあった。

(2) ボランティアを組み入れる運営上の利点

【ボランティアを組み入れる運営上の利点】に分類した発言は、学生に限らず外部のボランティアというものを活動のスタッフに参画させることで、里親会ならびに活動の運営にもたらされる利点について述べたもので、2つのコードに分類された6つの発言が該当した。

里親 A 氏が強調したのは、<少ない費用で大きな力を得られる>ことである。「人件費ってものすごくかかるじゃないですか？お子さん 1 人預かるのに里親さんから 2000 円お支払いいただいているんです。でもね、たった 2000 円で、1 人のお子さんを朝から夕方まで預かるって無茶な話」(A106) であるところを、学生ボランティアは「あんなたった交通費ごときで、お弁当ごときで、あんなにもパワーをくださって」(A170)。「人件費の部分は本当にもう感謝しかなくて。うん。そこを誰か、こう託児者のスタッフに任そうと思ったら、すごいことになっちゃうなと」(A108) と語る。

特に今回は子どもを預かって実施する企画であったことから、安全配慮のため人手が必要とされ、「学生さんたちが、子どもをほぼ 1 人ずつについて見てくれたっていうところが、もうものすごく助かりました」(B199) という。ほぼ 1 対 1 で預かれたことによって、「安心感。言いやすいんですよ。参加者の保護者のかたにも、学生さんいっぱい集まってくさって、1 対 1 でちゃんとお子さんをお預かりできますのでっていうふうにな、言いやすくて」(A122) と、<多くの人数で子どもの安全を守れる>体制を得られたことは大きな利点であったといえる。

(3) 外部に依頼することの難しさ

ボランティアが参画することによる良さや利点がある一方、迎え入れるには相応の準備が必要となる。27 の発言、4 つのコードからなる【外部に依頼することの難しさ】は、これに関する語りである。

中でも最も多い 16 の発言が含まれたのが、<依頼するために発生する作業負担>に関わる発言である。「安心安全に活動してもらいのために、事前にスタッフが会議を重ねるのは当たり前だと思う」(A110)、「どうしても学生さんとやるにはね、そういう連絡調整みたいな役の人は絶対に要りますもんね」(A167)、「指示が的確じゃないと下の人たちって。どうしたらいいのって戸惑う」(B162)、「外部に頼むっていうことは、それなりの手順というか、いろいろ考えなきゃいけないじゃないですか」(B295) という語りに、迎え入れるための準備や手続きがボランティア募集のネックとなっていることが読み取れる。

また、ボランティアを依頼する前段階として、里親 B 氏から<役割がなければ依頼できない>という発言もあった。名古屋市里親会ではボランティアであっても一定額の交通費を支給しているため、ボランティア起用にも費用がかかる。したがって、明確な役割がなければ「それぐらいの労力なら、自分たちでやっちゃおうっていうのが、まあたぶん本音だと思うんです」(B296)。今回は託児・子ども企画として、子どもの見守りに人手が必要であるという明確な見通しがあったためにボランティアを活用することができたものの、普段の里親会ではそこまで多くの子どもを預かる機会はなく、「それこそ『あのお母さん、大変そうだからあの子を見てあげてね』ぐらいだったら正直、そこにいる里親さんで見て終わりにできちゃう」(B299)。それゆえ、ボランティアを活用する機会があまりない。

加えて、役割を割り当てることに関連し、<ボランティアがどの程度対応できるか読めない>、<ボランティアにどこまでの負担をかけてよいか>という発言も両氏からあった。今回学生ボラ

ンティアを迎え入れるにあたり、「何していいかわからないみたいなの。『どうしようかな?』って、学生さんが困っちゃうかな?みたいなのはちょっと想定はしてました」(A6)、「それこそ偏見なんですけど、最近の若い方って、人間関係とか色々そういうところが、あのすごく繊細だったり、あの苦手だったり。もうすごい緊張しちゃってとか。だから子どもとの関わりとかも、やってみたいけど、もっとモジモジしちゃってできないとかを想定していた」(B120)というようにボランティアの力量への不安があった。また、ボランティアに負担をかけることについて、準備段階では「どこまでをやってもらって、ちょっと負荷かけるぐらいか本当は学生にとっても楽しいものなのか?もしくはそのちょっとした負荷すらもかけない方が、学生さんにとって楽しいのか?とか」(A174)、当日も「湧いて出てくる作業がいっぱいあって。それをパッと行って、パッとやってもらうってところを、頼んじゃっていいのかなみたいなの。気が引ける」(B280)と迷いやためらいがあったという。

(4) 学生参画に対する期待

インタビューの最後に、今後も学生が里親会活動へボランティアとして参画することをどう考えるか、参画する場合にはどのように参画してほしいかを尋ねた。その応答を中心とした9つの発言から3つのコードが生成され、これらを【学生参画に対する期待】にまとめた。

里親 A・B 両氏とも、これまでに述べたようなボランティア依頼の難しさを認識しつつ、今回の参画を経て「里親会として、学生さんが手伝って一緒に何かことを進めることはとてもプラス」(A165)、「ぜひまた来てほしい」(B122)と述べた。そして、<繰り返しの参画で得られるもの>に言及し、「1回きりじゃなくて、年に2回ぐらいこう。で、それが2年間で4回とかで、子どもがどんどん、その知った子どもが大きくなってくのが見えたりとか。相手の子どもがね、覚えてくれたりとかいう喜びとか」(A189)、「1回やってもらった子が2回目来ると、『あ、元気だった?』っていうところから始まるじゃないですか。『この間はありがとう』みたいなの。もうそこで既に信頼関係っていうか。前やってくれた子っていうので、こっちもそういう風に対応できるから、『あ、また来てくれたんだ』っていうね、『この前大変だったのにまた来てくれる』っていう風に」(B319)と子どもや里親との関係性が築かれていくことや、「継続して何回か経験するっていうことで。その都度こう段階を踏んで学びがあると思うので」(B307)として、ボランティアが得る学びからも、繰り返しの参画を期待した。

また、里親 B 氏は「こういう里親とか里子って、なかなか関われないと思うんですよ、この先。だから、これやってみたいって言ったら、『うーん、この子は、ちょっと』って先生から見て思っても、やってみたらいいと思います」(B124)と述べ、繰り返しの参画のみならず、新たにくさまざまな学生に関わってほしい>とした。「知るっていうだけでもすごい良いと思います。ぜひやってみたいという方は、参加していただければ」(B134)とも述べており、<若い人々に里親子を知ってもらえる>ことに接続する形で、幅広い参加を期待しているものと思われる。

他方で里親 A 氏は、<中高生の里子を楽しませる役回り>を学生ボランティアが担うことを期待する。里親会で実施する親子参加のイベントでは、ときに未就学児や小学生を楽しませる役回りを中高生の里子が担うことがある。例えば、「ミニ運動会をして。で、里子ちゃんの中の中高生が、お兄さん、お姉さん役でいたんですけども、(中略)っていっても中高生なんで、なんていうか別にそんな、ちっちゃい子をまとめるのが得意とかそんなことは決してないし。やらされてる感も満々でね。鬼の役をやって、島から島へと走って子どもたちは逃げる。お兄ちゃん、お姉ちゃんは追いかけるみたいな役をやらされて」(A155)いたという具合である。こうした場面で「大学生の方々とやったら、かなり盛り上がるんだろうなって」(A155)、中高生の里子は「自分も一緒に逃げたい側なのに、追いかける側をやらされてるっていう違和感。大学生とかだったら、自分はこの役割なんだなっていうので、盛り上がってやっていただけるんだろうなって。期待しちゃいます」(A156)と語った。中高生になった里子も楽しめる場を作る上で、「大人がやったら、本気で追いかけても追いつかないから」(A156)、学生の元気さを活かす提案である。

4 まとめ—里親会支援という観点からの検討

上記の分析結果を踏まえ、学生という外部者が里親会活動に参画する意義を、里親会支援とい

う観点で整理し、本稿のまとめとする。

今回の事例ならびにインタビュー調査の分析結果から、学生ボランティアの参画は、里親会活動を単に人的に補完するにとどまらず、活動の質や広がりを支えることにつながる事が示唆された。具体的には下記のような側面から質や広がりを支えられる可能性が示された。

第一に、子どもが関係する活動に限った支援ではあるが、里親会が子どもを安心して参加させ、活動を実施するための環境づくりを支えることである。学生は<子どもにとって関わりやすい>、心理的距離の近い存在であり、里親や年齢層の高いボランティアスタッフとは異なる立ち位置から子どもと自然な関係性を築くことができていた。こうした点や、身体を使った遊びなど<大人とはできない関わり>をできる点は、学生が参画する意義といえよう。

第二に、若年層に対して里親子や里親制度を周知し、将来的な理解者や支援者を増やすことである。活動を通して学生は里親や里子の存在を直接知り、関わる機会を得られていた。多くの里親会では里親制度の普及啓発活動を行っているが、若年層をターゲットとした活動はほぼ見受られない。将来の進路や人生設計をしていく年代への周知は、例えば、教員志望の学生が参画を通して里親子について知り、その後教育現場で里親子と出会った際に誤解なく対応できるといったように、里親子が暮らしやすい未来社会の醸成に役立ちうる。今回の事例を含め、里親会活動に一度に参画できるボランティアの数は多くなく、草の根の取り組みではあるものの、長期的な視点で積み重ねることにより、社会の醸成につながりゆくものと考えられる。

第三に、これは学生に限らずボランティアが参画する意義であるが、里親会の運営を支える地域資源になりうるということである。会員からスタッフとして十分な人員を確保し難い、また予算の面から雇用することも難しいという場合に、ボランティアが加わることにより、少ない費用で体制を整えることが可能となる。今回の事例では、多くの学生が参画し、ほぼ1対1で子どもを見守れる体制が実現したことにより、リニア・鉄道館への外出を実現できた。ボランティアの活用は、活動の幅を広げることの支えになるといえる。

一方で、学生を含む外部者を受け入れるためには、事前の調整や説明の負担が生じる。また、普段の里親会の活動規模では、ボランティアに明確な役割を与えられる機会が少ないという指摘もあった。里親 B 氏からは「勉強したいから参加したいみたいな、自由参加的な」(B295)形で募れないかという提案もあり、今後学生を参画させていく際には、ボランティアという形をとるか否かというところから考えていくこととしたい。

本稿では実践報告として、里親に対するインタビュー調査による質的データから、学生による里親会活動へのボランティア参画の意義を整理した。冒頭で述べた通り、里親会は里親子のより良い暮らしに必要な活動を行っているものの、その活動の担い手が充足している会は多くない。今回の調査ではボランティアを参画させることで生じる負担について指摘がありつつも、活動の充実につながるという意義も示された。里親会を支えていく地域資源のひとつとして、今後もボランティア活用や学生の関わりに着目し、実践を重ねていきたい。

謝辞

本稿で分析した調査は、科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 課題番号 24K05658 の助成を受けて実施したものである。調査の実施をご承諾くださいました名古屋市里親会会長さま、ご多忙の折にインタビューに応じてくださいました調査協力者のお二人に厚く御礼申し上げます。

注

- 1) 石井陽子・富田早苗・波川京子「地域里親会の現状と課題—地域里親会と養育里親の調査から—」『川崎医療福祉学会誌』第 30 巻第 2 号、2021 年、pp.589-596。ここでは他に、「活動内容・方法と周知に関する課題」、「関係機関との関係・連携に関する課題」、「里親支援に関する課題」が地域里親会自身の感じている課題として明らかにされている。
- 2) 全国里親会「里親だより」第 134 号、2022 年 11 月 20 日、pp.6-7。ここでは他に、「会員数が増えない」ことも上位にあげられている。
- 3) 2018 年発出の厚生労働省「フォスタリング機関（里親養育包括支援機関）及びその業務に関

するガイドライン」ではチーム養育の重要性がうたわれ、里親制度に密接に関わる機関のみならず、里親子の生活に関わる機関も支援者と位置づけ、「里親養育を理解し支援する地域ネットワークの構築に努める」(p.9)としている。なお、この文言は2024年発出「里親支援センター及びその業務に関するガイドライン」にも受け継がれている。

- 4) より詳細な経緯や当日の活動状況については、本稿掲載誌に別途投稿した二村玲衣「里親会活動への学生ボランティア参画の試み—里親子を知る契機としての気づき・学び」を参照されたい。
- 5) この学びについては、脚注4)に示した原稿で整理した。
- 6) 佐藤郁哉『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社、2008年。

サマースクール 2025in 海津 —多様な学生を対象としたエリアブランディング教育プログラム

塚本明日香¹⁾・二村玲衣¹⁾・佐々木実¹⁾

¹⁾岐阜大学地域連携推進本部地域協学センター（〒501-1193 岐阜県岐阜市柳戸 1-1）

1. はじめに

岐阜大学・中部学院大学・中部大学・日本福祉大学・名古屋学院大学の5大学からなるぎふCOC+事業推進コンソーシアム（以下、COC+コンソーシアムと記す）では、2016年度から参加大学共通プログラムとして学生の夏季休暇期間に「サマースクール」を開催している。サマースクールは開催地域が抱えている地域課題に対して解決策を提案することを目標に、5大学の学生が大学混合でチームを組んで学びあう教育プログラムである。

2022年度からは岐阜県の「産学金官連携人材育成・定着プロジェクト」の支援を受け、開催地域の企業と学生との接点強化に資することを念頭においた教育プログラムを実施してきている。2025年度は、海津市の域学連携支援補助金の助成も受けて開催した。本稿ではプログラムの構築から実施までの様子と、参加者アンケート結果や運営スタッフの振り返りで出された意見について報告する。

2. プログラムの構築

2-1. 対象地域の選定と実施方法

例年、サマースクールの受け入れ先選定は、COC+コンソーシアムの事務局でもある地域協学センターの会議に参加する各自治体の地域コーディネーターを通して公募する手順を踏んでいる。地域コーディネーターとは各自治体の職員の立場で、大学連携の要として地域協学センターの運営に関わっていただく役職である。今回は公募で名乗り上げる自治体がなかったため、受け入れ先について大学側で検討することとなった。

近年サマースクールの実施がない西濃圏域・飛騨圏域を中心に検討し、サマースクールを実施したことはないが、一定の連携実績がある海津市が浮上した。そこで海津市の地域コーディネーターである富田氏を通じて相談したところ快諾を得ることができ、対象地域が決定した。

実施方法は3日間プログラムという前提のもと、1泊2日の前半と最終発表日という形式とした。例年COC+コンソーシアムの実務者会議で、宿泊付きの方が密度の濃い提案になる、親睦が深まる等の意見が出ていること、海津市内に適当な宿泊施設があるが、2泊となると参加費が高騰して参加者の確保が難しくなると予測されたことが、今回の形式を選択した要因である。また、同時進行で検討を進めていたテーマ案においても、夜の時間を実際に体験することが有効であると考えられた。

2-2. プログラム構築のプロセス

プログラムは海津市およびCOC+コンソーシアムでの検討を繰り返して構築した。おおよその流れは表1に示した通りである。打合せの多くはZoomを利用したオンライン形式で実施し、3回の現地見学ではその都度海津市担当者との打ち合わせの時間も設けた。資料の授受等の事情で直接海津市を訪問した場合は「@海津市役所」と付記している。

同時に、毎月COC+コンソーシアムで「人材育成企画部会」として実務者間の会議を開催し、プログラム内容等を検討するとともに、必要に応じて海津市担当者にも参画してもらうことで関係者が同じ目的意識をもってプログラムに取り組めるようにした。

3月までのテーマ選定では、過去の実践に基づいた大学からの例示をもとに、海津市から①ふるさと納税、②移住定住、③月見の森エリアのブランディング戦略、④周遊観光という4つのテーマ候補が提示された。それを受けて①ふるさと納税と、③④を合わせた観光の2テーマについて、粗々ながら3日間のプログラム案を大学から提示し、最終的に海津市の判断で③月見の森エリアのブランディング戦略をテーマとすることが決定した。

海津市は、旧海津町、平田町、南濃町の3町が合併して形成された自治体であり、対象地域となる月見の森エリアはおおよそ旧南濃町のことを示す。このうち海津町には木曾三川公園、平田

表 1. 海津市との打ち合わせ状況

| | 打合せ日 | 内容 |
|----|-----------------------|-------------------|
| 1 | 2025.01.10 | サマースクール受け入れ相談 |
| 2 | 2025.02.17 | テーマ案相談 |
| 3 | 2025.03.06 | テーマ・日程確定 |
| 4 | 2025.04.09 | 現地見学 1 回目 |
| 5 | 2025.04.25 | 全体目標の設定（人材育成企画部会） |
| 6 | 2025.05.13 | 見学先候補の追加 |
| 7 | 2025.06.13 | 現地見学 2 回目 |
| 8 | 2025.07.01 | プログラム概要確認@海津市役所 |
| 9 | 2025.07.29 | 事前学習用資料手配@海津市役所 |
| 10 | 2025.08.21 | 現地確認 |
| 11 | 2025.08.22 | 最終確認（人材育成企画部会） |
| - | 2025.08.27-2025.09.12 | サマースクール実施 |
| 12 | 2025.12.17 | 事後ヒアリング@海津市役所 |

町には「おちょぼさん」として親しまれる千代保稲荷神社があり、いずれも岐阜県の入込観光客数上位に入る観光スポットであるが、旧南濃町エリアの観光スポットは両者に比べると見劣りするのが実情である。その観光ブランディング戦略を策定するタイミングであることから、若者の意見を広く募って反映させたいという意向があり、最終的なテーマ決定となった。

4月以降、プログラムの作り込みを始め、現地見学での知見も踏まえつつ、最終的にどんな提案を求めるのか、そのためにどういったプロセスを踏ませるのかといったことを検討していった。テーマに関する主担当課である海津市産業経済部観光・シティプロモーション課の要請と、大学スタッフで検討する教育プログラムとしての目標設定とをすり合わせ、最終的な成果物としては「ランディングページで使用するキャッチコピー」と「エリアの観光を盛り上げるための企画案」の2点を参加学生に課すこととした。考える手順についてもしおりに落とし込み、エリアブランディングの基本骨子が学べるプログラムとして設計することができた。

最終的なプログラムは表2に示す通りである。

表 2. プログラム行程表

| | |
|---|-----------------------------|
| 1 日目（2025 年 8 月 27 日 現地見学） | |
| 【全員共通】 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・オリエンテーション（自己紹介、担当コースの決定等） ・海津市の情報提供：全体情報（企画課）、テーマ関係情報（観光・シティプロモーション課） | |
| 【A コース】 | 【B コース】 |
| ①月見の森・水晶の湯 | ①行基寺 |
| ②道の駅 月見の里南濃（昼食） | ②道の駅 月見の里南濃（昼食） |
| ③川瀬農園 | ③津谷川周辺（中日本氷糖株式会社 担当者から情報提供） |
| ④羽根谷だんだん公園 | ④月見の森・水晶の湯 |
| 【全員共通】グループワーク①（見学の振り返り） | |
| 2 日目（2025 年 8 月 28 日 情報提供、グループワーク） | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・グループワーク②（課題整理、提案検討、質問整理） ・協力企業インタビュー（株式会社湖池屋・中日本氷糖株式会社） ・グループワーク③（提案作成） ・中間発表・今後の進め方の相談 | |
| 3 日目（2025 年 9 月 3 日 最終発表） | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・発表準備・成果発表会・表彰式/閉会式 | |

3. プログラム実施の様子

3-1. 参加人数と事前学習

最終的な参加人数は5大学合わせて18人であった（表3）。

表3. 最終参加人数（単位：人）

| 大学名 | 岐阜 | 中部学院 | 中部 | 日本福祉 | 名古屋学院 | 合計 |
|-----|----|------|----|------|-------|----|
| 人数 | 0 | 4 | 3 | 10 | 1 | 18 |

岐阜大学は全学共通教育科目として「地域共創セミナー（サマースクール）」（1単位）を開講し、2025年度の受講登録者は2人いた。他に事前・事後学習を課さないプログラム参加者としての参加申込みもあったが、留学やインターンシップ等、他行事を優先するという判断が相次いで最終的な参加人数が0人となった。

特筆すべきは日本福祉大学で、10人中6人が留学生の参加であった。ネパール国籍の学生が多く、十分な日本語能力を有する留学生がそれぞれの視点でグループワークに参加してくれたことにより、提案の幅が広がったと考えられる。

他に、対象地域である海津市出身者の参加や、車いすの学生も参加しており、例年よりも多様な属性の参加者が集うプログラムとなった。

事前学習資料は、岐阜県や海津市のおおよその状況を知ってもらうための資料を2種（岐阜県統計課の出している市町村統計資料（統計からみた海津市の現状）、県勢要覧2025）、テーマ関連資料として、海津市観光振興長期基本計画の現状分析等が掲載されている部分の抜粋と、月見の森エリアを含む海津市観光関係のパンフレット類（海津市提供）、キャッチコピー作成の参考のための文献紹介資料（成原統括事業推進コーディネーター提供）を送付した。

そして事前学習課題としては、上述の配布資料を活用したクイズに加えて、現在どのようなイメージが発信されているかを知るための画像分析を課した。被写体や雰囲気を選択肢を用意し、「海津市」「南濃」「月見の森」などのキーワードで検索される画像がどのような傾向を持っているかを確認してもらうことで、現状のエリアイメージの把握に努めさせた。

3-2. プログラム1日目（現地見学）

<開会式・オリエンテーション>

海津市役所内の会議室を会場に、開会式とオリエンテーションを実施した。開会式では佐々木実実行委員長と、受け入れ先である海津市から山崎賢二企画課長にご挨拶いただいた。

オリエンテーションでは互いの自己紹介、事前課題の共有等を実施し、見学に先立つ情報提供として海津市全体について海津市企画課から、海津市の観光動静について観光・シティプロモーション課からお話いただいた。観光に関する現状課題として、一定の整備が進みつつも、スポットごとの集客にとどまり周遊性が低いことが改めて共有され、今後の高速道路（東海環状自動車道）開通等も見据えたエリアブランディングの必要性が確認できた。

その後の現地見学はAとBの2コースに分かれるため、各チーム内でコース分担を決め、バスに分乗した。対象地域である旧南濃町エリアの情報を幅広く集めるための分担だが、コアエリアとなる「月見の森・水晶の湯」については参加者全員が把握する必要があると考えたため、時間帯をずらして両コースとも来訪するスケジュールとしている。

<現地見学：Aコース>

Aコースの見学ルートは表2でも提示した通り、月見の森・水晶の湯→道の駅月見の里南濃→川瀬農園→羽根谷だんだん公園である。

さいわい天气に恵まれ、月見の森や水晶の湯からは濃尾平野を一望する絶景を堪能することができた（写真1）。展望台へはすぐ近くまでバスで行ったが、関係車両以外通行禁止のルートを利用して利用させてもらっており、本来はハイキングコースとして登ってくる設定である。そのため復路については水晶の湯まで、希望者は徒歩で移動している。

道の駅では昼食をとるだけでなく、地域の特産品としてどういった商品が扱われているか等も確認する時間とした。

次に訪問した川瀬農園は、柿とみかんを栽培している個人農園であり、観光客向けのフルーツ狩りも提供しているところである。時間の都合上、柿畑だけを見学し（写真2）、炎天下でもあることから個別のお話や質疑応答は移動先の羽根谷だんだん公園のさぼう遊学館で会場を用意して対応していただいた。川瀬氏には、羽根谷だんだん公園の見学も付き合っただき、歴史的経緯を中心とした解説を折に触れて教えていただくことができた。

最後の見学先である羽根谷だんだん公園は令和5年度から整備がすすめられたキャンプ場を中心とするエリアである。併設されているさぼう遊学館は防災啓発施設であり、地元の子どもたちやキャンプに訪れた家族連れがいつでも防災について学べるようになっている。敷地が広いので50分程度の自由見学時間を設定し、参加者が思い思いのスポットを確認するようにした。



写真1. 月見の森展望台



写真2. 川瀬農園

<現地見学：Bコース>

Bコースの見学ルートは、行基寺→道の駅→津屋川周辺エリア→月見の森・水晶の湯の順で設計した。

行基寺は美濃高須藩藩主となる松平家の菩提寺であり、「月見寺」の別称を持つ。海津市の名勝に指定されており、見事な日本庭園と濃尾平野を一望する景色を楽しむことができる（写真3）。見学日は本来非公開の日程だったが事前準備段階で相談し、団体見学ならばということで受け入れていただき、本殿や書院など寺全体を拝観した。



写真3. 行基寺

道の駅はAコースと同様に昼食をとるだけでなく、販売されている特産品などを確認する時間とした。

午後に見学をした津屋川周辺は、天然記念物ハリヨの生息池やヒガンバナの群生地として知られる一帯である。運営側で事前見学を実施した際、たまたま保全活動に取り組む福井氏（中日本冰糖株式会社社長）の話を聞くことができ、中日本冰糖株式会社が当該エリアの整備に大きく貢献していることが知れた。そのため協力を依頼し、実際に保全活動に関わっている同社南濃工場地域貢献活動部長の森氏から現地で解説をうかがうことになった（写真4）。



写真4. ハリヨの生息池

最後に月見の森・水晶の湯にも訪れ、Aコースとは異なる時間帯のスポット散策を楽しんだ。

<宿泊施設でのグループワーク>

見学を終えた後は宿泊施設にチェックインし、夕食を済ませて一日の振り返りを実施した。グループ内でAコース、Bコースに分かれて見学に行っていたため、互いに情報を持ち寄り、感想を共有して翌日以降の企画案の種を出し合った（写真5）。



写真5. グループワーク

グループワークの最後に、1日の締めとして成原統括事業推進コーディネーターからの挨拶の時間も設け、合わせて事前学習資料と

して配布したキャッチコピー作成のための参考資料についても解説していただいた。

なお宿泊先である海津温泉自体が、旧海津町内の所在で今回の対象エリア外とはいえ、海津市内の有力な観光スポットであり、プロジェクトマップ等との取組みも実施されていて、参加者たちの発想を大いに刺激する施設であった。

3-3. プログラム 2 日目（情報提供・グループワーク）

<グループワーク>

今回参加者に求められている最終的な成果物は「ランディングページで使用するキャッチコピー」と「エリアの観光を盛り上げるための企画案」の 2 点である。その作成に向けたアイデア出しとして、海津市の観光資源等に関する情報収集、企画案のターゲットとなるペルソナや、企画案が目指す将来像の検討を、各グループのペースで進めていった。次に述べる情報収集の時間もはさみ、まずは中間報告に向けて各チームで着想を練っていったのが 2 日目のグループワークの概要である。

<情報提供>

追加の情報提供は 2 段階に分けて実施した。

最初のグループワークをある程度進めた後、海津市担当職員に対応していただく質疑応答の時間を設定した（写真 6）。「観光客が多い時期」「海津市観光におけるインバウンドの現状」「夏や冬のおすすめスポットはどこか」等、観光に関する質問だけでなく、市の職員が思う海津市の推しポイントを問う場面もあり、1 日目の実地見学だけでは把握しきれない海津市の魅力を整理する時間となった。海津市が主導して整備した月見の森・水晶の湯・羽根谷だんだん公園に関する質問はこの時間に受け付けることとしたので、「月見の森の由来」や「月見の森で実際に行われているイベント」等の質問も飛び出し、得られた情報は学生が考える企画案の中に落とし込まれることになった。



写真 6. 海津市職員への
質疑応答

続いて関係企業からのお話と質疑応答として、(株)湖池屋と、中日本氷糖(株)の 2 社を招いて情報提供をいただいた。

(株)湖池屋は、1 日目の見学では予定地を通り過ぎるだけとなったが、将来的な高速道路開通を見越して南濃工場を建設中であり、それが見学も可能な工場であるため、今回のサマースクールのテーマの文脈では新たな観光スポットとして期待されたところである。一方で企業としては本来菓子製造業であり、いかに消費者の心をつかむ菓子売り出すかというところに主眼がある。ヒット商品の開発話などは参加者も興味深く聞いており、将来工場見学で可能なアクティビティが何かという類の質問も出たが、それ以上にブランディング戦略の文脈で非常に参考になる情報提供の時間となった。

中日本氷糖(株)は、B コースで見学に訪れた津屋川周辺エリアの整備を手掛けているが、本業は氷砂糖の製造・販売を手掛ける企業である。業務内容に由来する氷砂糖資料館は産業観光スポットの一つとして海津市観光計画にも言及されているが、夏休み期間のためかすでに予約が埋まっていたため、今回のサマースクールプログラムでは訪れていない。NPO 法人「日本で最も美しい村」連合の立ち上げ時から関与している会員企業であり、昨今よく言われるようになった CSR (企業の社会的責任) の先駆者的企業である。企業と地域貢献についての話は学生の関心を刺激したようで、「本業と関係のないハリヨの保護を行っていたことが印象に残った」等のコメントが見られた。

情報提供のあと、昼食休憩をはさんでそれぞれのチームはさらに提案をブラッシュアップしていくことになる。

<中間発表>

15 時からの中間発表は、各チーム持ち時間 10 分程度として実施した。しおりのワークシート

をベースに考えてきた企画案の骨子を5分程度で紹介し、質疑やコメント、アドバイス等を5分程度で返していく方式である。この時点での提案は、当然ながらまだ粗が大きく、様々な指摘を受けて今後どう対応するかを考えることが重要になる。

メンバーが直接顔を合わせて相談する時間はここで一度中断されるため、今後の方針と互いの連絡方法等を確認して、2日目のプログラムを終了した。

3-4. プログラム3日目（最終発表会）

最終発表に向け、一通り完成したデータを発表会前日の9月2日までに事務局へ送信するノルマを課しており、若干提出時刻から遅れたチームはあったものの、4チームすべてがスライドを一通り完成させた状態で最終日に臨むことになった。

最終的な各チームの提案内容と、それに対して寄せられたコメントは表4のとおりである。

表4. 最終提案およびコメント概要

| チーム名 | 提案内容・主要コメント |
|---------------------|--|
| (A) ティラミス | 【キャッチコピー】スマホOFF ころON In Kaizu Nannou |
| | 【企画内容】Digital Detox 二次交通の課題にサイクリング活用を提案。働き世代で日々の疲労を自然で癒したい人がターゲット。日帰り・宿泊の2コースを四季それぞれ提案。月見の森エリア改善案（藤棚増設、望遠鏡アクティビティ、収穫体験など）も提案。 |
| | 【主なコメント】 デジタルデトックスの視点、四季折々のコース提案が良い。ターゲットとコンセプトのつながりが分かりやすい。紙の地図とカメラ以外にも案があると良かった |
| (B) バサント | 【キャッチコピー】新しい思い出。刻むなら海津はどうかい？ |
| | 【企画内容】バスツアー 大垣から養老鉄道で美濃津屋駅に出発からのバスツアー。全年齢層がターゲット。日帰り編と宿泊編を提案。湯の華アウトドアパークと比較して今後の改善を提言。健康志向と温泉をつなげた提案。 |
| | 【主なコメント】 海津市作成動画にちなんだキャッチコピー、養老鉄道とのコラボプランが良い。課題の整理に他所との比較をしたのが良かった。ターゲットを広くとりすぎ、全体のストーリーがもう少し整理できると良かった。 |
| (C) カラフル ※市長賞 | 【キャッチコピー】月見の森って何もないと思ってる？ |
| | 【企画内容】月夜の森 ライトアップに合わせてちょうちん作り。夜景を楽しむイベント開催を提案。ターゲットは自然好きの人。バスを出して交通問題解決。SNSで映え広告を実施。 |
| | 【主なコメント】 夜に注目して新たなイベントを提案したのが良い。障害のある方に向けた対応が考えられているのが良い。自然推しで夜景が良いというのは不一致では？ |
| (D) 多趣味 ※優秀賞 | 【キャッチコピー】リードを外して、心のままに。「南濃で、なにをする？」 |
| | 【企画内容】愛犬と出かけた旅行先〇選 in 海津 犬連れ、子連れ、家族連れプランと、学生向けプランを提案。フォトコンテストをはじめ各スポットでの楽しみ方を整理。新マスコット「ぎゅっと君」を創出。移住を考える人を増やすことも視野に入れた提案。 |
| | 【主なコメント】 細部に至るプレゼン、マスコットの提案に企画力を感じる。犬連れ向けの設定にオリジナリティがある。犬が苦手な人もいるので隔離方法も検討する必要があるかも。 |

当日は午前中から海津市役所に集合して最終調整の時間を確保した。発表会そのものは14時からの開催とし、1チーム10分発表、5分質疑の時間配分で実施した。学生には相互採点表を配布し、相互評価による優秀賞を選出する仕組みとした。相互評価は4項目の観点（海津市という地域性を踏まえた提案であるか・ブランドイメージが明確であるか・提案の整合性・提案の面白さ）を5点満点で採点する20点満点の形式で実施した。自チーム以外の3チームに対して評価し、発表会終了と同時に採点表を回収、集計して最も獲得点の高いチームに優秀賞の賞状と副賞が授与された。

他に発表会を見る教職員や海津市役所職員、そして観光ブランディング戦略策定にかかわる事業担当者には付箋を配布し、各チームに対するコメントを作成して集約する形にした。当日は岐阜新聞、中日新聞による取材があり、発表の様子やサマースクールについての記事が後日それぞれの紙面に掲載された。

また、参加者全員にプログラム修了証を授与し、受け入れ先の海津市からも挨拶をいただいて、全プログラム行程を終了した。

3-5.9月12日（市長賞表彰と懇談）

プログラム企画当初、最終発表会には横川海津市長に臨席いただき、その場で市長賞を決定・表彰してもらおう算段であった。しかし市議会一般質問のタイミングと重なってしまい、当日の臨席がかなわなくなったため、ビデオ確認で市長賞を決めること、その受賞者の表彰のために後日改めて時間を作ることとした。

別日程となってしまうため、全学生が再度集合することは現実的ではないと考え、市長賞と優秀賞の受賞チーム学生らに確認した結果、6人の学生が海津市を再訪して懇談することとなった。

横川海津市長からは「月見の森」の活用方法として、これまで夜に注目する企画に乏しかったので、その点を評価したというコメントをいただき、発表内容にとどまらず、実際に海津市を訪れてみての感想等を懇談で話し合うことができた。



写真 7. 横川海津市長と学生の集合写真

4. プログラムの振り返り

サマースクール終了後、参画した教職員間での振り返りと、海津市を再訪して担当職員との振り返りを実施した。まず、教職員間で出された意見は表5の通りである。

表 5. COC+コンソーシアム教職員の振り返り意見（2025.09.26実施）

| 分類 | 内容 |
|-----------|--|
| 受入れ先との調整 | <ul style="list-style-type: none"> ・企画の初期段階で受入れ先の市町村に共催を依頼する。 ・学生が提案して終わりではなく、市町村HPに掲載する、実際に企画を実施する等、提案が形になると学生の意識やアウトプットも変わるので、受入れ先市町村へ対応をお願いしたい。 |
| 多様な学生の受入れ | <ul style="list-style-type: none"> ・参加した留学生からは、「良い学びになった、他大学の教職員からもしっかりサポートしてもらえて良かった」と、良い反応が得られている。 ・留学生には、共同浴場の使い方の説明や食事に配慮する必要がある。 ・車いすの学生について、専用リフトバスが手配できたのは良かった。今後類似ケースがあった場合も、構えずに対応できるようになると良い。 |
| 参加学生の確保 | <ul style="list-style-type: none"> ・参加学生の満足度は高い。また、低学年でこうした行事に参加した学生はその後のプログラムにも継続して参加するケースがしばしばあるので、参加者を確保できるように工夫する必要がある。 ・より多くの学生を集めるため、地域を連想しやすい仕掛けや声掛け等、学生への周知方法を再考する。 |

| | |
|-----|---|
| | ・費用負担についても検討が必要である。 |
| その他 | ・女性が宿泊する部屋には、留学生問わず、バス付が望ましい。 ・学生の発表時間について、十分な時間を取れるようにする。 |

今回のプログラムでは、海津市がちょうど策定中の計画に意見を反映させる前提でプログラムを構築できたため、最終的なアウトプットは後述する通りかなりの部分が実際の海津市の計画に反映されている。こうした結果が担保されているか否かは、取り組む学生の意欲にも関わってくるため、今後もそうした調整ができるようにしたいという点で意見が一致した。一方で担当者レベルでの十分な協力があっても、共催や後援等、明確な位置づけをしないままにプログラムを進めてしまった部分があり、その点は次年度以降改善することとなった。

2番目の項目について、過去に留学生の参加者もいたことはあるが、今回は6人もの留学生が参加した。また、車いすの学生の参加は初めてのことであり、こうした多様な学生の受け入れについても話題に上った。温泉施設では留学生が戸惑っている場面があった、というのは企画側にとって盲点だったところであり、食事への配慮なども含めて、今後より充実した対応が望まれる。また、車いすの学生参加については、スタッフ側にとっても「貴重な経験」となってしまった側面があり、アレルギー対応と同程度の温度感でバリアフリー対応ができることが望ましいとされた。

参加学生数は、伸び悩んだのが今回の反省点である。ここ数年は宿泊がなかったり、あっても全額補助が得られていたりして、数千円単位の参加費徴収が学生の参加をためらわせたことが指摘された。一方で、補助金の運用等ですでに可能な限り軽減している状況であり、提供される内容に対して決して高価な設定ではないことから、参加者満足度の方面で周知を進めることの重要性が再確認されている。他の予定とバッティングした場合の優先度の決定権等は当然学生本人に帰するところであり、まずは申込人数を増やすために一層の周知が求められる。

海津市役所との意見交換は、補助金報告等も完了した後、12月17日に実施した。

表 6. 海津市担当職員の振り返り意見 (2025. 12. 17 実施)

| 分類 | 内容 |
|----------|--|
| 感想 | ・学生が海津のことを一生懸命考えてくれたことがまずは嬉しかった。 ・積極的に参加してもらえたことが良かった。 |
| 提案に対する感想 | ・企画提案がツアー寄りのものが多かったのもっと多様になると良かった。 ・留学生の参加が多かったのも、国外から見た視点がもっとあっても良かった。 ・夜を生かした企画は盲点だった。実現可能性も高そうで良い。 ・もっと思い切った提案があるかと思ったが、やはり時間的にも難しかったか。 |
| 提案の活用 | ・夜のイベントや、健康志向に関する企画提案の内容はかなり盛り込まれた。 ・2次交通に注目する提案から、レンタサイクル拠点の活用も盛り込まれた。 ・展望台のイベント、週末限定のキッチンカーなど、一部は実際に来年からやる予定。月見の森のリニューアルも令和10年度頃から取り組む可能性。 ・癒しメニューや月光体験など、高価格帯の観光サービスも視野に入れている。 |

まず受け入れ全体の感想として、学生たちが熱心に取り組んでいたことについて肯定的に捉えている声がある。その前提の上で、最終的にまとめられた提案について、期待値と多少の差異があったことは指摘された。一方で実現可能性の高い提案があったことについての満足度も高く、実際のブランディング計画内にかなり多くの要素が盛り込まれたことが共有された。

5. 謝辞

本プログラムの実施にあたり、岐阜県産学金官連携人材育成・定着プロジェクトおよび海津市域学連携活動支援補助金の助成を受けました。

プログラムの構築・運営にあたり、多大な協力をいただいた海津市担当課の皆様、見学受け入

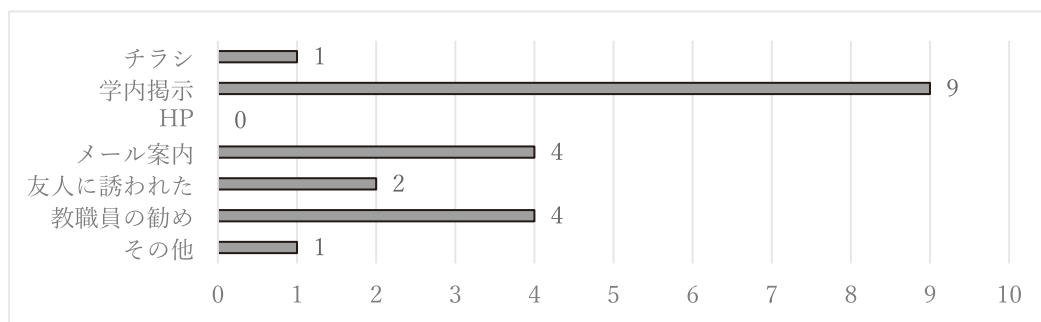
れの労をとっていただいた行基寺様、川瀬農園様、情報提供をいただいた(株)湖池屋様、中日本冰糖(株)様、その他大学関係スタッフをはじめ多くの皆様にご協力いただき、今回のサマースクールを滞りなく実施することができました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

6. 附録：参加者アンケートの結果

1. 回答者について（単位：人）

- (1) 所属大学：中部学院大学 4、中部大学 3、日本福祉大学 10、名古屋学院大学 1
- (2) 参加コース：A8、B10

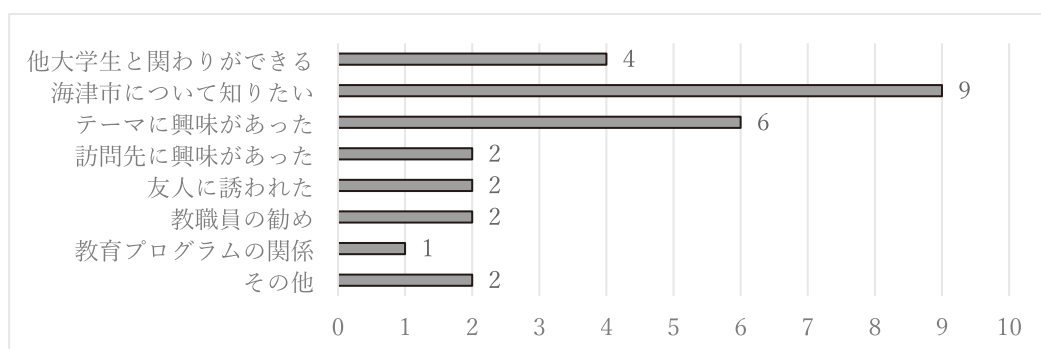
2. どのようにしてサマースクールを知りましたか（複数回答可）



その他の記述内容

- ・去年参加したため知っていた

3. 参加しようと思った理由は何ですか。（複数回答可）



その他の記述内容

- ・家が近かったから
- ・夏休みに何かしたいと考えていた

4. 海津市について

(1) 今回のプログラムを通して海津市の魅力を感じましたか？

①魅力を感じた 18/18 ②どちらともいえない ③魅力を感じなかった

(2) また海津を訪れたいと思いますか

①ぜひ訪れたい 11/18 ②機会があれば訪れたい 7/18 ③特に行こうと思わない

(3) 特に印象に残った海津の魅力があれば教えてください（記述数 16）

普段は海に近い場所で生活しているため、山に囲まれた環境が新鮮で個人的にすごく癒されました。自然の豊かさが海津の最も強い観光資源だと思っています。

自分が温泉好きなのもありますが温泉がとても良いと思いました。特に水晶の湯で、会談でひと汗かいたときに温泉に入るととても気持ちが良いだろうなと思いました。

自分の思っている以上に、自然があふれているというのが良い点だと思った。

| |
|---|
| ホテルのやつ |
| 特に印象に残った海津の魅力は自然が豊かで静かなところです。「月見の森」から見える景色がととてもきれいで、心に残りました。 |
| 行基寺から眺めた海津の町並みが雄大だった |
| 特に印象に残った海津の魅力は月見の森の月見台からの名古屋のビルと広い平野です。 |
| みかんや柿、自然が豊かなところ |
| 月見台のあたりの様々な場所の景色がとても良かったです。 |
| 海津の自然な景色、月見の森で見える自然とかが印象に残りました。静かな場所でとても好きなところでした。 |
| 行基寺が特に印象に残りました。歴史を感じる建物を見るのが好きなので、とても楽しかったです。 |
| ・ツイーカを使った動画がすごく魅力を感じた。 ・水晶の湯とか止まった場所の温泉が他にはないにぎり湯ですごく魅力を感じた。 ・月見台から見た景色が全体を一望できて、心が安らぎ、そこに魅力を感じた。 |
| 家族旅行としてくるのにゆっくりじっくり楽しめるスポットがたくさんあるところです！ |
| 花がきれいに見える場所が多くあり、紅葉の時期に特に訪れたいと思い、魅力的に感じました。 |
| 犬と訪れられるだんだん公園キャンプ場 |
| 水晶の湯、道の駅 |
| ハリヨのことを知ることができてうれしいです。 |

5. 海津の企業（中日本冰糖（株）・（株）湖池屋）について

(1) 今回のプログラムを通して海津の企業の魅力を感じましたか？

①魅力を感じた 15/18 ②どちらともいえない 3/18 ③魅力を感じなかった

(2) 特に印象に残ったことがあれば教えてください。(回答数9)

| |
|--|
| どちらの企業も工場見学や体験などがあり、とても有意義な疑似体験ができたと思います。自然環境の立地具合もとても良いと思います。 |
| 工場見学ができるところ |
| 普段食べているお菓子が「どのように発売されているか」などあまり聞けないような話を聞いて良かった。 |
| 体験など行って自分の好みにできることが特に印象に残っています。 |
| ハリヨの保護をされている中日本冰糖さんの話が印象に残りました。 |
| 私は湖池屋の話を聞いたけど、何拠点も持っていて外国とも連携していてすごく良いと思いました。日本だけでなく幅広い場所、そして開発がすごく力を入れていることが分かり、印象に残りました。 |
| 中日本冰糖さんが本業とはほぼ関係のないハリヨの保護を行っていたことが印象に残っています。 |
| 工場に関するお話の中で体験したり、見学できたりする施設だと知り、印象に残りました。 |
| ハリヨやホテルの話が興味深かった |

6. プログラムの満足度を教えてください。

※以下アンケート用紙裏面。未回答者がいたため、ここから回答数は16。

- (1) 全体 ①大変満足 8/16 ②満足 8/16 ③普通 ④不満 ⑤大変不満
- (2) 1日目 ①大変満足 10/16 ②満足 6/16 ③普通 ④不満 ⑤大変不満
- (3) 2日目 ①大変満足 8/16 ②満足 5/16 ③普通 3/16 ④不満 ⑤大変不満
- (4) 3日目 ①大変満足 10/16 ②満足 5/16 ③普通 1/16 ④不満 ⑤大変不満
- (5) 教職員の関わり ①大変満足 8/16 ②満足 8/16 ③普通 ④不満 ⑤大変不満
- (6) チームの雰囲気 ①大変満足 10/16 ②満足 4/16 ③普通 2/16 ④不満 ⑤大変不満
- (7) グループワークでは十分に発言することができましたか

①思ったことをすべて発言できた 4/16

②だいたい発言できた 11/16

③発言を控えてしまうことがあった 1/16

④全く言いたいことが言えなかった

(8) 自チームの提案について、自分ではどう評価しますか (100点満点で何点をつけますか)

| 点数 | 記述 |
|-----|---|
| 78 | リーダー、副リーダーが主に発言をしてくれていてとても助かりました。チームのバランスもとてもよかったです。 |
| 80 | 自分が提案したアイデアも取り入れ、そして他のメンバーの提案したアイデアもすべて取り入れたとても良い計画ができたと思います。 |
| 50 | 穴をすべて埋めることができなかった→現実性に欠けた |
| 50 | - |
| 90 | - |
| 70 | - |
| 100 | 車いすを使っているからこそ、分かることを具体的にしたところが良かった。ちょうちんを自分で作って持ち帰ることができるところが良いと思った。 |
| 100 | 中間発表では全然いい提案ができなかったのですが、しっかりまとめて自分たちのグループなりにできましたと思います。 |
| 100 | - |
| 80 | 自分の思ったことはなるべく発言するようにしていましたが、思いつくことが少なかったなのでそこは課題だと思いました。 |
| 100 | 前期の授業で似たものを受けたときは協力してもらえなくてすごく大変な思いをし、不安だったけど、このチームはみんなで協力し、いろいろな意見を出し合えて 100 点以上のチームでした。 |
| 80 | プランを提案するだけでは人は集まらないと思うので、もっと具体的に広める方法を考えるべきだった。しかし、限られた時間で細かい箇所まで詰めることができてよかった。 |
| 95 | もう少し具体的にできる部分があった気がしたから。 |
| 75 | 説明が足りなかった部分を感じた |
| 90 | 費用まで考えてはいなかった |
| 90 | もっと練習すればよかった |

7. 今後も同様のプログラムがあれば参加したいですか

①積極的に参加したい 5/16

②内容次第で検討する 10/16

③参加しない 1/16

8. その他気づいたことや感想、意見等、ご自由にお書きください。(13件)

| |
|--|
| 3日間ありがとうございました。岐阜県へは行くことができますが、海津へは久しぶりに来たのでとてもリフレッシュしながら参加することができました。 |
| グループワークも観光もとても楽しかったです。 |
| それぞれのチームから新しいアイデアを学べて嬉しかったです |
| 印象に残ったことは自然が豊かで静かなことと、色々なことを学べたことです。とくに「月見の森からの景色がとてもきれいだったことと、この地域の歴史や文化を学ぶ機会がありました。心からありがとうございました。 |
| 特に印象に残ったことはみんなが優しかったことです。 |
| 自分の体を考えると、参加をするかすごく悩みましたが、参加してとても楽しかったし、良い経験になりました。 |
| 3日間を通してチームだけでなく先生方にもたくさん協力していただきながら良い提案になるように考えることができたのでよかったです。 |

このプログラムに参加できてとてもうれしかったです。日本のことももっと知ることができて本当にありがとうございました。

海津市についてなんとなく知っているだけだったので深く知れてよかったです。グループワークでは自分自身の成長につながったと思いました。

しおりに考えるべき観点が明記されていたのでグループワークが進めやすかったです。海津についても詳しく知ることができて良かったです。

とても楽しかったです。またブランディングという自分の学科の分野に関する内容だったのでとても為になりました。

発表準備期間がもう少し長いと良いと思いました。

楽しかったです。

4. 2025年12月6日 岐阜大学公開講座 実施報告

SDGs×地（知）の拠点

大学と博物館の協働による
地域づくりの可能性

Open lecture report on December 6th, 2025
SDGs×Center of Community

Theme: Exploring the Potential of Community Development
through University–Museum Collaboration

岐阜大学公開講座「SDGs×地(知)の拠点」

大学と博物館の協働による 地域づくりの可能性

2025年 12月6日 土

13:30～16:30

FREE ADMISSION

参加無料

先着

200名



ZOOMによる
限定配信

要事前申込

12月3日 水 まで



地域協学センターWEBサイト内、『参加申込』(上記QRコード)よりお申し込みいただけます。エントリー後、当日までにZOOMの招待リンクを送信いたします。

https://www.ccsc.gifu-u.ac.jp/ccsc/index/entry_list

[お問い合わせ] 岐阜大学 地域連携推進本部 地域協学センター

TEL:058-293-3880 FAX:058-293-3881 Mail:ccsc@t.gifu-u.ac.jp

会場 / オンラインのみ

主催 / 岐阜大学 地域連携推進本部 地域協学センター

PROGRAM

13:15 オンライン入室開始

13:30 開会あいさつ

13:35 基調講演

改正博物館法と地域博物館のこれから～
美濃加茂市民ミュージアムの事例から

美濃加茂市民ミュージアム 館長 可児 光生氏

14:15 事例紹介①

関係人口と共働した博物館存続の取組み

飛騨みやがわ考古民俗館 学芸員 三好 清超氏

14:35 事例紹介②

「化石検定」化石の街ならではの域学連携

瑞浪市化石博物館学芸員・博士(理学) 安藤 佑介氏
瑞浪市シティプロモーション課 魅力発信係長 伊藤 允一氏

15:10 パネルトーク

大学・博物館・地域の協働による人づくり・未来づくり

①現場が抱える課題の共有

②地(知)の拠点としてのありたい姿の共有

③協働で地域の未来づくりの役割を果たすために何ができるか?

16:30 閉会あいさつ



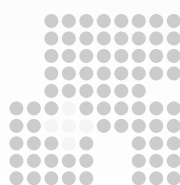
MAKE NEW STANDARDS.
東海国立
大学機構



岐阜大学

国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1 TEL.058-230-1111(代表)

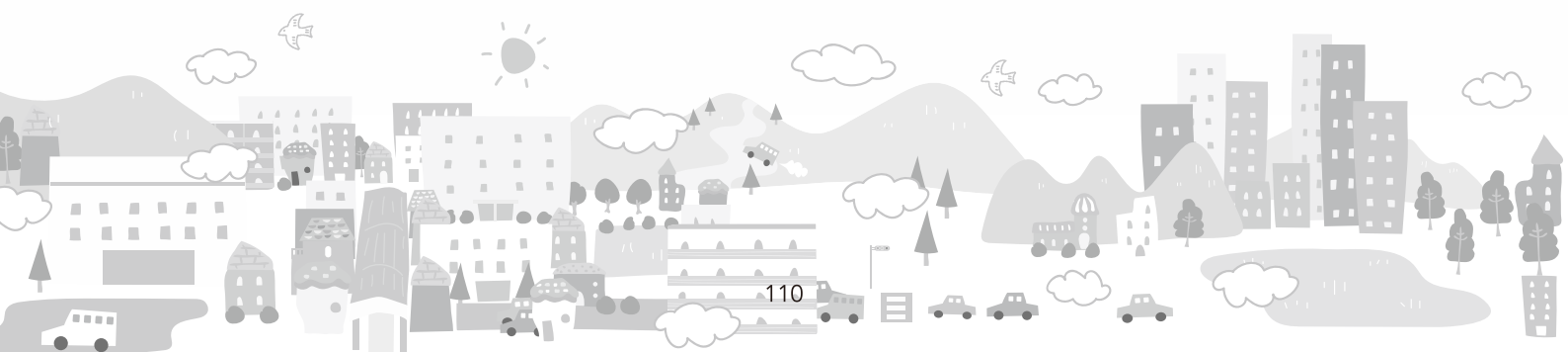


地域連携推進本部
地域協学センター

TEL.058-293-3880

[E-Mail] ccsc@t.gifu-u.ac.jp [FAX] 058-293-3881

[URL] <https://www.ccsc.gifu-u.ac.jp/>



基調講演

改正博物館法と地域博物館のこれから～美濃加茂市民ミュージアムの事例から～

可児 光生¹⁾

1) 美濃加茂市民ミュージアム館長・学芸員

美濃加茂市民ミュージアムの可児光生と申します。どうぞよろしくお願ひします。今回のテーマや趣旨にどれだけ私たちが関係するか不安ですが、美濃加茂市民ミュージアムが、ここ10年ぐらい関わっていることと、今回の博物館法の改正についてのお話を少しだけしたいと思ひます。

まず、美濃加茂市民ミュージアムの概要について、ご存知の方も多しと思ひますが、美濃加茂市というマチにある直営の地域総合博物館です。美濃加茂市は人口5万7000人ほどで現在も増えているという少し珍しいマチで、主要な街道中山道と、木曾川が交差する、今も昔も交通の要衝として栄えてきた町です。

開館したのが2000年10月で、今年でちょうど25年を迎えます。教育センターを併設しており、この辺が少し特徴的な施設かと思ひますが、本館と実習棟、民具展示館、それから現代美術作家などの滞在を想定した宿泊アトリエ棟などを設けている施設で、面積が5900平米ほどです。先ほど申し上げましたが、美濃加茂市民ミュージアムは美濃加茂市直営の登録博物館です。職員は20名ほどで、会計年度任用職員が13名を占め、正規職員は7名、うち学芸員が、考古、歴史、民俗、美術、自然史という、そういうメンバーが関わっている施設です。入館料は、博物館法の原則に則り、今も基本的には無料です。年間の入館者数は6万5000人ほどです。

館の持っている理念について少しお話をしたいと思ひます。まさに今回のテーマに関係します

が、「さまざまな地域資源が活かされ、ここで自由で深まりのある文化活動と多様な交流が行われるよう願っています。人々の「暮らしの一部」として利用され続けるとともに、まちや社会にとって必要とされる場になることをめざします」というのが館の理念として持っているところです。2020年度に、館が目指すビジョンというものを少しまとめた時に、その役割を整理しました。1点は、「ひとと暮らしをつなぐ」ということです。館が持っている作品や資料に、新たな見方を提案して、人々の好奇心につなぐ、日々の生活に刺激や潤いをという、個人的な側面を挙げています。もう一つはパブリックの側面で、「ひとと地域をつなぐ」という内容です。地域の資源を守り、掘り起こして新たな社会的な価値を示す、いわゆる「まちづくり」や「シビックプライド」につながるような、そんな活動を館の役割として持っています。具体的な活動の柱としては、「自然との共存」、「博学連携」、「市民参画」、「交流と地域」というものをキーワードにして進めているところです。

今日お話しする目次ですが、今まで美濃加茂市民ミュージアムが特にここ10年ぐらい関わってきた内容をお話しするのが中心となります。まず今回2022年に改正された博物館法改正とその背景について少しお話をします。2つ目に、そもそも地域とは何だろう、地域資源とは何だろうということについて、館が行った展覧会での話をしながらお話をしたいと思ひます。3つ目に、博物館

美濃加茂市民ミュージアムの概要

名古屋から北方へ約30kmの岐阜県南部の小都市 人口 57,072人 2020/11/10 現在
主要街道中山道と木曾川が交差する、昔も今も交通の要衝

- 開館 2000年10月
- 総称/通称 「みのかも文化の森」 * 教育センターを併設
- 施設 本館(展示、収蔵)、実習棟、民具展示館+生活体験館
(香斎民家を復元・昭和30年代のくらし)、宿泊アトリエ棟
(本館延床面積約5,900㎡、敷地全体面積 約95%)
中規模な地域総合博物館
- 自治体 (美濃加茂市) 直営の登録博物館
- 職員数 20名(正規職員7、会計年度任用職員13)
(うち学芸員 6名(考古・歴史・民俗・美術・自然史))
- 入館料原則無料
- 年間入館者数 65,247名(2024年度)



美濃加茂市民ミュージアムの理念

「さまざまな地域資源が活かされ、ここで自由で深まりのある文化活動と多様な交流が行われるよう願っています。人々の「暮らしの一部」として利用され続けるとともに、まちや社会にとって必要とされる場になることをめざします。」
http://www.forrest.mino-ama.gifu.jp/www/about_bunkanomori/pdf/D1/p03_rinen.pdf?20211129

その役割

- ①ひとと暮らしをつなぐ 《private》
作品や資料に、新たな見方を提案、人々の好奇心につなぐ
一人々の生活に刺激と潤いを
- ②ひとと地域をつなぐ 《public》
地域の資源を守り、掘り起こして新たな社会的価値を示す
—いわゆる「まちづくり」「シビックプライド」に活かす

活動の柱

「自然との共存」「博学連携」「市民参画」「交流と地域」



「思いをめぐらし、はじまる森」
1300坪

の基本的な機能になると思いますが、集める、守る、調べるといった地域資源の情報を整えることについてのお話をし、次にその活用と展開の形として、暮らしにつながる地域資源というものについて少し考えたいと思います。最後に、社会的な存在としての地域博物館と、博物館の連携のあり方、このあたりも今回の博物館法改正で触れられていますけれども、それについて少し最後に話をしたいと思っています。

博物館法改正とその背景

まず、博物館法改正について、2022年に改正され、その翌年から施行されている改正博物館法ですが、1951年に博物館法が制定されました。元々は憲法というものがあるわけですが、その後に教育基本法ができ、社会教育法、さらに個別法として図書館と博物館に関する法律ができて、それが現在に繋がっています。大きな教育法体系の中にあるということはあると思いますが、ここ数年の動きとして、文化芸術基本法、それから文化観光推進法、さらに文化財保護法の改正などがあり、そういうものが今回の博物館法改正に大きな影響を与えていると考えます。そのあたりを、条文を見ながら話したいと思います。

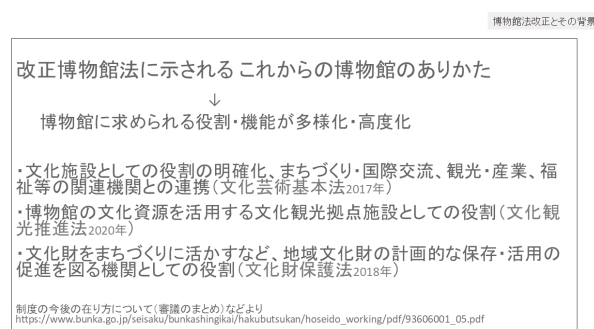
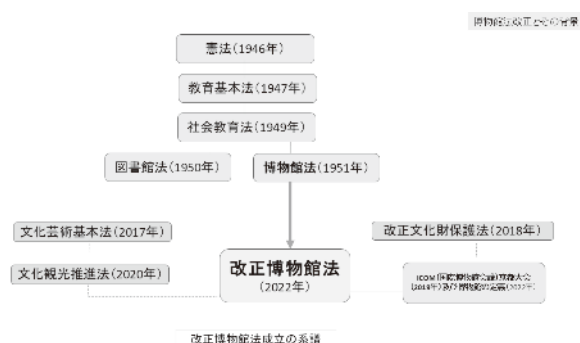
少し話が大きくなるかもしれませんが、教育基本法を改めて見てみると、前文のところに、「我々は日本国憲法の精神に則り」という言葉があります。この日本国憲法には第26条に「ひとしく教育を受ける権利を有する」という項目があります。これが教育基本法、そして関連する博物館法の一歩の根底にある理念、精神だと思います。それが徐々にそれぞれの法律に広がっていくわけですが、教育基本法の第12条に「国及び地方公共団体は、図書館、博物館、公民館その他の……」と、社会教育の振興に努めることが決められています。それに基づいて次は社会教育法が作られます。その第9条に「図書館及び博物館は、社会教育のための機関とする」ということが明記されています。社会教育法によって博物館は社会教育施設で

あることが法的にも裏付けられているわけです。

今回の博物館法の改正の条文を見ていこうと思います。目的という欄が大きく変わり、改正前は「社会教育法に基づき」という文言だったところに、「文化芸術基本法の精神に基づき」という文言が明らかに追加されました。色々なものが今回の博物館法改正で追加されましたが、その中で博物館の事業というところが大きく項目が増えています。第3条の中に、1項に続き2項、3項ができました。この新設された2項には、他の博物館、指定施設その他のこれらに類する施設との間において、相互の連携を図るという博物館同士の連携を挙げています。第3項には、第1項各号に掲げる事業の成果を活用すること、地方公共団体などと相互の連携を図るように協力し、当該博物館が所在すること、地域における教育、学術及び文化振興、そして文化観光を推進することが示されました。

この「文化観光」という文言は博物館法の中では今回初めて出てきましたが、これができる2年前に文化観光推進の中で定義されている言葉です。有形又は無形の文化的所産その他の文化に関する資源を文化資源という、ここで文化資源の定義をし、それらの観覧、文化資源に関する体験活動云々と文化観光の説明をして、その他の活動の推進を図り、もって地域の活力の向上に寄与するよう努めるものとなっております。この第3条の第3項あたりが、今回の博物館法の大きな特徴であると思います。今回の博物館法については、5年前（2017年）の文化芸術基本法と、それから2年前（2020年）に作られた文化観光推進法に色濃い影響を受けているものだと考えています。

その言葉が出てきた背景を少し考えて、もう一度、文化芸術基本法（2017年）を見てみると、第2条に挙げられた基本理念、ここの項目の最初に観光という言葉が出てきています。「観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業、その他の各関連分野云々…」となっていて、そこで連携を図



ることが必要だということと、第26条に、「美術館、博物館、図書館等の充実を図るため、国は必要な施策を講ずる」ということが明記されています。ここに挙げている観光という言葉は、その3年後に成立する文化観光推進法によって、さらに「文化観光」という概念に発展してきていると思います。

この文化観光推進法の定義に、「この法律において文化観光とは...」とあり、これが先ほどの博物館法の第3条の文言とまるっきり一致していることから、博物館法の前提にはこれがあることが分かります。この文化観光推進法の第2条2項では、文化観光拠点施設というものを定義しています。この「文化資源の保存及び活用を行う施設(文化資源保存活用施設)」とは、実際に文化資源の保存と活用を行う美術館、博物館、社寺、城郭等ということになります。この推進法においては「文化の振興を起点として、経済の牽引や国際相互理解の増進につながる...」と、最終的には地域の活性化を実現する目的で成立するものです。

一方、文化財保護法が2018年に改正されています。何度も文化財保護法は改正されていますが、この時の改正の一番大きな点は、文化財の活用のために、まず都道府県が「文化財保存活用大綱」を作り、その下に今度は基礎自治体が「文化財保存活用地域計画」を作ろうということがここで打ち出されました。それに基づいて、美濃加茂市も2022年から24年にかけて策定をしています。具体的に、文化財保存活用大綱、文化財保存活用地域計画の原則として、必ずしも文化財(=指定文化財)に限定しないものであっても、もう少し広く文化財を捉えようと、文化的所産という言葉を使いながら、周囲の環境や、そこで行われる伝統的な活動なども含めて活用・保護・保存していく必要があることを謳っています。このあたりも博物館法改正に結構影響していると思います。

今回の博物館法改正の背景を見ても、教育法体系の大きな流れに関連しながらも、文化芸術基本法と文化観光推進法、文化財保護法の関係

も色濃く残しているという感じがします。文化庁の今回のこの法改正に示される博物館の在り方を整理すると、博物館の役割と機能が多様化、高度化している中で、文化芸術基本法、文化観光推進法、文化財保護法といったものを含めた機能がこれから付加されていくということを行っています。

改めて改正博物館法を見てみたいと思います。第2条で「博物館とは、資料を収集し、保管し、展示して、教育的配慮の下に...」となっています。これを読み込んでみると、そもそも博物館とは誰のために?これは一般公衆のためであると、何のために?これは一般公衆のための教養、調査研究、レクリエーションに資するためで、教育的配慮に気をつけながら最終的に博物館の資料の収集、保管、展示、調査研究することだというふうに定義づけています。

今回の一連の改正を見ながら個人的に思うことなのですが、活用や地域の活性化というものは大事ではありますが、その基盤となる博物館の基本機能である収集、保存、調査研究、展示・教育がおろそかにならないかと懸念されます。まさに地道な活動があつてこそその活用だとは思いますが、そのあたりが一つ心配だということです。そもそも、地域文化資源というのは徐々に蓄積して創造していくものだと僕は思っています。ですから、活用の名のもとに消費され続けるのではないかと少し心配しています。それから博物館の原点である学びの場という、本来社会教育の拠点であり、生涯学習の場として位置付けられたその基本的なスタンスが、揺らぐことになるのではないかと少し懸念されると思っています。

そもそも地域資源とは?

そもそも地域とは何だろう、地域資源とは何だろうということを、美濃加茂の例を取り上げながら、少しだけお話をしたいと思います。2017年に、「まちのいいものよいところ」という展覧会を山

地域にはその資源に



地域にはその資源に

◇足元にこだわる 市の広報紙の連載を通じた地域資源紹介

- 「辻の風景」(2004～2006年度・38件)
- 「美濃加茂新24景」(2013～2016年度・24件)
- 「バス停からの小さな旅」(2019～2021年度・36件)
- 「書かれた「この地」を読む」(2002年度・12件)
- 「みのかもの山、望む山」(2022年度・12件)

など、地域特有の景観などを調査した成果を紹介し、「これまで調査してきたこと」のコンテンツとしてすべてをHP上でpdf公開



広報紙

之上という地区に絞って行いました。これは合併する前の旧村なのですが、そこに焦点を定めた展覧会ということで、そこではいわゆる指定文化財も少しは紹介しましたが、むしろそうでない未指定文化財などを中心としてピックアップしました。具体的には、かつてその地域の人たちが通った学校道と言われている通学路や、昔謡われていた音頭、ため池と記念碑、さらに現在この山之上という地区は果樹の生産が盛んなのですが、そこに広がっている果樹園の支柱に目をつけるなど、何気なく見ている風景などを紹介しました。これらはいわゆる指定文化財でも何でもないので、これまでの人々の暮らしの証や営みそのものであると考えました。あまりにも身近すぎるのでは、とは思いましたが、「ああ、そういうことだったんだね、気がつかなかったね」と、新たな発見を提示できて、共感も集めたと思います。そうして、非常に思ったことの一つに、地域、地域と言いますが、その一番の基本というのは、小学校の校区の単位じゃないかということをおもいます。そこで住民の間の一体感や固有のアイデンティティが生まれるのだと、そこが原点であるということを感じました。地域の暮らしの営みそのものが地域資源だと、自分はこの時の展覧会を通して少し感じました。

チラシの写真に写っている、普通の果樹園の支柱が実は力学的に意味があるということで、1個1個に商標登録のマークが付いていて、それを改めて紹介して皆さんに見てもらいました。今まで一度も館に来たことないような人も来られて、最初は本人が来て、次に家族を連れてきて、さらに親戚まで連れて来たというように少し反響を呼びました。何の変哲もないようなものですが、何かしら住民が関わってきたものです。そこには住民の心がこもっていたり、記憶がその中に込められていたりというのが多いことについて、改めて自分たちとして気づかされました。

今は美濃加茂市の中の1地区、山之上という地区を紹介しましたが、行政区分としての自治体が

必ずしも地域とは限らないと思います。美濃加茂市と言えば、木曾川とか中山道太田宿というのをイメージされますが、実際は美濃加茂市の南西部だけのものであって、今の山之上地区を含めて、地域外の人から見たら、はっきり言って興味関心はそれほど高くはないです。

むしろ木曾川ではなく美濃加茂市は長良川水系なのです。蜂屋川や川浦川といった川は全て西側に流れていて、水系的には木曾川水系じゃない面積の方が広いです。美濃加茂市は一つの自治体として、総合体としてあるわけですが、個別の地区が集まっているのだということに改めて感じているところです。もっとその地域にある足元の資源を見つめて、その風土は何だということを考えるような、そんなことを考えていきたいなと思います。

足元にこだわるということで、美濃加茂市の広報誌を使った連載を、2000年に博物館ができて少ししてから徐々に紹介をしています。最初は地域にある辻です。交差点にある風景を探してみようというものです。それから「美濃加茂新 24 景」。それから「バス停からの小さな旅」ということで、コミュニティバスは美濃加茂では結構充実していますが、そのバス停から降りた近くのものを探してみる。それから「書かれた『この地』を読む」ということで、かつての美濃加茂を取り上げた作家から見たこの地域の感覚や特徴を探してみようというものです。それから最後に、美濃加茂の山ということで、地域にある山とそこから望める山なども含めて紹介をするなど、こういったものをまとめて、これまで調査してきたことをコンテンツとして現在ホームページで公開をしています。

その中でも「バス停からの小さな旅」というものについては、その趣旨として、展示室内で展示を行うだけではなく、身近にある様々な文化資源に光を当てる役割があるということを最初に謳っています。そういった視点で、学芸員がそれぞれの分野で調査したものを 36 か所紹介していま



展示でも紹介
 ◇「バス停からの小さな旅」展(2022年)
 美濃加茂市内に運行されているコミュニティバス(愛称「あい愛バス」)に乗りながら、歩いて現地を散策するという企画(市の広報誌に3年間毎月連載)を展示したものの、市民からの情報も貴重。
 展覧会の趣旨は次のとおり。
 《地域のミュージアムには、展示室内で展示を行うだけではなく、身近にあるさまざまな文化資源に光をあてる役割があると考えています。ふだん通り過ぎてしまっているような場所を、「へえー」「そうだったの」と何か発見をすると少し楽しくなりますね。
 みのかも文化の森の学芸員がそれぞれの分野で調査し、「広報みのかも」で2018年5月から3年間におたつて「バス停からの小さな旅」として連載してきた「隠れたスポット36」を一挙紹介します。2022(令和34) 美濃加茂市開市35周年記念事業》



す。身近にあるアートというものも地域資源の一つで、市内にある色々な作品、神社にある奉納額といったものも紹介するなど、ひたすら足元を調査して蓄積する作業をしています。

まちの誇りというのの一つだけではないと思います。むしろ小さな、ささやかな誇りというのがたくさんある方が、地域としては豊かだと思います。まさに多様なものの集合体だと思います。日々の暮らしの中でちょっといいものを見つけて、掘り下げるといふこと、それを下支えするのがミュージアムの役割だと思います。そこでも博物館の役割が求められる。博物館の出番ではないかと思っています。

地域資源情報をととのえること

地域資源情報をどのようにしたらいいかということで、博物館の役割はととのえること、ということ。そもそも博物館における資料は当然、収蔵資料が中心になるわけですが、むしろ収蔵資料として館の中になく、現地にあるものも含めて、僕は全体でこれを地域資源と考えています。場や景観、風景、そもそもそれは博物館で収蔵できないものです。そういうものも含めて光を当てたいですし、それから収蔵資料といっても、それは必ず現地はあるわけです。もともとは博物館にあったわけではないので、現地を見てもらうということも意識しながら、全体で地域資源というふうに捉えていきたいなと思っています。

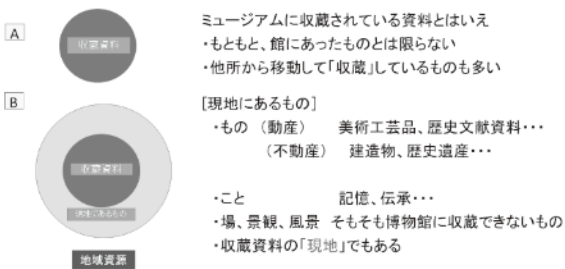
収蔵資料と地域の現地にある資料を合わせて、包括して地域資源、これこそがミュージアムが対

象とするものであり、そこに目を向けてこそ地域が見えてくるというふうに思っています。かつて君塚仁彦さんという人は、ミュージアムというのは「地域資料の保管庫」であると、そして「地域社会の記憶庫」であると言いました。なるほどな、と思いこの言葉を気にしながらやってきていますが、その考え方が大事ではないかと思っています。

地域の情報といえば、市民からすると図書館が結構近いと思いますが、美濃加茂では図書館と博物館が情報共有するという集まりを定期的に行っています。それぞれの館が持っている情報を把握しあうということもありますが、もう一つ大事なことは、市民からの問い合わせ、レファレンスの内容を情報交換しながら、市民からどんな問い合わせがあるということを知り、お互いに確認しあうことです。美濃加茂市民ミュージアムでも、それぞれ市民から問い合わせの内容を記録していき、本当に多種多様の問い合わせがあります。そういった知的好奇心に答えるために何か手立てはないかなと、2011年から始めているのが、「美濃加茂事典」というものです。言ってみれば地域デジタル事典ですが、これは本にしているわけではなく、ホームページ上で色々なデータベースやコンテンツを結びつけたネットワークです。

例えば筏という項目をここに挙げていますが、その簡単な紹介をして、その下に基本図書や図書資料、歴史資料、写真、過去にあった展示資料、展示情報、色々なものを絡み合わせて、リンクするところに一つの特徴があるかと思っています。項目

博物館における収蔵資料と地域資源



地域資源情報をととのえる

地域資源情報をととのえる

収蔵資料+地域の現地にある資料 = 包括して地域資源

→これがミュージアムが対象とするもの
そこに目をむけて地域が見えてくる

ミュージアムは
「地域資料の保管庫」「地域社会の記憶庫」
(君塚仁彦「地域のなかの公立博物館とその存在意義を再考する」2011)

地域情報といえば「図書館」

市民ミュージアムと市立図書館との情報を共有

- ◇それぞれが持っている地域情報を把握
 - ・図書館…開架郷土資料、閉架図書資料
 - ・ミュージアム…収蔵資料(モノ)、調査研究資料

- ◇それぞれのレファレンス活動の状況
 - ⇒市民の知的関心、くらしの課題の傾向を把握

どうしたら市民の知的要求に応えることができるか



地域資源情報をととのえる

地域資源情報をととのえる

ミュージアムに寄せられるレファレンスの記録

| 品名 | 品名 | 品名 | 品名 | 品名 | 品名 |
|----|----|----|-----|-----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 |
| 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
| 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 |
| 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 |
| 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 |
| 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 |
| 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 |
| 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 |
| 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 |
| 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 |
| 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 |
| 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 |
| 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 |
| 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 |
| 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 |
| 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 |
| 97 | 98 | 99 | 100 | 101 | 102 |

分野は
多種多様

コスト情報
が多い

このような知的好奇心にこたえるためにも →

内の事項 1 個 1 個に URL を持っており、検索すると繋がるので、自分たちも普通のネット上で検索すると、美濃加茂事典にヒットして、何か自分たちのやっていることが戻ってきたと思うことがあります。まさに更新する「美濃加茂版ウィキペディア」だと思っています。美濃加茂事典には過去の展覧会情報とこれまで調査していたことや、学芸員が調査してきた論文、そういう収集資料もセットにしながらかつていていくという状況です。こういった誰もが使える地域資源データベースというものが、地域の再発見や掘り起こしにつながる基本だと思います。「資料の公共化」、「文化的コモンズ」という、公共的な財産としてこういうものを位置づけて、積極的に利用してもらえるように進めていくのが博物館の大きな役割だろうと思います。

ミュージアムは当然展示をしますが、モノやコトを含めた「地域情報センター」という役割も、一方でその大事な側面だと考えています。そのことを踏まえて、実際にどのように活動を展開しているかということを紹介いたします。

美濃加茂市の市民ミュージアム常設展示室を模様替えしたのが 2020 年なのですが、その時に展示してあるものに対して、実際に現地での情報を「イッテミテ」という名前で配布するワークシートを作ってみたり、パネルで紹介したりして、その展示品と現地をつなげるというような活動をしています。これは常設展示室が始まったのですが、以後企画展の中においても色々な展示品を並べた最後に、一体これはどこにあるのだろうと

いうことを現地に行ってみて、その場所に誘おうというコーナーを用意するようになりました。

現地に行ってから再度もう一度展示品を見る時に、また新たな目でその展示と対話することができる。そうしてこれまで気がつかなかった足元の地域資源と、美濃加茂市民ミュージアムの展示品を結びつけ、紐づけるという役割をここで果たしていると思います。2020 年に展示室内でパネル紹介していた石仏の現地ツアーを開催したところ、該当地区の「まちづくり協議会」という自治会を中心としたその地域の自主的なグループの人達の参加がありました。そのメンバーの一人が石仏の歴史的な価値を全然知らなかったと、それを地域の「ほこり」であるとツアー直後に地域の広報誌で紹介してくれたので、少しずつその地域にも石仏の存在は広がりを見せていると思います。改めて、僕たちもこれからまだ地域の人達に対して聞き取りをしながら調査を深める必要を感じています。

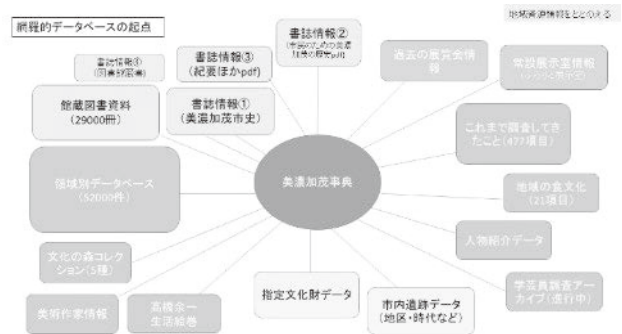
また、先ほどの山之上展の続きですが、2017 年にやった後に、子ども音頭という音楽の歌詞の文章を見ながら、いったいこの文章の「おおいけ」とはどこにあるのかということを知りたいという地域の方が調査を始めた。それから獅子芝居の中に使われている道具などを地元の高校が調べて、それを演劇部が演じるといった、住民との交流、高校生と地域住民の交流も行われました。こうした展示がきっかけになって、いろいろな活動に転化しているのかなと思ったりしています。

地域デジタル事典

美濃加茂事典 (2011年度～現在1,043件)

- 美濃加茂市民ミュージアムのHP上で、異なるデータベースやコンテンツを結びつけたネットワーク
- ⇒ことがらの簡単な解説+「ミュージアムデータベース」など関連事項へのリンク
- ⇒項目内の事項にもリンク
- ⇒更新する「美濃加茂版ウィキペディア」

地域資源情報誌との連携



美濃加茂市民ミュージアム展示における現地探索のための「イッテミテ」

- 2020年の常設展示室もよう替えにおいて導入
 - 常設展示室内において、現地へいざなう情報を「イッテミテ」という名称の小冊子にしたり、持ち帰りできるシートを用意
 - 展示されている考古資料の出土地、人物として紹介されている津田左右吉の「生家」、かつての筏の中継地など
 - 以後、企画展においても、展示終盤に「イッテミテ」コーナーを用意
 - 現地へ赴いてから、再度、展示品を見ることもある。その時には、また新たな意図や観点でそのものと対話することになる
- これまで気が付かなかった足元の「地域資源」と市民ミュージアムの展示品を紐づける



◇足元の石仏の再発見とほこり

2020年、常設展示室内でパネル紹介を行っていた三和町の石仏を訪ねる現地ツアーを開催した。身近にありながら知られていない石仏の存在、そして現地の空気や風景を知ってもらいたいというねらい、地域の資源は博物館の展示室ではなく現地にこそある。

該当地区の「まちづくり協議会」のメンバーも参加、担当学芸員の解説を聞いて、石仏が歴史的に貴重な価値があることを初めて知り、それに触発されて地区の「ほこり」としてツアー直後の会の機関紙で紹介した。

改めて、地域住民からの聞き取りなどを進めていく必要がある



食文化も大事にしている分野です。ボランティア組織で「美濃加茂伝承料理の会」というものがあるのですが、そのボランティアメンバーが定期講座をやったり、冠婚葬祭風習といった地域行事に伴う料理を調査再現するという特別講座をやってくれています。特別講座は今まで 20 何回行われていますが、そういう中で市民ミュージアムが収蔵する歴史記録や写真、民俗資料も提供して、総合的な観点での記録ができ、それをホームページにもアップしています。

地域の資源を発見するのは、地域住民や博物館だけではなく、まるっきり違う視点で見える人達、具体的には現代美術やアーティストの方々もです。そういう切り口か！とびっくりすることもいっぱいあります。彼らの中でこの地域を見つめて、その記憶を再現して作品を作っていくのですが、かつての営みなんかを彼らは作品として呼び起こす凄い人達だと思います。この写真は、昔の民家をアーティストが現代美術に使った様子です。民家の前に明治時代につくられたこの地域の用水が流れているのですが、その作家は塀の隙間に鏡を取り付けて部屋の中から覗くというような作品を作ったのです。アーティストが捉えた地域資源へのまなざしをみんなで共有したのだと思いました。

それから「きそがわ日和」という NPO 団体も、この木曾川や太田の宿場の、昔ながらの地域の魅力を発信する活動をアートとしてやっていて、こういった側面も大事なことかなと思っているところです。こうした地域の資源を掘り起こす作業

の蓄積というのは「市民知」、それから博物館の「学術知」、さらにいろんな方、アーティストの +α があって、新たな社会的価値を示す、それらが「シビックプライド」になっていくのではないかと感じているところです。

先ほど少し話しましたが、美濃加茂市は「美濃加茂市文化財保存活用地域計画」を策定しました。そこでは、「想いがつながり、深まりつづけるまち」というものを願いとして、「みのかも地域文化資源」と位置付けた、美濃加茂市の暮らしの中で大切にされてきた私達の営みを表す証となるものを紹介しました。指定文化財ではないものをメインにしてやっていきたいということで、この4月から5月にかけて展覧会を開きました。多様な地域文化資源を紹介しています。全部を紹介する時間はありませんが、小中学校の校歌の歌詞に歌われている色々な風景や人物、そういったものも、実は大事な地域文化資源であることに気が付きました。それから佐野一彦という哲学者が見た里山文化等々を紹介しました。現在も既に展開されている地域に関する絵本や、色々な冊子やマップなども紹介しながら、地域の拠点施設として美濃加茂市民ミュージアムが取り組むことのその可能性と課題を展開した展覧会となりました。

社会的な存在としての地域博物館と連携

今回の博物館法改正に伴って、文化庁は文化審議会博物館部会などで審議を行い、まとめました。その文化審議会博物館部会に、実は美濃加茂市民ミュージアムのある美濃加茂市長も臨時委員と

◇「まちのいいものよところ山之上展」(2017年)のその後

「おおいけ(大池)の調査

地区内小学校において、展示で取り上げた山之上子ども音頭の歌謡「おおいけ ほい 池のまわりに百町歩 梨畑 柿畑 ふどう畑・・・の池について、現在はなくなっているがかつてはほどにあったものなのかを市民ミュージアム資料と聞き取りを中心に調査



「十二社神社の獅子芝居」の調査と演劇

紹介した獅子芝居は存亡の危機。それについて、地元高校の演劇部が取り上げ、ミュージアム保管の道具や記録写真など調査を深める。それをふまえて地域の催事で上演、住民との交流も行われる



市民ミュージアムの展示がきっかけ、それを手掛かりに展開

◇地域の食文化の調査と普及～美濃加茂伝承料理の会の活動～

美濃加茂伝承料理の会施設オープンに先立、生活体験館「まゆの家」を会場にして、地域に伝わる料理を取り上げ、調べて作る活動をしている。年間8回ほどの定期講座「四季を食べる講座」のほか、冠婚葬祭や風習、地域行事にともなう料理を調査再現する特別講座を開催(これまでに21回)するほか、展覧会テーマに関連する料理を調査、再現する活動をしている。市民ミュージアムで収蔵する歴史記録や写真、民俗資料も提供、参考にもたらす。これらの調査成果は「おばあちゃんちのおかつて」(全4集)として発行、販売している。



《道ふしんの料理》(2016年)

昔は地域ごとで道譜を修理「道譜箱(みちふしん)」した後、部劣の食事をしていた。味噌、みそ汁、なすの田舎煮、きゅうりとなすの畑産漬け、七つもりを味わった。

- ・地域の資源を発見するのは、地域住民や博物館だけではない
- ・別の視点や発想を持った現代美術・アーティスト
- ・・・作品を通して記憶を再現、かつての営みを呼び起こす



「盛り展」2023年
地域の用水を作品
子どもの感覚もすこい

「きそがわ日和」2010年から 市民団体による
現代美術のアートプロジェクト
アートをととした地域魅力を発信



- ・地域の資源を掘り起こす作業の蓄積
「市民知」+「学術知」 +α

- ・あらたな社会的価値を示す
- ・それらが「シビックプライド」となっていく

して参加し、私もこの辺の審議を見守ることができたのですが、そういうものを通して出された方向性にこの5つがあります。「守り、受け継ぐ」、「わかち合う」、「育む」、「つなぐ、向き合う」、「営む」というもので、まさに社会や地域の課題への対応、これからの博物館に求められる役割だということを明記しています。そもそも、地域博物館の役割とは何だということについて言うと、かつて伊藤寿朗が『市民のなかの博物館』(1993)の中で、「利用者とは、展覧会観覧者だけではない。地域課題に向き合う人々にも視野を向けなければならない」ということを言っていますし、「地域の課題は、市民自身が主体となって取り組むことが基本である」、「地域の課題に、博物館の機能をとおして、市民とともに応えていこうというのが地域博物館である」と言っています。この言葉は今も何も変わってないと思います。

そもそも、地域や社会の課題とは何かというと、よく言われる少子高齢化や、地場産業の低迷、多文化共生、地域コミュニティの喪失など色々ありますが、こうした課題に対して博物館的切り口で関わることができると思います。既に回想法というやり方で関わってるところもたくさんありますが、美濃加茂の一例としてあげますと、医療や健康の面での関わりということで、「博物館浴」というものを2回ほど行いました。

森林浴のように、博物館を様々なストレスを軽減する癒しの場として注目しようということで、九州産業大学の緒方さんが提唱している言葉です。2021年に、すぐ隣に中部国際医療センターが

できたこともあり、福祉や医療の人たちに呼びかけて展示室を見てもらい、その前後で心理的・生理的な数値の変化を見る実験を行い、そこで一定の癒し効果を得ることが実証されました。先月、2025年11月にも同じく中部国際医療センター付属の健康増進施設利用者の方々と市民ミュージアムの方々と、計36名ほども加わり、博物館周辺の森も含めて観覧、散策し、脳の疲労度や自律神経のバランスなどを測定した結果、約6割の人に改善効果を確認することができました。展示室を見たり、森の中の施設や自然を見たりして、心理測定をすることを通して、博物館の施設を使った一定の効果が裏付けられています。

連携にも色々な連携があるわけですが、岐阜県博物館協会が、ここ数年、特に色々連携を深めていると思います。色々な情報交換、検証を並行しながら、資料保存活動も盛んにやっています。2024年、能登の震災で飛騨の施設で被害が若干あった時に、博物館協会のメンバーが修復のお手伝いをさせてもらったりしました。他にも、関係団体との情報共有で、県内にある岐阜県の歴史資料保存協会や郷土資料研究協議会のメンバーとの情報共有をしながら、色々これからのあり方を探っています。相互の信頼関係を構築して、お互い顔が見える関係性を築くことが第1番だと思っています。

連携という面でいうと、美濃加茂は学校教育との連携をずっとやっていて、主体的な学びを支援する場として学校現場からの期待も大きいと思います。指導要領が2020年に改訂された時に、

連携のかたち

◇岐阜県博物館協会

- ・岐阜県内の博物館 異館種との交流
- ・日常の博物館業務の情報交換、研修
- ・調査研究成果の公開
- ・平常時の資料保存活動
- ・非常時のレスキュー活動と体制組織の構築
2024年能登震災時における飛騨での活動
- ・さらに関連団体との情報共有、相互交流
+岐阜県歴史資料保存協会
+岐阜県郷土資料研究協議会



・相互信頼関係の構築、お互い顔が見える関係性

◇学校教育との連携

主体的学びを支援する場として、学校現場からの期待

◇2020年4月から全面実施されている新学習指導要領(小学校)での大きな改訂

○「…地域の図書館や博物館、美術館、劇場、音楽堂等の施設の活用を積極的に図り、資料を活用した情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実すること。」(小学校・総則)

○「主体的・対話的で深い学び」を実現するための方策の一つとして、「資料を活用した情報の収集」「調査活動」として具体的内容が初めて示された。それはいわゆる調べもの学習で利用される地域の図書館と同様な位置付け



◇博物館を学校が一方的に利用するのではなく、両者が主体的にかかわる「連携」が前提

学校と博物館が共同で資料・活動室を併用 (美濃加茂市民ミュージアム)

◇学校教育との連携

◇子どもたちの知的欲求や学校現場に対応するために

◇展示品や収集資料にとどまらず、「地域資料」「地域資源」を効果的に情報提供できる体制が望まれる。

小学校3年生が学習する社会科「市のうづりかわり」の内容に関する資料をまとめたもの
昭和30年以降の美濃加茂市の歴史をテーマごとに編集したもの (A4判、49ページ)



美濃加茂市のY地区まちづくり協議会

「魅惑的な色と爽やかな酸味を持つローゼル栽培」を企画

…栄養豊富で美容と健康に良いハーブ

○この地域には何の特産品もない、地域とは関係ないけれどこんなのはどうだろう
現在ではそれなりに定着し、知られるようになった

○この地域では明治から大正にかけて百合の栽培が盛ん
○その歴史を博物館は地域に伝えることができなかった
○もしそのことが伝わってれば、伝統を生かした地域特有の個性的な生産、取り組みができたかも。



…地域へのかかわりをもった博物館の存在感がなかった

「情報の収集や鑑賞等の学習活動を充実する」と、総則に初めて博物館を利用する目的が明記されました。それから「主体的・対話的で深い学びを実現するための方策の一つ」として、資料の情報や調査活動の場として博物館が位置づけられました。博物館を利用する学校現場からの期待が、ますます大きくなっていることがわかります。

学校教育との連携という意味で、「みのかものうつりかわり」という、小学3年生が学習する内容を、資料にまとめて配布しています。

大学との連携は美濃加茂市の方からなかなかできませんが、岐阜大学地域協学センターが発行する「地域志向学」創刊号の巻頭に書かれているセンターの位置づけが今後の方向性を示していると思います。私としては、岐阜大学の貴重な資料の宝庫であるアーカイブコア、「知の拠点」としての資料を多面的に利用できる関係があるといいなと思います。また、地域の博物館と大学との関係性をもう少し構築できるといいなと思っています。そういう中で、先ほど少し言いました地域文化財のレスキュー、これは平常時もあれば非常時もありますが、そういった中で中核的機関として関わっていただくことができればいいなと、個人的に思っています。

おわりに

美濃加茂市の Y 地区というところのまちづくり協議会は、かつてローゼルの栽培を企画して、この地域は何もないからこんなものを用意して地域振興を目指そうということが言われて、一定

の普及がされて、今では知られるようになりました。ところがこの地区は、明治から大正にかけて百合の栽培が盛んだったことがわかっていたのです。しかし、それをこの地域の人たちに僕たちは伝えることができませんでした。もしそのことが伝わってれば、そういう伝統を生かした地域固有の個性的な生産や取り組みができたかもしれないと思うと、この時には地域の関わりを持った博物館の存在感が何もなかったということについて、とても反省をしているところです。

一方で、K 地区のまちづくり協議会では、「木曾川に親しみ楽しめる空間づくり」を住民主体で計画し、色々な樹木を整えて遊歩道を作るという時に、外部の方から遊歩道を周るレンタサイクルの事業を提案したいということがありました。そうすれば観光客が大勢来て、その魅力をアピールできると提案されたそうです。しかし、地元として、自分たちはこの地域に住む人たち、特に子どもや孫世代に対して木曾川の良さを伝えたい、賑わいよりもっと地に足のついたものを作りたいということをおかれていて、僕はドキッとしました。やはりこういった長期的な視点や、暮らし重視、地域志向というものは、忘れてはいけない側面だと思います。

こういうところで博物館に何ができるだろうと考えた時に、これについてできてはいないので、**「エノキ」とか「ムク」の樹木植生調査**をしたり、かつて木曾川で採れた丸い建材の石**「玉石」**に関する歴史を調査したり、それから**「渡し船」**の船頭の話の聞き取りを一緒になって行うこと



計画策定の成果と今後は展覧会に

○身近な多様な地域文化資源を紹介

- ・市内14の小中高の校章
- ・ため池「鯉つかめ」の行事
- ・商家の視点で見つけて描いた「ペーハ小屋」
- ・植物分布から見た交差点としての美濃加茂
- ・哲学者・佐野一彦が見た里山文化

○すでに展開されている活動と広がり

- ・小学校で発行されている絵本
「あまのさんぽ」「えげんさん」...
- ・地域で発行されている冊子
「かものちようおものがたり」...
- ・ガイドマップ
「米田白山遊歩道マップ」...

○拠点施設として 美濃加茂市民ミュージアムが取り組むこと 可能性と課題

II これからの時代にふさわしい博物館の在り方

<これからの博物館に求められる役割・機能(5つの方向性)>

- | | |
|------------|-------------------------|
| 「守り、受け継ぐ」 | 資料の保護と文化の保存・継承 |
| 「わかち合う」 | 資料の展示、情報の発信と文化の共有 |
| 「育む」 | 多世代への学びの提供 |
| 「つなぐ、向き合う」 | 社会や地域の課題への対応 |
| 「営む」 | 専門人材の確保、持続可能な活動と経営の改善向上 |

博物館法制度の今後の在り方について(審議のまとめ)より
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/hakubutsukan/hoseido_working/pdf/93606001_05.pdf

「医療」「健康」面でのかわり

「博物館浴」 森林浴のように博物館が様々なストレスを軽減する癒しの場として注目され生まれた言葉。九州産業大学・緒方泉

◇2023年1月

- 福祉、医療関係者、近隣の中部国際医療センターに呼び掛け
- 展示室を観覧前後で心理的・生理的数値の変化を見る実験
- その結果、作品鑑賞が一定の癒しの効果をもたらすことが実証

◇2025年11月

- 隣接する中部国際医療センター付属の健康増進施設利用者と美濃加茂市民ミュージアムボランティアのみなさん 36名が参加
- 常設展示室の見学とミュージアム周辺の森の散歩
- 脳の疲労度や自律神経のバランスなどを測定
- 約6割の人に改善する効果を確認



などをやりながら、収集、保存、調査研究を進めて、「豊かな木曾川像」をつくるのが大事だと思います。そうすることで親水空間としての川辺の整備がより深まりのあるものになると思います。そういったより深まりのあるまちになるために博物館の役割があると思っています。

この図のような流れで、博物館の役割には個人的側面と社会的側面があります。個人的側面では、そもそも博物館ではぐくまれるのは「ものの見方の豊かさ」だと思いますが、こういうものを重視するということは、多様性を認めて寛容な気持ちになるということです。最近ギスギスした社会ですが、ゆたかなまちや社会、分断のない世界をつくっていくためにも、博物館が必要だと思います。一方で博物館の社会的側面としては、市民の生涯学習施設として、市民にとって地域を学ぶ場であり、それを支えることが、博物館の果たすことだと思います。そこで市民の主体的な活動を支えて、交流の場となるようにしていきたいと思っています。そのためには活用の前提となる博物館の基本的機能を大事にする必要があります、活用というのは、経済的、商業的に活用され、「にぎわう」だけ、「消費」するだけのものにならないようにしたいと思っています。

要は、活用というものがその地域の人たちの視点を持てるか、地域へのフィードバックがあるかどうかのポイントではないかと思っています。蓄積が活用になるわけですが、蓄積と活用という両者が、活用したものがまた蓄積されて活かされる、そういった循環が生まれていくといいと思っています。

(2025.12.6 オンライン開催)

☆ここで博物館ができること

- 水辺に繁茂する「エノキ」や「ムク」の樹木植生調査をする
- かつての生業「玉石」採りに関する館蔵の歴史資料を調査する
- かつての「渡し船」の船頭からの聞き取りを一緒に行う
- これらの成果と結果を記録し、地域と博物館に残す



…「豊かな木曾川像」に
…親水空間としての川辺の整備がより深まりのあるものに

↓
より深まりのあるまちになるために博物館の役割がある

○博物館ではぐくまれる ものの見方のゆたかさは
⇒多様性を認め、寛容な気持ちに
⇒ゆたかなまちや社会をかたちづくっていくことに

○市民の生涯学習施設として

- ・市民にとって地域を学ぶ場であり、そしてそれを支える博物館の機能を果たせるように
- ・地域資源にかかわる市民の主体的活動を支え、交流の場となるように

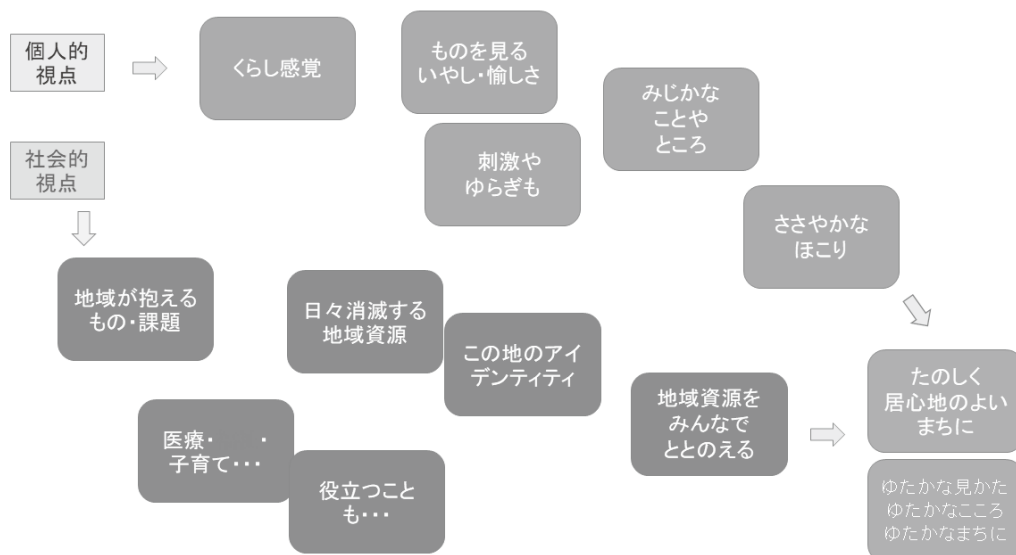
○活用の前提となる博物館の基本的機能を大事に

○活用は、経済的、商業的に活用され「にぎわう」だけ「消費」だけのものにならないようにしたい

- ・活用がその地域の人たちへの視点を持てるか、地域へのフィードバックがあるかどうか

○蓄積→活用

から 蓄積⇔活用 両者が行き来できるように



事例紹介①

関係人口と共働した博物館存続の取組み
～博物館資料「石棒」を未来へ伝える～

三好 清超¹⁾

1) 飛騨みやがわ考古民俗館 学芸員

飛騨市教育委員会、飛騨みやがわ考古民俗館学芸員の三好清超と申します。今日お話しさせていただくのは、関係人口と共働した博物館存続の取組みになります。博物館資料「石棒」を未来へ伝えるというのが副題で、今動画で流れているのが、僕たちの博物館の中央で回転する縄文時代の石棒になります。大体 4000 年前ぐらいのものになります。

まず自己紹介ですが、私は発掘調査や文化財保護の専門職員として旧神岡町に雇ってもらった者です。今は合併して飛騨市になりました。2017年に飛騨市は文化をやっていくよ、ということで文化振興課というものが立ち上がります。その時に僕は飛騨みやがわ考古民俗館も担当となりました。そして 2019 年に石棒クラブというものを立ち上げて活動しています。毎年 11 月に石棒を 2 本並べて「石棒強化月間」としているのですが、今年も無事にそれを迎えることができました。

今日の話と結論を先に言っておきます。今日は「社会」を飛騨みやがわ考古民俗館の設置主体で

ある飛騨市と、僕たちが関わる文化財や博物館の業界と考えると、それに寄与する活動をしようとしている石棒クラブという話をしたいと思います。それが、僕たちが考える社会課題の解決だということです。

石棒クラブは基礎自治体である飛騨市の政策として行っています。具体的には、困りごとをワークショップとしてプログラムし、博物館や文化財と関わる特別な体験に仕立てることをしています。そのうちのひとつが石棒のデータの整備と公開です。文化財データを仲間と整備して自由な利用を推奨（オープンデータ化）したら、逆にそれが伝えあう状況になり、仲間やファンが増えたという話をします。今、誰もが責任を持って石棒に触れて、公開し合い、発信し合って良いやり方を突き詰めていくと、未来の人たちにも伝わるのではないかと、そんな未来が待っているのではないかと、思って活動しています。

まず飛騨市の位置です。今日も 8 時前に家を出て、12 時ぐらいに岐阜大学に着きました。4 時間

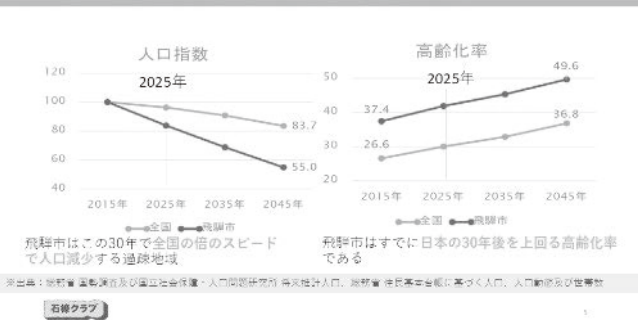


自己紹介 飛騨市教育委員会 課長補佐(学芸員) 三好清超

- ・2000年飛騨市教育委員会学芸員(旧神岡町教育委員会) 遺跡の発掘調査や文化財保護に従事
- ・2017年文化振興課たちあげ。飛騨みやがわ考古民俗館も担当
- ・2019年石棒クラブたちあげ。
- ・2022年NHKの全国版で流れる月刊文化財の表紙に!
- ・2025年無事に石棒強化月間をむかえる

岐阜県飛騨市とは 岐阜県最北端に位置し、少子高齢化が進む自治体

H16誕生
 南は高山市
 北は高山県
 西は白川村
 人口21,373人 (R7.10)
 高齢化率40.64%
 人口予測：2045年には11,000人



ぐらいかかります。同じ県内ですけど、一番端っこにある感じです。人口は2万1000人、高齢化率は40%を超えていて、2045年には1万1000人の人口になるという、過疎化が進む町になります。

高齢化率と人口指数ですが、2015年の消滅可能性自治体が発表された時のものになります。高齢化率は、日本は2045年（30年後）には高齢化率は36.8%になると出ていたのですが、飛騨市では2015年の時点で高齢化率37.4%、既に日本の30年後の先を行っている状況になっていました。しかし、逆に今頑張れば30年後、日本のトップランナーになってるんじゃないか？というモチベーションで今、頑張っている状況です。

そんな飛騨市にあるのが飛騨みやがわ考古民俗館です。1995年に完成し、民俗資料、考古資料、古民家の3施設からなります。写真の左が民俗の展示室、真ん中が考古の展示室で、その考古の展示室の中に石棒が多数あるということになります。博物館が石棒を作っていた縄文時代の遺跡のすぐ横に建っているため、石棒が大量にあります。

博物館管理の業務は、教育委員会職員が他の文化財保護業務と掛け持ちで担当しています。年間30日は管理員さんがいるので有人開館、年間120日は無人開館しています。150日の開館を確保して、今後、登録博物館にしていきたいと思っています。

合併前の飛騨市宮川周辺で収集発掘され、近年まで使われた民具や考古の資料を収蔵展示していて、とりわけ1,074本の石棒は全国の人に知られています。民具は国の重要有形文化財になっています。資料はすごいなと僕は思っていますが、博物館には固定電話はなく冬は大雪で閉館、市役所から27キロ離れている場所にあるのが課題だと思っています。しかし、石棒が1,074本もあるというのは、全国の考古学を研究している方々が知っている状況です。これがグーグルマップの地図です。下の方に飛騨市役所や飛騨市美術館、そして特急も停まる飛騨古川という駅がありますが、そこから27キロぐらい離れています。9割が山林の市になります。



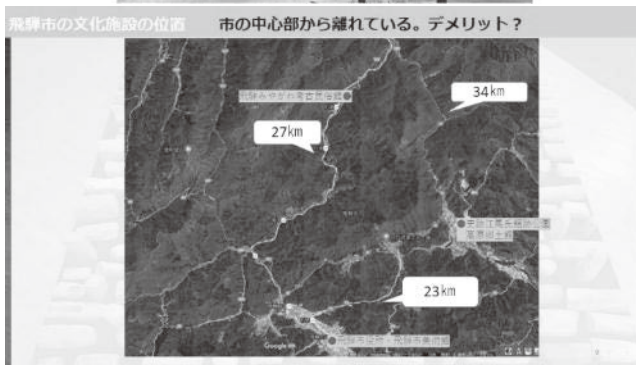
飛騨市の埋蔵文化財を集結させる文化施設が飛騨みやがわ考古民俗館です！

石棒クラブ



飛騨みやがわ考古民俗館って？

- 1995年完成。民俗+考古+古民家の3施設からなる
- 教育委員会職員が掛け持ち担当、開館年間30日+無人120日
- 飛騨市宮川町内で収集・発掘された、近年まで使われていた民具や縄文遺物を収蔵展示。とりわけ1,074本の石棒は全国区。
- 飛騨地方の民俗文化を知ることができる（国重要有形民俗文化財）
- 固定電話なし、冬季は閉館、市役所から27kmはなれる

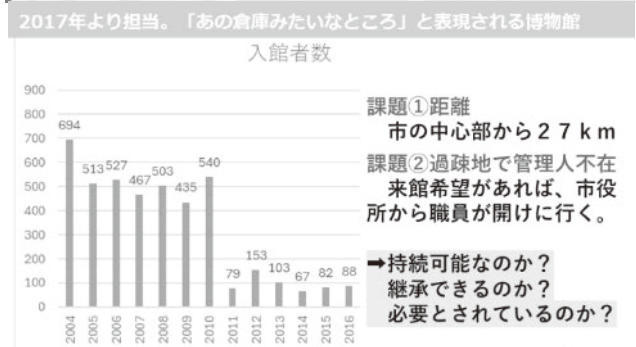


飛騨市の文化施設の位置 市の中心部から離れている。デメリット？



特別豪雪地帯であり、冬の維持管理に四苦八苦。

価値を伝えたい！飛騨市美術館に1,000本の石棒を並べる！（2017）



2017年より担当。「あの倉庫みたいなどころ」と表現される博物館 入館者数

課題①距離
市の中心部から27km
課題②過疎地で管理人不在
来館希望があれば、市役所から職員が開けに行く。

→持続可能なのか？
継承できるのか？
必要とされているのか？



石棒クラブ

これが冬の雪の様子です。屋根雪が2階の屋根まで迫っている状況です。屋根の雪下ろしをしていますが、僕らの背より高いぐらいの雪が屋根雪によって積もる状態になります。

僕が担当になった時の入館者数の状況です。2004年に合併して飛騨市になりましたが、右肩下がりでどこか急激に下がっているような状況です。市役所がある中心部から相当離れていて、管理人さんも30日しかいないので、他の時に来館希望があった場合は僕が鍵を持って市役所から27キロ走って開けに行っていた感じでした。それが持続可能なのか、継承できるのか、もっと言うと、飛騨市に必要とされているのかというのが、僕が担当になった時の課題でした。もちろん僕は中の資料は大事だと思っていたので、市役所近くの美術館で会期1ヶ月半借りて、特別展を2017年担当になった時にやりました。石棒を1,074本持って行って全部並べたのですが、会期中のお客さんは950人と、まさか石棒の方が多いという結果になってしまいました。この時、課題は距離ではなくて価値が伝わってないことだと思いました。

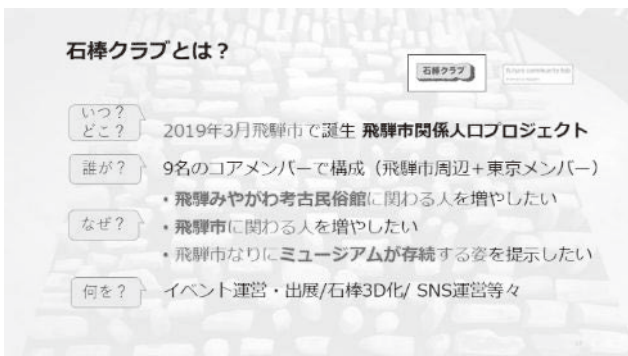
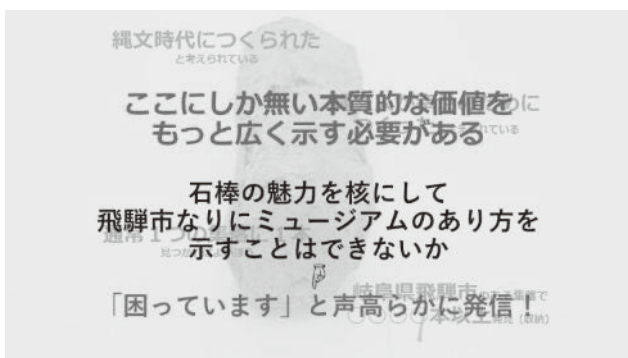
僕は、ここにしかない本質的な価値をもっと広く示したいと思いました。石棒の魅力を核にして、飛騨市なりにミュージアムのあり方を示すことはできないか？と調べてやっていたことが、「困っています」ということを発信することです。この「困っています」というのは、こういうことをやったらいいんじゃないの、やってあげるよという「関わり代」を作るといふ言い方をするのですが、そういうことに役立ったと今、思っています。その

関わり代を作ったことによって集まった人たちが石棒クラブになります。

石棒クラブというのは2019年、僕が担当になって2年後に誕生しました。9名のコアメンバーで構成されていて、飛騨の人もいますが、東京の人たちが傾きかけた博物館を応援できるなんて楽しそうじゃね？という感じで関わってくれています。なぜ活動しているかというところが大事です。飛騨みやがわ考古民俗館に関わる人を増やしたい。それを引き金にして、飛騨市に関わる人を増やしたい。飛騨市にミュージアムが持続する姿を示したい。これが立ち上げた契機になります。

どのような活動を目指していくかは、かなり初めから相談をしました。まずは石棒などのファンを作ることが大事だろうと(①ファン増加フェーズ)。そうすれば飛騨みやがわ考古民俗館だけでなく、飛騨市の文化財が持続可能な状態で存続していくのではないかと、飛騨市からも応援してくれるような状態が生まれるのではないかと考えました(②予算増加フェーズ)。そうなれば、日本中の小規模自治体の文化財が持続可能な状態で存続するあり方を展開できるのではないかと(③サステナブル拡大フェーズ)、と考えています。飛騨市で表面化したのは、人口減少という課題に根ざして、それは全国ではまだ潜在的な課題だったのではないかと分析をしました。今、体感として2つ目のフェーズまでは行きかけていると思っています。

行ったことはデジタルアーカイブです。まず画像の公開です。これは「一日一石棒」というイン



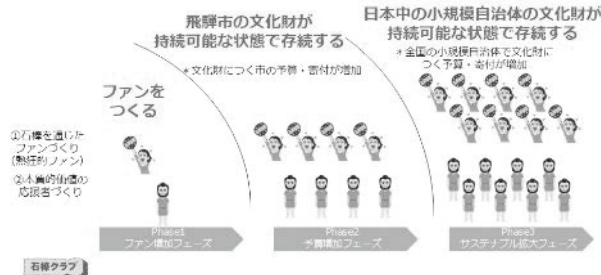
2019石棒クラブ爆誕



石棒クラブ

目指すところはどこ?

飛騨市で表面化した人口減少は全国では潜在的な課題?!



石棒クラブ

スタグラムでの画面で、1,074本の石棒全部をインスタで1日1本ずつ上げていこうという取り組みを始めました。2024年に1,074本全部完了して、今は人知れず1本ずつ減らしていくことをやっています。それには意味があって、石棒は壊された状態で見つかることが多く、縄文時代から人は何らかの形で石を最後破壊して終えているのです。5年かけて完成させたものを今度0にしたらどんな気持ちになるだろうかというようなことを追体験できないかなと考えています。

この画像は飛騨市に著作権を譲ってもらって、オープンデータとしています。データの取得はクラブ活動で行って、そのデータの管理は市で、公開はオープンデータで行っています。オープンデータで今も上げているのですが、東京の「くにたち郷土文化館」さんから、この画像は使っているかと連絡がありました。左側の写真が、今もくにたち郷土文化館の展示スペースに利用されているパネルになります。

ここで僕たちが考えているのは関係人口です。これは飛騨市での取り組みの一つとしてやっているのですが、図の右上に飛騨市に住んでいる僕たち定住人口があって、左下に「飛騨市のことを知ってるよ、アニメの聖地なんじゃないの?」という関わりがあまりない人がいて、その間に「毎年おばあちゃんがおるから夏休みに行くんです」という人や、「仕事で行ったことあって、なんか住み心地良かったから時々来てるんだ」という人がいます。この間には濃い関係性を作っていく人と、薄い関係性を作っていく人がいるということに

気づきました。それを関係人口というふうに呼んでいます。

飛騨市の人口が減っても、この関係性を濃くしていけば、ひょっとしたら地域は存続するのではないか、そのようなことを考えているわけです。そこで飛騨市が共同研究で行ったのがこの結果です。地域愛着を「好き」、「誇り」、「帰属意識」、「責任」、「大切」という5つの要素に分けています。飛騨市に滞在しない人〜1か月以上滞在したことある人まで約5,000人にアンケートをとりました。青は気持ちが冷めた状態、赤は気持ちが高まった状態です。注目してほしいのは、この赤枠で囲んでいるところですが、1週間未満の滞在で地域愛着の気持ちが高まり始めます。その地域のことを誇りに思うという気持ちは、1回目の滞在で既に生じ始めます。帰属意識というのがいわゆる移住ですが、1か月以上住むという移住まで至るのはやはり難しいことというのがこのグラフで見えてきます。つまり、心地よい関係を築いていくことを継続していけば、地域は存続するのではないか、ひいては博物館も存続させることができるのではないかと考えたわけです。

その研究成果を取り入れて行っているのが3Dデータの更新です。飛騨みやがわ考古民俗館の石棒や縄文資料を3Dデータ化しています。それによって親子や博物館のことが好きな人、博物館で働いている人といった多様な人たちが集まりました。これまで5年やっていますが、考古学や博物館学を専攻する大学生で、鳥取から茨城の資料が好きな方々に参加いただいています。面白いの

関係人口創出×デジタルアーカイブ推進 画像編

2019年、Instagramで「一日一石棒」はじめる（#石棒クラブ）2024完了！

石棒クラブ

関係人口創出×デジタルアーカイブ推進 画像編

文化遺産オンライン、飛騨市オープンデータサイトで公開！

データの取得は石棒クラブ、管理は市、公開はオープンデータ。

石棒クラブ

石棒クラブ著作の画像を飛騨市・飛騨みやがわ考古民俗館がデータ管理、CC-BYで公開→くにたち郷土文化館の展示パネルに利用！

関係人口の定義『観光以上、移住未満』

石棒クラブ 総務局 関係人口ポータルサイト <https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/>

飛騨市が関係人口の実践研究を通じてわかってきたこと1/2

滞在日数は重要ではないが、1度滞在しているかどうかは重要。

地域愛着は、preference(好み)、pride(誇り)、belonging(帰属)、future responsibility(未来への責任)、cherish(大切)の5要素に分解できることがわかった。そのそれぞれと滞在日数との相関を調べた結果は以下の通り。

| | 好み | 誇り | 帰属 | 責任 | 大切 |
|------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1か月以上 | -0.10 | -0.09 | 0.18 | -0.04 | -0.10 |
| 2週間から1か月未満 | 0.11 | -0.02 | 0.11 | -0.02 | 0.03 |
| 1週間から2週間未満 | 0.15 | 0.03 | 0.10 | 0.10 | 0.08 |
| 1週間未満 | 0.15 | 0.18 | 0.09 | 0.11 | 0.13 |
| ほぼ滞在しない | -0.14 | -0.10 | -0.22 | -0.09 | -0.08 |

飛騨市・東洋大学・水産教育研究機構・東京の共同研究
 杉本 幸子、石棒の「くにたち」をめぐって「飛騨」に日本社会における「関係人口」の実証分析：全国ア
 ンケート調査報告書「くにたち」No.33 飛騨市・水産教育研究機構・東京の共同研究

石棒クラブ

は、だんだん飛騨割合が高まってきているということ。初めは「これは誰が見るのか？」という話でしたが、なんと現在までで4万5700回も閲覧されています。これは飛騨市の人口の約2倍で、高田祐一さんという研究者によると、その閲覧数は日本の博物館文化財系機関で第2位です。また、現在201の3Dモデルを公開していますが、その数は全国1位です。そのデータがどのように使われているかですが、石棒ろうそく作家さんがその3Dデータを使ってろうそくを制作し、民家の明かりを照らすということをしたり、ゲーマーの方が自分で3D化合宿に参加して下さって、撮った石棒のデータをフォートナイトの自分のルームで使ったりされています。

そうして様々な方に知ってもらうことが結果としてできました。そうすると本物を見たいという声がだんだん大きくなっていて、2014年に僕たちは無人開館システムというものを構築したのです。ワнтаイムパスワードを発行して、それで入ってもらうことをしています。一番心配なリスクは収蔵品の盗難なので、テグスなどをしてい

るのはもちろん、今後ICタグの管理などでうまくクリアできないかを模索中です。

そのような活動をしていたら、文化庁の方がその活動を知ってくれて、「文化財ミュージアムDX実践ガイド」という2025年に刊行されたものの中に、「3D化合宿」を取り上げていただきました。こうしてだんだん外の方向で飛騨みやがわ考古民俗館のことを知ってくださる方が増えていった状況がありました。

外の活動で何か注目されているらしいと知られたら、今度は地域の中の方が呼応するようになってくれました。地元の宮川小学校が今、ガイド活動を博物館で行ってくれています。年間30日+αでこのガイド活動を時々してくれているので、だんだん開館日が増えていっています。ガイドは小学校から言ってきてくれました。小学生たちは、人口減少は地域のことを伝える人がなくなることが課題だとわかったので、自分たちができることを考えて、飛騨みやがわ考古民俗館でガイドをすると決めたということで活動してくれたそうです。去年は8名が宮川小学校の全校生徒です。

関係人口創出×デジタルアーカイブ推進 3Dデータ編

3D化合宿の開催！今年5年目。誰もが文化財情報を取得し公開！
201モデルの公開は文化財系機関で2025・11現在第1位！！



45,700閲覧！

飛騨市の資料を使って3Dデータ化の技術を習得する企画！
飛騨からは親子など一般の方、考古学や博物館学を専攻する大学生、鳥取から茨城のモノ好きさんに参加いただきました。（飛騨割合2024年15%→2025年30%）

石棒クラブ

ゲーム空間での活用 2023年
【フォートナイトでの配信】



石棒クラブ

文化庁研修などで飛騨市の事例が紹介される！ 2024・25年

「小規模で課題があるからこそ」
「それは、発掘調査現場の写真や出土物の写真等をオープンデータ化し、一定のルールを守れば、自由に利用できる状態にすることで。（中略）発掘調査データについては、岐阜県飛騨市などが特に充実している。」
『令和6年度埋蔵文化財担当職員等講習会-発表要旨-』
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/shokai/pdf/9411201_01.pdf 9ページ

石棒クラブ

『ミュージアムDX実践ガイド』（文化庁2025）7ページ
<https://museum.bunka.go.jp/post-46785/>

作家による活用 石棒ろうそく2021年



石棒クラブ

【無人開館システム】 2024年に「来たい」の声に応えて。
現在までに60名ほどの申込あり。今後ICタグ管理を検討中。



石棒クラブ

地元の宮川小学校全校生徒8名もガイドに！ 2024年
「人口減少は地域のことを伝える人がなくなること」
「自分達のできることを考えてガイドをすると決めた」



授業2回、実践1回
を行ってガイドし
てもらったことに！
授業ではフアンが
増えたことも説明



石棒クラブ

飛騨市立飛騨博物館
飛騨みやがわ考古民俗館
宮川小学校半日館長
2024年11月2日
9時00分～11時00分
11月2日は飛騨市立飛騨博物館、飛騨みやがわ考古民俗館、宮川小学校半日館長が、飛騨みやがわ考古民俗館で、飛騨みやがわ考古民俗館の歴史や文化財について、小学生にわかりやすく説明します。飛騨みやがわ考古民俗館の歴史や文化財について、小学生にわかりやすく説明します。飛騨みやがわ考古民俗館の歴史や文化財について、小学生にわかりやすく説明します。

このように、外が先に盛り上がり、中の人になんとかそれを感じて盛り上がってくれているのです。当初からの目的として、三好は誘引する人を見極めて情報を届けるということが大事だと思ってやっていたのですが、今度は三好以外の人が発信行動をしてくれるという状況になってきました。おそらく博物館の活動のマネジメントには、このような受け取った方の意識の変容も含まれるため、そこまで考えて活動する必要があるのではないかと考えています。

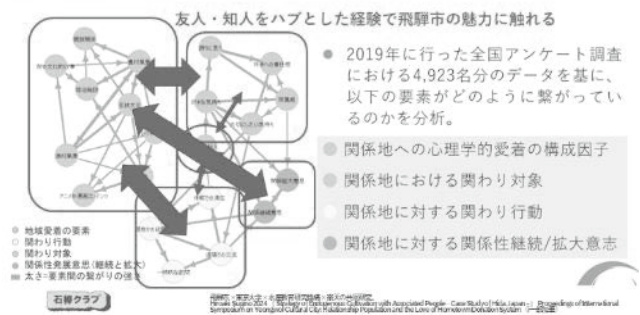
これをいま一度、関係人口研究に落とし込んでいます。これは2024年段階の研究成果です。左側の紫色の丸が縄文や石棒などの博物館に関わる要素で、それが三好や友人知人を介して、先ほどの誇りや好き、帰属意識というこの緑色の心理的愛着の気持ちに繋がるというのがこれまでの研究として分かりました。ここから、関係を拡大したいという赤の気持ちや、実際行動を起こしてくれるこの黄色の気持ちが生まれてくるというように整理することができると考えました。

しかし、それから2年弱活動してきて、今は友

人知人を介さなくとも、それこそ文化庁が発信してくれたり、小学校が発信してくれたり、もう三好を介さなくても関係が拡大したり行動を起こしてくれる次のフェーズを想定して、今はこの想定に基づいてデータを集めていかななくてはならないと考えています。

これまでのお話は発信を念頭に置いてやっていますが、飛騨市の文化財関係の発表（報道発表、講座、論文）を昨年度は71件行いました。これは飛騨市の市長の「知られていないのはやっていないのと一緒に」という言葉に基づいています。総務省の情報通信白書に、いち早く世の中の出来事を知るメディアは何か、世の中の動きについて信頼できる情報を得るメディアは何かといったことが述べられていて、テレビや新聞、検索エンジン、SNS というものが大事なツールとして紹介されています。それに基づいて飛騨市でも各メディアでの発信を継続しています。その結果、石棒クラブ結成以後、奇跡的な入館者数の回復を果たし、昨年度は合併20年で最多の入館者数を記録しました。また、ふるさと納税を通して、館内にある

飛騨市が関係人口企画の実践研究を通じてわかってきたこと2/2



R6年度、飛騨市の文化財の発表は実に71件！

職員のモチベーションは「発信までが仕事」「知られていないのはやっていないのと一緒に」「まずは情報発信」大切なことは調査研究に基づくこと

報道発表も、講座も、研究者向けの報告・論文等が発信の柱です！
R6年度は報道47件、講座12件、論文12本。
R7年度は、9/19現在報道40件！！

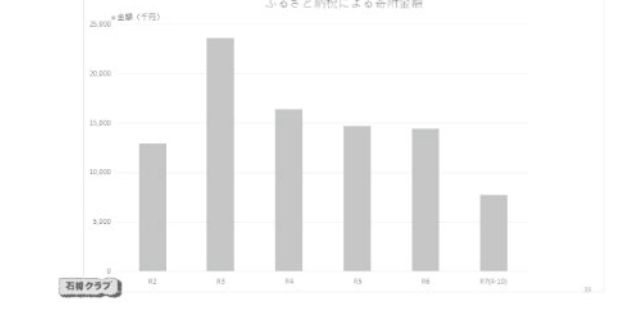
どの媒体を使って情報を届けるべきか



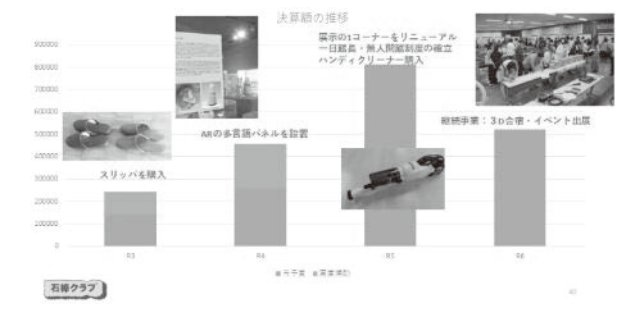
入館者は10倍に！寄付が8000万円あまり！応援ありがとうございます！



寄付が8000万円あまり！応援ありがとうございます！



飛騨市の手厚い応援があります！



古民家の修復に対して寄付をいただきますが、それも 8,000 万円余りお預かりすることができ、昨年度と今年度で第 1 期の修復工事を終えたところ。本当に応援ありがとうございます。

これは、この黄色の気持ちが生まれてくるというように整理することができると考えました。

しかし、それから 2 年弱活動してきて、今は友人知人を介さなくとも、それこそ文化庁が発信してくれたり、小学校が発信してくれたり、もう三好を介さなくても関係が拡大したり行動を起こしてくれる次のフェーズを想定して、今はこの想定に基づいてデータを集めていかななくてはならないと考えています。

そのような外部の動きや内部の動きから、飛騨市側も応援してくれています。スリッパを買い換えてくれたり、掃除機を新しく買ってくれたりと、市もしっかり予算をつけてくれる状況になってきました。こういう動きになっているのはなぜかということですが、よく三好は運がいいねというようなことは言われますが、そういう人たちの話を聞くと、色々なことを言ってくださいます。そ

れを僕なりに分析すると、課題は「人」、「意識」、「体制」、「制度」、「予算」に分類できると考えていて、それをどのようにエビデンスをとっていくかは今後の課題です。

それらの課題をどのように打ち破ってきたか、解決してきたか、飛騨市の経験から 6 つ大切だと思っていて、① トップに意義を語ってもらう、② 外部の外に発信してもらう、仲間を増やす、③ スモールスタートをする、④ あくまで現場で尖った企画をしていく、⑤ その尖った企画を行う担当者を孤立させない、⑥ 発信が大事ということを考えています。特に担当者を孤立させないことは大事だと思っていて、全員で同じ方向を向けたらいいと考えています。

日本は今後、人口減少社会を迎えて 100 年続くという予測のもとに、このように活動を行う必要があると考えました。今はあくまで飛騨市の施策ですが、小規模自治体の行う活動として参考になればいいと思っています。どうもご清聴ありがとうございました。

(2025.12.6 オンライン開催)

飛騨市の文化活動が知られていったのは何故?!

担当者の運が良かったからではないか?

- ・長年のやり方を変えることへの抵抗【意識】
- ・ツール導入だけがデジタル化という認識【意識】
- ・ITやデータに強い人がいない。新しいツールや概念に追いつけない【人】
(博物館などでは一度補助金で導入し、その後の更新ができず、..)
- ・これまでのシステム・機材が残っている。【体制?】
- ・積み上げてきたシステムとの整合性が難しい。【意識・体制】
- ・業務をどのように変えていくかが簡単ではない【体制】
- ・成果がすぐに出るか分からないのに予算を投資しない【意識・予算】
- ・報告書は紙【制度】

課題は、人、意識、体制、制度、予算などに分類できていると思います。
【どのようにエビデンスをとるのかは課題のままです。】

石綿クラブ

11

文化財の魅力をもくの方と共有するには

飛騨市での経験から 6 つ大切と思っています。(ほかにもあるかも)

- ・① トップに意義を語ってもらう ⇨ 博物館なら設置主体からの発信
- ・② 外部の力の活用 (仲間を増やす) ⇨ 自分達以外の発信
- ・③ 各調査組織でスモールスタート (小さな成功体験)
- ・④ 現場主義でのプロジェクト (現場のトガった企画を丸くさせない)
- ・⑤ 調査主体の中の実践者を当該組織の中で孤立させない
- ・⑥ 発信は誰に届けるかを考えて
TV・インターネット・新聞の順 (総務省 R3 情報通信白書)
⇨ ⑤ は特に必要なことかも。
文化財や博物館の継承を目指して「みんな」で同じ方向を向く。
実践者④にとって力になるのが「みんなの応援⑤」。

石綿クラブ

11

【まとめ】日本の人口減少→増えることがない前提での政策

今の認識
・ノルマ設定ではなく目的にむけて活動を続けるために必要なことは何かを考えて場面に
に応じて活動。
・役所の要素をどれだけなくすことが出来るか。
・その一つがデジタルによる「見える化」。記録の保存方法は考え続ける。
・どのような情報を遡跡から取得するかは常に学ばなければならない。
(専門職員としての研鑽は別の課題)
・博物館で社会課題を解決!

石綿クラブ



事例紹介②

「化石検定」化石の街ならではの域学連携

安藤 佑介¹⁾・伊藤 允一²⁾

1) 瑞浪市化石博物館 学芸員・博士(理学)、2) 瑞浪市シティプロモーション課魅力発信係長



協働のまちづくり

瑞浪市では「瑞浪市まちづくり基本条例」に基づいて、市民と行政の協働による市民主体のまちづくりを推進しています。

若者のまちづくりへの参加機会の確保として、市では、学生が地域の課題解決や活性化に取り組む域学連携活動に対して『域学連携推進交付金』を交付し、若者による協働のまちづくりを推進しています。



プロジェクトの背景

域学連携

瑞浪市は、2013年に中京学院大学、2016年に瑞浪高校、中京高校、麗澤瑞浪高校の市内3高等学校、2019年に中部大学、2020年に岐阜大学と域学連携協定を締結しています。

本協定では、産業・文化・福祉・教育などの分野で相互に協力し、「若者や研究者の参加による地域の活性化」や「社会貢献を通じた優れた人材の育成」といった協働のまちづくりを推進しています。

【瑞浪市域学連携推進事業交付金】
地域の課題解決・活性化に繋がる域学連携活動に対して交付金を交付。

1つのプロジェクトに対する交付限度額

- 調査研究活動 5万円
- 実践活動 20万円



プロジェクトの背景

現状の課題

若者による協働のまちづくりを推進しておりますが、2021年の市民アンケートにおいて、「これからも瑞浪市に住みたいと思いますか?」の問いに対し、「いつまでも住みたい」「当分住みたい」を合わせた『住みたい』の割合は 80.2%を示していますが、

20代や30代の若い世代で見ると、『住みたい』と思う割合は 75.0%と、全体に比べて低い傾向であります。

そのため、この年代が市外流出しないよう、学生時代から瑞浪市に愛着がわき、誇りに思えるようなシビックプライドの醸成を図る施策を行う必要があります。



※本講演の内容に関する詳細については、本誌「実践報告」の「岐阜県瑞浪市における域学連携を活用した『化石検定』の実施 (p.27~35)」に記載した。本講演録は概要を簡単に記述するにとどめた。詳細については別稿を閲覧するとともに、データ等は別稿より引用していただきたい。

瑞浪市の域学連携施策「ミライ創ろまい課」

岐阜県瑞浪市役所シティプロモーション課の伊藤と申します。最初に私の方から化石検定を始めるといった背景についてお話しさせていただきます。化石検定の具体的な施策については、瑞浪市化石博物館学芸員の安藤からお話しさせていただきます。

まず「協働のまちづくり」とありますが、瑞浪市では「瑞浪市まちづくり基本条例」に基づき、市民と行政の協働による市民主体のまちづくりを推進しています。若者のまちづくりの参加機会の確保として、市では、学生が地域課題の解決や活性化に取り組む域学連携活動に対して交付金を支出し、若者による協働のまちづくりを推進しています。

瑞浪市は域学連携と称して 2013 年に中京学院大学、2016 年には市内の 3 高校、2019 年に中部大学、2020 年には岐阜大学と域学連携協定を締結して協働のまちづくりを推進しています。協働のまちづくりを推進していますが、2021 年の市民アンケートにおいて、「これからも瑞浪市に住みたいと思いますか」というアンケートを取ったところ、「いつまでも住みたい」、「当分住みたい」という、『住みたい』という方の割合が、全体では 82%と高い数値を示していますが、20-30 代の若い世代で見ると 75%と全体に比べて低い傾向がありました。そのため、この世代が市外に流出しないように、学生時代から瑞浪市に愛着がわいて、シビックプライドの醸成を図る施策をしていく必要があるということで、色々な事業を展開しています。

その中で、若者のシビックプライドの醸成を図

課題への対応

そこで、若者のシビックプライドの醸成を図り、域学連携推進事業の取り組みをさらに実効性のあるものとするため、本市と域学連携協定を締結している高校生を対象に、学校の枠を超えたまちづくりチーム、瑞浪市役所「ミライ創ろまい課」を結成しました。

提案で終わらず企画したら自ら実践するがポリシー！

「ミライ創ろまい課」では、学生が主体となり、**自らが企画した地域活動に大人を巻き込みながら実践**することを通じ、若者が進んでまちづくりに参画し、まさに『にぎわい』を創出することを目指していきます。

プロジェクトの背景



プロジェクトの背景



瑞浪市役所「ミライ創ろまい課」は、条例等で規定されている正式な瑞浪市の部署ではありません。仮想的に行政組織の課名を模した学生によるまちづくりグループです。

市内に高校が3校と大学も立地している利点を活かし、高校や大学との連携を強化し、若者の定住意欲に繋がるような施策を展開することにより、若い世代の転出超過に対応していきます。

ターゲットは学生!!

ミライ創ろまい課の概要

プロジェクトの進め方

活動は月2回、市内事業者や市役所職員、ファシリテーターを交えたワークショップを重ね、学生が主体的に企画を検討・実施し、瑞浪市の魅力向上や課題解決に向けて活動をしています。

| | |
|------|---|
| 対象者 | 本市と域学連携推進協定を締結している高校や大学に通う大学生 【協定締結校】 瑞浪高校、中京高校、麗澤瑞浪高校、中京学院大学、岐阜大学、中部大学 |
| 参加者 | 現在83名（2期生4名、3期生43名、4期生36名） 内訳）瑞浪高校13名、中京高校54名、麗澤瑞浪高校16名 ※大学生の参加は現在無し |
| 任期 | 原則2年間 ※学年の状況により1年や3年となる者もいます。 |
| 活動拠点 | 瑞浪市役所西分庁舎（現地活動の場合もあり） |
| 活動回数 | 月2回程度（通常時は平日17時～18時半で1回あたり90分を目安） |

本日のお品書き

- 化石検定の目標
ファン層の交流によるネットワークの拡大
古生物学の普及
- いかに高校生にやる気を起こさせるか
キャリア教育の工夫
- 理想と現実 企画を現実にする
- 化石検定のその後

り、さらに域学連携推進事業の取り組みを進めていくために、本市と域学連携協定を締結している高校生を中心に、学校の枠を超えたまちづくりチーム、瑞浪市役所「ミライ創ろまい課」を結成しました。「ミライ創ろまい課」は、学生が主体となって自らが企画した地域活動に大人を巻き込みながら、若者が進んでまちづくりに参画して、まさに『にぎわい』を創出することを目的として活動しています。事業を企画し、自分たちで実践することをポリシーとして活動しています。「ミライ創ろまい課」は、条例等で規定されている正式な瑞浪市の部署ではなく、仮想的に行政組織の課名を模した学生によるまちづくりグループです。市内に高校が3校ある、そして大学も立地している利点を活かし、高校や大学との連携強化と若者の定住意欲につながるような施策を展開しています。

プロジェクトでは、月に2回、市内事業者や市役所、委託しているファシリテーターを中心にワークショップをして、学生たちが主体的に企画を検討し、自らそれを実践するような形で活動を行っています。「ミライ創ろまい課」は今年で4年目になり、現在3期生と4期生が活動していますが、現時点で83名の高校生がこの「ミライ創ろまい課」に参加し、かなり大所帯になっています。この83名がそれぞれ自分たちのやりたいチームに、主に3つに分かれて活動をしています。その中で、昨年度まで取り組んでいた「化石検定」というプロジェクトがありますが、学芸員の安藤から、このプロジェクトの進め方や効果についてお話させていただきます。

化石検定の取組み

ここからは瑞浪市化石博物館の安藤が説明させていただきます。今日は博物館関係者や化石検定を受けに来た子ども達も参加されているようですが、博物館の皆様への様々な提言がメインとなります。お品書きを見ていただくと、最初にファン層の拡大という文言があります。先ほど三好さんも同じようなこと言っていました、本事例は来館者増加や教育普及の拡大であり博物館関係者の皆さんが今頑張っておられる、あるいは将来の課題としてやっていることと根本的な部分は共通していると思います。その中で特に、化石を扱う古生物学は「学問」です。ファンを増やさなければならない。なぜかという、古生物学は絶滅を扱う学問です。絶滅を扱う学問なのに、次世代を担う研究者が減って、学問が絶滅すること

瑞浪市化石博物館



- 化石専門の博物館
化石産地にある博物館・化石が掘れる博物館
- 地元の小中学校と域学連携

最終目標(瑞浪ならでは)



- 野外学習地で化石を採集すること。
- その話題を夕飯の席で上げられるようにすること。

普及の一手法～趣味縁とは？～

- 浅野智彦『若者の気分 趣味縁からはじまる社会参加』(岩波書店、2011)より
- それぞれの「私的な」趣味の中に公共へ発信する力
- 意識、無意識に関係なく最終的には大きなコミュニティを形成
- 多角的な発信による認知度の上昇

化石検定の計画

- 2022年: 始動・・・2024年本検定開催を目標
企画と試行錯誤
高校生が問題を作る？
まずはインタビュー
2023年のプレテスト開催を目標
- 2023年: プレテスト
問題点の洗い出し
- 2024年: 本検定・・・化石の日付近に実施
- 2025年以降: 化石博物館主催

2026/1/7

になってはならないと考えています。これは博物館自体の問題ではなく、全国での古生物ファンをいかに増やすか、そして正しい古生物学の知識や理解度の普及というのが一つのキーワードになっていると思います。

最初に化石博物館の説明をします。先ほどの三好さんとは逆に、中央道の瑞浪インターから車で3分、名古屋インターから40分ぐらいの立地のいいところにあるため大変アクセスの良い立地にあります。

本講演のテーマに沿って地域との連携として何をやっているかといいますと、歩いて10分の位置にある近くの小学校の6年生の子どもたちが、国語の授業に博物館のパンフレットを作る活動を毎年行っています。それだけにとどまらず、出前講座など学校との連携を進めています。ここで、化石博物館のターゲットは、名古屋市から近いということで、視点は中京圏の名古屋や豊田に向いています。中京圏の人たちはもちろんのこと、より特定したターゲットは化石ファンと小学6年生です。小学6年生は地層や化石について授業で学ぶからです。そしてもう一つ、お母さんがターゲットです。その日の夕食で子どもたちに何を話してあげるかという話の主導権は、お母さんにある場合が多いです。親子で博物館講座を受ける時のお母さんというのは、私は“強力な”教育者だと考えています。

最終的な瑞浪市化石博物館の目的は、普及としては瑞浪で化石を採集して、その話題が家で取り上げられるようになることです。そうすれば化石の普及になると思っています。こうした様々な普及手法の中で明文化されているものが「趣味縁」というものです。

例えば、瑞浪市化石博物館のキャラクターですが、このキャラクターを中心に何が発信されるでしょうか。化石だけだと「学問」としての情報が発信されるだけにとどまりますが、このキャラクターのファンがいるとなると「別視点からの趣味としての化石」が発信される。あるいは地元の人がこのキャラクターのファンになるなど様々な分野から外に発信されていく。これも先ほど三好さんがお話しされたことと結構似ているところだと思いますが、今回の化石検定は、今まで化石博物館が作ってきたコンテンツにもう1個新たなコンテンツを増やすというもので、このような企画はどの博物館もやろうとしていることだと思います。その中でこの化石検定に関しては、高校生、検定が好きな人、古生物ファンなどの、不

2022年 ～試行錯誤～



- 何をやればよいのか・・・わからない!
- とりあえず取材・・・化石を一から学べない
- 結論: 高校生がプロをコントロールするのは無理! 高校生が問題を作るのは無理!

2023年 ～方向性が見える～



- 高校生は「発信」「+@」のプロデュース
- いかに検定に「華」をもたせるか
- 雑談の中から生まれた「きっかけ」
2023「絵を描くのが好き」「アニメ好き」→漫画家とコラボする?

プロとの仕事



サイエンスコミックライター
Ayaneさん

NHK岐阜放送局
有坂さん

- 好きな分野で勝負・・・これなら私たちもできる!
- 普段なら接点のない方々との仕事＝キャリア教育

改善点が見えてきた(2023年プレテスト)



- 高校生にイベントをこなすのは難しい
- 高校生はプロに華を持たせる企画者

特定ではなくて特定の人たち・ファン層といった第三者が発信してくれる、そのためのコンテンツを増やすということが目標でした。

ここからは化石検定をどうやって作っていったかですが、実は最初の始まった時から終わりは決めていました。2022年に「ミライ創ろまい課」が始動してから、2024年の本検定で終わること。そして2025年以降は、化石博物館が主催の化石検定を行えるようなパッケージを作ること。この2年でそれを行う計画として立てました。

まず事業の進め方としては、プロと一緒に仕事をするということを大切にしました。高校生たちだけで何か適当なことを放課後学習クラブのようにやるのではなく、人生をかけている人のパワーや助言を借りながら「仕事」として行うというものです。化石検定におけるプロというのは、化石の専門家である研究者(古生物学者)です。ではそれに対して高校生は一体何をやればいいのか、ということがまず課題として出てきます。

2022年に始動した時には、とにかく試行錯誤でした。当初は高校生たちが化石検定を作ることが目的でしたが、高校生には専門的な知識がありません、そこでとりあえず古生物学者から話を聞いてみようということになりました。しかし、古生物学者にインタビューをする中で、知識を問うだけならただのクイズと言われ、そこから、高校生がいきなりプロのような検定を作るのは無理、それなら高校生は何をやればいいのかと試行錯誤をしていった中で、一つ方向性が見えてきました。それは、問題は古生物学者が作り、高校生はそのサポートを行う、検定の広報を行うというものです。

2023年は、プレテストを開催し、2024年の本試験に向けたフィードバックをしていく時期でした。高校生と毎月2-3回ぐらい打ち合わせや様々な作業をしている時の雑談の中で、「私は絵を描くのが得意だ」、「私はアニメが好きだ」という生徒が多かったのです。これは博物館学芸員あるあるですが、博物館にいと様々なメディアの取材や、あるいは本を書くといった異種業とのコラボがあります。その中でたまたま私の場合は作家さん、漫画家さんと知り合いだったということもあり、私は「あなたたち絵を描くことが得意なら一緒に仕事することができるよ?」と生徒に提案したのです。そこから生まれたこのきっかけですが、雑談の中から生まれたものとはいえこれも高校生の発案に近いものでした。先ほど言ったように、絵を描くことに命をかけている人たちとの仕

2024年 ～方向性が形になる～



- 高校生からの提案
「私たちも問題冊子に出演する(問題の一部に)」

2024/1/7

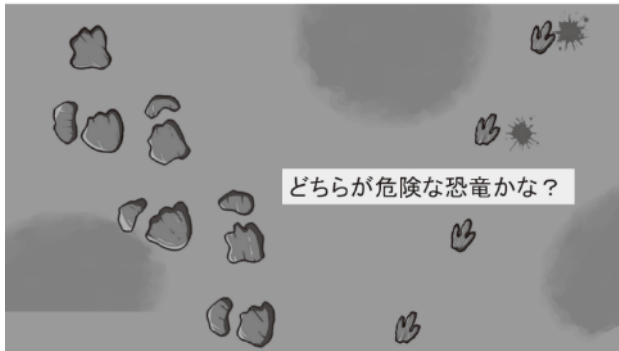
ラッキーパンチがあった



- サイエンスコミュニケーターの佐伯恵太さん (Ayaneさんとのネットワーク)からの依頼
- 化石検定が首都圏へ進出: 生半可にできない

2024/1/7

高校生の発案: イラストを見て考えて解く(暗記だけではとけないよ)



試験の問題にも活用できた



- ①この恐竜は4本足で歩いていた。 ②この恐竜はアンキロサウルスだ。
- ③この場所は昔はさばくだった。 ④この恐竜は子どもの恐竜だ。
- ⑤この恐竜はイラストの右下から左上に向かって歩いた。

2024/1/7

事、あるいはメディアの方々との仕事というように、問題を作るのは知識がないから難しいけど、好きな分野で勝負し、高校生活ではまずほとんど接点のない漫画家さんと仕事をするということになりました。左側の写真はオンラインで一緒に絵の案を考えているところですが、そういう「楽しく仕事できた」と思うことができ、それが結果的にはキャリア教育になったと思います。

2023年にプレテストを行いました、これはあくまでも試行錯誤の連続で、ここに出てきた改善点、例えば高校生主体では運営は難しい、ではどうすればいいのか。高校生が主ではなく脇役に徹する方がいいのか、そういう様々な改善点が出てきました。その改善点をどうしようかといった時に、これを踏まえて2024年の話に移ったのですが、前年の高校生は「古生物学者に華を持たせる」方向性については変えないで行こうということになりました。

その一つが「化石だけでなく古生物学者のイラスト化」でした。要は写真などではなくイラストにして楽しい感じのものを作ったらどうかということで、検定を作る私たち古生物学者が全員イラストになりました。そして高校生たち自身も、顔をプロの漫画家さんに描いてもらって、チラシもイラストメインでいくことにしました。そういう方向性になりましたが、これはこれで良かったのではないかと思います。

もう一つ、化石検定のイラストを一貫してサイエンスコミックライターのAyaneに頼んだのですが、その漫画家さんのネットワークでサイエンスコミュニケーターの方から、さいたまスーパーアリーナというとても大きな会場で開催するサイエンスコミュニケーターのイベントで、化石検定のようなクイズイベントをやりたいという提案が出てきました。これで本当意味での大きな仕事ができると、オンラインで打ち合わせをしたりして、高校生もかなり気合を入れて問題を作りにあたりました。プレテストやその振り返りの経験を踏まえて記憶や知識だけではない、絵を見て答えるような問題を作ることを目標としました。

これは高校生の発案だったのですが、恐竜の足跡の絵を使って、どちらが危険な恐竜かを答えさせる問題が完成しました。皆さんはわかりますか? 単純な2択です。このイベントは小学校低学年が参加するイベントだったので、あまり複雑にはしませんでした。それでもこれを高校生が発案したというのは、古生物、化石、古生物の興味や知識、事業運営に関する知識が蓄積されたとしても

に、高校生なりに外部に発表できるものを作る手法がその2年間で醸成されたと思いました。

このとき作成した問題は、その後改良を加えて化石検定の本試験問題にも活用しました。絵を見て答える問題なので、もちろん知識は役に立ちますが、記憶だけではできず、その場で考えなければできない問題です。問題の難易度は高めです。なぜなら、選択の数は決まっておらず、選択肢から「すべて」選ばなければならないからです。答えは1番と5番です。結構2番、3番、4番を選ぶ人もいますが、分からないことは基本的に選ば

検討の結果



• (地味な)研究者に華を持たせるという目的を達成

2023/1/7

高校生からの提案を形に

21 **ボクも先生が持っている恐竜の化石を発掘してみたいです!**
これはジュラ紀の有名な肉食恐竜だよ。発掘したいのなら、この化石が見つかる地層についてみようか。

この恐竜の化石を見つけることができる地層はどれですか? 1つえらんでください。

①ネメグト層 ②ランス層 ③モリソン層 ④ヘルクリーク層 ⑤ダイナソーパーク層

22 この恐竜の名前がわかる手がかりが頭の骨のどこにあります。一番大切な手がかり「1か所」を解答用紙に○で囲んでください。
●注意: 解答用紙にある○の大きさを○で囲んでください。2か所以上や全体を○で囲まないでね。

35 机の上の化石を見てください! 赤色で丸をつけた貝化石の名前を図鑑を使って調べて書いてください。

36 この貝化石の表面にはうすらと模様がついています。この模様から何を知ることができますか? 1つえらんでください。

①貝のカラーのかさ ②貝の年齢 ③貝が何を食べていたか
④貝がどこで生活していたか ⑤貝が生活していた場所の水温

37 この貝化石や岩石をよく見ててください。種類や保存状態から色々なことがわかります。それは何ですか? 3つえらんでください。

①浅い海だった ②海底に岩場があった ③海底は砂だった
④とても長い距離を流された後に化石になった ⑤生きていた場所の近くで化石になった

ないということも大切です。

さて、ここからは広報の話です。左側のチラシは2023年の最初にできたチラシなのですが、2024年のチラシでは、右側に示したチラシの通り古生物学者に華を持たせるという目的を達成するために考案されたチラシになりました。広報に関して、2023年のプレテスト開催時とはとにかく開催までの準備時間がなかったため、あまり周知できませんでした。チラシを作っても配布する期間が1か月未満と短かったため、参加された方は20人に留まりました。しかし、2024年はチラシも一新して、広報の方法も色々工夫したのです。各地の博物館に配布するなど頑張った結果、60名の参加者がありました。

そして、チラシ以外に高校生からの提案でどのようなことをやったかという、例えばこれは化石検定の問題を抜粋したのですが、先ほどの足跡の問題と重複しますが、イラストを使った問題にすることで結構親しみやすい感じの、ただ単に文章だけが並ぶ問題ではないものにしました。また、最初は4択とか5択の100点満点の問題を作ろうと思ったのですが、議論する中でやはり実技試験などもあっていいのではないかと案か

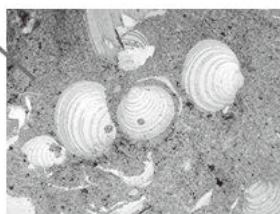
化石検定参考資料 ~みずなみ化石図鑑~

磯原市からは、約1,500種類以上のほ乳類、貝類、植物などの化石が見つっています。その中でも、松ヶ浦町にある「野外学習地」からはここで紹介するような化石が主に見つかります。化石検定の問題を解くヒントになる化石があるかもしれませんのでご活用ください。

| | | | |
|---|---|---|---|
| <p>メジロザメの仲間</p> <p>大きさ1センチほどのサメの歯化石。表面に光沢があり、歯の側面にこのざり状の歯がみられる。水深10mよりも深い海にたくさん生息している。</p> | <p>アンドウインカガイ</p> <p>大きさ1〜2センチの二枚貝化石。丸い形をしており、表面にたくさん点のようになっている。</p> | <p>マミヤマキクラ</p> <p>大きさ2〜3センチの二枚貝化石。扇形三角形をしており、表面に点のようになっている。</p> | <p>マミヤマハナダリ</p> <p>大きさ3センチほどの二枚貝化石。三角形をしており、表面に点のようになっている。1〜2センチの貝も見られる。</p> |
| <p>ワジンミ</p> <p>大きさ1センチほどの二枚貝化石。左右対称で丸い形をしており、表面に点のようになっている。みっしりして見ることが多い。</p> | <p>ミズナミホトテ</p> <p>大きさ3センチほどの二枚貝化石。クワ型に丸くおき形をして、ひょうめに10〜20本のたて筋が見られる。</p> | <p>ミエグンゴクソデガイ</p> <p>大きさ2センチほどの二枚貝化石。三日月のようになっている。よこすじがみられる。</p> | <p>カワベカガミガイ</p> <p>大きさ5センチほどの二枚貝化石。表面に丸くさんよのすじがみられる。</p> |
| <p>イズモニアガイ</p> <p>大きさ10センチほどの細長い二枚貝化石。ふちは丸くなる。表面に丸いよこすじが見られる。</p> | <p>メイメタマガイ</p> <p>大きさ2センチほどの巻貝化石。ずんぐりした丸みを帯びた形をしている。</p> | <p>トラフジガイ</p> <p>大きさ3センチほどの巻貝化石。塔が丸く、表面によこすじが見られる。</p> | <p>サガリガイ</p> <p>大きさ3センチほどの細長い巻貝化石。表面によこすじがみられる。</p> |

近い仲間は今どこに生きているの? ←この問題ではおぼえておく必要はありません。

アンドウインカガイ (イシガキガイ): 北海道・九州の海岸に生息している。水深50〜100mの海。
マミヤマキクラ (イソノガイ): 北海道・九州の海岸に生息している。水深50〜100mの海。
ワジンミ (イソノガイ): 北海道・九州の海岸に生息している。水深50〜100mの海。
ミズナミホトテ (イソノガイ): 北海道・九州の海岸に生息している。水深50〜100mの海。
メイメタマガイ (イソノガイ): 北海道・九州の海岸に生息している。水深50〜100mの海。
トラフジガイ (イソノガイ): 北海道・九州の海岸に生息している。水深50〜100mの海。
サガリガイ (イソノガイ): 北海道・九州の海岸に生息している。水深50〜100mの海。



ら、選択式だけではない、絵のどこかに丸をつけなさいという問題（22番）や、赤枠で囲った問題（35番）では、各自の机の上に化石を置いて、この化石をスライド右上に掲載した図鑑を参考にして名前を付けましょう、という化石の鑑定をさせる実技問題を取り入れました。これらの問題を解くことによって化石について学ぶという教育普及のきっかけづくりもできたのかなと考えています。

本事業の過程で、高校生と漫画家や司会者との打ち合わせや、高校生にも打ち合わせのメールでのやりとりに参加してもらうなど、大人が行って

いる仕事のような高度なことまでしてもらいました。大人が本気になって事業を遂行している姿勢を見たり、生徒の能力に合わせてより高い目標を設定すれば高校生たちも本気になると私は思っています。それは高校生に限らず、最初に紹介した近隣の小学生による化石博物館のパンフレット作りも、「博物館でパンフレットを張り出しますよ」と言うのと何が起るかという、子どもたちみんな字を丁寧に書くという効果もあるのです。そういう大人が本気になるということが大切です。

最終的にこの化石検定では目的は達成できたのかについてですが、最初に紹介した「ファン層を増やす」という目的について言及します。化石検定当日の冒頭に「友達を作って帰ってください」と参加者に私が話しました。実際に、参加者の方々は仲良くなって帰ってもらえたともいますし、ネットワークもできたようで、趣味縁が広がったものと認識しました。「第三者の発信」の目的はどうだったかという、瑞浪市によく来る化石ハンターのタレントさんが化石検定を受けた結果をわざわざ動画にしてくれました。また、検定の本を書かれている方が、化石検定はとても良かったとSNSで発信してくださいました。少し文章を抜粋しますと、「高校生が運営をした、子どもの受験者が多い、無料、問題が良質（考えて解く系）、監修の先生方との交流がある、そしてお土産は問題に出た化石を持って帰れる」ということで、第三者からの評価は全体的に良好なものでした。あわせて、参加者の約半数がその後化石博物館を再訪されました、つまりリピーターの確保につながりました。一部の方とはお話しする機会があり、皆次回開催するならばぜひ受けたいと言われました。

化石検定のその後ですが、今年岐阜市の柳ヶ瀬で行ったイベントで化石検定を応用したようなクイズを、先ほどのタレントさんが作られました。これが意外と難しく、例としてフタバスズキリュウが発見されたのは何県か？という問題を紹介します。フタバスズキリュウは、恐竜ではないという知識が大前提ですが、恐竜だからあそこね、と思って答えると間違える人が続出します。こういうものに派生する、応用する、あるいはファン層が増加するということも含めて、結局のところやはり趣味縁の拡大には繋がったと思います。

最後に話してきた内容はこのようなまとめになります。これで瑞浪市の事例紹介を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(2025. 12. 6 オンライン開催)

企画を現実に！



- 2024年はプロとの時間をかけた打ち合わせを実施
- 高校生の意識向上(メールのやり取りも行う)

2024/1/7

化石検定のその後



- リピーター(ファン層)の増加
- 受検者のネットワーク **趣味縁の拡大**
- 化石検定の応用(クイズから「問題」に)

2024/1/7

まとめ

化石検定の効果と域学連携

- 情報の発信・ファン層の拡大に寄与
- 参加した高校生への還元ができた
- 意外な波及効果を生み出せた
- 企画・発案○ 運営・実践△ 専門性×
→高校生の能力を把握することが大切
→高校生との密接な連携(大人の知識・責任重大)
- 域学連携
発信・交流人口獲得への一手段
高校生への生涯学習の機会提供

パネルトーク 大学・博物館・地域の協働による人づくり・未来づくり

登壇者： 可児 光生・三好 清超・安藤 佑介・伊藤 允一
学生コメンテーター：金元 和奏（岐阜大学応用生物科学学部4年生）
進行役： 塚本 明日香（岐阜大学地域協学センター）



(塚本) 進行役を務める地域協学センターの塚本です。議論の内容を、ホワイトボードを使って整理しながら進めていければと思います。それでは金元さんに最初に自己紹介をお願いします。

(金元) 岐阜大学応用生物科学部4年の金元和奏です。学芸員資格を取るコースを履修しています。普段から博物館や美術館にはよく行きます。今は学内の植物標本庫で標本整理のアルバイトや、ティーチングアシスタント(TA)をさせてもらっています。本日はよろしくお願いします。

(塚本) ありがとうございます。第一部では各講演者から様々な情報提供をいただきました。気になったことなどがそれぞれおありかと思います。まず金元さんから皆様への質問、そして各講演者からも「これはぜひ聞きたい」という質問を、恐れ入りますが一つに絞っていただき、整理したいと思います。では金元さんからお願いします。

(金元) 可児さんへの質問です。博物館を学校が一方的に利用するのではなく、両者が主体的に関わる連携が必要とおっしゃられたと思います。両者が主体的に関わること、特に博物館が学校を利用することの具体例があったら教えていただきたいです。また、関わった学校とその後でつながりが続いているとぜひ教えていただきたいです。

三好さんへの質問です。みんなで同じ方向を向くことが大事とおっしゃられていましたが、石棒

クラブは9人でチームを組んだということで、その中で対立することはなかったのでしょうか。また最後にどうやってエビデンスをとるかは課題のままということでしたが、今の時点で何か構想がありましたらぜひ教えていただきたいです。

安藤さんと伊藤さんへの質問です。高校生の観点をもとに作った化石検定の問題がとても良質で驚いたのですが、この問題作成に対して博物館やプロの方はどれぐらいの助言をして、こういう問題ができあがったのかを知りたいです。また、SNS 発信後に来館者数やフォロワー数は増えたのかを知りたいと思いました。以上になります。

(塚本) ご登壇いただいた皆様からも質問を一つずつ、可児さんから順番にお伺いしてもよろしいでしょうか。

(可児) それでは三好さんに伺いたいのですが、先ほど入館者数も関係人口も増えたという話がありました。そもそも人口が減っている大変な状況での取り組みだと思いますが、現在、地域に住んでおられる方々が何か今回のプロジェクトに対して触発や気づきといった、内発的なものがありましたら教えていただきたいです。

(三好) 自分は化石検定のことについてお聞きしたいのですが、市の大きい課題として、住み続けたいと思う人の割合が、若い世代で少し低いという課題があって、その対策事例として化石検定と

いうお話だったかと思います。化石検定の結果、その大きい課題に対してはどのようなアクションがあったのかを知りたいと思いました。

(安藤)私は可児さんと三好さんのお二方にお聞きしたいのですが、今日いらっしゃる方々は、私も含めてある意味、博物館の人間の中でも「癖の強い方」だと思います。その癖の強い方が博物館にいらっしゃることはユニークな活動ができるでしょう。では後進をどうするか。自分がいなくなった時に、果たして自分の意思をちゃんとつないでいってくれるのか、同じようなことをやるのか、それとももっと良くするのか。やはりどこも学芸員はすぐになれるものではないですし、こういう発案はすぐ形になるものではないのでそれが悩みだとは思いますが、後進をどう育てていくのか、どうしたいのかというご意見を伺いたいと思います。

(塚本)それでは6つ質問を出していただきましたので、まずは可児さんへの質問からご回答をお願いします。博学連携の具体的なところと、「癖が強い人」の後進育成、今やっておられることが今後続いていかなければいけないと考えたときに、どう考えておられるのかというところをお話いただければと思います。よろしくをお願いします。

(可児)美濃加茂市の博学連携の具体例について、開館以来25年やり続けていることなのですが、学校が博物館を利用するときに、学校としてはやはり子どもたちに対する知識の習得とか向上をまず基本的に考えていくわけです。当然、学校教育としては指導要領のねらいがあるので、その達成のために行うわけですが、一方で博物館というのはそういうカリキュラムがないので、博物館ならではの学びを提供しようとしています。お互い重きを置く点が違うわけです。その辺も事前に分かち合っていくということが連携の基本だと思います。一方的に「来ました、見学しました、帰ります」という、博物館に丸投げ状態ではなく、事前に必ず打ち合わせをしっかりとやります。その都度どういう学びの場にしたいのかということ、両者が合意を得ながらやっていくことが基本になっています。

例えば、地域学習のために子どもたちが館に来ますが、そこでは必ず事前学習をして、学校の中でそういったことを先生自身が自覚を持っていることが大事です。それを踏まえて子どもたちも

来るので、子どもたちが前向きになってくるといことが起き、そこでは一方的な利用ではなく、両者が主体的に関わる授業ができていると思います。その中で子どもたちも、地域の資源に対する学びを得ているのではないかと感じています。

連携という言葉をよく使いますが、僕はただ利用することを連携とは言いたくないです。両者が主体的にこうだ、こうだということを出し合って、そうして作っていくのが本当の連携だと思うので。ただ利用したから連携した数をカウントするというのは少し引がかかるところがあります。

それから、後進育成については、確かに色々な人が入れ代わり立ち代わり、博物館にずっといる人もいますが、そういう中で大事なことは、館としての、メンバーが変わっても変わらない理念やビジョンがあることだと思います。最初に僕が話した「美濃加茂ミュージアムビジョン」にも大きな2つのねらいがあり、方向性があり、理念を話したつもりです。それについてはホームページにも上げていますので、それを市民の方にも伝えていくつもりですが、まずは中の人間がそれに基づいた活動をするということ、さらにそれに関連する細かな指標を作って、それがどのくらい達成できたかということを確認していくという作業。それは職員の事務分掌とも関連しますが、大きな理念があって、それについて自分たちはどうしているかということ意識することが必要です。それに目の前に見える課題、個人の課題を紐付けていけば、それが最終的には館の理念に結びついてくるはずだと思います。それを地道にやるしかないかなと思います。

(塚本)ありがとうございます。それでは続いて三好さんご回答をお願いいたします。

(三好)まず、石棒クラブの9人の質問からで、対立などで困ることがあるのかということですが、対立はないです。次の話や先ほどの可児さんの話にも関わりますけれども、問題意識を共有しているからです。ミッション、ビジョン、バリューを共有しています。そのため、1個意見が出て、それと違うと、ならこのやり方、このやり方なら、と、その意見の違いとか、そのミッションに逆上っていく作業なので、そこに対立はないという理解です。

エビデンスをどのようにとっていくかは課題だという話ですが、それについてはまだ課題で、岐阜大学さんの力を借りるしかないのではない

かと考えています。

後進育成のところは、可児さんの話にも先ほどの話にも被りますが、問題意識の共有というところをどのようにしていくかということが、世代を超えても人が違っても大事なことだと思っています。やはりミッションがあって、ビジョンがあって、どのように価値を提供していくかというバリューの部分があると思いますので、それを誰がやろうが、どんなメンバーが集まろうが、共有することが大事だと考えています。

(塚本)ありがとうございます。可児さんからいただいた質問で、地域住民の方がプロジェクトに接して、何か触発されたようなことがあるか？と。

(三好)ありました。エピソードは3つ言えると思います。一つは、先ほどの話にもありましたが、小学生が出前授業や社会見学で来ていた関わりから、自分たちが館内ガイドに、というように関わり方が大きく変わったことがまずあります。

2つ目は、ふるさと納税を集めて何をしているかという話ですが、館内にある古民家の修復を、集まった金額分から順次やっています。修復の時に100人を超える人が集まって来て、どちらかという宮川にとっては大事だったけれども、飛騨市に合併したらなかなか古民家修復に対して予算を投入することができなかった状況に対して、参加してくれた町のおじいさんが「古民家を残してくれたのが本当によかった」という言葉を残してくれたことがあります。

3つ目は先ほどの話で、1995年に開館し、今年度30周年記念シンポジウムというものをやりました。その際に、開館に携わった先生にも来てもらってということだったのですが、どれだけ人が来てくれるのかがすごく心配でした。しかし、80名という会場が満席、その半分が宮川の人ということで、博物館がどういうことをやっているのか、自分たちが集めた民俗資料がどう活かされているのか、自分たちが発掘した考古資料にどのような価値があるのかということをととても気にしてくれているという行動に表れているなど考えています。

(塚本)ありがとうございます。次に伊藤さん、安藤さんへの質問が2点あります。こちらご回答をお願いしたいと思います。

(安藤)まず化石検定の問題づくりの質問について

回答します。検定問題についての博物館の助言ですが、助言という感じではないです。高校生たちで問題を作るのは難しいということで、アイデアを高校生にもらい、そこから私たちが問題を作ったという形です。私たち研究者が作ると専門的すぎる堅苦しい問題が作られると思われま。堅苦しい試験問題にいかにか華を持たせるかというのが高校生たちからの助言でした。そこに先ほどお見せしたように、イラストを使うとか、あるいはキャラクターを入れるとか、そのあたりについては高校生たちがかなり助言してくれました。そのため、どちらかという博物館の助言というより、助言するのは高校生で、問題を作るのは私たち研究者（古生物学者）でした。高校生たちからは「古生物学者のおじさん、おばさんたちは面白くない」と言われてしまいました。高校生たちから非常に良い助言がもらえましたが、先ほどお話ししたようなキャラクターを作るとか、そういう考えは私たちもちろんありますが、いかに魅せるかというのは高校生たちが上手かったなと思いました。

次のSNSのフォロワー数や来館者数が増えたかという質問ですが、来館者数を博物館で増やすのは、私は難しいと思っています。一つのやり方としては、ファンを増やす、リピーターを増やす。あるいはそれこそ先ほど三好さんも言われた、関係人口を増やすということになると思います。SNSに関しては、実際に化石検定の後、Xなどのフォロワーが増えたり、あとはファンが増えました。例えば化石のポストをすると、絶対にそれをリポストしてくれるファンがいる。数は少ないですけど、そういう人たちは増えたと思います。

化石検定を2024年は60名が受けました。そのうちの半分の30名がその後博物館を再訪するなどリピートしています。60名のうち10名ぐらいが関東方面からの参加者です。ちなみにこの試験は90点以上で一級、75点以上で二級、60点以上で三級にしたのですが、一級は3名しかいません。逆に二級は約20名と想定よりも多く、化石や古生物学が好きな受検者が多かったことを示していると思います。また、60点未満だった方もいるのが事実で、ある程度勉強しないとクリアできない検定になったと思います。難しかったことで、「次こそは」と思う人たちが勉強に来る。実はこれ検定試験ですが教育普及、古生物学の教育普及という側面も持ち合わせています。リピーターが博物館に来て学んでいってくれたことで、当初の目的はクリアできたと思っています。

博物館に何度も来てくれる、学んでくれる方がいます。最初はレクリエーションを楽しむ、それでいいと思いますが、より深い学びを得ていくくれた方がいたというのは良かったと思います。あとはその方々がまた発信してくれると、三好さんが言ったように、どんどん関係人口は増加していくのではないかと考えています。

(塚本)ありがとうございます。当初の大きな市の課題に対してのリアクションはどうでしたかというところですが。

(伊藤)はい。痛いところを三好さん突いてくるなと思いました。「ミライ創ろまい課」プロジェクト自体の「シビックプライドの醸成」という目的の中で、これからも瑞浪市に若い人の『住み続けていきたい』割合を成果指標の一つ、KPIとして設定していました。しかし、これはこの事業だけではなく、他の様々な事業を含めた複合的な成果指標として取り入れていました。当初75%だったのが翌年度測定した時に78%に上がり、よっしゃ！と思ったのですが、その翌年度に計測したら75%を切って、今度は74%になりました。やはり市民全員に聞く市民アンケートの中での一つの指標だったので、これは難しいなど。結局、シティプロモーション課なり化石博物館がやっている事業の中で主体的に関わってる人がどれだけ市民アンケートに答えているかもわからないですし、1,000人くらいのアンケートなのですが、若い人、それこそ10代だと1人から3人くらいしか回答していない状況で、その人の回答によって結果がブレてしまうので、なかなか効果的な指標としては難しいのではないかとということに気づきました。

そこで、翌年度から「ミライ創ろまい課」プロジェクトについては成果指標を変えました。それが東海大学の河合孝仁教授が提唱されているmGAPという修正地域参画総量指標と呼ばれているもので、瑞浪市は「ミズナミライ値」と名前を変えて、今はこれを成果指標として採用しています。

このmGAP、「ミズナミライ値」は、「ミライ創ろまい課」に参加してくれている学生を対象に指標を計測しています。意欲の度合いを質問するアンケートで算出された指数に人口を掛け合わせて算出する形になっていますが、学術的にこれが高くなるとシビックプライドの醸成が図れていると言われてしますので、今これを成果指標とし

てとっています。

簡単に説明すると、0から10の11段階評価で、「あなたは瑞浪市のことをどう思っていますか？」というところをカウントするのですが、それを推奨量、参加量、感謝量で分けて、「他人にオススメしたい気持ちがどれくらいあるか」、「自分が参加したい気持ちがどれくらいあるか」、「それをやってくれる人たちに感謝している度合いがどれくらいか」というのを計測しています。面白いのは10段階あるうち、0から5をマイナスとして評価します。そして、よく選びがちな6と7は計測しません。対象外です。8から10の高い人だけプラスして評価して、高い8から10の割合から0から5の割合を引き算して人口をかけるという計算をします。そのため、0から5が多くなると指標はマイナスになります。

やはり「ミライ創ろまい課」が始まった時にこれを計測したら全部マイナスでした。ただ活動を終えて2年間の任期を終えて、そのタイミングで全員にアンケートをとったところ、見事に全員がプラスになって、最初マイナス430点だったのが、最終的にプラス374.5点になり、800点くらい増えました。ここまでの成果というのはなかなか難しいかなと思っていますが、そういった活動で学生のシビックプライドの醸成を図るために、このmGAPの「ミズナミライ値」を一つの成果指標として、学生がどれだけ地域に感謝したい気持ちが増えたか、そういったことを成果目標として位置付けています。市全体の「これからも住み続けたい」というのは当然まだ指標としてありますが、一事業に対しては、今それを成果指標として取り扱わせていただいている状況です。

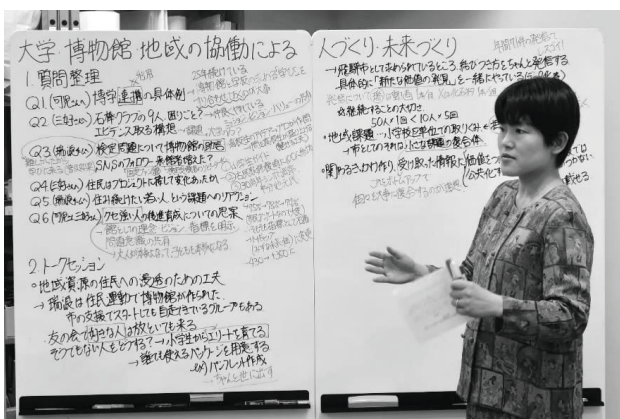
(塚本)ありがとうございます。様々な質問にご回答をいただきました。具体的な取組に関するところのほかに、評価指標のお話はエビデンスに関しての具体例になっていたのではないかと思います。また、博物館のキャラクターの強い個人が頑張ったから成り立っているとするのではなくて、館として続けていくために何が大事かということで、ミッション、ビジョン、バリュー、理念、指標というところ、組織、館としてのあり方をちゃんと共有していけば、次の「癖の強い人」がその人の癖なりに何かまたつながることをやってくれるのではないかと、というような共通項も出されたかと思います。

今回のテーマが「大学・博物館・地域の協働による人づくり、未来づくり」ということで、個別

事業の評価とか、博物館としての継続性についての質疑が続いておりましたので、次のトークテーマについて伺いたいと思います。

地域資源を住民の方に知らしめていく、住民のシビックプライドという言葉が出てきておりました。近くにいる人たちにこそしっかりと知ってもらうこと、生活に深みを持たせるというような表現もご講演の中にありましたけれども、住民に浸透させていくというと、なんか偉そうでちょっと言葉遣いが上手くないなと思うのですが、その工夫であるとか面白さを伺いたいと思います。

実は、大学も地域に入っていくときに、よそ者の目線として地域に入っていくことで初めて気づいてもらえる地域の良さというのはあります。一方で、そういう関わりを歓迎するひとにぎりの地域の人からスタートしたものの、そこで単発の取組みで終わってしまうこともあるんですね。地域に広がりを持たせていくこと、コアメンバーをつくってだんだんとファンを広げていくことが重要というようなお話も共通して出てきておりました。そこで皆様は、実際に取り組みをされて、関わりを地域に広げていらっしゃる方々ですので、その際にどんなところが大事になっていくのかを伺いたいと思います。地域の方と仲良くやっていくための「ビジョン、ミッション、バリューの共有」ということをご指摘がありましたけれども、それを最初にどこと共有をしていけばいいのかとか、住民の方々を巻き込んでいくにあたってどんな仕掛けをされたのかとか、そんな工夫を伺いたいと思います。



(安藤)瑞浪市化石博物館の場合は、市民の働きかけで博物館がつけられました。トップダウンではなく、ボトムアップの博物館と言われています。今から約 50 年前の話ですが、博物館をつくらうという動きがあった世代の方々です。その人たちの一部は、市内のボランティア団体「みずなみか

たりべの会」で文化を自発的に発信していく活動はかなり独り立ちしてやっています。ただ、そういう方々の多くは定年退職された高齢の方が多いのは事実です。

では若年層はどうするか、と言ったときに、もちろん博物館が好きな子たちは自発的に来てくれます。どこの博物館でもクラブとか友の会とかありますよね。では、地元好きな人がいるかという、そうでもない。ならどうするか言ったときに、やはりカギになるのは地元の小学生たちだろうな。もうエリートをつくらないといけない、というのは思います。ただ、エリートをつくるときに、癖の強い人たちがエリートを育てるの、かっていうとそうではなくて、「パッケージ」を作るのも方法ではないか思います。

特に学校は校長先生や担任の先生の異動もある。そうすると次の年には今までやっていた行事がなくなってしまうかもしれません。それを防ぐ手段として、先ほど講演で紹介した、博物館のパンフレットをつくることを学校行事化してしまう、あるいは授業の中に入れる方法があります。パンフレットをつくるのは、理科の中には郷土の自然を学ぶ内容が関連しますけど、他にも国語の授業にも使える。だから、分野横断で何かプロジェクトをやるといえることが必要なのかなと思います。

あとはパッケージをつくるにしても、内々で終わるものはよくないなと思います。例えば大人たちがやる事業っていうのは絶対形に残り、公表される場合が多い。ただ子どもたちがやるものって、クラスの中だけで終わり公表されない場合多い。そうではなくて、化石博物館ではそれを「これはパンフレットです。大人が見ます。みんなが真剣に見ます。本気で作りましょう」と子どもたちに言っています。やはり化石検定でも話したように、大人が本気になるというのは子どもを動かすと思います。あと、子どもの発想力や企画力、知識の飲み込みの速さは侮れないと思いますので、そこを引き出せるようにパッケージでつくってしまうのがいいかなと思います。具体的には、そんなに難しいものではなく、例えばパンフレットも良い紙で作るとか、フルカラー印刷にするとか、それを展示室のみんなが見る一番良いところに貼るとか、そういった小さな工夫の積み重ねで本気度が伝わると思います。可児さんが言われている理念も含めて、言い方は悪いですけど「機械的に続いていく」状況を作るのが大切ではないかなと思います。



(塚本)ありがとうございます。先ほどの質問とも関連していて、わかりやすい事例をご紹介いただいたかと思えます。三好さんから、このテーマを膨らませるような事例があればお願いします。

(三好)地域への浸透については、自分たちはメディアをかなり意識して情報提供・発信をしています。講演の冒頭で、飛騨市の課題にもコミットしたい、博物館業界が抱える課題にもコミットしたいという2つの目的がある中で、飛騨市が文化政策に対して求めていることをきっちり行う必要があって、その活動が博物館業界の課題にもコミットしていればいいと考えていますので、その理念・考え方を、報道を通して知ってもらうことをかなり強く意識しています。イベントを行ったウラにある「なぜこのような活動をしているか」という思い、これも報道に発信するようにしていました。

そのための仕掛けの部分については、可児さんの話の中で「地域の資源を掘り起こす作業が新たな社会的価値を掘り起こす可能性がある」というお話があったかと思うのですが、そのこと自体を市民と一緒に努めてやろうとしています。それがデータ化であり、その発信であり、もっというとその発信の仕方であるということです。

(安藤)三好さんの発表を聞いていて、これはどの博物館もやらなければならないことだなと思ったのが、飛騨市の報道発表が年間70件以上あるということです。インスタグラムも毎日やっているという。継続的に年間70件をやるということは、何日かに1件の頻度ですよね。ある意味、報道発表を継続的にやっていることと一緒にですね。インスタグラムの継続性であればやればできるかもしれないが、報道発表の継続性は結構大変ですよね。資料をつくって、1社だけにポンと投げたら絶対だめですので、全社に投げないといけな

い。これだけやる継続性というのはやっぱりすごいなと思いました。

収蔵品の3Dデータ化のお話も、結局のところはマメな活動を意識しないといけないというのは非常に思っていて、瑞浪市化石博物館は何をやっているかという、私の中でのマメさは1ヶ月で1本はYouTubeに動画をアップしようと思って活動しました。あとはペースとしては1週間に1回は化石の話題を瑞浪市の公式Xにあげようと。そうしないと多分、化石のファンの人たちは見なくなると思って、それは気をつけて情報発信をしています。

ニュースって難しいですね。報道発表をしようとしても報道機関が来ない場合もあるし、逆に報道発表をしすぎると「また同じニュースじゃないの？」ってマンネリ化されるのもあるのかなと思うので。そこは、うちは方向性が変わって、今はSNSを中心にやっています。いずれにせよ、媒体は違ってもマメな活動というのは、これはパッケージではなくて、一人ひとりが心がけることじゃないのかな。ちょっとの心がけでできるようなことなので、私は「学芸員はマメであれ」と提言したいと思います。

(三好)素晴らしい。それで言うと本当にお考えはご指摘いただいたとおりで、マメというか、活動をどのように継続させていくかというところをメンバーで共有しようとしていまして、「このイベントに何人来たらいいな」とか、「来年もこのイベントはするのか」とかではなくて、今やっているところをどのように継続させていくかということは、かなり意識はしています。

(安藤)一度に50人来るよりも、毎回10人来てもらった方が絶対に定着します。もちろん一度に50人もいいのですが、その10人がそのうち15人に増えていくと、最終的には関係人口増加につながるかなと思っています。でも博物館に求められるものの中には大ニュースもありますので、時々花火は打ち上げたいですね。

(塚本)はい、ありがとうございます。この話題に関連して可児さんからコメントをいただければと思います。

(可児)うちのところは、打ち上げ花火はないんで、線香花火なことばかりなんですけど、それは間違いなく言えることで。先ほどの話題に戻るのです

けれど、地域のアイデンティティについてです。まず何が地域だっていうのは、一番元にあるのは小学校区単位の活動が基本になると思うんですよ。それって考えてみたら昔の公民館と同じだと思います。今は公民館ではなくコミュニティセンターと言っていますが、そこでの皆さんが取り組んでいることがまさに地域の特性であるし、そこで生まれるものがシビックプライドになっていくのだと思うんですね。

市としてのシビックプライドっていうのは1個じゃなくて、たくさんシビックプライドがつながってる複合体に過ぎないと思うので、1個に特化する必要は全然ないと思います。

先ほどの地域の人たちというのは、僕の言っている地域というのは小学校区単位の地域なんですけども、皆さんはすごくいっぱい、いつも集まっています。美濃加茂であるのは「まちづくり協議会」という住民主体の団体があって、その人たちが結構集まってるいろんなことやってるんですよ。先ほども紹介したように、その中で「地域に何も無いからローゼルで売り出そうか」という話になったときに、僕たちはそれに博物館としての役割を果たせなかったことを反省しています。そういうこともあって、なるべく地域のまちづくり協議会的なところにもこちらから積極的に出かけて行って、何か一緒になって考えようねと、いうことをやっているつもりです。

ですから、今の博物館の中のメンバーは市内8地区を手分けして、この地区はこの人が窓口として関わるようにしています。領域・専門もあるんですけど、まずはその人が窓口として聞いてきて、それをみんなで相談して、もう一回やりとりする、そういうような形を数年前から取組みかけています。担当制を敷くというのは昔公民館でもあったんですけど、そういうことをやりながら、地域の皆さんのいい話を聞きながら、こちらも当然学ぶことの方が多いと思います。その人たちと仲良くなって、その人たちに聞いて、それをこちらが蓄積して残して、また地域に還元するという作業が大事かと思っています。そのためには地域の担当と言いますかね、こちらの方の体制を整えて、みんなと一緒に考えられる組織体をつくってこうとやっています。ですから、地域の誇りといいますけれど、その地域で面白いものがいっぱいあるので、そういう中でやることを僕らが聞きながら、逆に皆さんがやっていることを教えてもらって進めているところです。

例えば、地域の中であるため池があって、その

歴史をある人が一所懸命調べて絵本にされたことがあって、すごく僕らも参考になって、話も聞き取りして、館に蓄積しています。皆さんの方が当然知っているのは当たり前なので、それをどうやって僕らが一緒になって考えるのかっていう体制をつくるという姿勢が一番大事じゃないかと思っています。

(塚本)ありがとうございます。本当に地域のことは地域の方のほうがちゃんと知っているんで、それをいかにこちらが吸い上げる体制を持っていこうかということで、吸い上げたものについての新たな価値を学術的に裏付けてあげるとというのが役割になってくるのかなと思います。

(可児)吸い上げるっていう言葉が気になるんですよ。吸い上げるんじゃなくて一緒になってだと思ふ。引き上げてあげるといふ、底上げじゃなくて、一緒の目線が大事だと思うんですよ。

(安藤)可児さんの言われたことは、きっかけづくりということもあると思います。例えば、地域の個人がせっかくいい本をつくっても、今の世の中だと個人出版ということで評価が上がりにくい。だから、博物館は価値を付与し、その人の価値も上げられる役割を担うと、その人も博物館って価値があるものだと逆に思ってくれるのではないのでしょうか言い方は悪いですけど博物館をもっと利用してもらいたいと思います。

(可児)まさに役割分担の話で、調査されたことをある程度まとめて公共化する、資料を公共のものにするってことは、「文化的コモンズ」として博物館の仕事だと思うんですね。それを出版するとか、ウェブ上でデジタル化されたデータを誰もが使いやすいすることは大事だと思います。その辺の博物館の重要な役割を認識しないといけないかなと。

(安藤)その点では瑞浪市の直近でいい事例がありまして、瑞浪市は地歌舞伎の衣装が文化財としてあるのですけれど、それを保持している方のこれまでの衣装に関する研究を陶磁資料館の歴史資料集にぜひ載せましょうよという話をして、実際に論考として刊行されました。私たちにとっても一つのコンテンツが増えただけではなくて、明文化された資料が残ったというメリットもありますし、文化財保持者にとっては、私が今までや

ってきた研究がちゃんと形になったという利益も得られたと思います。このような共同作業をやはり継続できればいいのではないかなとは思いますが。だから学芸員に必要なのはアンテナかなと思いますね。

(三好) さきほどの可児さんのお話を聞いて思うのは、同じ市の中にも、過疎地域や人口密集地域といった、地域ごとの特徴があると思うんですけども、ボトムアップという言葉にすると一つなんですけど、それぞれの地域でちゃんとボトムアップが美濃加茂市はできているということなんでしょうか？

(可児) そんなことはないです。そういう視点が大事ですということで、なかなかできていないです。合併してもう 70 年経ちますけど、まだコミュニティがそこに残っているの、それをないがしろにしてまとめちゃうといのではなくて、コミュニティの複合体、合衆国のようなものですから、そこを大事にする姿勢がないと、絶対皆さん方から、「あそこのことは俺は関係ないからね」となっちゃうから、だからそうじゃない体制・空気を作っていないと、かえって反発をうけるとおもいます。

(三好) そこがマメですよ。そうありたいと思われました。

(塚本) ありがとうございます。なるほどな、と思うお話を伺う中で、そしてちょっと注意をされてしまったことにドキッとしながら、実はそれにすぐフィットした質問を視聴者からいただきました。大学の研究者と博物館、市民の方との連携についてということで、市民が行っている、あるいはそこに博物館の方々が関わっている調査観察に大学の研究者が積極的にしゃしゃり出ること、アカデミアの研究は上からの目線でちょっと萎縮する部分があるんじゃないかとか、研究者側が利用して終わってしまうんじゃないかというような、地域の方から忌避を招くようなことがないではないように感じます。ということで、その関わり方を良いものにするにはどうすればいいか、地域と大学の良い関わり方についてご意見を伺いたいですというコメントが来ました。

多分、萎縮させてしまう側の人間からすると、先ほどぱっと言っていたように、「そこはちょっと違うんじゃないの、ちょっとそこ気をつ

けてね」って言うていただくことはすごくありがたいのですが、なかなか言えなかったりすることもあると思うんですよ。こちらが言われるまでもなく、気を付けるべきことはちゃんと勉強して地域に行け、という話ではあるのですが、そういう地域との関わりを作っていく中で、今までにこんなことがありましたよと教えていただけそうな事例ですとか、やはりこれが一番大事だから勉強するにしてもこの姿勢を必ず持つておけ、というような一言がありましたら、是非お伺いしたいです。

(可児) 博物館の立場で言いますと、展示した石仏の例を出すと、その調査結果を、地域のツアーを通して地元の方に伝えることをやりました。その時に地域の方から逆にいろんな情報ももらえていう、両方「持ちつ持たれつ」という関係性があると思うんです。それはそれとして、ですけども、歴史系の大学研究室だと地域に入っていて、古文書の調査とかしますよね。1 週間とか 1 か月ぐらいかけて、ある家のものを全部調査するパターンがあるんですけど、その時にそれで調査したから終わりではなくて、その最後の頃に地域の人たちに対しての説明会をちゃんとやることに意味があるよということも聞いたことがあります。

先ほども言いましたけど、調査した結果を大学の目から見て、学術的な観点から実はこんなものだったってことを伝えることが、地域の方にとって大きな意味があります。大学の力ってすごく大きいなと思うんですよ。博物館よりもっとそういった学術機関として、大学としてはそれをやっていただけると、地域の方も「大学の先生がこう言ってくれた」とすごく大事にされると思います。大学側もフィードバックと言うか、そこに残していくということが大事ななと思います。さらにそれが継続するとですね、地域にとってもとても意味があると思うし、大学にとっても有効ではないかと感じます。さらに、調査のあとに継続的な視点で何らかの関わりを持ちつづけることも意味があると思います。

(三好) 自分も似たようなことになってしまうんですけども、飛騨宮川地域でずっと地域に入っている先生がおられて、その先生の地域の入り方は、ありていに言うと最後まで、要は一緒にお酒を飲むまでおると。最後には「また来るね」っておっしゃられるんですよ。30 周年の記念シンポ

ジウムの時もその先生の顔を見に地域の方が来られるというような、そういうつながりができているということがあるのかなど。お酒飲む・飲まないかは置いておいて、やはり関係性をどのように地域の人に持ってもらうかっていう、その姿勢からは学ぶことがあるなと思いました。

(可児)立教大学でもそういうことがあって、そこで博物館課程を受け持っている先生が新潟県のある自治体に入って、それこそ30年とかやっていて、両者にとってすごくね、やっぱり何か形ができていて、大学にとってもいいことだし、地域にも素晴らしいということをおっしゃっていて感動したんですけど、なかなかできないですけどね。



(塚本)私も7、8年関わってる地域は、それこそ一緒にお酒を飲んで醜態を晒したこともあるんですけど。そういう関係性があるとすごくいいなという感じはしています。それは癖が強い個人のつながりではないかという話にもなってしまうんですけども。いかがですか。

(安藤)その話の流れで、実は人文系と自然史系で多分、雰囲気が違います。自然史系の博物館は例えば化石もそうですし、それ以外のものでも、地域性って実はあんまりないですよ。もちろん地域性もありますけど、どちらかという行政区分には拠りません。フィールドが全国です。だから博物館のつながりって、わざわざ協会を作らなくても元々あったのが自然史系の博物館同士のつながりで、特に瑞浪の場合は特殊です。瑞浪市化石博物館設立に大きく携わった糸魚川先生は大学教員をやりながら博物館の学芸員を兼務されていた時期があって、それにより大学をはじめとする研究者が入りやすかったんですね。

そしてもう一つは、館の基本理念に「みんなの

博物館」というのを最初に取り入れています。みんなの博物館、開かれた博物館って何かというと、誰でも博物館を利用できることです。例えば博物館資料へのアクセスが容易な雰囲気づくりをすると、共同研究をしやすい風土が整います。

それとともにもう一つ大事なものは、研究を行うのは人です。その博物館にどんなスタッフがいるかわからなかったら意味がない。それこそ美濃加茂市民ミュージアムのすごくいいところは、学芸員のプロフィールが似顔絵付きでホームページに掲載されています。学芸員が何をやってるのかなどが誰でもわかり、敷居が下がります。そのため、博物館にいる学芸員の名前をできるだけ出す必要が私はあると思うんですね。瑞浪市化石博物館では学芸員がこんな研究をやってますというのをホームページにも出してますし、それだけでは受け身だと思うので、私は大学のセミナーや学会に行くようにしています。やはり行く人脈ができる。そこで出会った若い子たちがうちの標本見たいと館に来るので、そういう人脈を作ることが大事かと思います。ありがたいことに瑞浪市は学会へ行く予算を毎年出してもらっています。

また、先生が言われたお酒を飲む、これやっぱり大切です。名古屋大の私の師匠がいいこと言ったのですが、収蔵品を機械的に何か見せて、はい終わりじゃなくて、牧歌的な、収蔵品の前で建設的な雑談できる雰囲気づくりが大切だと思います。そこから新たに派生する研究もあると思います。そこで話しているうちに「これ一緒にやりましょう」という話になることもあります。どこの博物館とか大学にどれだけの標本を貸したとか、どこかの博物館や大学の先生と一緒に論文書いたであるとか、あるいは私が主体で連携して論文書いたとか、そういうのも指標にしていますので、やはり共同研究ができるようにやるのがいいのかなと思います。

そういう意味では、3年前に瑞浪市で見つかったパレオパラドキシア化石の研究の時は20人以上の研究者が来訪して「これはいいものだ」と言っていて。その時に一番言われたことは「瑞浪市化石博物館は入りやすいよね」と。収蔵庫が近いといった物理的な距離ではなくて、システム的なことでポッと電話とかメールして「いいですか?」「いいですよ」という姿勢。それは、私も館に入った時に最初に言われた「みんなの博物館だから」という基本理念があったからだと思います。そうすると可児さんが言われたように、基本理念が大切ですよ。その基本理念を新しく来る人たちがち

ちゃんと理解して次の世代に伝えることが必要なのかなって思いますね。

自然史系と人文系はだいぶ違うかとは思いますが、大学の先生方とは対等な立場でやりましょって感じですか。自然史系の博物館はどこでもそんな感じじゃないのかなって認識はあります。大学に求める姿勢としては「やってやるわ」じゃなければいいじゃないかなと思ってますね。結局、対等の立場で研究をやりましょって姿勢であればやれるのではないかなと私は思います。

(塚本)ありがとうございます。基本的な理念が非常に大事で、その上で対等に関わっていくべきで、何よりも継続して関わり続けることというのが大事で、そのためにはやはりマメさが必要というところが共通して出てきたのかなと思います。

最後、トークセッションのまとめとして、本日のテーマ「大学・博物館・地域の協働による人づくり、未来づくり」ということで、基本理念の重要性ということも共通して言われてきましたけれども、あと地域課題、これをどう捉えるかというところで、小学校区単位での小さなことをきちんと複合するよという話もありました。大学と博物館は、地域課題に資する教育機関であり文化機関であるという点では共通していると考えていいのかなと思います。

今後向かうべき未来づくりというところですけども、こんなことが今後実現していくといいなという理想をそれぞれが描いていただいてほしいと思います。金元さんにはここまでの話を聞いて、博物館に入っておられる学生目線、ユーザー目線で、こんな博物館になったらいいなという理想を伺っていきたくと思います。



(金元)私は博物館にはよく行くんですけど、研究とかで博物館に関わるってことはないタイプの

人間です。ただ、大学の先生たちのように、博物館と頻りにやりとりする人たちと一緒に何かをすることはよくあります。その際に、資料を見に行くのが大変だという話はよく聞いているので、それこそ開かれた博物館、みんなの博物館ということをおっしゃってたと思うんですけど、それがもっと全国の博物館でみんなが共通してできたらいいなと思います。博物館ごとに資料を見る手順が違うみたいなのも全部共通化していくぐらいの気持ちで、利用しやすい博物館になったらいいなと思います。

(伊藤)可児先生が言われてたことが、本当に地域づくりの土台だなと思っていて、担当をそれぞれ決めて地域に入っているとおっしゃってましたけれども、瑞浪市でもまちづくり推進協議会が立ち上がっておりまして、各地域に支援員を置いて地域の活動を支援していくのですけれども、すべからず行政職員は外に出た方がいいよ、中で仕事するんじゃないよ、地域の人の声を拾って、地域の人たちと一緒に課題を共有して、そのまちをより良くしていくためにはどうしたらいいんだろう？ってことをちゃんと一緒になって考えて、その課題解決を行政としてできることと地域としてできることを整理した上で、より良い地域社会をつくっていくためにどのように施策をやっていけばいいのかということを考えていく必要があるのかなと思っています。

その際に、やはり地域内だけの視点じゃなくて、教育機関、大学とか外からの人材の意見も取り入れながら、より面白いことであつたりとか、より新しい発見であつたりとかが生まれたりするもので、そういった視点を大切にしながら、どんどん行政職員は外に出て、地域の人と一緒に協働していくことが、これから持続可能なまちづくりを進めていく上では一番大切な視点なんじゃないかなと思って今日お話を聞いていました。本日はありがとうございました。

(安藤)結局のところ、それも含めて継続的にやることだと思います。つまりマメさが大切です。他の博物館や調査に出かけることもマメじゃないとできないと思います。それは考え方や気持ちの問題なので「できる」「できない」だけではなく、そういう考えをみんな学芸員が持てば結構うまくいくんじゃないのかなとは思っています。だから学芸員の皆さん頑張りましょって、マメになりましょって、と思います。

ただ、どこでも開かれた博物館って、やっぱり難しいと思います。博物館が持つ資料の規模も博物館毎で違いますし、館自体の規模も違うし、職員の数も違います。瑞浪市化石博物館は規模も小さいので逆に動きやすい、フットワークが軽くできますが、やはり大きな博物館ですと、それぞれの標本に対する意見があるので、それを統一化するというのは、私は難しいと思います。ただ、もう博物館学芸員が表にでてこない時代ではないと思うので、少なくともこの博物館には誰かいるということを知っている環境にならないとだめだなというのは思います。

だから美濃加茂といえば可児さんですね、と博物館関係者はほぼ知っていますが、では可児さん以外に誰がいるの？って言ったときに、美濃加茂市民ミュージアムはちゃんと他にこういう人がいますというのはホームページで公表している、この点が大切だと思います。それって別にそんなに難しいことじゃないと思いますよ。別に行政のお約束で職員の出しはだめということはないですし、それこそ学芸員は専門職ですの出した方がいいと思います。そうすると、例えば電話したときも誰々さんに質問したいとか、そこは一つ利用のハードルが下がるきっかけになるかなと思います。博物館によってはホームページの情報量が少ないところがみられますので、それは結局マメさになるんですが、博物館の人たちが頑張って情報をたくさん出して、うちにはこういう標本がある、うちにはこういう学芸員がいる、この学芸員はこういうことができるということが発信されると、やはりファンは拾ってくれると思いますし、そのファンが何かあったときの助けにはなってくれるし、意外なところで力になってくれると思うんですよね。パレオパラドキシアの発見の時も、瑞浪市の住民が見つけたときに私の顔が思い浮かんだそうです。「任せとき、安藤さんに電話しとくから」って言ってくれた。それって大切だと思います。私の顔が思い浮かばなかったら、多分警察に電話して発見ではなく事件になっていたかもしれません。地域に出ていって覚えてもらう、特に地域の人にはあの博物館にああいう人がいるんだよっていうのを知ってもらうのが大切かなと思います。

(三好)いくつかお話の中で自分が思ったことは、博物館として情報を蓄積していくという、一番大事な地道な作業が見えにくいという課題があります。きっと大学としてはどのような研究をされ

ているかみたいなのは、きっと発信もしにくいのかなど。成果は学会であるとか論考であるとか発表されると思うんですけども、そのあいの作業のところが情報発信というのはきっとあまりお互い得意じゃなくて、その部分を好きになってもらったら、成果とか結果とかに左右されず、未来があるんじゃないかなって考えています。それがお互いの業界の課題にも、地域が持つ課題にも迫れるものであればいいなというふうに今は考えています。

(安藤)それって展示にも使えるですよ。子どもたちって展示に至る過程が好きです。結果とかじゃなく、発見からの過程が好き、こういうふうになっていったというのが好きです。それはもう間違いなくアンケートや行動を見ているとそうなので。大人の男性は結果を見る傾向にありました。ただ、その過程を見せるっていうのが難しいですよ。

(可児)自分自身勉強になりました。ありがとうございます。今日思ったことは、博物館や美術館は、いろんなものを見て、物の見方がいろいろ増えてきて、さらに他の人の話を聞いて、自分の見方もまた変わったりする楽しい場というか、興味深い場だと思うんですよね。その辺が学校とは若干違うところで、楽しいところでいいんですけども、そういったものの見方が豊かになるっていうことを考えた時に、やはりお互いにこの人がこう考えているということがわかると、その人自身が見えてきたりすることがありますよね。そうすると、だんだん相手に対して理解が深まって、何か寛容な気持ちになるということがあると思うんです。それがもしかして地域にもあるんじゃないかと思います。今日8つの地域の話をしましたけど、それぞれ顔つきは違う、歴史も特性も違うところを、それを掘り起こして皆さんで認め合う。地域内で認め合うのもいいんですけど、それをよその地域もそういうふうに見ながら、あその地域はこうだけど、うちはこうだよってことを話し合っていく中で、相手のことがわかってくると思います。何か豊かなまちというのはそういうことかなと思うんですよね。

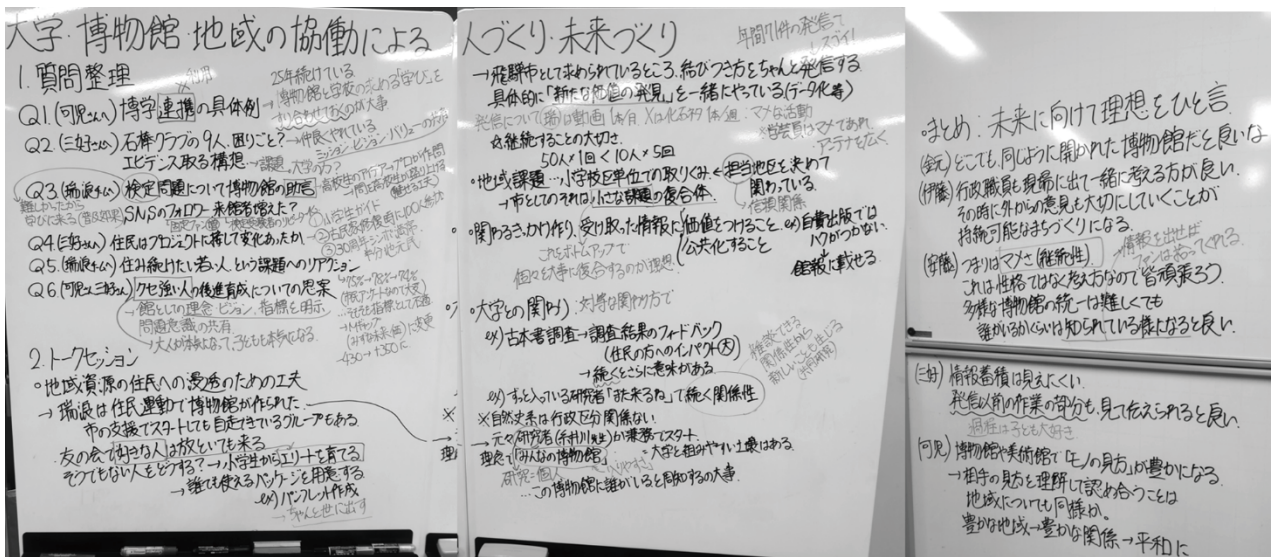
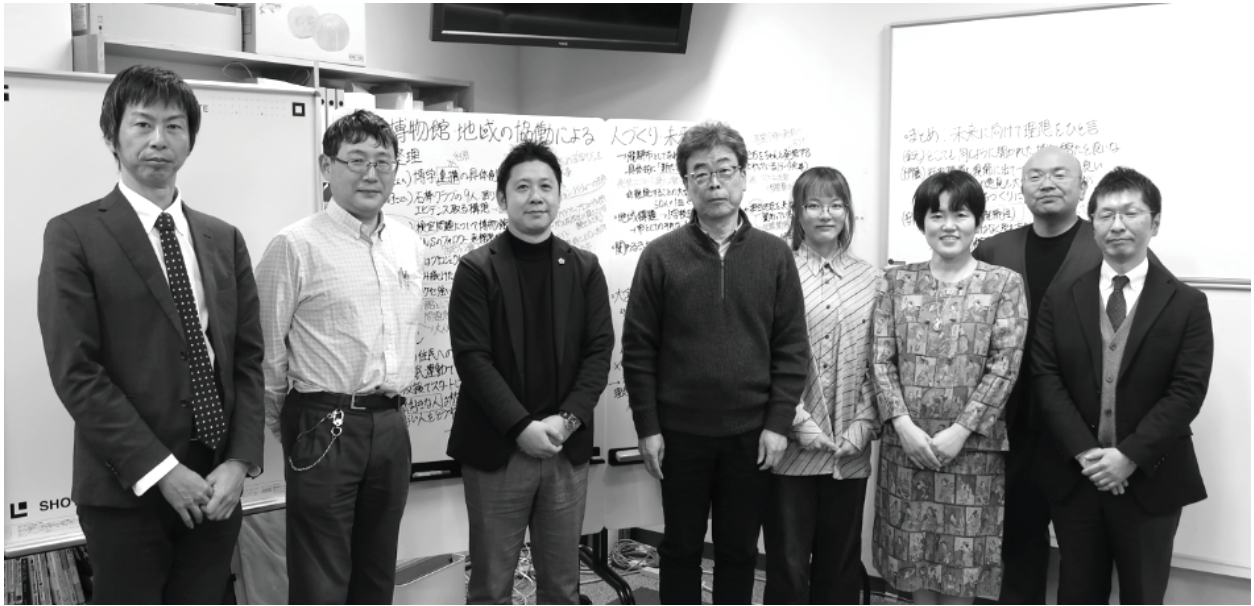
だから、最近よくいさかいとか分断とか戦争がいっぱいありますけど、地域同士がわかっていくこと、認め合っていくこと、そんな空気ができていくことがさらに発展していくと、それは国同士のいさかいがなくなることにつながり、平和につ

ながるといいなというふうに思います。簡単にい
かないんですけど、そのためにも博物館は本当に
小さいけど役割はあるかなということ、地
域の話からちょっと飛躍しましたがと思ってい
ました。

(塚本)ありがとうございます。ものの見方を広げ
るからこそ、理解が進んで、結果的に平和がしっ
かりついてくると、それは非常にうれしいことだ

と思います。草の根で仲良くということが大事だ
よというのは平和教育の文脈でもよく聞くこと
ですね。すばらしいまとめをしていただいたので
はないかと思います。最後に未来に向けての理想
を大きくまとめていただいたところで、今回のト
ークセッション終了にしたいと思います。ありが
とございました。

(2025.12.6 オンライン開催)



グラフィックファシリテーションの成果 (板書：塚本明日香)

「地域志向学研究」の概要と投稿案内

岐阜大学地域連携推進本部地域協学センター
「地域志向学研究」編集委員会

1. 「地域志向学研究」概要

「地域志向学研究」は、複数の学問分野の学際的な協働、横断的・融合的な連携及び教育研究機関、自治体、NPO、地域団体、民間事業者等の協学により地域社会の活性化に貢献する統合的な基礎・応用研究及び教育活動や実践的な取組みの報告を掲載します。

2. 原稿の種類

原稿の種類は下表のとおりとします。

| 分類 | 主旨 | 査読 | 目安分量 |
|------|--|----|----------------------------|
| 総説 | 地域志向学に関連する問題やその解決に向けたこれまでのアプローチを、その手法の有効性評価も含めて整理し、分野全体の概要を知らしめるもの。編集委員会が依頼したものを主とする。 | なし | 印刷頁最大 12 頁 (20,000 字程度) 以内 |
| 原著論文 | 地域志向学の発展に資する学術的価値を有する、独創性、新規性、体系性を備えたもの。 | あり | 印刷頁最大 16 頁 (30,000 字程度) 以内 |
| 調査研究 | 独創性、新規性及び体系性は必ずしも備えていないが、「地域志向学」の発展に資する調査をまとめたもので、学術的価値を有するもの。 | あり | |
| 短報 | 原著論文ないし調査研究の中間報告として位置づけられるものや、原著論文ないし調査研究よりも小規模であるが迅速に公表することで地域志向学の発展に寄与するもの。 | なし | 印刷頁最大 6 頁 (10,000 字程度) 以内 |
| 実践報告 | ①～④に該当する具体的な活動実践、改善等に関する報告。 ①COC、COC+の教育プログラムに関する取組み ②教育機関等による社会貢献活動に関する取組み ③産学金官連携又は地域学校協働活動に関する取組み ④その他、これらに類する取組み | なし | 印刷頁最大 12 頁 (20,000 字程度) 以内 |

※いずれの種類の前稿についても編集委員会が内容、文章、図表や体裁等の修正を依頼することがあります。

※原著論文及び調査研究における投稿は、単著・共著を問わず 1 人 2 本以内とします。

※原著論文及び調査研究は、査読を実施して採否を決定します。

3. 応募資格

特になし

4. 申込方法

編集委員会にお問合せください。申込用紙とフォーマットをお送りします。

また、地域連携推進本部地域協学センターHPにてフォーマットをダウンロードすることができます。

5. 第11巻投稿締切（2027年3月刊行予定）

○原著論文・調査研究…2026年11月15日

○その他の原稿…2027年1月15日

6. 問合せ先

地域志向学研究 編集委員会

住所：〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1 岐阜大学地域連携推進本部地域協学センター内

E-mail: ccsc@t.gifu-u.ac.jp

電話番号：058-293-3880

国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学

地域志向学研究 2026年 第10巻

編集 「地域志向学研究」第10巻 編集委員会（五十音順）

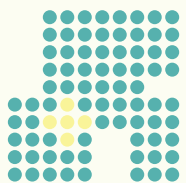
伊藤 浩二
岩澤 淳（委員長）
大宮 康一
塚本 明日香
西澤 泰彦
二村 玲衣
村上 啓雄

発行 令和8年3月
岐阜大学 地域連携推進本部 地域協学センター
〒501-1193 岐阜市柳戸 1-1
TEL. 058-293-3880
FAX. 058-293-3881
<https://www.ccsc.gifu-u.ac.jp>

装丁 canpai design
印刷 株式会社コームラ

地域 志向学 研究

2026
VOL.10



地域連携推進本部
地域協学センター

TEL.058-293-3880

[E-Mail] ccsc@t.gifu-u.ac.jp [FAX] 058-293-3881

[URL] <https://www.ccsc.gifu-u.ac.jp/>



MAKE NEW STANDARDS.

東海国立
大学機構



岐阜大学

国立大学法人東海国立大学機構 岐阜大学

〒501-1193 岐阜市柳戸1-1 TEL.058-230-1111(代表)